

オレの名はロナルド・ウィーズリー！ よろしく頼みますよ、ポッターさん！！

冬月之雪猫

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

転生した。その事を自覚した時、オレの心はキラウエア火山の如く熱く熱く燃え上がった。

ずっと憧れていた。

別に転生に憧れていたわけではない。

超能力でも良かった。空を飛べるのも良かった。オレを食い殺そうと牙を剥く魔獣でも良かった。

オレはとにかく超常現象に憧れていた。

ドキドキワクワクと胸躍る大冒険がしたかった。科学では解明出来ない未知の現象と遭遇したかった。

目次

第一章 『賢者の石』

第一話 『オレの名は！』	1
第二話 『ホグワーツ特急』	9
第三話 『ホグワーツ』	16
第四話 『組分け儀式』	25
第五話 『ルームメイト』	32
第六話 『魔法学校の授業』	39
第七話 『ドラコ・マルフォイの憂鬱』	46
第八話 『魔法薬学の先生』	52
第九話 『ハグリッド』	60
第十話 『飛行訓練』	66
第十一話 『ハリー・ポッターVSドラコ・マルフォイ』	75
第十二話 『ヒツポグリフクラブ』	82
第十三話 『ヒツポグリフ』	88
第十四話 『クイリナス・クイレルの苦悩』	96
第十五話 『ドラゴンクラブ』	102
第十六話 『ハロウインの夜に』	109
第十七話 『ドラゴン』	117
第十八話 『アルバス・ダンブルドア』	124
第十九話 『クリスマス』	131
第二十話 『ゴドリツクの谷』	141
第二十一話 『禁じられた選択』	149
第二十二話 『休暇明け』	156
第二十三話 『ノーベルタ』	164

第二十四話『トム・リドル』

171

第二十五話『ダズブリー邸』

179

第二章『秘密の部屋』

第二十六話『ダンベル何キロ持てる？』

189

第二十七話『ジニー・ウィーズリー』

196

第二十八話『ドビー』

203

第二十九話『ルシウス・マルフォイ』

214

第三十話『正体不明』

226

第三十一話『分霊』

233

第三十二話『トム・リドルの後悔』

240

第三十三話『トム・リドルは苦悩する』

246

第三十四話『魔王の配下』

252

第三十五話『覚醒』

260

第三十六話『ロナルドの決断』

267

第三十六話『眠る場所』

274

第三十八話『禁忌』

279

第三十九話『ヒーロー』

285

第四十話『サテイスフアクション』

292

第四十一話『空虚な足跡』

297

第四十二話『黄金旋風』

303

第四十三話『それはとてもとても強く、美しく、そして……、
恐ろ

しいもの』

311

第四十四話『嘆きのマートル』

318

第四十五話『アビス』

325

第四十六話『闇の帝王』

332

第四十七話 『苦悩』	340
第四十八話 『激怒』	344
第四十九話 『エグレ』	350
第五十話 『スリザリンの継承者』	356
第三章 『アズカバンの囚人』	
第五十一話 『黄金の魂』	366
第五十二話 『押し付け』	373
第五十三話 『シリウス・ブラック』	379

第一章 『賢者の石』 第一話 『オレの名は！』

転生した。その事を自覚した時、オレの心はキラウエア火山の如く熱く熱く燃え上がった。

ずっと憧れていた。

別に転生に憧れていたわけではない。

超能力でも良かった。空を飛べるのも良かった。オレを食い殺そうと牙を剥く魔獣でも良かった。

オレはとにかく超常現象に憧れていた。

ドキドキワクワクと胸躍る大冒険がしたかった。科学では説明出来ない未知の現象と遭遇したかった。

常々思っていた事だ。

先人達はなんて酷い事をしたのだろうか！

科学はあらゆる神秘を解明し、あらゆる未知を既知に変えていった。

素晴らしい事なのかもしれない。だけど、後人にもう少し冒険の余地を残しておいて欲しかった。

だが、謝ろうと思う。

転生を肯定する科学者なんて一人もいなかった。けれど、オレは転生した。

まだ、世界には未知が残っていた。先人達はまだオレに冒険を残しておいてくれたのだ。

第一話 『オレの名は！』

オレは舐めていた。

この世界を舐めていた。

信じ難い事に、オレの冒険は転生だけでは終わらなかった。

なんと、この世界には魔法があった。

「クカカカカカカカカカッ!!!」

魔法！ それは神秘の塊である。

短い棒を振り、呪文を唱えるだけで物を動かせる。炎を出せる。無機物を生物に変える事が出来る。

奇妙奇天烈摩訶不思議、原理がサツパリ分らない。

それでも研究を行えば法則を見つけ出し、科学に落とし込む事も可能だろう。

だが、そんな事はしない。そんな事はさせない！

「素晴らしい!! 最高だ!! これぞ、オレが求めていた冒険だ!!」

「ママ、兄さんがまた奇声をあげてるわ」

「そういうお年頃なのよ」

生まれ変わり、新たに母となった女性と妹として誕生した少女が何か言っているが気にしない。

オレはとにかく魔法の本を読み耽った。

やたらと多い兄達に外に連れ出される時以外はいつも本を読んでいる。

兄達に連れ回されるのも嫌いではない。彼らの価値観や常識、能力はこれまた神秘の塊だった。

科学に殆ど触れず、魔法に囲まれて生きて来た子供達はあらゆる面で転生前のオレの価値観や常識からかけ離れていた。

「ロン！ 今日には箒に乗せてやるよ」

「おお、兄上!! 是非頼む!!」

ロンというのはオレの名だ。正確にはロナルド・ウィーズリー。ウィーズリー家は古の時代から代々続く魔法使いの一族らしい。

オレを箒に乗せてくれたのはチャーリー・ウィーズリー。野性的な印象を与える男だが、面倒見が良く、動物に対する愛護精神の持ち主だ。

「クカカカカカツ!! 飛んでいる!! オレは箒で飛んでいる!!」

「相変わらずロンの笑い方は面白いな。よし、庭を一周してみようか」

箒で空を飛ぶ。まさしくエキサイティングな初体験だ。

チャーリーはオレが満足するまで延々と庭を周回してくれた。

「おい、ロン！ パースのカップを鼻食いつきティーカップに取り替

えてやろうぜ！」

「クカカカカカツ!! 兄を兄とも思わぬ蛮行、素晴らしい!!」

兄のパーシーに悪戯を企てているのはフレッド・ウィーズリー。

その後ろでウキウキと紅茶を淹れているのはジョージ・ウィーズリー。

彼らは双子で瓜二つの顔を持っている。

三人でスニーキングミッションにトライしていると、すべてを目撃していた我が妹であるジニー・ウィーズリーに企てを阻まれ、我々悪戯仕掛け人は敢え無く母上の長時間に渡るお説教を受ける事となった。

「ロン！ あの二人と一緒にになって悪戯なんてしちやダメだ！」

母上の説教から解放された後、今度は兄上からの説教が始まってしまった。

彼の名前はパーシー・ウィーズリー。生真面目な性格で、よくフレッドとジョージの二人に悪戯のターゲットにされている。

「ロン、あんまりママやパーシーを怒らせてはいけないよ」

窘めるように言うのは長兄であるウィリアム・ウィーズリー。愛称はビルである。

「やあやあ、ビル！ 今日はどんな本を持ってきてくれたんだい!？」

「……やれやれ。今回は遺跡関連の本だよ」

オレは歓声をあげた。

エジプトのピラミッドにはファラオの呪いがあり、海の底には古代の魔法が眠る。

まさに冒険の舞台だ。オレはいつか遺跡に挑みたいと願っている。

「ビル！ また呪われた部屋の話をしてくれ！」

「またかい？」

ビルはhogwarts魔法魔術学校という魔法使いの為の学校に通っている。

千年以上前に建造されたというhogwarts城には様々な不思議があり、その一つが呪われた部屋だった。

「うーん。じゃあ、少しだけだよ」

どうやら、ビルにとってはあまり良い思い出では無いらしい。

「……ところでや」

「ん？」

「いや……、なんでもない」

ビルは薄っすらと頬を赤らめている。珍しい。今言おうとしていた事に照れている様子だ。

「……兄上、恋でもしたか？」

「ブホッ!？」

凶星だったようだ。

「なんだ？ アプローチの方法にでも悩んでいるのか？」

「……うぐ」

またしても凶星だったようだ。

我が兄上は実に分かりやすい。すでに相手にも伝わっているのではなからうか。

「ふむ……」

ビルは身内の鼻根目が無くともナイスガイである。

見た目が良く、頭脳も明晰で運動も出来る。加えて、性格も素晴らしい。

完璧という言葉が体現している男だ。

「直球勝負で行くといい。回りくどい策を弄するのは君の魅力を陰らせるおそれがある」

「……そ、そうかい？」

「折角の夏休みなのだ。どこかに遊びへ誘えば良いだろう」

「う、うん。そうだね。うん、誘ってみるよ」

後日、ビルはあっさりとは振られた。

振られ文句が凄かった。

『貧乏で無作法。私と付き合えるなんて、思い込みが激しいにも程があるわ！』

清々しい振られ方をしたものだ。

その日は一日中フレッドとジョージがミス・タイラーとやらのモノマネを披露し続けた。

そして、生まれ変わってから初めてビルのマジギレ顔を拝む事となった。

普段穏やかな人間を怒らせてはいけない。悪鬼羅刹もかくやという恐ろしい形相だった。

そのような日々を送りながらオレは十一歳になった。

一度は六十六歳まで生きたオレだ。晴れて喜寿である。

女房に出て行かれ、息子夫婦は海外に行ってしまった、もはや誕生日を祝ってくれるのは会社の同僚達と付き合いの長い腐れ縁共だけだと思っていた。

家族で誕生日を祝われる素晴らしきは言葉にし難いものがある。

誕生日のケーキを食べる度、甘い物を美味いと思える体に感謝しながら嘗ての人生に思いを馳せる。

オレの死因は酒の飲み過ぎだった。今度は節制しよう。いや、魔法の世界ならアルコール中毒なんて魔法でちよちよいのちよいか？

「ロンも今年からホグワーツね」

母上が言った。そう、オレも今年からホグワーツに通う事になる。

夢にまで見たホグワーツだ。呪われた部屋は生憎とビルの後輩達によって完全に破られてしまったらしいが、他にも多くの謎が残っていると聞いている。

しかも、今年は伝説の男が現れると噂になっている。

「ああ、楽しみだ!!」

嘗て、この世界には闇の帝王と謳われた男がいたそうだ。

そして、その男を滅ぼした赤子がいたらしい。

その者の名はハリー・ポッター。

彼はオレと同一年らしく、今年ホグワーツに入学してくる筈だと言われている。

生きている英雄と会える。胸が踊る。昂ぶる。是非ともお近づきになりたい。

「クカカカカカカカカカカカッ!!」

「……その笑い方、結局直らなかつたわねえ」

何度も何度も矯正しようとしたが無駄骨に終わった事に母上は肩

を落としました。

生憎、七十七年掛けて固まりきった笑い方だ。母上の為にも直そうと思っただがピクリとも動かなんだ。

「いいじゃないか！ ロンは大物になるぞ」

父上は上機嫌だ。酒が入っている。オレも飲みたいが、前に飲んだ時の母上が少々恐ろしすぎた。まあ、あの時は7歳だったからな。

「ロン！ 入学したら秘密の通路を教えてやるからな！」

「でも、組分けには気をつけろよ。すっげー痛いんだ！」

「クカカカカカッ!! 楽しみだ!!」



「……どこにあるんだろう」

不安のあまり目眩がして来た。

ハグリッドに貰った切符には9と3 / 4番線の文字が刻まれている。

バーノンおじさんにも散々からかわれたけれど、こんな中途半端な数字のホームなんてある筈がない。

だけど、ホグワーツに行くためには9と3 / 4番線から出る列車に乗らないといけない。

「どうしたら……」

その時だった。

「クカカカカカカカッ!! 面白い!! なんて、面白いんだ!!」

奇怪な笑い声が聞こえた。思わず振り返ると、そこには赤毛の集団がいた。

注目するべきは集団の中に僕と同じくフクロウを連れている人がいた点だ。

「いいから早くおし！ ホグワーツ特急が出てしまうわよ！」

ホグワーツ特急。その言葉は決定的だった。

意を決して近づいてみる。

「あ、あのー」

「んん!? おお、その大荷物にシロフクロウ！ もしや、ホグワーツに？」

奇怪な笑い声を上げていた子が真つ先に僕に気付いてくれた。

「う、うん。その……、君もだよね?」

「その通りだよ、えつと……」

「あつ、僕ハリー。ハリー・ポッター」

名前を名乗った途端、少年は満面の笑顔を浮かべた。

そして、僕の手を両手で掴み取った。

「オレの名はロナルド・ウィーズリー! よろしく頼みますよ、ポッターさん!!」

「え? あ? え? う、うん。よ、よろしく、ウィーズリーさん」

「オレの事はロンで構いませんよ! まさか、こんなに早くお会い出来るとは! さあさあ、共に参りましょう!!」

「え? え? え?」

あれよあれよという間に僕は壁の方へと連れて行かれてしまった。

このままでは壁にぶつかる。そう思った瞬間、僕達は壁をすり抜けた。

「え?」

「さあさあ、こちらへ!! オラ、ちったちった!! ハリー・ポッターさんのお通りだぞ!!」

「ちよつ!? や、やめ……、やめて!!」

まるでチンピラのように周囲にいた人達を蹴散らそうとするロンに慌てた。

周囲の視線がすごく痛い。

困っていたとは言え、どうやら僕はかなり変な子に声を掛けてしまったらしい。

「ロン! 困っているじゃないの!」

ロンの母親らしき人が壁から出て来て叱りつけた。

「おつと、お説教を聞いている暇は無いんだぜ! ポッターさん、行きましょう!! 空いているコンパートメントを探さにやいけませんからねえ!」

「いや、僕は……」

「さあさあ、行きましょう。ポッターさん!!」

やばい。この子、すごく強引だ。

僕はホグワーツ特急に引き摺り込まれた。

「空いてましたよ、ポッターさん!! 二人で仲良くホグワーツを目指
しましょうや!!」

誰か、助けて……。

第二話 『ホグワーツ特急』

第二話 『ホグワーツ特急』

ホグワーツ特急がガタンゴトンと音を鳴らしながら走っている。

「いやー、汽車に乗るなんてレアな体験ですよね、ポッターさん。今どきは電車ばかりですから」

「そ、そうだね……」

「そう言えば、ポッターさん！ 知ってますか？ さつきお菓子を売りに来たお嬢さんがいたでしょう」

「お嬢さん……？」

知らない。お菓子を売りに来たのはおばちゃんだった筈だ。

「彼女は二世紀ちかくの間、ここで車内販売を続けているそうですよ」

「二世紀?! じよ、冗談だよね?」

「いやいや、これが本当の話でしてね。魔法界っていうのは本当に面白いですよ！ そう思いますよね？ ポッターさん！」

「う、うん」

ハリーは思った。

—— ちよつと離れて欲しい……。

コンパートメントにはハリーとロンの二人しか居ない。

普通に考えれば対面で座ればいい筈だ。それなのにロンはハリーの隣に座っている。肩を抱き寄せられ、密着している。

「そ、そうだ。お菓子を食べようよ！ えつと、カエルチョコレート？ まさか、本当のカエルじゃないよね……」

なんとかロンの拘束から抜け出してチョコレートのを破るハリー。

「本物じゃないけど生きてますぜ」

「え?」

いきなり、包からチョコレートのカエルがハリーの顔面に向かってダイブした。

「のわー!?!」

「クカカカカカッ！ 大丈夫ですか、ポッターさん！」

陽気に笑いながらロンはハリーの顔面に張り付いたカエルチョコレートをつまみ取った。

「魔法界のこういう生き物型のお菓子は大抵生きてるんですよ。もちろん、仮初ですけどね。前に飴で出来た蜂とか、砂糖細工の蝶なんかも見た事がありますよ」

「ふ、ふーん」

「おっと、顔中チョコレート塗れですね。ちよいとお待ちを」

ロンは杖をハリーの顔に向けた。

「スコージファイ」

すると、ハリーの顔からチョコレートが拭い去られた。

「うわっ！ すごい！ これ、魔法だよね!?!」

「そうですよ、ポッターさん。兄上に習いましたね。やってみますか？」

「う、うん！ やってみたい！」

「ではでは」

ロンは持っていたカエルチョコレートで顔面にチョコを塗りたいと思った。

「ロ、ロン!?!」

「さあ、やってみてください。呪文はスコージファイ。杖の振り方は手首のスナップを効かせて時計回りに回す要領ですよ」

「で、でも、僕魔法を使った事がないんだよ!?!」

「大丈夫ですよ。呪文を唱えて杖を振るだけですからね」

「う、うーん。じゃあ、やってみる……」

「その意気でき、ポッターさん!?!」

ハリーはコホンと咳払いをすると居住まいを正した。

「よ、よーし！ スコージファイ！」

呪文を唱えると共にハリーの杖からそよ風が吹き出し、ロンの顔面からチョコレートを拭い去った。

「や、やった!?!」

「お見事です、ポッターさん!?!」

初めて魔法を使った。その興奮にハリーは浮かれた。

「他にはないの!?! 僕、もっと使ってみたいよ!」

「でしたら、ピッタリの魔法がありますよ。メガネに向けて、レパロと」

「メガネに……? えっと、杖の振り方は?」

「突き出す感じに」

「こ、こう? レパロ」

杖から火花が飛び出した。ハリーがビクビクしてのけぞると、火花はハリーの顔を追いかけた。

「ななな!?!」

目の前で火花がスパークして、ハリーはすっかり動転してしまった。

「なんなの!?!」

「修復呪文ですよ、ポッターさん。メガネ、直ってるでしょ?」

「……へ?」

メガネを外してみると、罅割れていた筈のレンズが綺麗になっていた。フレームの歪みも直っている。

「わーお」

メガネを掛け直すと、以前よりも視界がクッキリしている事に気付いた。

どうやら大きな罅割れ以外にも無数の傷があったらしい。それらが修復された事で視界が劇的に改善されたというわけだ。

「……君はいろいろな事を知ってるんだね。家族もみんな魔法使いなの?」

「ええ、先祖代々魔法使いの家系でさ」

「そうなんだ! じゃあ、ホグワーツの事も知ってるんだよね?」

「それなりには! ホグワーツの事が気になるなら良い物がありますぜ、ポッターさん!」

そう言うと、ロンはポケットから奇妙な物体を取り出した。

「これなに?」

「本棚でさ」

それは確かに本棚だった。けれど、あまりにも小さ過ぎる。タバコの箱よりも小さい。

「この右下の……つとと」

爪先でひっかくようにして、ロンはミニチュア本棚から一冊の本を取り出した。

本は爪くらの大ききだったけれど、しっかりと文字が刻まれている。

「うわっ、すごいね。これ、こんなに細かく文字が書いてある！」

「ああ、これはそういう職人技のアレではなく……エンゴージオ」

ロンが呪文を唱えるとミニチュアの本はみるみる大きくなっていく。

「うわわっ!?!」

「縮小呪文を掛けて小型化していたんでさ。んで、これが本来の大きさとというわけですよ、ポッターさん」

「そ、そうなんだ」

巨大化した本には『ホグワーツ今昔』という文字が刻まれている。

「この本にはホグワーツの大抵の情報が載ってるんですよ。例えば、歴代校長の名前や業績だとか、ホグワーツ全体の簡易的な見取り図だとか、寮の解説だとかね」

「そう言えば、ホグワーツにはいくつかの寮があるんだよね？」

ハリーは以前ダイアゴン横丁で遭遇した少し嫌味な男の子の言葉を思い出しながら問いかけた。

「四つあります。グリフィンドール、レイブンクロー、ハッフルパフ、そして、スリザリン。それぞれの寮には色々の特徴がありますね、ちよつとした儀式で振り分けられるそうだし」

「儀式……?」

「さあ、それについては教えて貰えませんでした。まあ、記念すべきイベントですからね。それはやってみてのお楽しみって奴なんですよよ」

「……なるほど。じゃあ、寮の特徴って言うのは?」

「色々ありますよ。まず、寮の名前はホグワーツの創設者の名前から

取ったそうです。ゴドリック・グリフィンドール、ロウエナ・レイブ
ンクロー、ヘルガ・ハツフルパフ、サラザール・スリザリンの四人で
す。彼らはそれぞれ生徒に求める素質が違いました。例えば、ゴド
リック・グリフィンドールは勇猛果敢な生徒を望み、それ故にグリ
フィンドール寮は勇猛果敢な生徒を多く受け入れています。同じよ
うにレイブンクローは知性的な生徒を、ハツフルパフは誠実な生徒
を、スリザリンは狡猾な生徒をと」

ロンはホグワーツ今昔を開きながらハリーにホグワーツの事を
語って聞かせた。

ハリーは思った。彼はとても変な子だけど、同時にとても親切な子
だ。

よく考えると強引で距離感が異様に近い事を除けば彼の行動は
困っているハリーを助ける為のものばかりだった。

「ロンは何でも知ってるんだね」

「何でもなんてとんでもありませんぜ！ 本を読めば分かる事ばっか
りでさ。例えば、ホグワーツには隠された部屋がいくつもあるんです
よ。それは本に載ってませんからね、是非とも発見したいと思ってる
んですよ。どうです？ 一緒に探してみませんか？ ポッターさん
！」

「う、うん。楽しそうだね」

彼はそれから一番上の兄が経験したという奇想天外な冒険譚を
語った。

長きに渡り誰も発見する事の出来なかった呪われた部屋をビル・
ウィーズリーとその仲間達が発見し、打ち破ったというものだ。

その物語の中では悲しい事に死者も出てしまったという。

「……ホグワーツって死人が出るの？」

「まあ、毎年つてわけではありませんがね」

「あ、当たり前だよ……」

毎年死者が出ていたら普通はとつくに廃校になっていると思う。

なんだかホグワーツに行くのが少し怖くなって来た。

「ところで、実は興味深い噂を耳にしましてね」

「噂？」

「ええ、秘密の部屋の噂でさ」

「秘密の部屋？ それって、隠し部屋って意味？」

「そうでもあり、そうでもないってところですね。創設者の一人であるサラザール・スリザリンが遺した秘密の隠れ家だそうですし、今に至るまで誰にも発見されていないそうです」

ロンは瞳をキラキラと輝かせながら言った。

短い付き合いだけど、なんとなく彼が何を言いたいのか分かった気がする。

「……探したいの？」

「もちのロンでさ！ 呪われた部屋は完全に攻略されてしまいましたよね、秘密の部屋は今も秘密のままなんですよ！ どうです？ 一緒に探してみませんか！ ポッターさん!!」

「で、でも、危なくないの？」

「危ないかもしれませんが」

ロンは否定しなかった。

「けど、冒険には危険が付きものですよ、ポッターさん！」

「いや、冒険なんてした事ないし……」

そう言いつつも、ハリーは秘密の部屋に興味を惹かれ始めていた。呪われた部屋の話も恐ろしく思う反面、面白そうとも思っていた。「ポッターさん。世の中、本当の意味で未知つてのは早々無いもんですよ」

ロンは真面目くさった表情で言った。

「魔法だって、今はまだドキドキワクワクしてますが、いつか慣れちゃう。だからこそ、冒険するんですさ！ ドキドキワクワクする為に！」

ハリーはロンの瞳に燃え上がる炎を見たような気がした。

「エベレストを登っても、ダイビングで海底を覗いても、古代の遺跡を探索しても！ 大抵は先人達が記録を残し、研究を終えちゃってる事が殆どだ！ オレはいつだって先人の後追いばかりだった！ けど、秘密の部屋に先人はいない！ いや、作った本人は別ですぜ？

遺跡だって、作った本人達にとっては既知のもんでしょう。けど、そ

ういう事じゃねえんだ！ 今現在、誰も知らない！ 分からない！
そういう未知に挑んでみてえんだ!!」

ロンの力説にハリーは圧倒されていた。エベレストだとか、ダイビングだとか、十分過ぎる大冒険に聞こえるけれど、彼はそれで満足していないらしい。

「……ロンは未知に挑んでみたいんだね？」

「その通りでさ！ さすがはポッターさんだ！ 分かってますねえ！」

大喜びのロンに対して、これだけ力説されたら誰でも分かるという言葉をハリーは飲み込むことにした。

「ポッターさん!! ホグワーツに着いたら一緒に秘密の部屋を探しましょう!!」

「……う、うん」

ハリーはロンの圧に押されながらも頷いた。

秘密の部屋にも興味があるけれど、それ以上に友達から何かに誘われて一緒にやるといふ事に憧れを抱いていた。

「約束ですよ、ポッターさん!!」

「うん！ 約束するよ、ロン」

約束。それはハリーにとって初めての事だった。

なんだか嬉しくなって、ハリーはロンと一緒に秘密の部屋を探索する自分を夢想した。きつと、それは凄く楽しいだろうと思った。

第三話『ホグワーツ』

汽車がガタンと大きく揺れて、オレは目を覚ました。

「……あーっと、寝ちまったか」

対面ではポッターさんもぐっすりだ。二人でお菓子を食べながら駄弁っていたらいつのまにか眠ってしまったていらしい。

腹を掻きながら欠伸を噛み殺して車窓を眺める。すっかり真っ暗だ。

「あちやー。そろそろ到着か？」

汽車での旅路を楽しみにしていたから、寝てしまったのは少しもつたいなかった。

「ポッターさん！ 起きてくださいや、ポッターさん！」

「……ん、んー？ ロン……？」

「そろそろ着きますぜ。着替えましようや」

「え？」

ポッターさんは目をシバシバさせながら車窓を見た。

「うわっ、真っ暗！」

「もちつとばかり汽車の旅を楽しみたかったんですがねー」

オレ達は大慌てで服を着替えた。

「いよいよ、ホグワーツが近づいてきている。夢にまで見た冒険の舞台だ。」

「楽しみですねえ、ポッターさん！」

「うん！」

第三話『ホグワーツ』

汽車は無事にホグズミード駅に到着した。

「なんでも、ホグワーツの近くには魔法使いだけの集落があるそうです。それがホグズミード村という名前だそうです」

「だから、ホグワーツ駅じゃないんだね」

ハリーとロンが話していると、そこに一人の少女が近づいてきた。

「あなた達！」

「ん？」

「え？」

二人揃って振り向くと、少女は言った。

「わたし、さつきあなた達のコンパートメントに行ったのよ。でも、ぐっすり眠っていたから起こすのは気が引けたの」

「お、おう？」

「そ、そうなんだ？」

ハリーは困惑しながら小声でロンに問いかけた。

「……し、知り合い？」

「いんや……、初対面でさ」

困惑している二人を尻目に少女は言った。

「ネビルのカエルが逃げたのよ。まだ見つかっていないの。もしかして、どこかで見なかったかしら？」

「……あ、あー！ なるほど！ いや、見てない……ですよね？ ポッターさん」

「う、うん。僕達、ずっとコンパートメントにいたけど見てないし、入ってきてもいなかったよ。……起きてる間は」

「あらそう……。ところで、ポッターさんって言うの？」

「う、うん。僕、ハリー・ポッター」

「まあ！ わたし、あなたの事を本で読んだ事があるわ！」

瞳を輝かせる少女にハリーは後退った。なんとなく、彼女からはロンと同じ空気を感じる。

ロンには慣れてきたけれど、さすがに二人もこんな庄の強い人達に囲まれては堪らない。

「ちよいと待ちな、お嬢さん！」

そこにロンが割って入った。

「お嬢さん……？」

少女はお嬢さん呼びに首を傾げた。

「おっと、誰だって顔をしているな。そりやそうだ。名乗ってないからな。だから、名乗らせて頂こう！ オレの名はロナルド・ウィーズリー。気軽にロンって呼んでくんない！」

「あら、丁寧にどうも。わたしはハーマイオニー・グレンジャーよ。

よろしくね、ロン。それから、ハリー」

さつきまでの圧が鳴りを潜め、律儀に挨拶をして来たハーマイオニーにハリーは毒気を抜かれた。

「う、うん。よろしく……」

「よろしく頼むぜ、お嬢さん！　ところで、ポッターさんに用があるならまずはマネージャーオを通してもらおうか！」

「マネージャー!?!」

「マネージャー!?!」

ハリーとハーマイオニーは揃って目を丸くした。

「おうともさ！　魔法界を救った伝説的英雄であるところのポッターさんにはオレというマネージャーが必要なのさ！」

「ロ、ロン！　僕、そんなの……」

「安心してくだせえ、ポッターさん！　あんたにちよつかい掛けて来る不埒な輩はオレがとつちめてやりますよ！　パパラッチとかね」

「パパラッチ!?　わたし、パパラッチなんかじゃないわ！」

「そこ!?!」

ハリーは汽車でぐっすり眠った筈なのに段々と疲れを感じ始めていた。

「イッチ年生！　イッチ年生はこつちだ！」

グツタリしていると聞き覚えのある声が聞こえてきた。

「あつ、ハグリッドだ！」

ハリーは自分を魔法界に導いてくれた巨漢との再会に嬉しくなつた。

「あの人ハグリッドなの？」

「たしか、ホグワーツの森と領地の番人だったか……?　人狼なんか蔓延る禁じられた森の管理を任せられてるとは聞いていたが、なるほど、ありや強そうだ！」

「禁じられた森？」

ハリーは首を傾げた。人狼というのも聞き慣れないワードだ。

「ホグワーツの外周に広がる広大な森の事だ。数多の魔法生物が棲家になっているそうで、中には獯猛で危険な魔法生物もいるそうでさ。」

人狼はその代表例みたいなもんですね」

「怖い所なんだね」

「ええ、是非入ってみたいですね!」

「……ん?」

ハリーは今、致命的に会話が噛み合っていない気がした。

「入ってみたい……?」

「ええ、危険な魔法生物が跋扈する森を探索する! まさに大冒険じゃありませんか! 是非、一緒に行きましょうや! ポッターさん!」

「ダメよ!」

ハリーが返事をする前にハーマイオニーが腰に手を当てながらプリップリした様子で言った。

「禁じられた森への立ち入りは禁止されているの! だから、禁じられた森なのよ!」

「そこは先生方との交渉次第って所でしようよ。もちろん、無断で入り込む事が違反って事は重々承知してまず、お嬢さん」

「……それなら、まあ」

ハリーとしてはそんな危険な所にわざわざ入り込みたくはなかったのでハーマイオニーにもう少し頑張って欲しかった。

「あなた達!」

そこに黒髪の少女が現れた。

「おや、お嬢さん。どうかしたのかい?」

「お、お嬢さん……? って、それはいいわ! それより一年生よね?

もう、みんな行っちゃったわよ!」

「え?」

「え?」

「え?」

ロン達は顔を見合わせた。

よく見るとハグリッドの姿がない。

「ええええええええええ!」

「置いていかれた!」

「い、急いで追いかけなきゃ!!」

ロン達は大慌てで駆け出した。

「そんなに先へは進んでない筈だから慌てなくて大丈夫よ! その向こうの小道を道なりに進むだけだから!」

心配して声を掛けてくれた少女の言葉にそれぞれ感謝の言葉を返しながら三人は小道を急いだ。

「面目ありません、ポッターさん! オレの責任だ!」

「い、いや、ロンの責任ってわけじゃ……」

「いいから急ぎましょう!」

ハーマイオニーに尻を叩かれながら急ぐと何とか集団に追いつく事が出来た。

それぞれがハグリッドに小舟へ押し込まれている。

「ハグリッド!」

「おお、ハリー! 後ろにおったんか! そら、小舟に乗りな」

「う、うん!」

ロンとハーマイオニーも続いた。

「よし、全員乗ったな! では、出発!」

小舟はハグリッドの掛け声と共に勝手に水面を走り始めた。

その様にロンは口笛を吹き、ハリーとハーマイオニーは歓声をあげた。他の船でも興奮した様子の一年生達の囁き声が広がっている。

周囲を木々に囲まれた細い川をハグリッドが掲げているランプの灯りのみを頼りに進んでいく。まるでテーマパークのようだとロンは思った。

小舟の集団は暗黒の中を進んでいき、やがて開けた場所に出た。

「こいつはたまらねえ……」

ロンはその絶景を目の当たりにして興奮を抑えきれなかった。

闇夜に浮かぶ巨城。正面の湖面には窓の光がキラキラと反射していて、まるで夜空の中を泳いでいるような錯覚を与えてくる。

隣ではハリーとハーマイオニーも息を呑んで絶景に見とれていた。

「頭を下げるー!」

ハグリッドの声だ。正面に洞窟が近づいている。天井がかなり低

いようだが、ハグリッドがぶつからない限り、生徒が頭をぶつける事は早々無さそうだ。

小舟は洞窟地下の岸辺で停止した。

「よつとー!」

ロンは身軽にボートから岸に飛び移り、ハリーに手を伸ばした。

「さあ、ポッターさん!」

「あ、ありがとう」

「さあ、お嬢さん!」

「ありがとう」

「つと、あぶねえ!!」

ハリーとハーマイオニーに手を貸したロンは隣のボートからふとつちよな男の子が飛び移ろうとしてバランスを崩しかけている事にいち早く気付いた。

「どわー!」

けれど、バランスを崩した少年はすっかり動転していて、助けようとしたロンもろともひっくり返ってしまった。

「大丈夫か? 二人共」

間一髪、ハグリッドが二人を片手でそれぞれ掴んで助けた。

「おお、感謝するぜ! ハグリッドのとつつあん!」

「とつつあん!! あー、なんでもいいが気いつけるよ?」

「ガッテンだ!」

ハグリッドに陸地で下ろしてもらおうとロンは手早く乱れた服を整えた。

「おう、大丈夫かい?」

「う、うん。ありがとう……、えつと」

「オレの名はロナルド・ウィーズリー。ロンって呼んでくんない!」

「うん。僕はネビルだよ。ネビル・ロングボトム」

「よろしくな、ネビル。しっかし、とつつあんスゲエな! 片手でオレ達を軽々持ち上げちゃった! こんなパワフルなタフガイにはこれまでお目にかかった事が無い! 尊敬するぜ!」

「そ、そうか? とりあえず、そろそろ出発するからな。船に忘れ物と

かしてねえだろうな？」

「ちよつくら確認してくるぜ！」

ロンは小舟を端から端まで順番に見ていった。

「おいおい、カエルを落としたのは誰だ!？」

「トレバー!!」

なんと、ネビルのカエルが見つかった。

「他にはなんもねえようですぜ、とつつあん!」

「おう、すまねえな。よし、イツチ年生！ これから上に向かうぞ。ついて来い！」

ハグリッドは一年生達を先導して岩の階段を登り始めた。

「あ、ありがとう」

ネビルはカエルを見つけてくれたロンにさつき助けてもらった事も含めて深く感謝した。

「良いつて事よ！ これから学友になるわけだしな。長い付き合いになるんだ！ 水クセエ事は無しでいこうや！」

「う、うん」

ハグリッドの後に続いて一年生達が石階段を登り終わると城門の前には年配の女性が立っていた。

「おお、別嬪さんじゃねえか！」

「え？」

みんなが厳格そうな雰囲気の彼女に尻込みしている中、ロンだけ変な反応を示していてネビルはキョトンとなった。

「わたくしはミネルバ・マクゴナガル。ホグワーツの教頭です。ここからはわたくしが引率を行います。みなさん、ついて来て下さい」

どうやらハグリッドはここまでらしい。ロン達はハグリッドに一言ずつ声を掛けながら城門をくぐり抜けた。広々とした校庭を抜けると大きな扉があり、マクゴナガルが近づくとまるで自動ドアのように勝手に開いた。

ハリーは不思議そうに扉を見つめている。

「コレも魔法なのかな？」

「うーん。ホグワーツの今昔には書いてありませんでしたね。カラク

りっぽいものも見えるし……、んん?」

「きつとカラクリ半分、魔法半分なのよ。珍しい事じゃないわ。魔法だけで開くようにする事も出来ると思うけど、それだと扉が傷みやすいもの。魔法による自動開閉をカラクリでサポートしているのよ、きつと」

「なるほどだぜ! お嬢さんは頭がいいな! 将来大物になるぜ、絶対!」

「どうも……。それにしても、あなたもホグワーツ今昔を読んだのね。わたしももちろん読んだわ! ホグワーツの事を知りたかったし、他にも魔法界にまつわる本をたくさん読んだのよ!」

「そいつは凄い! 本をたくさん読む事は良い事だぜ! お嬢さんはがんばり屋さんだな!」

「そ、そうかしら……?」

ハーマイオニーは頬を赤らめながら顔を逸した。どうやら褒められて満更でも無いらしい。

それからロン、ハリー、ハーマイオニー、ネビルの四人は他の一年生達と共に入り口近くの小部屋に押し込まれた。

人数に対して、部屋があまりにも狭い。窮屈だった。

「まるで満員電車に乗ってるみたいだぜ」

ゲンナリしながら言うロンにネビルは首を傾げた。

「満員電車?」

「ぎゅうぎゅう詰めてこった! っと、なんだあ!」

ロンは素っ頓狂な声をあげた。びつくりするハリーとハーマイオニーは直後更にびつくりした。

なんと、壁から人が生えてきたのだ。

「なにこれ!」

ネビルも目を白黒させている。

「ゴーストよ!」

ハーマイオニーはいち早く正体を見破った。

壁から生えてきた人々は誰も彼もが白く、そして透き通っていた。空中を自在に泳ぎながら生徒達に話しかけてくる。

その超常現象を前にして、ロンは興奮した。

「ゴースト！ お化け！ 幽霊！ 居るって事は聞いてたし、本でも読んだ！ けど、実際に出会えるとは!!」

ロンは一番近くを漂っている血みどろの男に手を振った。

「おーい、旦那！ 旦那！」

けれど、血みどろの男は気づかなかったのかそのまま壁の中に戻って行ってしまった。

「ぎ、残念だったね……」

シヨボンとするロンにハリーは慰めるように声を掛けた。

するとマクゴナガルが戻って来た。他のゴースト達もいつの間にかいなくなっていた。

「さあ、組分けの儀式が始まります。みなさん、わたくしについて来て下さい。大広間へ向かいます！」

第四話 『組分け儀式』

空中に浮かぶ無数の蠟燭に脳が痺れた。

天井に広がる銀河に涙腺が緩んだ。

一步進む毎に興奮が増していく。

「……ポッターさん。オレ、今感動してますぜ」

「僕もだよ……」

学校は嫌いじゃなかった。

勉強を苦に思った事はない。体育の成績はいつもトップを独走していた。

六十六歳で天寿を全うするその瞬間に涙を零してくれたダチ公共の中には小学生の頃からの腐れ縁もいた。

中学の頃から付き合い始めた女と深夜の学校に忍び込んだ事もあった。高校で暴走族の仲間と一緒に学校の窓硝子を割った事もあった。大学で遊び過ぎて三人の女に自宅へ踏み込まれた事もあった。

楽しい思い出、苦い思い出、悲しい思い出、嬉しい思い出、腹の立つ思い出、いろいろあった。

だけど、入学式でここまで心を震わされた事はさすがに無かった。「学校なんざ、どこも変わんねえと思ってたのによお！」

ただ、入学しただけだ。ただ、歓迎を受けているだけだ。ただ、歩いているだけだ。

それだけで幸福の絶頂を感じている。

ずっと求めていた世界が広がっている。魔法という超常現象に満たされた世界。

「これがホグワーツか！」

第四話 『組分け儀式』

マクゴナガルが立ち止まった。

そこは教員達が座る席と生徒達が座る席の間にポツカリと開いた空間だった。

「これより組分けの儀式を始めます」

そう言つて、彼女は小さな椅子と古ぼけた帽子を運んで来た。
まるで、その帽子こそが主人公とでも言うかのように彼女は脇へ身
を引いた。

そして、1年生達が首をかしげる中で唐突に帽子が動き出した。
切れ込みが入っているのかと思われた部分がまるで口のようにパ
カパカ開き、帽子は歌を歌い始めた。

わたしは綺麗じゃないけれど
人は見かけによらぬもの

わたしを凌ぐ、かしい帽子
あるならわたしは身を引こう

山高帽は真つ黒だ

シルクハットはするりと高い

わたしはホグワーツの組み分け帽子

わたしは彼らの上を征く

きみの頭に隠れたものを

組み分け帽子はお見通し

被ればきみに教えよう

きみが征くべき寮の名を

グリフィンドールに征くならば、そこは勇氣ある者が住う寮

勇猛果敢な騎士道で、他とは違うグリフィンドール

ハツフルパフに征くならば、きみは正しく忠実で、忍耐強く真実で、

苦勞を苦勞と思わない

古き賢きレイブンクロー

君に意欲があるならば、機智と学びの友人をここで必ず得るだろう
スリザリンではもしかして、きみは真の友を得る

どんな手段を使つても、目的を遂げる狡猾さ

被つてごらんよ、恐れずに！

興奮せずに、お任せを！

きみをわたしの手に委ね！ おっと、わたしに手はないね！

だって、わたしは考える帽子！

帽子が歌い出す。それはまさしくファンタジックな光景だった。

これまでマグルの世界で生きて来た子供達は特に思い知らされていた。

ここから先は常識など通用しない魔法の世界。夢が現実となる世界。

「ブラボー!!」

ロンは涙を流しながら拍手をした。

周りの子供達がドン引きしていても、彼は帽子に拍手を送り続けた。

「最高だ!! 素敵なお歌だったぜ、帽子の旦那!!」

「ロ、ロン! 落ち着いて!」

興奮するロンを必死に宥めようとするハリー。

「お静かに!」

そこにマクゴナガルの鋭い声が飛んできた。

「組み分け帽子の歌に感動するのは結構ですが、これから組分けを開始します。儀式の間は口を閉じて、自分の名前が呼ばれるまで静かにお待ちなさい」

「ガッテンだ!」

元氣よく返事をするロンをマクゴナガルはジロリと睨んだ。ハリーとハーマイオニー、ネビルの三人は慌ててロンを黙らせた。

ロンが黙るのを確認するとマクゴナガルはA B Cの順に名前を呼び始めた。

呼ばれた生徒が椅子に腰掛けて帽子を被ると四つの寮の内のどれかに割り振られていく。

「ハーマイオニー・グレンジャー」

G r a n g e r
グレンジャーであるハーマイオニーがまっさきに呼ばれた。

彼女がどこの寮に入るのかロンとハリーは特に注目した。

それまでに組分けされた生徒達はほぼ帽子を被った瞬間に寮の名前を叫ばれていたのだが、ハーマイオニーは帽子を深々と被ったまま沈黙が続いた。

「……ど、どうしたのかな?」

ハリーは困惑した。まさか、寮を選んでもらえなかったのではない

だろうか心配になって来た。

けれど、それは杞憂であると直ぐに分かった。

グリフィンドール!!!

帽子は高らかに叫んだ。

ハーマイオニーはあからさまにホツとした様子でグリフィンドールの席に向かい始めた。

その途中、ロン達の方に向かって軽く手を振った。

ロン達も手を振り返し、更に組分けの儀式を見守っているとネビルの番が回ってきた。

「ネビル・ロングボトム」

ネビルの場合は早かった。

グリフィンドール!!!

彼は目をパチクリさせている。マクゴナガルにせつつかれてグリフィンドールに向かいながら、彼もロン達に手を振った。

「二人共グリフィンドールだったね」

「たぶん、オレもグリフィンドールでしょうね。なにしろ、家族全員が生粋のグリフィンドール生なもんで」

「そうなの!?!」

ハリーは慌てた。寮についての知識はダイアゴン横丁で嫌味な男の子が言っていた言葉とロンが教えてくれた事が全てだ。

ロンはどの寮の事も良い感じに思える解説をしてくれた。

けれど、なんとなくスリザリン寮は避けたいと思っていた。嫌味な男の子がスリザリンの事を持ち上げていた事が一番大きな理由だった。

「ドラコ・マルフォイ!」

その男の子が今まさに呼び出され、帽子は触れるか触れないかの時点で彼の寮を叫んでいた。

スリザリン

気取った様子でスリザリンの席に向かっていく少年を見て、ハリーは少なくともスリザリン以外の寮が良いと思った。

そして、彼の番が来た。

「ハリー・ポッター」

その瞬間、喧騒が一気に静まった。あまりの変化にハリーは戸惑った。

「ポッターさん！」

すると、ロンがハリーの真正面に立った。

「喋る帽子の旦那が寮を決めてくれるんだ！ 組分けがこんなにワクワクするもんとは思わなかったぜ！」

「ワクワクって……、僕はむしろドキドキってどうか……」

「いいじゃないですか！ ドキドキワクワク！ それが人生つてもんよ！ なんだって、どんな事だって楽しんだもん勝ちよ！」

出会った時から変わらないロンを見て、ハリーは少し落ち着く事が出来た。

「……行ってくるね」

「行ってらっしゃい、ポッターさん」

ハリーは微笑んだ。今がロンの思いやりなのだと分かったからだ。

組み分け帽子の下へ向かっていく途中、みんなからの視線が突き刺さってくる。

だけど、彼らの視線よりも強い圧を汽車の中でずっと味わって来た。だから、このくらいヘツチャラだとハリーは俯きそうになる頭を上げた。

「お願いします」

椅子に座るとマクゴナガルがハリーに組み分け帽子を被せた。

これは難しい……。

まるで空から声が降ってきたかのようだ。

勇気に満ちている。頭も悪くない。才能もある。おまけに自分の力を試したいという素晴らしい欲望もある

ハリーは願った。

—— みんなと一緒にがいい。僕はグリフィンドールがいい。

グリフィンドールがいいのかね？ 君ならばどの寮でもそれぞれ素晴らしい未来を切り拓く事が出来るだろう。特にスリザリンでは

偉大なる者への道が開かれる

—— 僕はグリフィンドールがいい。

よろしい……。そうまで願うならば

グリフィンドール!!!

ハリーは歓声を上げかけた。マクゴナガルが帽子を脱がせると、彼はロンに手を振った。そして、ハーマイオニーとネビルが待っているグリフィンドールの席へ向かった。

そして、遂にロンの番が回って来た。

「来た来た来たー!!」

ロンは待ちに待った瞬間に胸を踊らせた。

喋る帽子を前にして、ロンは満面の笑顔を浮かべた。

「よろしく頼むぜ、帽子の旦那!!」

「いいから、早く座りなさい」

マクゴナガルはやれやれといった調子で言った。

彼女は彼を見て、彼の兄弟達を思い出していた。特に双子のフレッドとジョージを……。

「頼みませ、マクゴナガル先生!」

威勢よく椅子に座るロン。彼の頭にマクゴナガルは組み分け帽子をポンと乗せた。

これはまた……

帽子の声が聞こえて来た。

—— おお、帽子の旦那! やっぱ、いい声してるぜ! さつ

きの歌声も最高だったぜ!

おお、そうかね? そのような感想を言ってくれる子は少ない。ありがとう

—— いいって事よ! オレは心から思った事を言っただけだぜ!

そのようだ。君は自分の心にとっても正直だ。恐れを知らぬ勇敢さを持ち、未知に対して貪欲でもあり、己の野望を大切にしている

—— さあ、帽子の旦那! オレの寮を選んでくんない!

よろしい……。君のような男に相応しい寮は

グリフィンドール!!!

第五話 『ルームメイト』

「ふがっ!？」

自分のイビキで目が覚めた。

「……つと、朝か」

腹を掻きながら起き上がると、窓から朝日が差し込んでいた。

「ツヘー・清々しいぜー!」

バンと窓を開くと冷気が部屋に雪崩込んで来た。

体と共に心も引き締まる。

「さむっ!?! なんて窓開けてんだ!?!」

寝ぼけ眼で文句を言うのは黒人の男の子だ。

「おはようさん! そう言えば、昨日は満足に自己紹介も出来ていなかったな。改めて、オレの名はロナルド・ウィーズリーだ! よろしくな!」

「デイ、デイーンだよ。デイーン・トーマス」

ロンの庄にデイーンは若干怯えながら名乗り返した。

「んん……、朝?」

二人の声でデイーンの隣のベッドの子も目を覚ましたらしい。

「そうだぜ、ブラザー!」

ロンは手をパンパン叩きながら彼の下へ向かった。

「おはよう! オレの名はロナルド・ウィーズリーだ! 名前を教えてくださいよ、ブラザー!」

「ブラッジャー……? え? クイディッチの話? えつと、名前だっけ? 僕、シエーマスだよ。シエーマス・FINEGAN。アイルランドのナショナルチームのファンさ」

「そうなのか! オレはなんと言ってもチャドリー・キャノンズだぜ!」

「ええ……、負けてばっかじゃん」

「だからこそ、応援のし甲斐があるってもんよ!」

そんな風に話していると他のベッドの住民も目を覚まし始めた。

「……ロン? チャドリー・キャノンズってなに?」

「おお、ポッターさん！ もしや、ご興味が！ でしたら、ここに『キャノンズと飛ぼう』ってファン雑誌がありますよ！」

ハリーは目をシバシバさせながらもメガネを掛けてロンが運んで来た冊子を眺めた。

「クイディッチ……？ なんだっけ、それ」

「ええええええええええ！」

「マジで言ってるの!？」

ハリーの言葉に丁度ベッドから降りようとしていたネビルとシエーマスが反応した。

「え!? なに!？」

「ハリー！ 君、クイディッチを知らないの!？」

「そんな馬鹿な!?! クイディッチだよ!！」

「……僕もよく知らないんだけど」

ディーンの言葉にネビルとシエーマスは絶句した。

「もしや、ディーンはマグル生まれか？」

ロンは手をポンと叩きながら問いかけた。

「う、うん。両親共マグルだよ」

「なるほどな。クイディッチってのは要するに魔法界限定のスポーツでさ」

「魔法界のスポーツ!？」

「それって、どんなの!？」

ハリーとディーンは興味津々の様子だ。

「驚いた。本当に知らないんだね」

「クイディッチを知らないなんて……」

そんな二人にネビルとシエーマスは未だ衝撃が収まらないらしい。

「そう言うネビルとシエーマスはサッカーを知ってるかい？」

「サッカー?」

「なにそれ？」

「ええええええええ!？」

「うそでしょ!？」

立場が逆転した。

今度はポカンとしている二人にハリーとデイーンが驚愕している。「サッカーはマグル限定のスポーツさ。それぞれ片方だけの世界で生きて来たら知り得ない事もあるうさね」

ロンは肩を竦めながら言った。

「そう言うロンはどっちも詳しいよね?」

「うんうん」

ハリーとネビルの言葉にロンは苦笑した。

「オレは知らない事を知らないままにするつてのがどうにも落ち着かないタチなだけですよ。まあ、クイディッチについては朝食の席で説明致しましょう! さあ! みんな着替えて大広間へ行こうぜ!」

第五話『ルームメイト』

大広間に向かうとハーマイオニーの姿があつた。

「おはよう、お嬢さん! 相席いいかい?」

「あら、おはよう。もちろんよ、ロン。ハリーとネビルもおはよう。そっちの二人は?」

「おはよう、ハーマイオニー。デイーンとシエーマスだよ」

「ハーマイオニー、おはよう。ルームメイトなんだ」

「よろしく、デイーンだよ」

「シエーマスだ」

ロンは席に座りながらキョロキョロ辺りを見回した。

「お嬢さんのルームメイトはまだ夢の中かい?」

「ええ、みんなグツスリ。まだ早い時間だから先に出て来ちゃったの」

「お嬢さんは優しいな。ところで、料理の注文はどうすればいいんだ?」

「食べたい物を言えばいいのよ。わたしもチョウに教えてもらったの」

「チョウ?」

ハーマイオニーはレイブクロウ寮の制服が集まる席を指差した。そこには見覚えのある少女がいた。

「おお! あの時のお嬢さんじゃねーか!」

「あつ、本当だ!」

その少女はホグズミード駅でロン達に親切にしてくれた子だった。

「レイブンクローの生徒だったんだね」

「チョウ・チャンって言うのよ。わたし達より一つ上らしいの。すっごく優しい人だわ」

「ああ、違いねえ！」

ロンは立ち上がった。

「ロン？」

「二度も親切にされて黙っちゃいられねえぜ！」

そう言つて、ロンはレイブンクロー寮の席に向かつて走り出してしまった。

ハリーとハーマイオニー、ネビルの三人は顔を見合わせた。

それから慌てて彼を追いかけた。取り残されたシェーマスとデイーンは顔を見合わせた。

「なんなんだ？」

「さあ」

二人は肩を竦めた。

「お嬢さん！」

そして、ロンはチョウの下へ辿り着いた。

目を丸くするチョウ。他の生徒達もポカンとしている。

「オレの名はロナルド・ウィーズリー！ 昨日は親切にしてくれた！ 今朝もうちのお嬢さんに優しくしてくれたみたいだ！ 朝食の団欒を邪魔するのは気が引けたが、我慢出来なかったぜ！ オレは感謝の気持ちでいっぱいなんだ！ 伝えさせてくれ、ありがとう!!」

「え、ええ。ど、どういたしまして……」

ロンの圧力にチョウは腰が引けている。

「このお礼は必ずさせてもらうぜ！ 困った事があつたら何でも言つてくれ！ あんたの為なら何でもするぜ！ ってなわけで、邪魔したな！ あばよー！」

「……は、はい」

去っていくロン。チョウは呆気にとられたままだった。

「そ、その、ありがとうございました」

そんなチョウに恐る恐るハリーもお礼を言った。

「あの、改めてになるけど、ありがとう、チョウ」

ハーマイオニーも二度目になるお礼を言った。

「えっと……、あ、ありがとう」

ネビルは流れに乗った。

そして、三人もそそくさとグリフィンボール寮の席へ戻って行った。

「……あ、嵐のようだったね」

レイブンクロウの監督生のペネロピー・クリアウオーターが言った。

「そ、そうだね。でも……、とても良い子達ね」

チョウは走り去っていくロン達を見た。

そして、優しく微笑んだ。



朝食ではクイデイツチの話で盛り上がった。

ハーマイオニーは知識だけは知っていたものの、具体的なイメージを掴めずにいたらしく、ロンやシエーマス、ネビルの話にハリーやデインと共に興味深げに耳を傾けていた。

そうしてしばらくするとハーマイオニーのルームメイト達もやって来た。

大きなリボンが特徴の女の子はラベンダー・ブラウン。インド系の顔立ちの女の子はパーバティ・パチル。

どうやらハーマイオニーの部屋は三人部屋らしい。

パーバティは明るく社交的な様子だが、ラベンダーは男子と接する事に慣れていないらしく、その事を察したロンは食後の腹ごなしにハリー達を誘った。

「授業まで時間がある事だし、中庭でサッカーやろうぜ！ ネビルとシエーマスもたまには異文化に触れてみるのも悪くない筈さ！」

「いいね！ やろうやろう！」

デインが飛びつき、男子チームはハーマイオニー達に声を掛けて中庭に向かった。

「よし、広さは十分だな！ えつと、これでいいか」

中庭には丁度いい大きさの石があった。

「どうするの？」

ハリーが問いかけると「こうするんでさー」とロンは杖を振った。

「フェラベルト」

すると石はサッカーボールに姿を変えた。

「凄い!!」

「ロン、もう変身術が使えるの!?!」

「わーお！」

「すっげー！」

「へへっ、一番上の兄上が教えてくれたんでさ」

ロンは器用にサッカーボールを浮かせ、リフティングをした。

「上手だね！」

「これでもガキの頃からスポーツは大概得意だったんでね！ そら、

デインー！」

「オツケー！」

ロンからパスされたボールをデインーも器用にリフティングし始めた。

「おっ、やるじゃねーか！」

「まあね！ 地元のクラブに入ってたからこのくらいはお茶の子さい

さいさー！ それ、ハリーー！」

「わっ!? ちよちよっ、こ、こっう？」

デインーにパスされたボールをハリーは必死に蹴り上げた。ロンやデインーと比べるとおぼつかない様子ながら、それでもリフティングが出来ている。

「さすがはポッターさんだ！」

「よ、よしー！ 行くよ、ネビル！」

「う、うん！」

ハリーにパスされたボールをネビルは思いつき蹴り上げた。

「わっ!? ごめん!!」

「任せて！」

シエーマスはボールを追いかけて走り始めた。

なんとか落ちる前に追いつくと、シエーマスはロンに向かってボールを蹴った。

「オーライ！ ナイスパスだぜ、シエーマス！」

少し強めの勢いながら、ロンは鮮やかにボールを受け取り、再びフティングを始めた。

それから五人は授業が始まるギリギリまで遊び続けた。

そして、見事に授業に遅刻したのだった。

第六話 『魔法学校の授業』

初っ端の授業に遅刻してしまったロン達五人組は慌てて席に座った。

『遅刻は感心しませんよ』

驚いた事に一時限目の魔法史の担当教師であるカスバート・ビンズはゴーストだった。

彼は一言だけ注意すると授業を再開した。

「ビックリしたよ」

ハリーはゴーストの先生に目をパチクリさせている。

「ママに聞いた事があるよ。たしか、暖炉で眠っていて、起きた時に肉体を置き忘れてしまったんだってさ」

「そんな事ある!?!」

シエーマスの言葉にデイーンはポカンとしている。

「……しっかし、声が小さいな。おい、もつと前に行こうぜ。ここだと聞こえねえよ」

ロンは必死にビンズの話聞き取ろうとしていたけれど、彼の声はボソボソとしていて非常に聞き辛かった。

「ええ……」

「ロンって、真面目なんだね」

「まあ、確かに聞こえないもんね」

「いいと思うよ」

シエーマスとデイーンは渋々といった様子ながら、五人は一番前の席に移動した。

そこにはハーマイオニー達の姿もあった。

「あなた達、先に行った筈なのにどうして遅刻してるの?」

咎めるように睨みつけてくるハーマイオニーにロンはシートと人差し指を口に当てた。

「お怒りはごもつともだが、まずは授業に集中しようや」

さすがに最前列まで来ればビンズの声も問題なく聞き取る事が出来た。

『えー、現代観測出来ている最古の呪いはエジプトのファラオの墓に掛けられていたものであります。それ以前のものとなると魔力が風化してしまい痕跡だけを辿れるものがいくつもあるのみとなっております。それらも正確な効果、発動条件などは不明となっております。カイロにある紀元前2700年頃建造されたピラミッドが魔力の風化を抑えるための処置が行われていますが、あと数年以内には完全に風化してしまうだろうとエジプト魔法省が発表しておりますね。このピラミッドに掛けられた呪詛の内訳は侵入者立ち入り禁止線、空間拡張、幻影の罫などです。他に建造当時生贄となった人々の怨念をピラミッド内に封じ込める細工が施されております』

「先生ー」

ビンズが教科書に記されている内容をそのまま読み上げているとロンが手を上げた。

『……んー、君は』

「オレの名はロナルド・ウィーズリーです！教科書だとそこで終わってるんですが、怨念を閉じ込める事に意味はあるんでしょうか!?」

『もちろんあります。これは現代で言う所の闇の魔術の祖先とも言える悍ましき深淵の術の一つですね。そもそも、魔法は精神と密接に関わっています。分かりやすく例えるなら変身術ですね。変身術を使う時は変身させたい物を強くイメージする必要があります。他の術に関しても魔法の発動には強いイメージが必要不可欠なのです。それは闇の魔術も例外ではなく、その発動には強い負の感情やイメージネーションが必要となるのです。さて、想像すれば分かると思いますが生贄にされた人々が死の瞬間に抱いたのはどういう感情だと思えますか?』

「死にたくない……、ですかね?」

『それも一つでしょう。他にもあらゆる負の感情が爆発していた事は想像に難くありません。そうした感情をピラミッドという瓶に詰めて熟成させたわけです。その悪しき魔力は想像を絶する極大の呪詛となりました』

「きよ、極大の呪詛……」

『ピラミッドに使われた建材一つ一つに呪詛が浸透し、ピラミッドそのものが一個の意思を持つに至ったのです。邪悪なる意思はその悪意を侵入者に向ける。これによりピラミッドは王の遺体を守る為の堅硬な墳墓となったのです』

「ピラミッドが意思を?!」

ロンだけではなく、他の生徒達も驚いていた。

「せ、先生！ 建物が意思を持つなんて、本当にあるんですか!?!」

ハーマイオニーは堪らずに問いかけた。

『ありますよ。例えば、このホグワーツ城が良い例となるでしょう』

「え!?!」

ハーマイオニーは目を見開いた。

『長い歴史の中でホグワーツ城が自らの意思を示した事実が幾度も確認されています。例えば、生徒や教職員が強く望んだ時、ホグワーツ城はその者の力になろうとします。反対にホグワーツの生徒や教職員に悪意を向ける者に対しては明確な敵意を向けた事もあります。これは創設者達が建造時に掛けた魔法によるものではなく、歴代の校長が増築した魔法によるものでもありません。ホグワーツ城がこの国のあらゆる施設の中で最も安全である理由の一つこそ、ホグワーツ城が自らの意思をもって生徒や教職員を守ろうとする為なのです』

第六話 『魔法学校の授業』

「いやー、面白い授業でしたね！ ポッターさん!」

「うん！ ホグワーツ城が生きてるなんてビックリしたよ」

ロンの言葉に対して、ハリーは壁や天井を見回しながら言った。

「うーん、あれ本当なのかな?」

シエーマスは疑っているようだ。

「魔法界でも不思議な事なの?」

デイーンの言葉にシエーマスは肩を竦めた。

「だって、建物だよ?」

「でも、絵とかお菓子が生きてたりするじゃん」

「それはそうだけど……」

魔法界で生きてきたシエーマスにとってもホグワーツが生きているという話は衝撃的だった。

「付喪神ってやつかもしれないねえなあ」

「付喪神？」

ネビルは首を傾げた。

「ああ、長い事使われてきた道具には魂が宿るつってな。そういう言葉が日本って国にあるのさ」

「日本？」

「ああ、トヨタがある国だよ。うちの車はトヨタ製なんだ！」

「トヨタ？」

「そもそも、魔法界に車ってあるのかな？」

そんな風に話していると二時限目の闇の魔術に対する防衛術の教室に辿り着いた。

「うわっ!？」

「くさっ!？」

教室の扉を開いた途端にニンニクの臭いが襲いかかってきた。

「なんだあ!？」

あまりの臭さにロンは涙目になっている。

「や、やあ……、き、君達もせ、せ、席に……コホン、席につきた、たまえよ」

どもりながらターバンを巻いた男が声を掛けてきた。

闇の魔術に対する防衛術の担当教師であるクイリナス・クイレルだ。

「先生、このニオイなんなの!？」

シエーマスが抗議するとクイレルは曖昧な表情を浮かべた。

「きゅ、吸血鬼避けだよ。ほ、ほら、や、闇の魔術に対する防衛術はき、危険な魔法生物のた、た、対処法も学ばなければ……その、いけないからね」

「吸血鬼？」

ハリーは首を傾げた。

「吸血鬼は人に近い姿をした吸血生物の事でさ！ 生ける屍の一種で

死体が何らかの条件で吸血鬼に変化するそうですよ」

「生ける屍?！」

ゾツとする響きにハリーは身震いした。

「く、くわしいね。そ、そう。その通りだよ。きゅ、吸血鬼は生ける屍だ。ア、アメリカには似た、似たような生物としてゾ、ゾンビがいるね。他にもちゅ、中国にはキョンシーがいたりするんだよ」

「そう言えば、先生。ゾンビと亡者って、何が違うんですか?！」

ロンは思いついたように問いかけた。

「も、亡者とゾンビのち、違いかい? そ、それはだね。う、うーん」
クイレルは困ってしまった。

「ロン。亡者って?！」

「生ける屍の事ですよ、ポッターさん。どっちも腐った死体が無軌道に動き回るって言う特徴があるんです。その違いがよく分からなくてですね……」

「た、たしかにあまりそ、双方に違いは……いや! ああ、そうだ! も、亡者とゾンビにはさ、最大の違いがあ、あつたよ」

「ほんとですかいい!！」

「あ、ああ。も、亡者とぞ、ゾンビの最大のち、違いはだね……、亡者はま、魔法で生み出されるといふ点だよ」

「魔法で? でも、ゾンビもたしか人工的に作られた例があるって聞きましたぜ? フランケンシュタイン博士の怪物とか」

「えっ……、それは……ああ! それは、そのだね。恐らくは何か本で読んだのではないかね?！」

「ええ、そうです! 魔法生物の本でゾンビの項目にフランケンシュタインの怪物の名前がありました!」

「そ、それは恐らくよ、読んだ本がま、間違っているね。ニュ、ニュート・スキヤマンダーの本がた、正しいんだよ。あのか、怪物はも、亡者とはす、少し作り方が違うが……、か、カテゴリー的には亡者なんだよ。あ、あれはね、錬金術と魔法によるものだからね。た、ただ、自然発生するゾ、ゾンビとはちよ、ちよつと違うんだ」

「なるほどなー」

ロンは納得したようで満足げに頷いているが、ハリー達は生ける屍の話聞いてすっかり青褪めていた。

「ゾ、ゾンビって自然発生するんだ……」

「あっ！もしかして、ゾンビが自然発生するのもピラミッドが生きてるっていうビンス先生の話とつながったりするんですかね!？」

ピンときた様子で言うロンにクイレルは困惑した表情を浮かべたけれど、少しすると目を見開いた。

「あ、ああ、いや……、そう！そ、その通りのようだよ！ピ、ピラミッドの話というのは、よ、要するに生贄の怨念を封じ込める事でピラミッド自体に意思を持たせる古代の呪詛の事だろう？ゾンビも同じなんだよ。墓場というものは墓参りの為に訪れた者達の死者を悼み、復活を望む念が渦巻いているからね。その念に満たされたまま長い年月を過ごした死体は時折動き出すんだ。亡者はそのプロセスを魔法によって簡略化させたものなのだよ。まあ、ピラミッドとは違って墓場は大抵解放的な場所に作られているから念が散りやすいのだけど、古い場所だと魔法使いによる結界が設置されている場合もあってね。そういう所で生まれるわけだから、ある意味で魔法で生み出したとも言えなくはないか……。だから、厳密に言えば、やはり亡者とゾンビに違いはない？いや、しかし……、そこに人の意図が介在しているかどうかは明確な違いと言ってもいいかもしれない……」

途中からどもる事もなく、クイレルはぶつぶつと自分の世界に入ってしまった。

とつくに授業の時間はスタートしているけれど、その事にも気付いていないらしい。

けれど、クイレルの独り言は聞いていても面白かった。

「でも、死人が復活する事もあるんだね。さすが魔法界って言うか……。もしかして、僕のパパとママも蘇ったりとか……」

ハリーの言葉にロンはすまなそうな表情を浮かべた。

「……ゾンビや亡者を含めて、生ける屍はあくまでも屍なんです。動く死体であって、蘇った生者じゃないんですよ」

「ど、どういう意味？」

ネビルはよく分からなかったようだ。

「た、魂がな、ないんだよ」

クイレルが自分の世界から帰ってきたようだ。

「動く死体はあくまでも死体という物質が動いているんだ。よ、要するにま、全くの別人になってしまっているんだ」

「つまり、中身が違うんですよ。ビンズ先生のピラミッドの話では無機物である建築材に生贄達の怨念が染み込んだ事で意思を持つていたでしょう？ 同じ要領で無機物となった死体に墓参りに来た人達の想念が染み込む事で新たな意思を持つんでさ」

その説明を受けても確りと理解出来た生徒はほとんど居なかった。理解出来たのはハーマイオニーを含めたごく一部だけだった。

「……じゃあ、やっぱりパパとママは生き返らないんだね」

「そのごく一部の生徒の一人はハリーだった。」

「すみません、ポッターさん……」

ロンは悲しそうな表情を浮かべるハリーの肩に手を置いた。

「……ひ、人は死ぬと魂を失ってしまうんだ。普通はね……」

慰めるようにそう言うと、クイレルは時計を見て慌てだした。

ようやく授業開始の時間が過ぎていている事に気がついたのだ。

彼が慌てて授業の準備を開始して、いよいよ授業開始となった瞬間、授業終了の時間が来た。

「……………じ、次回から授業をスタートさせます」

みんな、クイレルに慰めの言葉を送りながら次の授業に向かうのだった。

第七話 「ドラコ・マルフォイの憂鬱」

ハリーのホグワーツでの生活はまさに順風満帆だった。授業が面白い。友達と遊ぶのが楽しい。ご飯が美味しい。それまでのマグルの世界での生活と比べたら雲泥の差だ。

「おはようございます、ポッターさん！」

変わり者だけど心優しい友人に恵まれた事もハリーは幸福に感じていた。

「おはよう、ロン！」

今日も元気な挨拶で一日が始まる。

第七話 「ドラコ・マルフォイの憂鬱」

「しまった！ お嬢さんに返す筈だった本を置いて来ちゃった!？」

朝ごはんを食べる為にルームメイトのみんなと移動しているとロンが慌てたように叫んだ。

読書をこよなく愛するロンとハーマイオニーはちよくちよく本の貸し借りを行なっている。

ホグワーツの図書室には大抵の本が揃っているけれど例外もあるらしい。

「すまねえ、みんな！ 先に行つててくれ！」

機関車のようにパワフルな走り方で去つて行くロン。

「ロンは何の本を借りてたのかな？」

「ギルデロイ・ロックハートって人の本。ハーマイオニーにオススメされて、すっかりハマっちゃったみたい」

「ロックハートだっ!？」

シエーマスが素っ頓狂な声をあげた。

「なに!?! どうしたの!?!」

デインは目を丸くした。

「だつて、ロックハートだよ!?! ママが夢中になつてるやつじゃん!」

「ママが……?？」

ハリーは首を傾げた。

「ロックハートの本のファンは女の子が多いんだよ」

ネビルが言った。

「僕の親戚のお姉さんもロックハートの大ファンなんだ。けど、婆ちゃんも胡散臭い男だつて言うんだよ。それで二人が大喧嘩して大変だった事があるんだ」

「具体的にどんな本なの……？」

デイーンが聞くと、シエーマスとネビルは揃って肩を竦めた。

「知らない」

「僕、読んだ事ない」

そんな風に話していると大広間の前まで来ていた。

そこには三人の男の子達がいて、彼らの内の一人はハリーを見つめていた。

「やあ、久しぶりだね」

ハリーは彼の事を思い出すまでに一拍ほどの時間が掛かった。

「……君、マダム・マルキンで会った子？」

ハリーの反応が不快だったのか、少年は表情を歪めた。

「そう言えば、名乗っていなかったかな。僕はドラコだ。ドラコ・マルフォイ」

「ぼ、僕は……」

「ハリー・ポッター。もちろん、知っているとも」

ドラコは威圧的な少年だった。

ロンも庄の強い子だけど、彼から感じるものとは全く違うとハリーは思った。

「……僕達、朝ごはんを食べに来たんだ」

ハリーはあまり彼と話がしたくなかった。

けれど、大広間に入ろうとすると目の前に太い腕が伸びて来た。

「うわっ」

咄嗟に後退ると、大柄な男の子がニヤニヤとハリーを見ていた。

「おい、何をするんだ！」

見るに見かねたデイーンが声を荒げた。

「ああ、お前達は行っていいぞ。僕はハリー・ポッターに用があるんだ。お前達のような有象無象に構っているほど暇ではないんでね」

「おい、僕達を有象無象って言ったのか!？」

ドラコの挑発的な言葉にシエーマスは顔を真っ赤にした。すると彼の前には別の大柄な男の子が立ちはだかった。

「クラブ、邪魔者には御退場願え」

「おう」

手をポキポキと鳴らしながら近づいてくるクラブにシエーマスは怯えた。

なにしろ、相手は体格が一回り以上も大きい。暴力に訴えられたら一方的に怪我をさせられるのは明白だ。

「やめろ！」

シエーマスの前にハリーが割り込んだ。燃えるような眼差しをクラブに向ける。

「用があるのは僕なんだろう!？」

その瞳の輝きにクラブは体を強張らせた。そして、ハリーの姿が遠のいた。

はじめ、ハリーが後退つたのだと思った。自分に怯えたのだと考えた。

けれど、相棒であるゴイルの顔が真横に現れた事で後退つたのが自分である事に気がついた。

無意識だった。ハリーの眼光に呑み込まれ、クラブは一歩足を引いていた。

その事に気付いた瞬間、クラブの心は激情に満たされた。

「……………」

屈辱だった。正しいのはシエーマスの反応だ。ヒョロガリの癖に自分の前に立ちはだかり、あろう事か威圧して来るなど生意気だ。

怒りで頭の中が沸騰している。

拳を握り締め、振り上げた。

「ヒョロガリがあああ!!」

迫り来る拳を前にして、ハリーは恐怖した。けれど、顔を逸らさなかつた。

それは暴力を向けて来る目の前の男に対する彼の精一杯の抵抗

だった。

—— よーし、お前達！ そいつを捕まえておけよ！

マグルの世界ではイトコのダドリーに何度もサンドバッグにされて来た。

その度に俯いて、泣いて、惨めさを噛み締めて来た。

けれど、魔法界に来てまで同じ轍を踏むなんてイヤだった。

魔法の世界に来た。初めての友達を得た。だからこそ、新しい自分を始めたいと思った。

こんな奴には負けたくないと思った……!!

「かつこいいぜ、ポッターさん!!」

そんな彼の眼前でクラブの拳は止まった。

「あつ……」

クラブの上腕二頭筋をロンが掴んで止めていた。

「普通の奴なら咄嗟に顔を背けていた筈だ！ だけど、背けなかった！ 恐怖を感じていなかったわけじゃない！ ポッターさんは恐怖を感じた上で逃げなかつたんだ!!」

止められた腕とは反対の腕で殴りかかって来たクラブを転ばせて、掴んでいた腕を捻り上げながらロンは涙を零していた。

「勇気だ!! これこそが勇気だ!! ますます惚れ込んだぜ、ポッターさん!!!」

「あつ……、うん。あ、ありがとう……」

クラブをややすやすと無力化させながら言われても微妙だった。

「お、おい、クラブを離せ！」

クラブの相棒であるゴイルが飛び掛かって来た。

「ダチ公の為に飛び込んで来るとは、見上げたやつだぜ!!」

ロンはクラブを抑えたまま、あつさりとゴイルの拳を避けた。

そして、クラブを解放した。

「そっちのタフガイの友情に免じて、ポッターさんを殴ろうとした事は許してやらあ！」

バンとクラブの背中を叩きながらロンは言った。

「つと、ん？」

そして、ロンはドラコを見た。

ドラコは彼を見ながら青褪めていた。

「おっ、坊っちゃん！ 久しぶりだな！」

「……ロ、ロナルド」

「オイオイ、水クセエなあ！ オレの事はロンって呼んでくんない！」

ドラコはロンに返事をする事なくクラブとゴイルに「行くぞ……」と言って大広間に入って行ってしまった。

「坊っちゃん……」

ロンは寂しそうにドラコの背中を見送った。

「し、知り合いなの？」

デイーンが問い掛けるとロンは頷いた。

「何年か前にダイアゴン横丁でちよつとな。折角だし、話がかつたんだがなあ。どうやら嫌われちまつたらしい……」

「アイツ、すごく嫌な奴だった」

シエーマスが言うと、ロンは苦笑いを浮かべた。

「坊っちゃんは味のある性格だからな」

「味？」

ハリーは首を傾げた。



「ドラコ、アイツと知り合いなのか？」

クラブは不満そうな表情で問いかけた。

「……別に」

そう言いながら、ドラコはグリフィンドールの席へ向かうロンの姿を見た。

——— 安心しな、坊っちゃん！ オレがしっかりと送り届けてやっからよ！

不意に脳裏を過ぎった過去の記憶をドラコは必死に振り払った。彼にとって、それは人生最大の汚点だった。

「アイツら、気に入らない」

クラブはポキポキと手を鳴らしながら言った。

「ああ……、気に入らないな」

—— クカカカカッ、坊っちゃんは色んな事を知ってるんだな！ スゲエぜ！

—— 偉いぜ、坊っちゃん。自分の足でしっかり立ち上がった！ 立派だぜ！

うるさい。黙れ。何様のつもりだ。

あの時は年上だと思っていた。同い年だと知っていたら……。

「そう言えば、今日の魔法薬学はグリフィンドールとの合同授業だったな」

魔法薬学の担当教師であるセブルス・スネイプはグリフィンドールの生徒に対してあたりが強い。

きつと胸の内に渦巻いているモヤモヤも晴らしてくれる筈だ。

第八話 『魔法薬学の先生』

ハリーは魔法薬学の教科書を読んでいた。

「ベゾアール石って、なんなの？ どうして、ヤギの胃の中にあるの？」

「ヤギの結石なんですよ、ポッターさん」

「結石って？」

「内臓の中で……つと、要するに腹の中で体液が固まったもんでさ。人間にも出来る事があるんですけど？ まあ、病気の一種なんで出来ないう方がいいんですがねえ……」

ロンは顔を引き攣らせながら言った。

ハリーはキョトンとしながらも「なるほどー」と納得した。

「……おもしろいなー」

第八話 『魔法薬学の先生』

少し前の事だ。寝室で本を読んでいるロンを見ながらシエーマスが言った。

「ロンは本当に真面目だよ。僕、ホグワーツに来る前なんて教科書を一ページも開かなかったよ？」

ロンは苦笑いを浮かべた。

「オレは頭の出来が悪いからな」

「はあ？」

シエーマスだけじゃない。ハリーやネビル、デイーンの三人も怪訝な表情を浮かべた。

ロンは何でも知っている。ハリーが質問した事に彼が答えを窮した事など滅多にない。

だから、嫌味かと思ってしまった。

「マジな話なんだよ。オレは予習無しで授業を受けたら板書を写すだとか、先生の話をとにかく鵜呑みにする事しか出来ねえ。一を聞いて、一も覚えられるか分からねえんだ。だから、教科書を読むのさ。せめて、一を覚えてから授業を受ける。そうすりゃ、少なくとも一以上を学ぶ事が出来るわけさ」

ロンは言った。

「ただ覚えるだけの作業なんざ、ちつともおもしろくねえ。覚えた事を基にして、色んな事を学んでいく事がおもしろえんだ」

それはハリーにとって未知の考え方だった。

ただ、何でも知っているロンがかつこ良いから、彼に倣って教科書を読んでいただけだ。

授業は面白いけれど、未だに勉強自体が楽しいとまでは思えていなかった。

◆ その日からハリーは予習を始めた。けれど、当初はそれが苦痛だった。

彼にとって、勉強とは楽しいものではなく、ただひたすらに面倒くさいものだったからだ。

なにしろ、これまでの人生において、ハリーは人から褒めてもらった事がほとんど無かったからだ。

勉強を頑張った所で誰にも褒めてもらえない。認めてもらえない。だから、勉強を頑張る事に意義を感じる事も無かったのだ。

「それにしても、ポッターさんは凄いや！ もう教科書をそこまで読破するなんてよ！」

「ロンはとつくに全部読んでるんでしょ？」

「オレはホグワーツに来る前から読み始めてたからですよ。ポッターさんはしつかり学びながらページを読み進めていらっしやる！ それなのにこの速度だ！ 凄い事だぜ！」

「……べ、別に」

ロンは些細な事でも全力で褒めてくれる。しかも、そこにウソが無い事が伝わってくる。そのおかげでハリーは頑張る事に対して前向きな姿勢を保つ事が出来た。

そして、授業の時に予習をした成果が現れた。

今まで受け身で受けていた授業はマグルの学校でもホグワーツでも変わらず、先生の話聞いて覚えるだけの作業だった。

けれど、予習をして受けた授業はそれまでと全く違ったものに変貌

していた。

先生の話は既に知っている事が多く、だからこそ教科書の内容から派生した内容を語り始めた時は直ぐに気づく事が出来た。そして、その内容が驚くほどすんなりと自分の中に入って来た。

その時のハリーはロンの言葉を強く実感していた。新たな事を知る事が楽しい。勉強が面白い。そう気づく事が出来た。

「さあ、ポッターさん！ 次は魔法薬学の授業ですぜ！ 楽しみですねえ！」

「うん！」

魔法薬学は一週間の中でたった一コマしかない。だからこそ、ハリーは特に力を入れていた。

「ちよつと不安だな……」

一緒に地下の教室へ向かっているとシエーマスが呟いた。

「どうしたの？」

デイーンが問い掛けると、彼は言った。

「スネイプって、スリザリンの鼻屑が凄いらしいんだ。それに他の寮の生徒にはすごく意地悪だって聞いたよ」

その話を聞いて不安な気持ちになりながらハリーは地下教室に辿り着いた。

中は肌寒く、壁にはずらりとガラスの瓶が並んでいる。その中にはアルコールに漬けられた動物が入れられていた。

「うわあ……」

ネビルは気味悪そうに壁際から離れた。

「なんか、不気味だね」

ハリーの言葉にデイーンとシエーマスも頷いた。

「まるで童話の世界みたいだなあ、こりゃ」

ロンは興味深そうに首が二つあるトカゲの標本を見つめている。しばらくするとスリザリンの制服の少年達がやって来た。ドラコとクラップ、ゴイルの三人組だ。

「おおつ、坊っちゃん！」

真っ先に気付いたロンが声を掛けるとドラコは顔を顰めながら遠

くの席へ行ってしまった。

「……ロン」

寂しそうな表情を浮かべるロンを見て、ハリーはますますドラコの事が嫌いになった。



セブルス・スネイプが教室に入ってくると生徒達は押し黙った。

彼は今まで受けて来た授業の先生達とは明らかに異質な雰囲気を纏っている。

「まずは出席を取る」

スネイプは名簿から視線を上げる事なく淡々と生徒達の名前を読み上げていった。

名前を呼ばれた生徒は体を強張らせながら返事をした。

「……ハリー・ポッター」

ハリーの名前を呼んだ時、彼は初めて名簿から視線を上げた。

目と目が合った瞬間、怖気が走った。

その黒い瞳にはおよそ温もりと呼べるようなものが無かった。冷たくて、虚ろで、暗いトンネルを思わせる。

「ああ、さよう。ハリー・ポッター。我らが新しいスターだな」

呼吸が止まる。

ホグワーツに来る前までは日常だったけれど、この学校では感じる事の無かったもの。

スネイプはハリーに悪意を向けていた。

新しいスターという言葉はハリーを嘲笑する為に選んだ言葉だった。

それからスネイプは出席確認を続けた。

「ロナルド・ウィーズリー」

「ハイ!!!」

ロンはいつも通りだった。スネイプ相手にも変わらぬ元気いっぱいの返事をした。けれど、それはあまりにも場違いだった。

スネイプは名簿から顔を上げると不愉快そうにロンを見た。

「ここは競技場ではない。無駄に大声を張り上げるなど、他人の迷惑

を考えられぬようだ。その自分勝手な振る舞いに、グリフィン・ドールは一点減点」

あまりの事に呆気に取られた。ただ、元氣よく返事をしただけで減点されるなんて、今までの授業ではあり得ない事だった。

「ハイ！ すみません、先生！」

けれど、ロンは堪えた様子も見せず、スネイプに頭を下げた。

その様が余計に不愉快だったのか、スネイプは渋い表情を浮かべながらロンを無視して出席確認を続けた。



出席を取り終わると、スネイプは生徒達を見回した。

見られただけで寒気がしてくる。

まだ始まったもないのに、ハリーはこの授業を嫌いになり始めていた。

「このクラスでは魔法薬調合の微妙な科学と厳密な芸術を学ぶ」

スネイプの声は決して大きなものでは無かったけれど、物音一つしない地下教室の中では一番後ろの席までしっかりと届いていた。

この先生に対して、『聞こえなかったからもう一度お願いします』などと言える勇者は恐らく居ないだろうとハリーは思った。

「ポッター！」

急に名前を呼ばれてハリーは飛び上がりそうになった。

「アスフォデルの球根の粉末にニガヨモギを煎じたものを加えると何になるか？」

いきなりの問い掛けにハリーはパニックを起こしかけた。

けれど、必死になって予習した内容を思い出すと該当する情報が喉元を飛び出した。

「ね、眠り薬です！ えっと、生ける屍の水薬です！」

それは一日目の授業でクィレル先生から習った生ける屍と同じ名前を持つ薬だったから、印象に強く残っていた。

「……もう一つ聞こう」

正解した筈なのに、スネイプは不愉快そうに表情を歪めた。

ハリーにはわけが分からなかった。

「ベゾアール石を探して来いと言われたら、どこを探す?」

「ヤギの胃の中です! ベゾアール石はヤギの結石なので!」

それは少し前にロンから教わったばかりのものだった。

勢い込んで答えたハリーに対して、スネイプは眉間にシワを寄せた。

「我輩はどこを探すのかと聞いたのだ。そんなにも自分の知識を自慢したかったのかね? その傲慢な振る舞いに、グリフィンドール五点減点」

「はあ?」

あまりの事に隣で聞いていたロンが口をポカンと開けた。

「ちよつと待て、先生! それはどういう事だ!」

立ち上がって、スネイプに向かって歩き出した。

「授業中に席を離れるとはどういう事かね? ウィーズリー」

「納得いかねえから質問にきました! なんて、質問にキチンと答えたのに減点したのか教えて下さいよ!」

「……教師に口答えをする気かね」

「このままだと教師だと思えなくなりそうだから聞いてるんですよ!

もちろん、何か理由があるんでしょうねえ!」

「罰則だ」

スネイプは言った。

「それからグリフィンドールは十点減点」

「罰則でも減点でもいいから答えてくれよ、先生! いくらなんでもおかしいだろ!!」

「黙らんか!! 今は授業中だ。これ以上妨害するならば出て行かせるぞ、ウィーズリー!」

「上等だ!! いいから答えろよ!! お前、なんで質問にキチンと答えたポッターさんから減点したんだ!! きつちり答えやがれ!!!」

教室は騒然となっていた。普段陽気な性格のロンが本気で怒っていたからだ。しかも、相手は教師だ。

減点されて、罰則を与えられて、それでも退く事なくロンはスネイプに問い掛け続けている。

「……出て行け」

そう呟くとスネイプは懐に手を入れた。そして、引き抜いた杖を口に奪われた。

「貴様!？」

「出て行ってやるから答えろよ。なんで、お前さんはポッターさんから減点したんだ？ それだけ教えてくれたら罰則も確り受けてやるからよお」

「言った通りだ！ 聞かれてもいない事をわざわざ口にした傲慢さに――」

「ヤギの結石だからヤギの胃の中にあるんだろ!? 単なる補足説明じゃねえか!! どこが傲慢なんだよ!？」

スネイプの青白い肌に赤味が差し始めた。

「貴様、退学処分にするぞ!!」

「やってみろよ!! 納得出来ねえ事をそのままにするくらいなら退学になる方がマシだ!! テメエはポッターさんの努力に泥塗りやがったんだぜ!?! 許せねえ、絶対に!!」

二人は共にヒートアップしてしまっている。

このままでは本当にロンが退学になってしまう。そう思ったハリーは居ても立っても居られなかった。

「もういいよ!! ロン!!」

「ポ、ポッターさん!？」

「ロンが退学になるなんてイヤだ!!」

ハリーはロンを庇うように前に出た。そして、涙が滲む目でスネイプを睨みつけた。

すると、スネイプは唾然とした表情を浮かべた。

あまりにも予想外の反応にハリーは戸惑った。

「……………さつさと席に戻るがいい。授業を再開する」

ロンから自分の杖を奪い返すとスネイプはそのまま黒板の下へ向かって行った。

「え？ あつ、はい。い、行こうよ、ロン」

「で、ですが…………」

「いいからー！」

ハリーはロンを席まで引き摺って行った。それからは実に普通に授業が進んでいった。

おできを治す薬の調合を行う事になり、ハリーとロンは上手く調合に成功した。

するとスネイプはハリーの薬を見て「グリフィンドール、一点。他の者は手本とするように……」と言った。

あまりの態度の違いに誰もが啞然としながら授業は終わった。

第九話 『ハグリッド』

週末、ロン達は森番であるハグリッドの小屋を訪ねていた。

ハリーが彼から招待状を受け取っていたのだ。

「クカカカカッ！ 可愛い奴だぜ！」

ハグリッドの小屋にはファングという名のボアハウンド犬がいた。

ロンはファングに押し倒されそうになり、咄嗟に身を翻すと逆に構い倒した。

「アオオオオン!!」

仰向けになってお腹をワシヤワシヤと撫でられ、ファングは気持ちよさそうに鳴いている。

「おうおう、ファングや。だらしないぞ」

ハグリッドはクスリと笑いながら一行を小屋の中へ招き入れた。

外見とは裏腹に巨体であるハグリッドとロン達五人が入っても小屋にはたつぷりと余裕があった。

「へへっ、待つとれよ。ケーキを焼いておいたんだ」

子供達が歓声を上げるとハグリッドはニツコリした。そして差し出されたケーキを見て、子供達の笑顔は凍った。

そこにあつたのはカチカチなロツクケーキだったからだ。

「……どうやって食べるの？」

試しにフォークを刺そうとしたシエーマスは折れてしまったフォークの先を見ながら困惑した。

「普通に食べばいいんだ」

そう言うとハグリッドはロツクケーキを口に放り込んでバキバキと音を鳴らしながら食べ始めた。

「さすがだぜ、とつつあん！」

ロンもハグリッドを真似てロツクケーキに噛み付いた。

「はがっ……」

けれど、当然のように歯が立たなかった。

「だ、大丈夫!？」

ハリーが心配して声を掛けるとロンは少し涙目になっていた。

「ま、まるで鉄の塊だぜ……」

その様子を見て、ハリー達はそのまま食べる事が不可能だと悟った。

仕方なく、ハグリッドがロックケーキと共に用意してくれた紅茶に少しずつ浸して柔らかくする事にした。

第九話『ハグリッド』

気を取り直して、ハリーはハグリッドにロン達の事を紹介した。

ハリーにとって、ハグリッドは自分を魔法界に導いてくれた人であり、人生で初めて誕生日を祝ってくれた人でもあった。

彼に入学してから今に至るまでの事を語る事はハリーに不思議な満足感を与えた。

「スネイプ先生って、どんな人なの？」

ハリーは魔法薬学の授業の話を終えた後に問い掛けた。

最初はとんでもなく理不尽な事を言っていたのに、いきなり態度を豹変させて、あまりにも理解不能だったからだ。

「どういう人かつちゆうとな……、うーむ。まあ、厳しい人ではあるな」

「厳しいって言うか、イカれてるよ」

シエーマスの言葉にハグリッドは厳しい表情を浮かべた。

「先生の事をそんな風に言っちゃいかんぞ」

「だって、本当の事だよ！ ハリーがちゃんと答えたのに減点して、その癖調合した魔法薬に点数上げて、もうメチャクチャだったよ！」

デイーンの言葉にネビルもうんうんと頷いている。

「ロンの事を退学にしようとしたんだよ！ 僕の為に怒ってくれただけなのに……」

ハリーもスネイプに対しては戸惑いと同じくらいの嫌悪感を抱いていた。

「しかしなあ……。スネイプ先生はあまり自分の事を語らねえお人だから俺もそこまで詳しいわけじゃねえが……」

ハグリッドはしどろもどろになっている。魔法薬学の授業でのスネイプの言動や行動をフォローする為の言葉を必死に考えているが、

中々実を結ばない様子だ。

すると、ロンが手を叩いた。

「奴さんにも色々あるってこつたろうよ。いずれにしろ、最後は普通に授業してくれたんだ。あーだこーだ言うのはやめとこようや」

ロンは話を切り上げた。

「それより提案があるんだ！ クラブに入らないか!？」

「クラブ？ あるの?」

クラブはマグル限定の文化だとばかり思っていたハリーが首を傾げると、ロンはいくつかの紙をテーブルに広げた。

「ホグワーツには幾つかのクラブがあるんですよ、ポッターさん！

例えば、寮毎のクイディッチチームもクラブなんですよ。他にもゴブストーンクラブだったり、天文学クラブだったり、ホグワーツ古代ルーンクラブだったりがあるんですよ」

「そう言えば、掲示板にラットレースクラブのチラシがあつたつけ」

「ラットレースクラブ!？」

あまりにも奇妙なネーミングのクラブだとハリーは目を丸くした。

「そう言えば、おじさんがホグワーツに通っていた頃はセレスティナウオーベックファンクラブに入ってたとか言ってたつけ」

「セ、セレ……なに?」

「セレスティナウオーベックだよ。有名な歌手なんだ」

「歌手!? 魔法界に歌手なんているの!？」

「いるよ!! 当たり前でしょ!？」

衝撃を受けるハリーに衝撃を受けるネビル。

「……えっと、それでロンはどのクラブに入りたいの?」

「ずばり、ヒップグリフクラブですよ!!」

「ヒップグリフ?」

ハリーはキョトンとなった。

「ヒップグリフは魔法生物の一種だ。鷲と馬の特徴を併せ持っていて、それはもう美しい生き物なんだぞ」

ハグリッドは夢見るような表情を浮かべながら言った。

「見たかったら今度見せてやるぞ」

「え？ ヒッポグリフがいるんですかい!?」

ロンが飛びついた。

「おう！ 普段は禁じられた森の少し奥の方におるんだがな」

「マジかよ!? 見たいぜ、とつつあん!! 頼む、オレにヒッポグリフを見せてくれ!!」

瞳をキラキラと輝かせながら懇願するロンにハグリッドはニッコリと笑った。

「もちろんいいぞ！ じゃあ、次の週末にまた来い。その時に会わせちやる」

「おおおおお!! マジか!! 恩に着るぜ、ハグリッドのとつつあん!!」

ロンは滝のように涙を流しながらハグリッドを抱きしめた。

ハリー達もロンの反応に興味をそそられた。

「ハグリッド！ 僕も見たい！」

「僕も！」

「見せてよ、ハグリッド！」

「おねがい！」

「もちろんだ！ へへっ、しっかり準備しといてやるからな」

ハグリッドは下手くそなウイंकをした。ハリー達は歓声を上げた。

「そんで、話が逸れちゃったけどヒッポグリフクラブに入りたかったな？」

そう言つて、ハグリッドは逸れてしまった話の軌道を戻してくれた。

「ああ、そうだぜ！ ヒッポグリフクラブはいわゆる探索系のクラブなんだ」

「探索系って？」

デイーンが問い掛けた。

「要するに魔法生物の生態調査だとか、薬草の生育域の調査を行ったりするクラブだな。似たようなものとスフィンクスクラブってのもあるみたいなんだが、そっちはフィールドワークよりも座学に重き

を置いてるらしくてな」

「それ、楽しいの？」

シエーマスは怪訝そうだ。

「もちろんだぜ！ ヒップポグリフクラブの活動の中には禁じられた森の探索もあるって話だ！」

「禁じられた森の探索!?!」

ネビルは素っ頓狂な声を上げた。

「じよ、冗談だろ!?!」

シエーマスも正気を疑うかのような視線をロンに向けた。

「大マジだぜ!」

「そう言えば、禁じられた森に入ってみたいって言ってたもんね」

ハリーは汽車での会話を思い出していた。

———
ホグワーツの外周に広がる広大な森の事で。数多の魔法生物が棲家になっているそうで、中には獰猛で危険な魔法生物もあるそうだし。人狼はその代表例みたいなもんですね。

———
是非入ってみたいですね！

どうやら彼は本気だったようだ。

「ああ、安心しろ。ヒップポグリフクラブの活動で入る区域は決まってるんだ。しっかり安全対策も出来てるからな」

「そ、そうなんだ」

ハリーはホツとした。

「しっかし、ヒップポグリフクラブに入りたいとはな。エドワード達が聞いたら喜んだらうな」

「エドワード?」

「もしや、エドワード・グレイか!」

ロンが色めき立った。

「誰それ?」

シエーマスが首を傾げると、ロンはグルンと首を回して彼を見た。

「エドワード・グレイ! 兄上と共に呪われた部屋を攻略した偉大なる先人だぜ!」

「え? その人が呪われた部屋の攻略者なの!?!」

ハリーは呪われた部屋の事をロンから聞いていた。胸躍る冒険譚にワクワクした事を覚えている。

「そうだぞ。色々あったが……、ヒップグリフクラブの活動をしとる時のエドワード達はそれはもう楽しそうだったなあ……」

そう言うと、ハグリッドは鼻を噉った。

「ハグリッド……?」

「大丈夫ですかい……?」

「ああ、すまん。ちと悲しい事を思い出しちゃってな……」

ハリーはその言葉に呪われた部屋を巡る冒険譚が楽しいだけのものでは無かった事を思い出した。

その冒険の最中、命を落とした人がいたと聞いている。その人とハグリッドは浅からぬ関係にあったのだろうと悟った。

「ハリー。ロン。シエーマス。デイーン。ネビル」

ハグリッドはハリー達の頭を一人一人撫でた。

「友達は大事にするんだぞ」

その言葉はとても重く感じた。

「ヒップグリフクラブのリーダーに声を掛けといてやるよ。ついでだし、次の週末でええか?」

「……ああ、頼みますぜ、とつつあん」

「おうー!」

ハリー達はいつの間にか紅茶の中でふやけたロックケーキを食べた。

表面はベチャツとなっていて気持ち悪かったけれど、内側はほっくりしていてとても美味しかった。

第十話 『飛行訓練』

その日、僕は初めてダイアゴン横丁を訪れた。

それまで屋敷の中だけで生きて来たから、僕はとても興奮していた。

「父上！ 母上！ 早く行きましょう！」

両親を急かしながら街を歩いていると奇妙な笑い声が聞こえて来た。

「クカカカカカツ！ 素晴らしい！ これが魔法族の街か！ まさしくファンタジーじゃねえか！」

「ま、待って……！ 待ってくれ、ロン。ぼ、僕、もうヘトヘトなんだ……」

赤毛の男の子が目の前を走り抜けていった。その後ろを彼の兄弟らしき人物が追いかけている。

「まったく、品のない」

父上は不愉快そうに言った。

「お前はあのように振る舞ってはいかんぞ」

「はい、父上」

模範的な態度で返答すると父上は満足げに微笑んだ。

「いい子だ、ドラコよ」

その言葉に僕は嬉しくなった。

父上に認められ、褒められる事は僕にとって何よりも重要な事だったからだ。

第十話 『飛行訓練』

とても嫌な夢を見た。

「……クソッ」

初めてダイアゴン横丁を訪れた日、僕は雑踏の中で両親と逸れてしまった。

その場で両親が見つ付けてくれるのを待てばいいものを、僕は不安になつて探し歩いてしまった。そして、気付けば薄暗い路地に迷い込んでいた。

そこで蹲っていたら声を掛けられた。父上かと思って見上げた先には怪しげな風貌の男がいて、僕は恐ろしくなった。すると誰かに手を引かれた。

「ああ、最悪だ」

思い出したくない事ほど鮮明に思い出せてしまう。

走っている途中で僕は転んだ。膝を擦りむいて泣きべそをかいてしまった。そんな僕に彼は背中を向けながら膝を曲げた。

「ロナルド……」

背丈に差なんて殆ど無かったのに、僕は彼を年上だと勘違いしてしまった。

だから、いくつもみつともない姿を見せてしまった。

思い出すだけで羞恥のあまり頭を掻き筆りたくなってくる。

「……むにや。はれ？　もう起きてるのかい？」

クラブが目を覚ましたらしい。

「今日は飛行訓練だよな……。ああ、楽しみだなあ」

「……ああ、そうだな」

楽しみだった。掲示された紙にグリフィンドールとの合同授業という文面が無ければ完璧だった。

とても憂鬱な気分だ。



「クカカカカカツ！　遂に来ましたぜ、ポッターさん！！　飛行訓練の時間だああああ！！」

普段からテンションの高いロンだけど、今日はいつも増して元気いっぱいだ。

「うん。楽しみだね、ロン」

ハリーもウキウキしていた。

なにしろ、空を飛べるのだ。人は誰しもが一度は空を自分の力で飛んでみたいと夢見るものだ。

「僕、不安だなあ」

ネビルは呟いた。

ロンやハリーに影響されて予習をキチンと行っているにも関わら

ず、いつも授業でミスをしてしまう。

飛行訓練でもきつとミスをする筈だとネビルは半ば確信していた。「大丈夫だって、ネビル。僕、家で何度も乗ってるんだ。案外普通に出来るもんだよ」

シエーマスが励ますように言った。

「……箒で空を飛ぶって、未だにイメージ湧かないなあ」

ハリーと同じくマグル生まれであるデイーンは悩ましがげな表情を浮かべながら言った。

「それは確かに……」

ハリーも同意見だった。

「どうして、箒なのかな？」

箒は本来掃除用具である筈だ。そんな物に乗って空を飛ぶのは奇妙だと思った。

「うーん。今度、ビンズ先生に聞いてみますかねえ」

そんな風に話していると校庭に辿り着いた。

既にスリザリンの生徒達が整列していて、足元には箒が並べられている。

「よお、坊っちゃん！」

相変わらず、ロンはドラコの事が気になるようだ。

当の本人は知らぬ顔で無視している。もう放っておけばいいのにとハリーは思った。

あんないけない奴と仲良くならなければいけないほど、ロンは友達に不自由していない筈だと言いたかった。

「ロン！ 箒に乗るコツみたいなのはあるの？」

「コツですかい？ そうさなあ、箒を物とは思わず、馬みたいなもんだって捉えるといいですよ」

「馬？」

ハリーは首を傾げた。

「箒は乗り手を見てるんですよ。怖がったり、乱暴に扱ったりしたらソツポを向いて言う事を聞いてくれなくなるんですよ」

「そうなんだ。僕、ちゃんと乗れるかな……」

「ポッターさんなら大丈夫ですよ！　もし、落ちそうになってもオレが全力でフオローしますから！　怖がらずにチャレンジしてみてください下さいや！」

「うん！」

そうやって話していると飛行訓練の担当教師であるマダム・フリーチがやって来た。

慌てて整列するとドラコが此方を見ている事に気がついた。

ハリーが視線を向けるとドラコはソツポを向いた。

「どうかしたんですかい？」

ロンは気づかなかったようだ。

「なんでもないよ」

ハリーは微笑んだ。

「さあ！　右手を箒の上に突き出して！」

マダム・フリーチの掛け声にハリーとロンは慌てて従った。

「そして、『上がれ！』と言う」

みんな『上がれ！』と叫んだ。ハリーとロンの箒はすぐさま飛び上がって手に収まったけれど、飛び上がった箒は少なかった。

ハーマイオニーの箒は地面を転がるばかりだし、ネビルの箒はピクリとも動いていない。

「ネビル！　自信を持ちな！　お前さんなら出来る！」

「で、でも……」

ネビルは眉を八の字にしながら呻いた。

「出来るさ!!」

「そ、そう……?」

「出来らあ!!!」

「う、うん。で、出来る」

洗脳かな？　ハリーは思った。

「あ、上がれ！」

けれど、ネビルは見事に箒を飛び上がらせる事が出来た。その姿を見た後は出来なかった生徒達も次々に成功していった。

どうやら、ネビルが出来るなら自分でも出来る筈だと思っただら

い。

「全員、無事に箒を上げられたようですね。では、跨って下さい！ ただし、飛んではなりませんよ」

マダム・フーチはそう言うのと箒の跨り方を実演して見せて、生徒達の箒の握り方を確認して回った。

ドラコはずっと間違った握り方をしていたと注意されている。ハリーはクスリと笑った。

その事に気付いたドラコはハリーを恐ろしい形相で睨みつけた。

「皆さん、大丈夫そうですね。では、私が箒を吹いたら地面を強く蹴ってください！ 箒がグラつかないように確りと押さえて、二メートルくらい浮上したら少し前屈みになって直ぐに降りてくるように！ 箒を吹いたらですよ、一、二の三！」

一斉に生徒達が飛び上がった。

「ひゃっほー！ こいつは最高だぜ！！」

ロンは歓声を上げている。

「わーお」

ハリーも胸の中を感動で満たしていた。

空を飛ぶ事は想像以上に素晴らしいものだった。

「ほ、僕、ちゃんと飛べてる！」

ネビルも嬉しそうだ。

それから全員がゆっくりと地面に降りていく。

「素晴らしい。例年、手間取る生徒が一人か二人はいるものです。グリフィンボールとスリザリンにそれぞれ一点を与えましょう」

マダム・フーチはみんなを褒め称えた。

けれど、最も讃えられるべきはネビルだと多くの生徒達が思っていた。

ネビルに出来て、自分に出来ないとは誰も思っていないからだ。

「次は直進の方法です。少し待っていて下さい」

マダム・フーチが杖を振ると芝生の上に幾つものラインが浮かび上がった。

「それでは何組かに分けて、ラインの上を飛んでもらいます」

ロン達はいつものメンバーで組んでラインの上に並んだ。
今回はネビルよりも先に飛ぶ事になってしまった生徒が多く、ラインを確りとなぞれた生徒は少なかった。

後発の生徒達はネビルに熱い眼差しを向けている。

そもそもネビルが成功しなければ成功出来ないなら彼らはネビルより能力が低いのではないかとハリーは訝しんだ。

「ねえ、ロン。真っ直ぐ飛ぶのにコツとかあるの?」

当のネビルはロンにアドバイスを求めた。

浮上と降下に成功した事で自信を盤石に出来たらしく、気負った様子はない。

「あるぜ! ちょっと前の方を見るんだ。真下を見てると逆にやり難くなると思うぜ!」

「ありがとう!」

確かにラインから外れてしまった生徒の多くはラインを必死になぞろうと真下ばかりを見ていた気がする。

ハリーもロンのアドバイスに従いながら箒を走らせた。箒は何故か左に行こうとするから少し右に引つ張る必要があった。

五人は横並びでゴールに辿り着くとマダム・フーチはまた一点をくれた。

「おっ、次は坊っちゃんだな!」

後続の組の中にはドラコがいた。

ロンは立ち止まって応援し始めた。すると、ドラコは他の四人よりも速く、滑らかにゴールへ辿り着いた。

「ひゅう! さすがだぜ、坊っちゃん! 箒に乗るのは大得意だって言ってたもんな! お見事だぜ!」

ロンの言葉が聞こえていたのか、ドラコはツンとした表情を浮かべながら「こ、このくらい、当然だ」と言った。

ハリーはそのやり取りが面白くなかった。

「……僕だってあのくらい!」

「ハリー、どうしたの?」

「なんでもない!」

ネビルはキョトンとしている。

そんな彼の成功を見た後続の生徒達は次々に直進飛行を成功させていった。

ネビル効果は凄まじく、その事にマダム・フーチも気付いたようで、次の旋回の訓練ではネビルを含めたロン達の組が一番手に選ばれた。旋回訓練も直進訓練と同じくラインの上を飛ぶというものだったが、蛇のようにグニャグニャと曲がりくねったラインの上を飛ぶのはかなり難しそうだと思った。

「こ、これ、大丈夫かな……」

さすがにネビルも不安になった様子だ。そんな彼に後続の生徒達の視線が集中している。

頑張れ！ お前なら出来る！ 成功してくれ！ そんな切なる願いが向けられている事に本人は気付いていない。

「怖がらなければ大丈夫さ！ むしろ下手にビビるとバランスを崩すぜ。ラインの上をなぞる事は意識しない方がいいかもな。ちよつと大胆になってみりや、きつと成功するさ！」

「う、うん！」

ロンのアドバースにネビルは力強く頷いた。

けれど、今度ばかりは難易度が高過ぎたようだ。ネビルはラインを大きく外れ、それを修正しようとして箒がブレてひっくり返ってしまった。

シエーマスとデイーンもひっくり返りこそしなかったもののラインを大きく外れた状態でゴールしている。

意外だったのはロンだ。彼はラインの上を確りとなぞっていたものの、ハリーがゴールした時はまだ半分も進めていなかった。

「凄いぜ、ポッターさん!! あんなグニャグニャのコースを減速無しで進むなんざ、普通じゃねえ!! 天才だ!! マジで天才だぜ!!!」

ゴールしたロンはハリーを手放しで褒め称えた。

それが嬉しくて、ハリーはわずかに胸を張った。

「こりや、クイディッチの選手になったら凄い事になるぜ。体躯的にシーカーが合ってそうだな」

「シーカー?」

「クイディッチで一番重要なポジションでさ! きつと、ポッターさんは最高のシーカーになれると思いますよ!!」

そんな風に話していると鼻持ちならない意地悪な声が飛び込んできた。

「ふん! そいつがシーカーだって?」

そこにはドラコがいた。

「なに?」

ハリーは刺々しい態度を向けた。

ロンは戸惑っている。

「あの程度の飛行でシーカーになんて……いや、グリフィンドールのチームならなれるのかな? スリザリンと違って、グリフィンドールはレベルが低いからね」

「ぼ、坊っちゃん?」

「そう言う君は随分と自信があるみたいだね」

「ポ、ポッターさん?」

バチバチと火花を鳴らし始める二人にロンはオロオロしている。

「……ふん。見ているがいい」

そう言つて、ドラコは他のメンバーと共にラインへ向かつて行った。

そして、確りとラインの上をなぞりながら誰よりも速くゴールへ辿り着いた。

「おお、さすがは坊っちゃん!! いやはや、てえしたもんだ!!」

ロンは拍手喝采を送った。

そして、ハリーはその瞳にメラメラと対抗心の炎を燃やし始めた。

「それでは最後に校庭を一周してみましょう。特に素晴らしい飛行能力を見せてくれたミスター・ポッターとミスター・マルフォイには皆さんの手本となつてもらいます。そうですね、レース形式にしてみましようか。勝った方には一点を与える事にします」

それはハリーにとって渡りに船だった。ドラコの方も闘争心を顕にしている。

マダム・フーチが杖を振り、校庭の外周にラインを設置した。そのラインは時に上下に、時に左右に折れ曲がっている。

「浮上と降下、そして旋回。今日習った事がすべて必要となるコースです。コースを外れた場合はタイムにペナルティを与えます」

ハリーとドラコはそれぞれの箒を握り締めながらコースへ向かっていく。

「負けないぞ」

「ごっちのセリフだ」

二人は互いの事を睨みつけた後、箒に跨った。

第十一話 『ハリー・ポッターVSドラコ・マルフォイ』

マダム・フーチが設置したラインの上で浮上するハリー・ポッターとドラコ・マルフォイ。

バチバチと火花を飛ばし合う二人を見て、他の生徒達はどちらが勝利するかで盛り上がっている。

「ハリーが勝つよー！」

「バカめ、グリフィンドール！ 年季が違うぜ！ ドラコが勝つきー！」

「ハリー、がんばれー！」

「ドラコ、コテンパンにしてやれー！」

応援と野次が飛び交う中でも二人の意識は互いから離れない。

出会った時から反りが合わないと思っていた。ホグワーツに来て、言葉を交わす度に嫌悪感が増していった。

ハリーにとって、ドラコは既にダドリー以上の怨敵となっていた。

そして、ドラコにとってもハリーは不倶戴天の敵となっていた。

第十一話 『ハリー・ポッターVSドラコ・マルフォイ』

マダム・フーチの笛の音と共にレースはスタートした。

同時に飛び出していく二人を見て、幾人かの箒飛行経験者達は目を瞠った。

授業用として用意されたシューティングスターという名の箒は年季が入り過ぎてオンボロもいいところだ。

それぞれが家で使っていた箒と比較すると差は歴然で、箒が違えば旋回訓練ももっと楽にクリア出来た筈だと悔しがっている者が多かった。

そんなレース用としては不向きにも程がある中古品を使っている筈なのに二人のスピードはかなり速いように見える。しかも、ラインからズレる事が全く無い。

「スゲエ……！！ スゲエぜ、二人共！！ 経験に裏打ちされた坊っちゃんの安定した飛行も見事なら、ポッターさんの飛行は正に天性のソレだ！！ 信じ難いぜ、あれで今日が初飛行なんてよう！！」

興奮したロンの声はカーブに差し掛かる二人の耳にも聞こえてい

た。

ハリーの飛行が天性の才覚によるものだと言う事は共に飛行しているドラコが誰よりもよく理解していた。

シユーターイングスターの制御は困難を極める。それでもドラコがラインを外れずに飛行出来ているのは箒の癖に対応する技術を幼少の頃から学んでいたが故だ。

今まで一度も箒に乗った事がない状況でこのオンボロを使ったら途端にラインをはみ出していた筈だ。

「……巫山戯るな」

ドラコとて専門の教育を受けて来たわけではない。両親に軽い手解きを受けて、後はお気に入りのおモチャで遊ぶ感覚で触れて来た程度だ。

それでも経験の差は歴然であるべきだ。そうでなければあまりにも情けない。そんな姿を衆目に晒す事など我慢ならない。

胸に闘志が燃え上がる。ハリーに対する嫌悪感だけではなく、この勝負に勝利したいという欲望が彼の中で芽生えた。

眼光鋭く前方を見つめ、速度を上げていく。

「ドラコがスピードを上げたぞ!？」

「無茶だ! あの手で、あの速度でその先にあるのは——」

コースの先にあるのは宙返りを要求するループだ。箒飛行初心者を交えたレースに用意していいものではない。

コレを初見でクリア出来る者がいたら、それこそ天才だ。

だからこそ、ドラコは一気呵成にループへ飛び込んだ。ラインを外れる事なく見事な宙返りでクリアし、更に僅かな下降を加速に利用した。

あまりにも見事な妙技に観衆が湧く。けれど、その喝采が急に止まる。

何が起きたのか、ドラコは見なかった。見なくても分かった。

悔しいが、認めるしかない。ハリー・ポッターは箒飛行の天才だと

「負けるもんか!!」

ハリーは自分が如何にとんでもない事をしでかしたのか自覚する事なく前方のドラコに鋭い眼光を向けている。

彼は見事に宙返りを成功させていたけれど、ドラコのようにそれを加速にまで利用する事が出来なかった。

その差は広がっていくばかり、このままでは負けてしまう。

そんな事は認められない。アイツに負けたくない。勝ちたい。

燃え上がる闘志は際限なく膨れ上がっていく。

「ドラコ・マルフォイ!!!」

気付けば叫び声を上げていた。

今、この瞬間に彼の中でドラコ・マルフォイの存在が大きくなっていく。

負けたくない存在として、強く彼の心に焼き付いた。

その存在を凌駕したいと心から思った。

「ハリー・ポッター!!!」

そして、それは前方に行くドラコも同様だった。

背後に迫る圧倒的な存在感、放たれるプレッシャーに対して彼は歯を食い縛る。

ハリー・ポッターという存在を彼の心は倒すべき存在であると強く認めた。

その存在を超越したいと心から思った。

「うおおおおおおお!!!」

カーブを最短最速で曲がり、ストレートで箒を加速させる。

「はあああああああ!!!」

その瞬間こそ、ハリーの天才は発揮される。

僅差だ。けれど、確かにカーブからストレートに移行する時の減速と加速でハリーはドラコを超えている。

その事実を理解出来ている者はマダム・フーチのみ。

彼女は息を呑む。このレースは数年前から授業で採用するようになった。けれど、初見でクリア出来た生徒は多くなく、チャールズ・ウィーズリーやエドワード・グレイといった卓越した生徒達だけだった。

それでもここまで素晴らしい飛行が出来る者は早々いないと感じた。

「ドラコ!!」

「ハリー!!」

鬼気迫る表情でハリーがドラコに迫っていく。

四回目のカーブを越えたところでいよいよ二人の距離は僅差となった。

残るはストレートのみ。ドラコはゴールを見た。そして、箒を僅かに下げた。

悪足掻きのようなものだった。ここに来て、彼はカーブからの立ち上がりのテクニクにおいて自分がハリーに劣ってしまっている事を悟ったのだ。

だからこそ、勝利の為にほんの僅かでも加速しようとゴールまでの距離を測り、眼下を走るラインに接触しないギリギリまで下降した。意味など無いに等しい極僅かな加速だったけれど、それは並びそうになっていたハリーの最大加速を超えていた。

「ゴール!! 勝者はドラコ・マルフォイ!! スリザリンに一点を与えます!!」そして、ハリー・ポッターもお見事!! 皆さん、二人の見事な箒乗りに拍手を!!」

マダム・フーチの言葉が無ければ誰もが言葉を失っていた。

それほどの名勝負だった。

「……次は負けない、絶対に!!」

「ツハ! 吠えるなよ、負け犬が!!」

剥き出しの敵意がぶつかり合う。

「ブラボー!!!」

そこに号泣しながらロンがやって来た。

「ロ、ロン!?!」

「ロ、ロナルド!?!」

ロンは敵意を向け合う二人を同時に抱き締めた。

「なんて、スゲエ名勝負なんだ!! あんた達は正に最高の箒乗りだぜ!! うおおおおおおおお!!! 感動をありがとう!!!」

巨体のクラブの拳をアツサリ止める筋力から逃れるには、二人の筋力は悲しいほどに非力だった。

けれど、誰も助けない。みんな、ロンに影響されて叫び声を上げたり、拍手喝采を送ったり、涙を流すのに大忙しなのだ。

二人は思った。

—— 誰か助けて……。

—— 誰か助けて……。

そして、飛行訓練の授業は終わった。

◆

それから数日が経ち、ロン達はハグリッドの小屋を訪れていた。

そこにはハツフルパフの制服を着たハンサムな少年がいた。

「よお！ 約束通りヒツポグリフクラブに入っちよる奴を連れて来たぞ」

「セドリツクだ。セドリツク・デイゴリー、よろしく頼むよ」

セドリツクはハツフルパフの三年生らしい。

「セドリツクの親父さんは魔法生物規制管理部で働いとるんだ」

「だから、魔法生物の生態調査に興味があつてね。ヒツポグリフクラブに参加してるんだよ」

彼の自己紹介を聞いた後、ロンは「もしや……」と彼の顔を見つめた。

「兄上が言っていたカナの輪の!?!」

「……君はチャリーリー達の弟さんだよね?」

「そうでさ! オレの名はロナルド・ウィーズリー! あなたの事はかねがね兄上から伺っております!」

「ロン、カナの輪って?」

ハリーが聞くと、ロンは胸を張った。

「呪われた部屋を攻略した偉大な英雄達のチームですよ、ポッターさん!!」

その言葉にセドリツクは何故か辛そうな表情を浮かべた。

「……あ、あれ?」

思わぬ反応にロンは戸惑った。

「えつと、それよりヒツポグリフクラブに入りたいんだよね？ 説明をしてもいいかな？」

「は、はいー！」

明らかに話を逸らされ、微妙に気まずい雰囲気のままセドリツクはクラブの説明をしてくれた。

「ヒツポグリフクラブはケトルバーン先生が監督しているクラブなんだ。クラブルームには後で案内してあげるよ。主な活動はフィールドワークで、他にも魔法生物や魔法薬の研究も行ってるんだ。それと、時々ドラゴンクラブと共同で魔法の訓練も行ってるよ」

「ドラゴンクラブ？」

ネビルが首を傾げた。

「決闘クラブなんだ。他にも高度な飛行訓練も行ってる。有名な決闘者やクイディッチの選手の多くはドラゴンクラブの出身者なんだよ」
「面白そう！ でも、どうしてヒツポグリフクラブがドラゴンクラブと共同で訓練するの？」

デイーンが聞いた。

「魔法生物の中には危険なものも多いからね。戦闘能力は必須技能でもあるんだ。も、もちろん、一年生にいきなり危険な魔法生物の世話をさせたりはしないけどね！」

青褪めたネビルを見て、セドリツクは慌てて付け足した。

「フィールドワークは禁じられた森に入るんですよね!？」

ロンが食い気味に聞くと彼は頷いた。

「もちろん、安全が確保されているゾーンだけだね。他にもホグズミード村近辺まで散策に出掛ける事もあるんだ。まあ、これは許可証が必要だから三年になるまでお預けだけど……」

セドリツクはヒツポグリフクラブの事を丁寧に教えてくれた。

そこにはロン達になんとしてもクラブへ加わって欲しいという熱意があった。

「……みんな、ドラゴンクラブにばっかり行っちゃうんだ。そうじゃない子は大体がスフィンクスクラブだね。ああ、スフィンクスクラブってというのは学術系のクラブなんだ。様々な研究を行っている所

で魔法省や研究職を目指している生徒が多いね」

「ヒツポグリフクラブって人気ないの？」

シエーマスの言葉にセドリックは「うぐっ」と呻いた。

「ドラゴンクラブやスフィンクスクラブと比べると地味ってよく言われるんだ。でも、楽しいのは絶対ヒツポグリフクラブだよ！ 将来的にもクラブに在籍していた事は魔法生物関連の職に就く時に有利に働くしね！」

「僕、ドラゴンクラブの方がいいなー」

「僕も」

シエーマスとディーン言葉にセドリックはショックを受けている。

けれど、ハリーもどちらかと言えばドラゴンクラブに興味を唆られていた。

「おっと、待ちな!!」

そこでロンが立ち上がった。

「決闘クラブドラゴンの事はオレも兄上から聞いてるけどよお、メチャクチャ訓練がハードなんだぜ？ ぶっちゃけ、自由時間が殆ど無くなっちゃまうらしい」

「え？」

「マジで？」

シエーマスとディーンがセドリックを見た。彼は力強く頷いた。

「そ、そうなんだ!! なにしろ、彼らはガチだからね!! 寝る間も惜しんで訓練に励んでいるんだ!! だから、一年生からいきなりドラゴンクラブに入ってもついて行けないと思うよ!!」

「それに共同訓練で時々参加出来るんだ！ むしろ、ヒツポグリフクラブの方がお得だぜ!!」

「その通り!!」

ロンとセドリックは固い握手を交わした。そんなこんなで彼らはヒツポグリフクラブに入会する事になった。

第十二話 『ヒツポグリフクラブ』

第十二話 『ヒツポグリフクラブ』

セドリツクに案内され、ロン達はヒツポグリフクラブのクラブルームにやって来た。

そこはとても広大で、とても奇妙な空間だった。

部屋の半分が沼になっていて、木や石の足場が設置されている。他にも様々な薬草の鉢植えの中心に屋内だと言うのに立派な木が生えていた。

「沼には魔法生物が何匹か潜っているから迂闊に近づかないようにね。あと、薬草の中には取り扱いに注意するべき物も多いから気を付けてね」

「魔法生物だつて!? 見たいぜ! 見せてくれ、セドリツクの兄貴!!」

「ははは、落ち着きなよ。ちゃんと見せてあげるさ」

年上の貫禄だろうか、セドリツクはロンのハイテンションを圧される事なく受け止めて言った。

部屋には入って来たロン達以外にも幾人かの生徒がいて、円形の舞台のような場所には奇妙な風貌の老人がいた。

「まずは先生に挨拶だ。ケトルバーン先生! 入会希望の生徒を連れて来ました!」

セドリツクの声に振り向いたケトルバーン先生には手足が無かった。代わりに鋼鉄製の義手と義足を装着している。

「おお、待っていたぞ。君達の事はハグリッドから聞いておった。赤毛の君は禁じられた森に入りたがっているともな」

「はい! オレの名はロナルド・ウィーズリー! 是非、禁じられた森を探検したいと思つてます!!」

その言葉にケトルバーンは難しい表情を浮かべた。

「わしとしては直ぐにでもあの場所の素晴らしい魔法生物達の事を紹介したいのだがね」

「ダメなんですか?」

ハリーが聞くと、ケトルバーンは頬をポリポリと搔いた。

「以前、同じように生徒が禁じられた森へ入る事を望んだ事がある。彼女は魔法動物学者になりたいから魔法生物の研究の為に入り方を教えて欲しいと願ったのじゃ。しかし、それは全くのウソだった。彼女は悪しき目的の為に禁じられた森へ踏み込み、そして……、その因果は一人の心優しい生徒の命を奪う事となつてしまった。君達が邪悪であるとは考えておらんが、安易に生徒を禁じられた森へ踏み込ませてはならぬと掟が追加されてな。ほれ、入学式の日に言われたじやろう？」 禁じられた森への生徒の立ち入りは禁ずると校長が」

「は、はい」

「二度と悲劇を繰り返さぬ為の掟じゃ。安全が確保されておる場所にも、すぐさま案内するわけにはいかぬ。一年！ その間、君達が如何なる信念を抱いた生徒であるか見極める時間をわしに与えて欲しい」 ハリー達にとつては渡りに船だった。なにしろ、ホグワーツに入学してからの数週間の間に禁じられた森の危険性はイヤという程みんなから聞かされていたからだ。

けれど、ロンは違う。彼は常々禁じられた森へ入つてみたいと言つていた。そんな彼にとつて、ケトルバーン先生の言葉は不満に違いないと誰もが思つていた。

ところが彼は「分かりました！」とアツサリ引き下がった。

「い、いいの？」

思わずハリーが問い掛けると、ロンは「ええ！」と答えた。

「事情が事情ですしね。それに、禁じられた森に入る前に最低限度の防衛術を会得する必要があるとも考えていましたから……。お嬢さんが禁じられた森の情報を記した本を幾つかリストアップしてくれまして、それらを図書館で借りて調べてみたんですがね？ 禁じられた森の魔法省分類のレベルはエックススリー エックスフォーからエックスフォー エックスファイブで、奥地にはエックスフォー エックスファイブの生物も存在する可能性が示唆されていました。さすがに何の準備も無く入るわけにはいきませんよ」

「魔法省分類？」

「エックス エックスとかエックス エックスって、何の事？」

魔法界で生きて来たネビルとシエーマスもチンプンカンプンらし

い。

「分かりやすく言えば、魔法省が設定している魔法生物毎の危険度だ。例えば、^{エックスワン}Xは^{フロバーク}レタス食い虫みたいな無害な生物を意味している。それが^{エックスツー}X Xになるとグリーンデローのように対処は簡単ながらも人間に危害を加える生き物が現れてくる。そして、X X Xともなるとヒツポグリフのように対処法をキチンと学ばなければ危険な生き物ばかりになるし、X X X Xともなれば大人の魔法使いにとっても脅威となり得る。X X X X Xに至っては卓越した魔法戦士が複数で挑んでも命の危険に晒される程なんだ。だから、安全が確保されたゾーンと言えどもイレギュラーな事態が起きた時に最低限の自衛が出来ていないとまずい。それから、緊急の逃走手段として箒も用意しておきたいと思っていたんだ。だから、いずれにしても最速で一年後となるだろうとは思っていたんだ」

ハリー達はキョトンとしていた。ロンの普段の言動からして、そこまで慎重に考えていたとは思っていなかったからだ。

「でもさ、ロンはいつも冒険したいって言ってたじゃん。僕、ダメって言われても飛び込んでいっちゃうんじゃないかって思ってたよ」

デインの言葉にハリー達もうんうんと頷いている。

「おいおい、勘違いしてもらっちゃ困るぜ!? オレはあくまで冒険がしたいんだ! 死にたいわけじゃねえんだよ」

ロンは言った。

「確かに、場合によっては危険に飛び込む事も必要さ。けど、冒険の醍醐味はあくまでも未知を楽しむワクワクとドキドキにあるんだ。ただ危険を味わいたいとか、強敵と戦いたいってんなら、ここじゃなくてドラゴンクラブに入ってるぜ!」

その言葉を聞いて、ハリー達はロンが口にする冒険の意味を履き違えていた事に気がついた。

危険に飛び込み、強力な魔法生物と戦いたがっているものとはかり思っていたけれど、確かにそれならドラゴンクラブの方が相応しい筈だ。

「ってか、そんな無謀な事にポッターさん達を付き合わせるわけねえ

でしょうが！」

心外だとロンは怒ってしまった。

「ご、ごめん、ロン」

「ごめんよ」

「勘違いしてたよ」

「ごめん」

ハリー達が謝るとロンは頬をポリポリと搔いた。

「オレはみんなと冒険を楽しみたいから誘ったんだ。確り準備して、未知を楽しもうぜ！　なあ、みんな！」

「うん！」

ハリー達が頷くとケトルバーン先生が拍手した。

「ふむふむ、思っていた以上に賢明じゃな。チャーリーやフレッド、ジョージの三人は君よりもずっと軽率じゃった」

そう言うと、ケトルバーン先生は沼地の方で馬に似た奇妙な生物の世話をしている生徒を呼んだ。

「なんですか？」

ロジャー・デイビスと呼ばれたレイブクローの生徒はロン達に「やあ」と声を掛けながら駆け寄ってきた。

歳はロン達よりも二つ上らしい。

「来週、ドラゴンクラブとの合同訓練があつたじやろう？　この子達を参加させてやってくれ」

「ええ!?　いきなりですか!?　まだ一年生でしょ？　そもそも、基本呪文すら……」

「ええい、わしはクラブの顧問じゃぞ！　顧問の言う事が聞けんのか!?」

「横暴だ!?　もう、何かあつたら責任取ってくださいよ！」

「ホーツホツホツホ！　わーつとるわい！」

そんな風なやり取りの後、ロジャーはロン達に向き直った。

「えーつと、そんなわけでそんな感じになったから来週末にドラゴンクラブの決闘場に来てくれ。場所は分かるかい？　ここを出て、廊下を右に進んだ先にドラゴンの紋章が飾られた扉があるんだけど、そこ

がドラゴンクラブのクラブルームなんだ。入る為には本来ドラゴンクラブのクラブ証ライセンスが必要なんだけど、合同訓練の時だけはヒツポグリフクラブのクラブ証で入れるからね」

「クラブ証？」

「え？ まだ貰ってないの!？」

ロジャーはケトルバーン先生を睨みつけた。先生はどこ吹く風でソツポを向いている。

「……まったくもう！ セドリック、すぐにクラブ証を用意してあげなよ。僕はドラゴンクラブのリーダーと話してくるからさ」

「う、うん。ありがとう、ロジャー」

ロジャーはクラブルームを飛び出していった。

そして、セドリックは部屋の中央に立っている太い木の傍に並んでいるデスクから幾つかの書類とバッジを持って来た。

「このバッジがクラブ証だ。それと、こっちが入会書。確り読んでからサインしてくれ」

それぞれ一枚と一個ずつ配られた。

「じゃあ、ハグリッドの所に戻ろうか。ヒツポグリフの準備をしている筈だからさ」

「おお、そうだぜ！ ヒツポグリフ！」

ロンは瞳を輝かせた。先週のロンとの約束をハグリッドは確り覚えていたらしい。

「だ、大丈夫なの？ さつき、ヒツポグリフはXXXって言ってたけど……」

デイーンの言葉にロンは笑った。

「ハグリッドのとつつあんが確り監督してくれんだから心配なんて無用だろ！」

けれど、その言葉に何故かセドリックとケトルバーン先生は不安そうな表情を浮かべた。

「……せ、先生も来てくれませんか？」

「そうじゃな。まあ、ヒツポグリフならハグリッドだけで大丈夫と思うが、あの美しい生き物は何度見ても素晴らしいものじゃし」

そう言つて、ケトルバーン先生も同行する事になった。
ロン達はキョトンとした。
そして、一行はハグリッドの下へ戻つて行つた。

第十三話 『ヒツポグリフ』

魔法界に来てから多くのファンタステイックな物事を見て来た。

動くレンガがアーチを作る。人が壁をすり抜ける。ボートが勝手に動き出す。蠟燭が宙に浮かぶ。箒で空を飛ぶ。

一つ一つがマグルの世界での常識を壊していった。けれど、これこそが決定的だとハリーは思った。

「これがヒツポグリフ……」

ハグリッドが小屋の近くに繋いでいた三頭のヒツポグリフはまさに現実を超越していた。

頭と前足は鷲のようだけど、その胴体と後ろ足は馬のそれであり、背には大きな翼を生やしている。

そのあまりにも幻想的な姿に見惚れているのはハリーだけではなかった。

「……アメイジングだぜ」

ロンは涙を零していた。

「ああ、こんな……、本当にスゲエ……」

感動に打ち震えている。

「オレは……、オレはよお！ 嬉しくて堪らないぜ。ヒツポグリフ！

お前さん達が存在してくれている事が嬉しくて堪らねえ!!」

この時になって、ようやくハリーは理解した。

未知との遭遇。胸を満たすワクワクとドキドキ。

まるで夢を見ているかのような素晴らしい気分だ。

これがロンの言っていた冒険なのだ。

第十三話 『ヒツポグリフ』

「……へへっ、気に入ってくれたみてえだな」

ハグリッドは子供達の反応に満足げだ。

「気に入ったなんてもんじゃねえ!! 最高だ!! 最高だぜ!! とっ

つあん!! ありがとう!!!」

ロンはハグリッドの巨体を全身でハグした。

「分かるぜ。ヒツポグリフは本当に美しい生き物だ。言葉で言い尽く

せねえ程に」

ハグリッドは微笑みながらロンの背中を叩いた。

本人は軽く叩いたつもりなのだろうが、ロンは悶絶している。

「ハ、ハグリッド！ 加減してくれ！」

慌ててセドリックがロンを救出した。

「おっと、すまねえ」

ハグリッドは頭をぼりぼりと搔いた。

「大丈夫？」

ハリーはふらついているロンに声を掛けた。

「だ、大丈夫です……。さ、さすがはとつつあんだぜ。スゲエ、パワーだ」

「無理しない方がいいよ。凄い音してたもん」

ネビルは若干青褪めている。

「ハグリッドは加減を知らないからな……」

セドリックは困ったように溜息を零しつつ杖を振った。

するとロンの背中痛みがスツと引いた。

「おお、スゲエ！ 治癒呪文ですかい!？」

「まあ、応急処置程度だけだね。もしも、後で痛くなったらマダム・ポーンフリーの所に行くんだよ」

「ガツテンだ！ しっかし、スツと痛みが消えたぜ。さすがはセドリックの兄貴だ！」

そう言うと、ロンは軽快にヒッポグリフの下へ駆けて行った。

「これこれ、迂闊じゃぞ」

するとケトルバーン先生が魔法でロンを連れ戻した。

「おろっ？」

首を傾げるロンにケトルバーン先生はコホンと咳払いをしながらハグリッドを見た。

すると、ハグリッドは「おっと、そうだ」と口を開いた。

「お前さん達にまずはヒッポグリフの説明をせにやならんかった。いかか？ ヒッポグリフはとても誇り高い生き物だ。無礼な態度を取ったり、軽はずみな接し方をしたらいかん。手痛いしっぺ返しを食

らう事になるぞ」

その言葉にハリー達の視線はヒッポグリフの爪へと集まった。

あの爪で引き裂かれたら無事では済まないだろう。

「面目ねえ……。つい、興奮しちまってよお」

ロンはしよげ返っている。

「いや、今のは説明をキチンとせんかったハグリッドの落ち度じゃ」

ケトルバーン先生が言った。

「ハグリッド。生徒に魔法生物の素晴らしさを説く喜びはわしもよく知っておる。じゃが、だからこそ生徒に対する安全対策は万全で無ければいかん」

「へ、へい。すみませんです……」

叱られたハグリッドは巨体を縮こませている。

「……あんな事言ってるけど、ケトルバーン先生の授業が安全快適だった事なんて一度も無いんだ」

セドリツクがコツソリと言った。

「以前、校庭にあつた演劇用の施設を燃やした事もあるそうだしね」

「へ、へえ……」

ハリー達はなんといいか分からなかった。

◆

その後、ハグリッドは丁寧にヒッポグリフとの接し方をハリー達に説明した。

そして、いざ実践となるとロンが真っ先に手を挙げた。

みんな予想していた事だから素直に一番手を彼に譲った。

「灰色の羽のがバックビーク、茶色の羽のがエスメラルダ、黒い羽のがレイヴンだ」

ハグリッドが名付けたのだろうか、イカした名前だとロンは思った。

彼はレイヴンの前に立った。そこから先は瞬き一つしてはいけない。重要な事はヒッポグリフに認めてもらおう事だ。

目は口ほどに物を言う。つまり、目で隠し事は出来ないと言う事だ。ヒッポグリフはとても賢い生き物であり、その瞳からその者の器

を測るらしい。

レイヴンは顔をロンに向けた。まるで品定めするかのよう目細めてる。

ロンはゆっくりと頭を下げた。当然ながら、お辞儀はヒトの文化であり、ヒツポグリフに対して儀礼的な意味はない。肝心なのは首の付け根を見せる事だ。命を差し出す事で信頼を勝ち得る事が重要だ。

一分程経った後、レイヴンはゆっくりと頭を下げた。まるでお辞儀をしているかのようだ。

「よし、ええぞー！　ロン、近づいて撫でてやれ」

「ああ……」

ロンは感嘆の息を吐きながらレイヴンに近づいていく。

その眼光はとても鋭く、まるでロンの一挙一動を観察しているかのようだ。

「美しい。それに……、なんてカッコいいんだ」

至近距離まで来ると、ロンはその首に触れた。ゆっくりと撫でるとレイヴンは目を細めた。

「クルルル……」

気持ちよさそうに鳴いた。

「か、可愛いぜ」

ロンは衝撃を受けた。

美しさとカッコ良さ、そして可愛さが同居している。

まさに神が作り上げた芸術品だ。

「ここか？　ここが気持ちいいのか!？」

ロンは夢中になってレイヴンを撫でた。ウツトリと目を細めるレイヴンにゾクゾクした。

もつと気持ちよくさせたい。喜ばせたい。

「クリュリュリュウウウ」

「よーしゃよしゃよしゃ!!　ここはどうだ!?!　ここもいいだろう!?!」

遂には立っていられなくなってしまった。ロンは全身を使って撫で続け、レイヴンはしゃがみながらクチバシを開けっ放しにしている。

それを見ていたバックビークとエスメラルダはドン引きしているのかレイヴンとロンから距離を取った。

「……よし！ 次はハリー、いつてみるか？」

ハグリッドは言った。

「いいの!?! あれ放つたらかしていいの!?!」

デインは捕食しているのかさかしているのか分からない光景を見ながら叫んだ。

「ほっほっほ！ ミスター・ウィーズリーには魔法生物学の適正があるようじゃな！」

ケトルバーンは朗らかに笑った。

「言っておくが、あれは誰もが出来る事ではないぞ。ハグリッドが言った通り、ヒツポグリフはとても誇り高い。自分を心から愛している者で無ければ、あそこまで受け入れたりはせぬ。下手に真似ようとするば逆鱗に触れる事となるじやろう。ちなみにわしは出来るぞ!!」

そう言っつて、ケトルバーン先生はエスメラルダに突撃していった。エスメラルダは逃げ出した。

「ク、クリュリユリユリユ!!」

「何故じゃ、エスメラルダ!! わしはお主を愛しておるぞ!!」

「……エスメラルダはメスだからな。きつと、レイヴンみたいになるのが恥ずかしいと思っただらう」

ハグリッドは禁じられた森へ消えていくエスメラルダとケトルバーンを見ながら言った。

「俺もあいつらの事を心から愛しちよるんだが、あそこまではさせてくれん……」

シヨボンとしているけれど、当たり前だとハリー達は思った。

ハグリッドのパワーであんな事をされたら全身の骨がバキバキに折られてしまう。

ヒツポグリフ達も愛情を受け入れるために死にたくないのだろう。「さて、エスメラルダが行っちゃったからな。ハリーの相手はバックビークだ。デイン達は順番待ちな。レイヴンも……、ロンに夢中になっちゃまったみてえだ」

「クリユウウウウ」

「クルル……」

最初の威厳が完全に消えてしまったレイヴン。ひっくり返って、口にお腹を撫でてもらっている。

そんな一人と一匹からバックビークは更に距離を取った。

ハグリッドに促されてハリーが近づくとバックビークはビクツとした。隣がとんでもない事になっているから仕方がない。

ハリーはロンに倣ってジツとバックビークを見つめ、頭を下げた。けれど、中々お辞儀をしてくれない。とても警戒しているようだ。

「……ふむ。ハリー、少しさがれ」

ハグリッドが言った。

「かなり警戒しちまつとるようだ」

ハリーは少し残念だった。さすがにロンと同じ事をする気は無かったけれど、それでもバックビークの羽を撫でてみたいと思っていたからだ。

そう思つて顔をあげた途端、バックビークは急に前足を折った。

お辞儀をしてくれたのだ。

「い、いいの?」

「クルル……」

一瞬、バックビークはレイヴンを見た。

「あ、あそこまではしないよ」

「クル」

まるで人の言葉を理解しているかのようだ。バックビークは安心してように近寄つて来た。

試しに首を撫でてみるとバックビークは「クルルル」と気持ちよさそうに鳴いた。

その反応の可愛らしさはハリーの胸をときめかせた。なるほど、その可愛さにはロンを狂わせた魔力がある。

このままだと彼と同じようにバックビークに溺れてしまいそうだ。

ハリーは自制心をフルに発揮する必要があった。

「おーいー」

そうしているとケトルバーン先生が戻って来た。エスメラルダが彼にすり寄っている。

そして、その後ろから四頭のヒツポグリフがついて来ている。

「ケトルバーン先生！ 牧場の方まで行つとつたんですか」

「うむ！ 一人一頭居たほうがいいと思つてのう。ディーン達の分も連れて来たぞい！」

「助かります！ 三頭以上となると俺一人ならいいが子供達が危ねえと思つとつたんですが、先生がいらつしやれば問題ねえ」

「ほつほつほ！ その氣遣いが出来ておるなら、わしの後任を任せても問題無さそうじゃな」

「せ、先生の後任!? お、俺がですかい!？」

ケトルバーン先生の言葉にハグリッドは衝撃を受けている。

「前々からダンブルドアと話しておつたが、こうして生徒達の為にヒツポグリフとの接し方を教えている様を見て確信したぞ！ お前さんは良い教師になれるじやろう」

「せ、先生……」

ハグリッドはよほど嬉しかったのか涙を零した。

「けども、先生……」

「分かつておる。簡単にはいかぬだろうが……、しかし！ 諦めてはいかん！ わしもそろそろ体にガタが来ておつて後任が是非とも必要なのじゃ。協力するから頑張つてみんなか？」

「……は、はい!! 頑張るです、先生!!」

その話はバックビークやレイヴンと戯れていたハリーとロンにも聞こえていた。

ハグリッドが先生になる。それはとても素晴らしい事だと思った。

それからシエーマス達もそれぞれヒツポグリフと接し始めた。

ハリー達はネビルが怖がつて上手いかないのではないかと心配したけれど、それは杞憂だった。

ネビルもヒツポグリフを怖いというよりも美しくてかっこよく、そして可愛らしい生き物だと確信していたからだ。

「マテリアル……、君つてすごく魅力的だね」

ネビルは青い羽のマテリアルにすっかり魅了されている。

セドリックも黄色い羽のオルテガと交流し、最後はみんなでヒツポグリフの背中に乗って湖を遊覧飛行した。

うっかり背中から落ちてしまってもヒツポグリフは直ぐに旋回して助けてくれたし、間に合わない時はセドリックが即座に呪文でヒツポグリフが助ける為の時間を稼いでくれた。

その週末はハリー達にとって格別なものとなった。

第十四話 『クイリナス・クイレルの苦悩』

クイリナス・クイレルは他の境遇を同じくする同僚達と同じように気合を入れていた。

グリフィンドールの一年生。彼らの授業は一筋縄ではいかない。「いやはや、まるで学生の頃に戻ったかのようです……」

授業の内容から生まれる余地のある疑問の答えを満遍なく網羅しなければならぬ。

さもなければまた質問に答えるだけで授業時間が終わってしまう。初めはロナルド・ウィーズリーという生徒だけだった。けれど、回を重ねる毎に彼の熱意が他の生徒へ伝染していった。

今では多くの生徒が授業の中で生まれた疑問を積極的に質問するようになってきている。

『……自己で解決出来ぬ未熟者ばかりだな』
どこからか、彼にだけ聞こえる声が呟く。

確かに、勉強に対する熱量に大差の無いレイヴンクローは質問する事が減多にない。それは彼らが疑問を自らの力で解決する為だ。

自習の中で授業内容はおろか、その内容から生み出される疑問の全てに解答を得てから授業に参加している。

それは素晴らしい事だと思うが、教師としては味気ない。
『なるほど、問題児ほど可愛いという事か』

問題児という程ではない。何しろ、彼らに悪意はない。授業の内容を聞いて、疑問に思った事を教師に聞く。それは正しく理想的な光景だとクイレルは感じていた。

第十四話 『クイリナス・クイレルの苦悩』

教室に入り、いつものように最前列で爛々と瞳を輝かせている生徒を見る。

「きよ、今日は……で、ですね。その……じ、人狼についてお話ししよう」

闇の魔術に対する防衛術の授業では生徒に自らの身を守る術を教える。

それは文字通りの『闇の魔術に対する防衛術』であったり、魔法界では不意に訪れる可能性のある災厄の回避法であったり、危険な魔法生物と遭遇した時の対処法であったりと様々だ。

多くの教科書は最初の項目に『魔法生物の章』を据えている。その理由はもつとも現実的であり、もつとも想像しやすい為だ。

人生の中で闇の魔術や厄災にただの一度も遭遇しない魔法使いはいる。けれど、魔法生物とまで遭遇しない魔法使いなど滅多にいない。

特にグリンデルバルドやヴォルデモート卿のような邪悪が存在しない時代においては魔法生物こそが最も危険な脅威なのだ。

加えて、魔法生物の対処法の多くは杖を振らずとも可能な事が多く、呪文学などで生徒達が魔法の基礎を修めてから本格的な魔法の授業に移行出来るようにという意味も含まれている。

「じ、人狼はとて、とてもきき、危険な生き物でありまして……」
けれど、魔法を使いたくて仕方のない新入生にとっては座学中心の授業など期待ハズレも甚だしい。

他のクラスではクイレルのどもり癖や神経質な態度もあつて冷笑を向けられる事が多く、中には聞こえるように侮辱的な言葉を発する生徒もいた。

このクラスにおいても初めは失望感を漂わせる生徒がいたし、嘲るような笑みを浮かべる者もいた。

けれど、このクラスにはそうした陰湿さをかき消してしまう太陽がいた。

「し、従つて、じ、人狼にか、噛まれたものは……じ、人狼になつてしま、しまうのです」

「先生!!」

同時に二つの手が拳がっていた。質問回数レコードホルダーであるロナルド・ウィーズリーと彼に次ぐ質問回数を誇るハーマイオニー・グレンジャーだ。

クイレルは嬉しくなった。丁度、今話している内容から推察される彼らの疑問点の答えを調べ尽くしていたからだ。

どんな事を聞かれても即座に答える事が出来る筈だ。

「口、ロナ、ロナルドくん。ど、どうしたんだい？」

「先生！ 人狼に噛まれた場合、その毒が肉体を変性させると書いてありますが、その毒というのはいわゆる呪詛などとは違うのですか!?

一定周期で狼に変身するとありますが、変身は魔法である筈ですよね!?! 一定周期で魔法が自動発動する呪詛という事なのでしようか!?!」

予想通りの質問だ。クイレルは内心でほくそ笑んだ。

「あ、当たらずとも遠からずといったと、所ですね。し、しかし、呪詛……つ、つまりは魔法的要素が発揮されるのはか、噛まれた瞬間な、なのだよ。肉体の変性時、さ、細胞の一つ一つがそ、そういう物に変化をすするんだ」

どもらなければいけない事が煩わしい。

「そうか、分かったぜ!!」

ロナルドは叫んだ。

「つまり、細胞は常に変身しようとしてるんですね?! けれど、常には変身しない。魔力だ!! そうでしょう!?! 細胞は変身の為の魔力を必要としているんだ! だから、魔力が溜まり切るまでは変身が発動しない。逆に! 溜まってしまおうと変身してしまおうんだ!!」

「その通りだよ!!」

素晴らしい。クイレルは拍手を送った。

これは脱狼薬という人狼が変身した際に自我を保たせ続ける効果を持った魔法薬の開発者であるダモクレス・ベルビーの論文に記されていた内容だ。

彼は人狼の変身の原理を探り当て、その細胞に干渉する魔法薬を研究し、遂には脱狼薬を完成させた。

脱狼薬の主成分がトリカブトである理由も、トリカブトに含まれているアコニチン系アルカロイドのアコニチンやメサコニチンといった成分がナトリウムチャンネルと結合する事で細胞を麻痺させて活動を停止させる事が出来るからだ。

この論文を読んだ時、クイレルは震えた。なにしろ、トリカブトの

毒の研究は魔法界よりもマグルの世界の方が遥かに進んでおり、その研究をダモクレスは魔法使いでありながらキッチンと理解した上で脱狼薬完成に役立てた為だ。

嘗て、マグル学の担当教師だった時代を過去に持つクイレルにとって、ダモクレスは尊敬すべき偉大な人物となっていた。

「教科書の次のページを開いてごらん！ 脱狼薬という薬が載っているだろう？ それを開発したダモクレス・ベルビーはまさしく天才なんだ！」

また、どもる事を忘れてしまった。だけど、今はとにかく生徒達に語り聞かせてあげたい。

こんなに素晴らしい人がいるんだ。こんなに素晴らしい研究があるんだ。それらはマグルの研究者達の努力も礎となっているんだ。

どんなに熱く語っても、目の前の生徒は引いたりしない。逆に瞳を輝かせるばかりだ。

「そうだったのか!! さすがはクイレル先生だぜ!!」

混じりつ気のない尊敬の眼差しがとても心地よい。

「あ、あ、ありがとう。さ、さあ、授業をす、進めようか！」

馬鹿にされたくなかった。

笑われたくなかった。

見返したかった。

「ち、ちなみにだがね。脱狼薬のけ、研究はさ、更に進んでいるんだ。い、いつかはか、完治させるこ、事もでき、出来るかもしれないね。だから、も、もしだよ？ もし、人狼にか、噛まれるような事があっても諦めちゃダメだ。粉末状の銀とハナハツカの混合物をすぐに傷口に塗れば人狼になってしまいが生きられる。それがイヤだと死を選ぶ人もいる。だけど、未来に希望はあるんだ！ だから、き、君達が万が一にもその……、そんな事があつてはいけないけれど、それがおき、起きてしまったら……、生きる事を選びなさい。いつかの未来に君達を偉大な誰かが助けてくれる筈だからね。人狼に限らず、どんな事でも」

「はい、先生!!」

「はい！」

「分かったよ、先生！」

「はい、先生！」

演じる事を忘れてしまったのに、生徒達が人狼に噛まれて死を望む光景を思っただもってしまった。その上、とてもシラフで言うようなセリフではなかった。

だけど、誰も笑わない。生徒達はみんなクイレルの言葉を聞いて、理解していた。

—— ああ、楽しいな。

丁度授業終了の時間が来た。

クイレルは安堵した。そそくさと教室を出て、自室へ戻った。

「……ああ」

それ以上は堪え切れなかった。

教師である事が楽しい。

教師である事が誇らしい。

そんな事に今更気付いてしまった事が悲しくて仕方ない。

「ああああああああああああああああああ!!」

涙が止めどなく溢れ出す。蹲り、体を震わせる。

もつと早くに気付きたかった。けれど、何もかもが手遅れだった。

『そうだ、クイレルよ。貴様には使命があるのだ。それを忘れるな』

姿無き声がクイレルを更なる奈落へ突き落とす。

『そろそろ血が必要だ』

その身は既に呪われている。

歩む先に光はなく、戻るべき道は既に崩れ去っている。

「……ははっ」

クイレルは微笑んだ。

追い詰められた心は妄想の中に救いを求める。

本当は声など聞こえない。あの日、あの森になど行っていない。見返す為などという下らない理由でヴォルデモート卿を探し求める事などしていない。

未来には希望がある。

「そうやって、己を騙して暗闇を歩き続ける。
今日も明日も……、本当の地獄へ落ちるまで。」

第十五話 『ドラゴンクラブ』

週末、ロン達がドラゴンクラブのクラブルームを訪れると、そこにはマクゴナガル先生の姿があった。

「おお、マクゴナガル先生！　もしや、先生が顧問なのですか!？」

ハリー達には理解し難い事の上無いのだが、ロンにはマクゴナガル先生の事が凄く魅力的な女性に見えるらしい。

はしやぐロンに対して、マクゴナガル先生は「フリットウィック先生と交代にはありますけどね」と答えた。

「さて、あなた方はヒツポグリフクラブのメンバーですが、ここではドラゴンクラブのルールに従っていただきます」

「ルールですか?」

シエーマスが首を傾げた。

「まず、これから語るすべてのルールを厳守する事。これが最初のルールです。破った者は特権の剥奪もあり得るので気をつけるように」

「特権?　そんなのあるんですか?」

デイーンが聞くと、マクゴナガル先生は「もちろんです」と返した。

「クラブに加わるのは特権であり、権利ではありません。その特権を持つに相応しくない者からは剥奪せざるを得ないのです」

「クラブを追い出されるって事ですか!？」

ネビルの言葉にマクゴナガル先生は首を横に振って否定した。

「追い出すのではありません。クラブ活動の永久的な禁止です。無論、これにはクイディッチのチームも含まれています。如何に箒乗りとしてのセンスを持っていたとしても、特権無き生徒にピッチに立つ資格はありません」

それはあまりにも厳しい罰だ。シエーマスとデイーン、ネビルの三人は一気に青褪めた。

クイディッチのチームに参加する事の意味をよく理解していないハリーもヒツポグリフクラブから追い出される事を歓迎する事は出来ないと感じていた。

「落ち着きな、みんな！ それだけルールが重要って事さ！」

ロンが言った。

「言ったろ？ ドラゴンクラブはガチの決闘クラブだ。闇の魔術を使わなくても、魔法は使い方次第で簡単に人を殺せちまう。つまり、決闘クラブは人命に対しての危機管理に殊更に慎重さを求められるのさ！」

「その通りです、ミスター・ウィーズリー。さすがですね」

マクゴナガル先生は優秀な生徒にご満悦だ。そして、彼女に褒められたロンは鼻の下を伸ばした。

ハリー達はちよつと引いた。

「魔法使いの決闘では人間に対して攻撃性の魔法を行使する事が稀ではありません。そして、魔法にはまだあなた方が想像すらかない恐るべき可能性が秘められているのです。軽率な行いによって、あるいは人の命を奪ってしまうかもしれない。そのような惨事を防ぐ為にルールが存在するのです」

それからマクゴナガル先生は幾つかのルールをロン達に説明した。

- 一つ、決闘の際には決められた区画で行う。
- 一つ、決闘の際には指定された呪文のみを使用する。
- 一つ、決闘の際にはA判定を受けた呪文のみを使用する。
- 一つ、他者の決闘に横槍を入れてはならない。
- 一つ、他者の決闘に野次や声援を飛ばしてはならない。
- 一つ、他者の決闘区画に入ってはならない。
- 一つ、呪文の練習にはその呪文でA判定を受けている上級生、または教師の監督が必要である。

一つ、呪文の練習をしている生徒の邪魔をしてはならない。

一つ、呪文の練習は教師が使用を許可している呪文に限られ、それ以外の呪文の練習には練習許可申請書の提出を求められる。

などなど、他にもたくさんルールがあった。

「再三になりますが、これらのルールを厳守しなければあなた方にとって望ましくない結果を齎す事になります。分かりましたね？」

「はい、先生！」

元氣よく返事が出来たのはロンだけだった。

ハリー達はそもそもルールをすべて覚えきれぬ気がしなかった。

「ルールについては後ほど冊子を用意します。それに、初日からすべてのルールを完璧に守る事は難しいでしょうからね。少しならば大目に見るとします。もつとも、これらのルールの内の多くはうっかり破ってしまう類の物ではない筈ですけどね」

その言葉にハリー達はすっかり恐縮してしまった。

「はいはい！　じゃあ、ここからは私が説明するね！」

すると、そこに三年生のアンジェリーナ・ジョンソンの姿があった。彼女はグリフィンドールの生徒であり、なおかつグリフィンドールのクイディッチチームのチェイサーでもある。

「先生つてば、脅かし過ぎですよ！」

「しかしですね、ミス・ジョンソン。ルールを守る事はとても重要な事なのです」

「分かっているけど、この状態だと訓練が身にならないですよ」

マクゴナガル先生に正面切つて抗議を行うアンジェリーナの姿にロン達は目を丸くした。

「……まあ、少し脅かし過ぎましたね」

なんと、マクゴナガル先生の方が折れた。

その光景にハリー達はアンジェリーナを卓越した存在なのだと認識し、ロンはマクゴナガル先生が生徒の言葉をしっかりと受け止め、自らの非を認める強さを持った素晴らしい女性なのだと感動した。

第十五話 『ドラゴンクラブ』

ドラゴンクラブのクラブルームはヒツポグリフクラブのクラブルームよりも二倍くらい広かった。

至る所に円があり、そこでは決闘する生徒達の姿もあった。

「あの円が決闘の為の区画なの。決闘デュエル・サークル円と呼んでいるわ。決闘中の内外の安全を万全なものとする為のたくさんの魔法が籠められているのよ」

アンジェリーナの説明を受けながら、ロン達は決闘円が無い区画へやって来た。

そこにはヒツポグリフクラブのクラブライセンス証であるヒツポグリフのバッジを付けた生徒達が大勢いた。

「セドリツクー！」

ハリーは色々と世話を焼いてくれているセドリツク・テイゴリーの背中を見つけて声を掛けた。

「やあ！ 待ってたよ」

「セドリツクの兄貴！ 今日はおよろしく頼みますー！」

「相変わらず元気だね。まあ、今日は僕もよろしく頼む側だからね。ほら、彼がドラゴンクラブのリーダーだ」

セドリツクが視線を向けた先にはスリザリンの上級生がいた。

「テレンス・ヒッグス。六年生でスリザリンのクイディッチチームのシーカーでもある」

「テイゴリー！ オレは自己紹介くらい出来るぞー！」

「すまない、ヒッグス。ちよつと上級生振りたくてね」

テレンスはロン達を見た。まるで睨みつけられたかのように感じるほど鋭い眼光だ。

「改めて名乗ろう。それが礼儀というものだ。オレの名はテレンス・ヒッグスだ。お前達も順番に名を名乗れ！」

「はい！ オレの名はロナルド・ウィーズリー。よろしくお願ひしますー！」

「元気があつて結構！ 次！」

「は、はい！ ハリー・ポッターです。よろしくお願ひしますー！」

「ポッター！ ここでは知名度や過去の実績などに意味はないぞ。今現在の実力がすべてだ！ 次！」

「はい！ シエーマス・フィネガンです！ よろしくお願ひしますー！」

「声は腹から出せ！ 無理な叫び方は喉を痛めるぞ！ 魔法使いにとって、呪文を唱える喉は最も重要な器官の一つと心得ろ！ 次！」

「デイ、デイーン・トーマスです。よろしくお願ひしますー！」

「何を聞いていた!? 腹から声を出せ！ 次！」

「あ、あの、ネ、ネビル・ロ、ロングボトムで、です！ よ、よろしく……あの、お願ひしますー！」

「怯えるな！ 魔法使いにとって、もつともやってはいけない事だぞ！ 自信を持って！ 虚勢を張れ！ 卓越していると思込め！ それが強魔法使いになる為の第一歩だ！」

「テレンスはロン達を一人一人見つめた。」

「いいか！ 今日、お前達に呪文を使わせる気はない！ 当然だろう！ まだ基礎すら固められていない状況だからだ！ だが、ケトルバーン先生はお前達をここに寄越した！ 何故だ!? お前は分かるか!! ロナルド・ウィーズリー!!」

「はい！ このクラブの空気を感じる為です！」

「そうだ！」

ロンは見事に正解を言い当てたらしい。

ハリーは自分が当てられていたら答えるどころか呼吸すらままならなかったに違いないと思った。

「テレンスが発する威圧感は今までに感じた誰よりも強い。」

ただ前に立っているだけで屈服してしまいそうになる。

「お前達はまず何よりも知らねばならない!! 危険とは何か!? 戦うとはどういう事か!? それこそが身を守る為の大前提だ!! 如何に呪文を豊富に覚えていようとも! あらゆる魔法生物の対処法を学んでいようとも! そもそも立ち向かう為の心構えが出来ていなければ何の意味もない! お前達はその時、何も出来はしないだろう!! だから、それを叩き込む!! アンジェリーナ!! 彼らに決闘を見せろ!! 妙な配慮はするな!! 血を見せろ!! 苦痛を見せろ!! 敗北を見せろ!! それが彼らの安全に繋がるのだからな!!」

「はい」

アンジェリーナはマクゴナガル先生に脅かされた時よりも更に恐縮してしまっているハリー達を見て溜息を吐いた。

「……まあ、これはこれで必要な事だしね」

「ひ、必要な事って?」

シエーマスはビクビクしながら問い掛けた。

「脅威は穏やかな笑顔なんて絶対向けてくれないんだよ」

そう言いながら、アンジェリーナはクスリと笑った。

「テレンスは厳格だけど、スリザリンにしては凄く公平だから苦手意識は持たないで欲しいな。きつと、その方が君達にとつてもプラスだと思っわ」

言われてみると、テレンスの態度は他の多くのスリザリン生達と決定的に違っていた。

入学してから今日まで、ドラコ達以外のスリザリン生とそれほど深く接した事は無かったけれど、それでも彼らがグリフィンドールに対して隔意がある事には気付いていた。

テレンスにはそれが無い。だからこそ、反発する気が起きなくてひたすら恐縮してしまったのだ。

「まあ、テレンスに限らないんだけどね。このクラブで何年も活動を継続している人間は誰も彼もが傑物ばかりよ。だからこそ、卒業後は名を馳せる人が多いの。わたしもそういう人間になりたいと思つて頑張つてるわけ」

「なるほどなあ。このクラブの厳格な規律はそれぞれの物が一種の鍛錬になつてるわけだ」

「どういう意味？」

ロンの言葉にハリーが首を傾げた。

「寺の修行と一緒にでき。人間つてのは自由を求めるもんです。だから、これだけ厳しい規律を確り守り続ける為には己を律しなければならぬ。まさに精神鍛錬つて奴ですよ」

「寺？ うーん、でも分かった気がする。テレンスが僕達に言つていたのもそういう事なんだよね？」

ハリーの言葉にロンは力強く頷いた。

「さすがはポッターさんだ！ ええ、そうですよ。テレンスの旦那が言つてたのはまさにその事です。その時に自分がするべき事を出来るようにする。その為の第一歩を旦那はオレ達に歩ませてくれようとしてるのさ！ 大したお人だぜ！」

「……それが分かっちゃう君達も大したもんだけどね」

アンジェリーナは小さく呟いて苦笑した。

「さあ、テレンスが言つていた通り、今日はみんなの決闘を見学しても

らうよ」

そう言つて、彼女はある決闘円の前までロン達をつれて来た。

円の中では二人の上級生が向かい合っている。

「エクスペリアームス!!」

「プロテゴ!!」

一方のハツフルパフ生が放った呪文の光がもう一方のレイブンクロー生の前で突然跳ね返った。

戻ってくる自分の呪文を回避して、ハツフルパフ生は「ステューピファイ!!」と唱えたが、その杖の先にレイブンクロー生はいなかった。

ハリー達は彼が回避する寸前にレイブンクロー生が「オブスクロー」と唱えていた事に気付いていた。

「あれは視界を晦ます魔法なの。今、エリックは目が見えていないのよ」

アンジェリーナの言葉通り、ハツフルパフ生であるエリックは焦ったように見当違いな方向へ杖を向けている。

「焦っちゃったわね。彼の負けよ。すぐに反対呪文で目隠しを祓うべきだったわ」

彼女の言う通り、決闘はレイブンクロー生であるケイの勝ちだった。

知らない呪文が飛び交い、それを知らない方法で対処する。

初めて見る魔法使いの決闘はドキドキとワクワクでいっぱいだった。

第十六話 『ハロウインの夜に』

ホグワーツ魔法魔術学校に入学して二ヶ月が経過した。その間、とても濃密な時間を過ごして来た。

平日は夜まで友達と遊んで、寝る前には予習と復習をする毎日。週末はクラブ活動だ。ヒッポグリフクラブのクラブルーム内で飼育されている魔法生物や栽培されている薬草の世話を焼いている。

レイヴンやバックビーク達との交流も続いている。

ハグリッドはハリー達との交流をいつも楽しみにしていて、週末には必ずヒッポグリフ達を小屋の近くまで連れて来て彼らの来訪を待ち構えるようになっていた。

それはケトルバーン先生の提案でもあった。ハグリッドをいずれ教師にしたいと思っているケトルバーン先生はこのヒッポグリフとの交流会が良い経験になる筈だと睨んでいる。

実際、生徒の安全に気を配る事やキッチンとした知識を与える為の指導方法などをハグリッドは必死になって勉強して実践していた。

そんなわけで、ハリー達はクラブの後にヒッポグリフでの遊覧飛行を行う事が習慣になっていた。

もつとも、それはハグリッドの為だけではない。それ以上に飛行訓練以外で空を飛ぶ事が出来る唯一の機会をハリー達は逃す気がなかった。

「おお、レイヴン！ 美しいぜー！」

ロンは折角綺麗にブラッシングしたレイヴンの羽毛にキスの嵐を浴びせている。

彼は心からレイヴンを愛しているし、レイヴンも彼を心から愛している。

羽毛が乱れてしまっても、レイヴンはもつともつと自分からすり寄っていく。

バックビークはそんな一羽と一人をどこか呆れたように見つめている事が多い。

「よし、出来たよー！」

ハリーがブラッシングを終えるとバックビークはハリーの胸に頭を擦り付けた。

「バックビーク……？」

折角手入れた羽毛が乱れてしまう。

少し困惑したハリーだったけれど、その仕草にバックビークの本音を垣間見た。

呆れているように見えたけれど、実際には羨んでいたらしい。

ハリーはそつとバックビークの頭を抱き締めた。

第十六話『ハロウインの夜に』

「いやあ、いい匂いですねえ」

どこからか漂ってくるパンプキンパイの香りにロンはお腹を鳴らした。

「うん」

今日は記念すべき日だった。フリットウィック先生がようやく浮遊呪文の実践訓練を解禁してくれたのだ。

マクゴナガル先生やクイレル先生も来週から杖を使った授業を開始すると言っていた。

いよいよ呪文を使う上での基礎が固まったという事だ。

ドラゴンクラブとの合同訓練でも魔法を使わせてくれるかもしれない。ハリー達は期待に胸を膨らませている。

「ロンー」

「おお、お嬢さんー」

大広間に向かっているとハーマイオニーがロンに話し掛けて来た。

二人は読書という共通の趣味を持つ事で極めて良好な関係を築いている。

「ロックハートの新刊が出たのよ！　あなたが知らないかと思って教えに来てあげたのー！」

「へっへっへ、抜かりはないぜ！　日刊預言者新聞の予約票を夜にでも送ろうと思っていたところさ！　お嬢さんのと一緒に送っとくぜ？」

「いいの？　じゃあ、お願いするわね。『雪男とゆっくり一年』！　楽

しみだわ！」

「雪男も実際見てみてえよなあ」

盛り上がる二人の会話にハリー達はついて行けなかった。

「ロックハートの本によくそこまで熱中出来るね」

シエーマスが言うのとハーマイオニーは露骨に不満そうな表情を浮かべた。

誰だつて、自分が好きなものを貶されたら嫌な気分になるものだ。けれど、ロンは平気そうな顔をしている。

「そうバカにしたもんじゃねえぜ。なにしろ、ロックハートさんの本はノンフィクションって奴だからな」

「ノンフィクション？」

「つまり、作り話じゃないって事さ」

ロンは言った。

「バンシーやグールお化けはともかく、鬼婆やトロール、吸血鬼なんかと渡り合ってるんだ。凄いお人だぜ！」

「そうよ！ その通りだわ！ 並外れた勇気と実力の持ち主なの！ リスペクトに値する人なのよ！」

ハーマイオニーは熱意たつぷりにロンの言葉に賛同した。

「でも、婆ちゃんは胡散臭いって言ってたよ？ ペテン師だつて」「まあ！」

ネビルの言葉にハーマイオニーは憤慨した。

「おいおい、ペテン師は酷いぜ。実際、本の中でロックハートさんが敵と戦った時の対処法は正しいものばかりだ。中には先進的とも思える対処をしたシーンもある！ 特に『泣き妖怪バンシーとのナウな休日』には感動したものだぜ！ バンシーは死者の為に泣いていて、そんな彼女の為にロックハートさんは涙を零すんだ！ 優しいお人だ、尊敬するぜ!!」

「ロン！ あなたは本当によく分かっているわ！」

シエーマスとネビルは納得いかな気だけど、これ以上何を言っても二人には分かってももらえないだろうと諦めた様子だ。

「そう言えば、あなた達はクラブに入ったそうね！」

「おう！ ヒップグリフクラブって言ってな。魔法生物や薬草の世話をさせてもらってるぜ！」

ハリー達は嫌な予感がした。

「そ、それよりさ！ はやく大広間に行こうよ！」

「お腹空いたよ！」

「パンプキンパイが待ってる！」

「行こう行こう！」

ハリー達はロンとハーマイオニーの背中を押した。

「お？ お？ お？ そ、そんなに腹減ってたんですかい!？」

「ちよ、ちよっと押さないでよ!？」

「いいからいいから」

ハリー達はなんとか話を有耶無耶にする事に成功した。



大広間はハロウィーンの飾りで豪華に彩られていた。

天井や壁には千羽近くもコウモリが止まっていて、浮いている蝋燭はカボチャをくり抜いたジャック・ランタンに入れ替わっていた。

ロン達が感激しながら席に座ると、目の前にご馳走が乗った金の皿が現れた。

「あれ？」

ネビルが何かに気付いたように声を上げた。

「どうしたの？」

「クイレル先生がいらないよ」

「え？」

ネビルの言う通り、教職員の席にクイレル先生の姿が無かった。

「具合悪いのかな？ なんだか、この前の授業の時も顔色悪かったし……」

「心配ね……」

「そうだ！ 後で見舞いに行きましようかね!？」

「ええ？」

「見舞いは別に行かなくてもよくない？」

「何言ってるんだ！ 恩師が体調不良なんだぜ!？ ここは元気の出そう

な物を見繕ってだな……」

そうこう話していると大広間の扉が開いた。

相変わらず青褪めた様子のクイレル先生が恐縮した様子で教職員用の席に向かつていく。

「ただの遅刻だったみたいだね」

「でも、相変わらず顔色悪そうだね」

クイレル先生の席はスネイプ先生の隣だった。

「スネイプ、なんかクイレル先生の事睨んでないか？」

「遅刻した事を怒ってるのかしら？」

「え？ そんな事で怒るの!？」

「ほんとスネイプってわけわかんねえよな」

ハリー達にとって、スネイプ先生は意味不明の一言に尽きた。

魔法薬学の授業の時、彼は事ある毎にハリーに対して減点と加点を繰り返すのだ。その理由がどちらも曖昧でハリー自身も困惑するばかりだ。

スリザリン生でさえ戸惑っている。最初は減点される時にせせら笑っていた連中も今ではポカンとした表情を浮かべている。

「……なんか、情緒不安定よね」

優等生のハーマイオニーですら、スネイプの行動に理由を見つけ出す事が出来なかった。

「なんつーかなあ」

ロンはスネイプ先生を見つめながら呟いた。

「なんか、ポッターさんを見てるってより、別の誰かを見てる感じなんだよな」

「別の誰か？」

ハリーは首を傾げた。

「……年齢的に考えて、恐らくは」

ロンは渋い表情を浮かべた。

「多分だが、ポッターさんの御両親だな」

「え？」

両親と聞いて、ハリーは目を見開いた。

「ああ言う人間を前にも何度か見た事があるんです。子供を通して親を見ちまつてる。そう言う奴は得てしてその親との関係が複雑だったりするんだ」

たしかに、度々感じていた事だ。

どうも彼の態度がチグハグだと。

自分を見ているようで、違う誰かを見ているようだ。

「なんか、面倒くさいね……」

デインは呆れたようにスネイプ先生を見た。

ハリー達もうんうんと頷いた。

「まあ、いつかは奴やつこさんも気づくだらうさ。ポッターさんはポッターさんなんだってな」



『……これはどういう事だ？ クイレルよ』

ハロウインの夜、クイリナス・クイレルは姿なき声による懲罰を受けていた。

魂を侵していく猛毒が与える苦痛は筆舌に尽くし難い凄惨な痛みを彼に与えた。

「お、お許してください……。わ、わたしは……。わたしは……」

『今宵、貴様はトロールを城内に招き入れる計画だった筈だ。トロールに教師共の目が向いている隙に例の物を手に入れる筈だった！ 違うか!?!』

「わ、わたくしは……。ど、どうか……。どうかお許しを……」

『クイレルよ！ 俺様は貴様に慈悲を与えたぞ。生徒に危害を加えないという貴様の身の程を弁えぬ要求を呑んでやったのだ。その恩を仇で返したのだぞ！』

「で、ですが……。ですが……。ト、トロールがま、万が一にもせ、生徒に危害を加えでもしたら……」

クイレルは涙で床を濡らしながら叫んだ。

「ト、トロールは大人の魔法使いでも命を落とす危険があるのです!! 生徒が対峙してしまつたら……。そうしたら……。わ、わたしは決して裏切つたのではないのです。わ、わたしは生徒に危害を加えない

かっただけなのです!!」

『貴様……』

激痛がクイレルの全身を襲った。その苦痛は彼の意識を強制的にむしり取る程のものだった。

『愚か者め!!』

怒りに満ちた声が響く。

『駄目だな。この男では……、もう』

能力は申し分無かった。心には付け込む隙があった。

アルバニアの森に潜伏していた時、これほど優秀な駒を手に入れる事が出来たのは間違いないと幸運だったと確信していた。

けれど、この男の心に空いていた穴が急速に埋められつつある。

ロナルド・ウィーズリー。血を裏切る者の末裔にして、熱意漲る生徒。あの少年の熱意がクイレルの中の教師としての魂に火を灯してしまった。

『いずれは生徒の為に俺様を裏切るだろう』

死よりも恐ろしい苦痛を味わいながら、それでも生徒の為に逆らった。

その時点で裏切りの未来は確定した。

それは危険を賭して Hogwartz に潜入した目的の達成が不可能になった事を意味している。

『……まあ良い。いずれにしても、セブルスの言動や行動を見るにダンブルドアも勘付いている可能性がある』

いざとなればセブルスに乗り移ればいい。

今はダンブルドアの忠犬を演じているが、その真なる忠誠は別の者に向けられている。

そう、偉大なるヴォルデモート卿に。

『だが、セブルスと接触するならば機会を慎重に探らねばならぬ。あ
るいは……』

思考を重ねていると激痛が走った。クイレルに与えたものとは違う。これは魂を穢す呪い。これは彼とクイレル双方が共有する痛みでもある。

『……愚か者め』

ヴォルデモート卿は呟いた。

クイリナス・クイレルに未来などない。その魂は既に呪われている。

例え、帝王の魂から解放されたとしても次のハロウインを迎える事はない。

唯一、賢者の石の力だけが彼の命を救う事が出来るのだ。しかし、誰が死喰い人の為に貴重な命の水を与えるというのか。あまつさえ、自らの意思で罪を犯し、呪われた者などに。

『愚か者め……』

第十七話 『ドラゴン』

遂にクイディッチシーズンが到来した。

校内は学年を問わず、寮を問わずにクイディッチの話題で盛り上がっている。

今日はグリフィンドールとスリザリンの試合だ。

「おお、兄上達だ!!」

試合観戦の為に競技場のグリフィンドール用観客席に座っていたロンはピッチに現れた紅の装束の選手達の中から兄であるフレッドとジョージの姿を見つけ出した。

二人は悪戯好きな双子として知られ、よく管理人のフィルチを困らせている。

けれど、ハリー達にとっては授業に遅れない為の近道を教えてくれたり、ユーモアのあるジョークで笑わせてくれる気の良いお兄さん達だった。

「アンジェリーナもいるよ!」

チェイサーの中にはドラゴンクラブとの合同訓練でお世話になったアンジェリーナの姿もあった。

「あつちにはテレンスがいますよ!」

デイーンはスリザリン側の選手達の中からテレンスの姿を見つけた。

ドラゴンクラブのリーダーとして、常に厳格な態度を崩さない鋼の男だ。

「ど、どつちを応援したらいいのかな?」

ネビルが言うと、デイーンは呆れたように彼を見た。

「グリフィンドールに決まってるだろ! 君はグリフィンドール生なんだからさ!」

「そうだよ! それに、テレンスは応援が必要な選手じゃないぞ!

なにしろ、これまでの試合でテレンスはいつも相手のシーカーよりも先にスニッチを取り続けてきたんだ。だから、スリザリンは何年も連続で優勝してるんだよ!」

シエーマスの言葉にハリー達はグリフィンドールチームの事が心配になって来た。

「アンジェリーナの姐さんに聞いたんだが、テレンスの旦那は二年生の時からシーカーだったらしい。その時から四年間一度も負けてないそうさ。今年で引退らしいし、こりゃ無敗伝説を打ち立てちまうかもしれないねえぜ！」

更にロンが不安を煽る事を言ってきた。

「テレンスが卓越した存在である事はドラゴンクラブでイヤというほど分かっている。」

「だけど、彼はグリフィンドールの敵なのだ。倒すべき存在であり、デイーンの言う通り応援なんて以ての外だ。」

『さあ、試合開始です!!』

いつもフレッドとジョージと共に行動しているリー・ジョーダンが実況席で試合開始の合図を送った。

第十七話『ドラゴン』

結果として、グリフィンドールは敗北した。

「テレンスの無敗伝説がまた一刻まれたのだった。」

「惜しかったよなあ……」

「デイーンがぼやいた。」

「グリフィンドールはチェイサーとキーパーが奮戦して試合をリードしていた。」

「けれど、結局はテレンスによるスニッチキャッチで逆転負けだ。」

「スニッチキャッチで一気に150点って、ルールとしてどうなんだ？ しかも、キャッチした瞬間に試合が終わっちゃうって……。それまでの試合経過が無意味じゃん」

「分かっているなあ！ それまでにチェイサーが150点以上取ったり、不利な場合はシーカーやビーターが相手のシーカーにスニッチを取らせない為に動いたりとかの戦術があるんだよ！」

「出来てなかったじゃん」

「それは!! ……その、だって」

「デイーンの視線からシエーマスは逃げるように顔を背けた。」

「まあ、学生レベルだと難しいよな……」

ロンが言った。

「実際、プロの試合ならシエーマスの言ったような高度なやり取りが見れるんだぜ？　ただ、学生にアレを再現しろってのは無茶だぜ。全員が高水準の飛行能力を持っていて、なおかつ完璧な連携が出来るよう訓練しようとしたら勉強に割いてる時間なんか無いからなあ……」

「でも、グリフィンドールの練習はハードだって聞いたよ？」

ネビルの言葉にロンは頭をポリポリと掻いた。

「オレも兄上達がボヤいているのは聞いているがな。試合前ともなると放課後から深夜まで休み無しでの訓練漬けらしい。けど、それでも足りないんだ。なにしろ、空は地上と違うからな。360°の自由過ぎるフィールドを縦横無尽に飛び回りながらプレイするわけだぜ？　サッカーやバスケの比じゃねえ難易度だ。ぶっちゃけ、普通に試合が出来てるだけで学生としては百点満点だ。それ以上の高度な戦術まで求めるってのは……、まあ酷ってもんよ」

「だったら、ルールを変えちゃえばいいじゃん。スニッチをキャッチしたら試合終了で、得点は入らないとか」

「それだと制限時間を設けちゃった方がいいだろ？　シンプルだし、試合も変に長くならなくて済む。けど、それだとシーカーの役目が無くなっちゃう」

「シーカーを無くせばいいんじゃないの？」

「シーカーはクイディッチの花形だぜ？　本来はみんながやりたがるポジションなんだ。それを無くすってのは無理だろ」

ロンとデインはシーカーの存在意義について熱く議論を交わしている。

シエーマスとネビルも物言いたげな視線を彼らにチラチラ向けていた。

けれど、負け試合だったからか、試合中はそこそこ興奮したけれど、ハリーはイマイチ面白さを掴み切れなかった。

◆
五人はその足でハグリッドの小屋を訪れた。

いつものように紅茶を淹れてもらい、ヒツポグリフ達と遊んでいるとセドリックがやって来た。

「やあ、ハグリッド」

「どうやらハグリッドに用があるようだ。」

「どうした?」

「ケトルバーン先生からだよ。実は近くでドラゴンの卵が見つかったらしいんだ」

「ドラゴンの卵!?!」

ハグリッドは飛び上がった。彼が地面に着地した振動でハリー達は立っていられなくなり、それぞれのヒツポグリフに助けってもらった。

「お、落ち着いてくれ。見つけたのはヒツポグリフクラブのメンバーなんだ。いつものように禁じられた森の指定区域で魔法生物の生態調査を行っていたら、ケンタウロスが居たらしくてね。何者かがドラゴンの卵を放置したとかなり怒っていたそうなんだ。だから、一先ずペネロピーは守護霊呪文でケトルバーン先生を呼んだ。そして、先生は卵を回収したんだ。危うくケンタウロスは彼女に矢を向ける所だったらしい……」

「今は連中もピリピリしとるからな……」

生徒がケンタウロスに矢を向けられたと聞くと、ハグリッドは険しい表情を浮かべた。

「うん。それで、ケトルバーン先生はすぐにドラゴンの生息域へ卵を送ろうとしたんだけど……」

「ど、どうしたんだ?」

「どうやら、かなり長い期間ドラゴンの卵にとって最適とは言い難い場所に置かれ続けていたらしい。このままだと生まれる前に死んでしまうかもしれないんだ」

「なんだと!?!」

ハグリッドの怒声に今度はハリー達が飛び上がった。

彼のこんなにも怒りに満ちた声は聞いた事が無かった。

「ハグリッド! 気持ちわかるよ。僕だって、魔法生物の命はかけ

がえのない物だと知っているんだ！ だから、よく聞いて欲しい。ドラゴンを生息域に戻す前に、卵をキッチンと孵化させる必要があるんだ。それをケトルバーン先生はハグリッドに頼みたいと言っていたんだ」

「なんだって!？」

ハグリッドは再び飛び上がった。地面が揺れる前にヒツポグリフ達はハリー達の服をクチバシで摘んで持ち上げた。二度同じ轍は踏ませない。彼らはとても賢い生き物なのだ。

「今はダンブルドア先生が必要な処置を施しているらしいんだ。その後、卵の孵化についてケトルバーン先生と一緒に説明しに来るって言ってたよ。それで、僕は先に準備しておくと言われたんだ。たしか、暖炉があつたよね？」

「ある!!… あるぞ!!」

ハグリッドは慌てたように小屋へ入っていった。

そして、セドリックはポカンとしているハリー達に向けて言った。「そういうわけだから、君達も手伝ってくれないか？ ドラゴンは危険な生物だけど、その孵化に立ち会える事は奇跡みたいなものなんだ！ 君達にとっても極めて素晴らしい経験になると思う！ 先生達には許可を取って来てあるからさ！」

「……さすがだぜ」

ロンは震えていた。

「さすがだぜ、セドリックの兄貴!!」

彼は泣いていた。なにしろ、ドラゴンである。

彼がそれまで黙りこくっていたのは衝撃が強すぎたからだ。

生まれ変わり、多くの魔法や魔法生物を見て来た。それでもドラゴンは格別だ。

多くのファンタジー小説や映画の中でも特別な存在として語られてきた、幻想の頂点。

彼の心は転生を自覚した時のようにキラウエア火山の如く熱く熱く燃え上がっていた。

「うおおおおおおおおお
!!!!!!! とつつあん
!!!!!!!」

彼も小屋の中へ駆け込んでいってしまった。中から二人が狂喜乱舞している声が響き渡る。

「さあ、僕達も入ろう！やる事はいっぱいあるよ！」

セドリツクも瞳をキラキラさせていた。

ハリー達は顔を見合わせながら頷いた。

「ドラゴンに会えるんだ!!」

「すごいすごい!!」

「うおおおお!!」

「わ、わくわくする!!」

ロン達だけではない。ハリー達もドラゴンに興奮を隠しきれなかった。

小屋に入ると、まずは興奮して奇妙な踊りを踊っていたロンとハグリッドを宥め、セドリツクの指揮の下でドラゴンの卵を出迎える準備を行った。

小屋を密封し、暖炉の傍から燃えやすい物を退かし、床や壁に防火呪文を掛けていく。そうしていると小屋の扉をノックする音が響いた。

「ど、どうぞ!!」

慌ててハグリッドが扉を開くと、そこにはケトルバーン先生がいた。

そして、その後ろには白くて長い髭を蓄えた長身の老人が立っていた。

食事の時、遠目に見る事はよくあった。けれど、ここまで間近でその人と会うのはハリー達にとって初めての事だった。

「やあ、ハグリッド。そして、ヒップグリフクラブのみんなもこんにちは」

ホグワーツ魔法魔術学校の校長であるアルバス・ダンブルドアは半月型のメガネの向こうからキラキラしたブルーの瞳を生徒達に向けてニッコリと微笑んだ。

今世紀最も偉大な魔法使いを前にして、ハリー達は恐縮した。

あのロンでさえ、すっかり吞まれたように立ち尽くしている。

それほど、彼の発するオーラは圧倒的だった。それこそ、テレンスの覇気すらも大きく上回る偉大なオーラだった。

第十八話 『アルバス・ダンブルドア』

アルバス・ダンブルドア。

その人の偉大なる歴史を本で読んだ時、オレは震えた。

彼の最も有名な偉業はゲラート・グリンデルバルドとの対決だろう。

ヴォルデモート卿が台頭する以前は彼こそが史上最悪の闇の魔法使いだった。ダンブルドア先生は彼と対決し、勝利した。グリンデルバルドの悪行を調べれば、それが正しく救世であった事が分かる。

他にも未成年魔法使いの制限事項令などの法律関係やドラゴンの血液の12種類の利用法の発見を始めとした研究者としての活躍も目覚ましく、近年ではニコラス・フラメルとの錬金術の共同研究でも成果を上げている。

対してオレはと言えば六十六歳まで生きて、その間に成し遂げられた事はどれもこれも誰かの後追いではなかった。

何か障害があつたわけじゃない。五体満足で生んでもらったし、何不自由なく育ててもらった。大学にも通わせてもらって、最終的には愛想を尽かされたものの海外を飛び回る生活について来てくれる女房とも結婚出来た。

オレという人間を最後まで見限らないでいてくれるダチ公達とも出会えたし、息子はオレに憧れてくれた。

順風満帆だった。坂本玄蔵さかもとけんぞうとしての人生は最初から最後まで幸福だったと確信している。出会った人々全てに感謝もしている。

だけど、悔しくなった。涙が止まらなくなった。

母上は好物の魚の塩焼きを慌てて焼いてくれて、兄上達は泡食いながら本だとかお菓子だとか悪戯グッズだとかを持って来てくれた。

それでも涙を止められなくて、優しくも素敵過ぎる家族を心配させてしまった。

「……………ああ」

人生とは、本来は一度切りのものだ。

だから、オレは何も成し遂げられなかった己の人生とダンブルドア

の華々しい人生を比較してしまった。

あまりにもみみっちい。かつこ悪くて仕方なくて、だから余計に涙が溢れた。

第十八話『アルバス・ダンブルドア』

「……以上がドラゴンの卵を孵化させる為に必要な手順じゃ。何か質問はあるかね？」

ダンブルドア先生はケトルバーン先生と共にドラゴンの孵化について丁寧に教えてくれた。

とても分かりやすかった。話し方が上手いだけじゃない。声のトーンから間の取り方まで完璧で、聞く事にストレスを一切感じさせない。

なにより、話の噛み砕き方が上手だ。十一歳の少年達に最も適した説明の仕方だった。

「ロン、どうしたの？」

「……へ!? え? ど、どうしました!？」

「な、なんか、元氣無さそうだから……。大丈夫?」

心配そうに覗き込んでくるポッターさんの瞳を見て、その向こうに己の情けない表情を見た。

嘗て、女房に言われた言葉が脳裏を過る。

——いつまで経っても大人になれない子供のような人。

的確な言葉だった。

ガキの頃からの性分を捨てられず、夢ばかり追っていた。

馬鹿は死ななきや治らないって言葉があるが、オレの場合は死んでも治らなかつた。

「……ダンブルドア先生。一つ、聞いてもいいですかい?」

「もちろんじゃよ」

ダンブルドア先生は真っ直ぐにオレの目を見てくれた。

「どうやったら、アンタみたいになれますか?」

ポッターさん達は困惑している。

当然だろう。なにしろ、さつきまでの話題との繋がりが全く無い。それでもオレは聞かずにはいられなかつた。

「アンタはどんな思いで……、どんな風に歩んで今のよう……」
誰かに尊敬されたいわけじゃない。
誰かに褒めてもらいたいわけじゃない。
ただ、人生の最後にオレは思った。

—— 情けねえ。

そうやって、自分の人生を嘆いてしまった。
自分の足で歩んできた道のりを自分で否定してしまった。

「ダンブルドア先生！ オレは……、オレは自分の人生に胸を張り
てえんだ!! 誰に否定されても構わねえ!! けど、オレ自身が認めて
やれる男になりてえんだ!!!」

オレの言葉にダンブルドア先生は大きく目を見開いた。
困らせてしまったのだろう。

あまりにも唐突過ぎるし、あまりにもふわふわした質問だ。

けれど、出来る事なら答えて欲しい。だって、オレはこの御人に憧
れてしまった。この御人に理想を見てしまった。

だから——、

「……わたしには答えられぬ」

返って来た言葉には深い悲哀の感情が浮かんでいた。

「え?」

「ミスター・ウィーズリー。なりたい自分というものは人それぞれ違
うものじゃ」

ダンブルドア先生は言った。

「君がわしのようになりたいと思うてくれた事はとても光榮な事
じゃ。けれど、君には君の理想がある筈じゃよ。その理想とわしの姿
は同一のものかね?」

「それは……」

「おそろくは違う筈じゃ」

彼はキツパリと言った。

「何故なら、君は誰かになりたいわけではない。君は君自身になりた
い筈じゃ。だからこそ、君の道は君が選ばなければならぬ。その道標
の一つとしてならば助言は出来よう」

「お、教えてくださいませ!!」

まるで神に救いを求める敬虔な信者のようにオレはダンブルドア先生に縋った。

「足を疎かにしてはならぬ」

ダンブルドア先生はポッターさん達に視線を向けた。

「君には友人がおる。家族がおる。クラブのメンバーやホグワーツの教師がおる。彼ら一人一人が君にとって掛け替えのない存在である事を忘れぬ事じゃ」

「も、もちろんです!! オレは一度だって、ダチ公や恩師を軽んじた事なんざ……」

心外だと叫びながら、オレの脳裏には女房の顔が過ぎった。

振り回してしまった。我慢ばかり強いてしまった。一番大切な存在を蔑ろにしてしまった。

—— 待ってくれ、明子!! 頼む、考え直してくれ!!

気付いた時には遅過ぎた。愛想を尽かされてしまった。

「……肝に銘じます」

改めて、ハッキリと感じた。ダンブルドア先生は本当に偉大な御方だ。

オレが顔を背けて来た一番イタイ所をしっかりと見抜いて、助言してくれたのだ。

「君ならば大丈夫じゃろう」

ダンブルドア先生は言った。

顔を上げて見た彼の表情には、どこか羨望のような表情が浮かんでいる。

「……分からねえ。どうして……」

「君は大切な人を大切に思う事を知っておる。それはなによりも重要で、思いの外忘れやすい事じゃ」

「オレは……、そんな……」

「ロン」

揺れる視界にポッターさんの顔が入り込んで来た。

「ポ、ポッターさん……?」

「僕、ロンが悩んでいたなんて知らなかった」

「いや、悩みつつうか……」

「僕はロンの助けになりたいんだ」

真剣な表情で彼は言った。その言葉が嬉しくて仕方ない。

女房が出て行った時もそうだ。何時だって、何処でだって、オレはダチ公に支えられて来た。

「ポッターさん……。ああ、あああああああああああああああああ
あああ!!!」

涙が溢れ出して止まらねえ。

こんなオレを心配してくれるポッターさんの優しさと心意気が胸を満たしていく。

「ロ、ロン!？」

「オレは……、オレはなんて恵まれているんだ!!」

オレは一度死んで、ロナルド・ウィーズリーとして生まれ変わった。そして、愛情豊かな両親と素敵過ぎる兄弟達を得た。

ホグワーツでもオレは出会いに恵まれた。

質問する度に笑顔で教えてくれる先生達。オレの不躺な質問にも真剣に答えてくれる校長先生。そして、心配だと言ってくれるダチ公。

「そうだ!! そうだぜ!! 忘れちゃいけない、一番大事な事だぜ!!!」

ありがとう、ダンブルドア先生!!!」

オレはダンブルドア先生の手を両手で握り締めた。

「なつてやるぜ!! なつてみせるぜ!!! なりたい自分に!!!」

誰も知らない未知に出逢いたい。その夢は生まれ変わった時点で叶っていた。けれど、満足できなかつた。

その理由が今分かつた。

満足出来なくて当たり前だ。オレはオレ自身の本当の望みを分かっていた。なかつた。

「ポッターさん!!」

「う、うん?」

「ネビル!!」

「は、はい！」

「シエーマス!!」

「お、おう!？」

「デーン!!」

「な、なに!？」

「とつつあん!!」

「お、おう！」

「校長先生!!」

「うむ」

オレはここに宣言する。

「冒険するんだ!! 誰も見たことのない世界をみんなで!!」

一人で出逢いたかつたんじやない。

みんなと一緒に出逢いたかつたんだ。

「そうだ、そうなんだ!! ワクワクとドキドキはみんなに分かち合うものなんだ!!」

オレは暖炉の炎の中に鎮座しているドラゴンの卵の下へ向かった。
「クカカカカカカカカカカカカカカカッ!!! まずドラゴンだぜ!! 元気がいっぱい生まれてくれよ!! オレ達は待ってるぜ!! お前さんとの出逢いを!!」

ドラゴンの卵の孵化には母竜が吐息を吹きかけるように炎を浴びせ続ける必要があるらしい。

だから、常に暖炉の炎の中に置き、時折火吹き棒で炎をかき混ぜてやらなければいけない。

オレは思いつきり息を送り込んだ。

「……よく分からないけど」

シエーマスも火吹き棒を手にとった。

「とりあえず、ドラゴンをみんなで頑張つて孵そうって事だよね?」
「おうともよ!!」

オレ達は代わり番こに炎をかき混ぜた。

◆
ドラゴンの卵を世話する子供達を眺めながらダンブルドアは目を

細めた。

—— オレは自分の人生に胸を張りてえんだ!! 誰に否定されても構わねえ!! けど、オレ自身が認めてやれる男になりてえんだ!!!

その言葉は彼の心を深く抉るものだった。

何故なら、ロンが答えを求めて縋った相手こそが最も自分を軽蔑している人間だったからだ。

多くの名も知らぬ相手から肯定されても、彼自身が己の人生に胸を張る事はない。自分自身を認める事はない。

だからこそ、答えられなかった。

「……素晴らしい夢じゃな」

久しく抱いていなかった感情が心の奥底に灯った。それはロンが彼に抱いていたものと同質のもの。

自分の為に生きる。それは聞きようによっては批難を受けかねない生き方だ。けれど、自分の為に生きられない者がどうして他者の為に生きられるというのか。

—— より大きな善のために。

その言葉をどこか抛り所のようにしながら生きて来た。

自分の為に生きるには、あまりにも多くの過ちを犯し過ぎた。

「君ならばきつと……」

自分の為に生きる。それは、あるいはヴォルデモート卿という邪悪と同じ思想だ。

けれど、彼には分かち合う事を尊ぶ心がある。その心がある限り、彼は——。

第十九話 『クリスマス』

季節が移り変わり、クリスマス休暇が近付いて来た。

朝が来ると真っ先にロンが起きて、みんなを叩き起こす。

大広間で朝食を食べた後は中庭で腹ごなしのサッカーをする事が日課になっていた。

最初はルームメイトの五人だけで岩を変身させたサッカーボールを蹴って遊んでいたのだけど、いつからか他のマグル生まれの子達も集まり始めてキチンとした試合をするようになっていた。

ゴールポストはハグリッドに作ってもらった骨組みに上級生が変身術を使って拵えている。

最近では純粋な魔法族の子も物珍しさから参加するようになっていた。

「ジャステイン！ パス！」

「オーケー、アーニー！ 行くぞ、グリフィンドール！」

「来い！ 返り討ちにしてやるぜ！」

「行くよ、ロン！」

ハッフルパフのアーニー・マクミランとジャステイン・フィンチⅡフレッチリーはすっかり常連になっている。

彼らが集めたハッフルパフチームとロン達が集めたグリフィンドールチームの試合成績は五分五分状態だ。

夢中になって時間を忘れてしているとハーマイオニー・グレンジャーが叱りに来る。

おかげで遅刻しないで済んでいるのでロン達は彼女に感謝していた。

「先生！ 飛行に箒を使うようになったのはどうしてですか!？」

授業では質問が飛び交い、生徒達の集中力の高さに先生達も気合を入れている。

『それはマグルの視点から見ても家にあつておかしくないものだからです。これはもう少し先の授業で説明する内容なのですが、嘗て魔女狩りというものがありません。魔法族が魔法族らしく生きられない

い時代があつたのですよ』

魔法史の授業はグリフィンドールの一年生にとって人気の科目だ。
なにしろ、話が面白い。

時々、談話室では歴史上の英雄の中で誰が一番カッコいいかの議論が行われている。

ロンの一押しは日本という国のスサノオという英雄。なんでも、ヤマタノオロチというドラゴンと戦った事があるそうだ。

他にもアーサー王が一番だと言う子もいれば、クー・フリーンこそ英雄の中の英雄と言う子もいるし、ベオウルフ王の伝説を熱く語る子もいる。

ハリーも歴史に興味を抱くようになり、グリフィンドール寮の名前の元となったゴドリック・グリフィンドールという人の事が気になっている。

その事をハグリッドに言うと、なんとハリーの生まれ故郷がゴドリックの谷という名称である事が判明した。その事でますますゴドリックに対する興味を強めている。

「レイヴン!! 今日もかつこいいぜ!!」

「バックビーク、会いに来たよ!!」

放課後はヒップグリフ達の下へ駆け付けている。

最近は週末だけでは物足りなく感じるようになっていたのだ。

ハグリッドは牧場そのものを移設して、ロン達がヒップグリフに会いに来やすくしてくれた。

「ハグリッド、ドラゴンの卵はどう?」

相変わらず、ハグリッドの小屋は煉獄のように暑い。

人が暮らせる温度ではないと思うけれど、ハグリッドはドラゴンの卵の為に耐え忍んでいる。

その愛の深さにロンは常々感動し、彼を褒め称えている。

「あら、こんばんは」

ドラゴンの卵の世話はハグリッドやロン達だけの仕事ではない。

そもそもセドリックはヒップグリフクラブの活動としてハグリッドの手伝いをダンブルドア先生に許可してもらったのだ。

だから、他のヒツポグリフクラブのメンバーが来る事もある。ペネロピー・クリアウオーターはその内の一人だ。彼女はロンの兄であるパーシーのガールフレンドでもある為、パーシーと一緒にいる事もある。

彼女は卵の発見者でもあり、殊更にドラゴンの卵を気にかけている。

「さーて、帰って宿題をやらないとですねー！」

「うん」

「うへー……」

「今日もどっさり出たもんね」

空が真っ暗になる前に寮に戻ったら勉強タイムのスタート。

魔法薬学と変身術は特に宿題が多く、終わった頃にはヘトヘトだ。

そんな風に平日を忙しく過ごし、週末にはヒツポグリフクラブの活動やドラゴンクラブとの合同訓練に参加して汗を流す。

忙しくても充実した日々を彼らは送っていた。

第十九話『クリスマス』

クリスマス休暇の前日、ハリーはトランクに荷物を詰めていた。

「準備出来ましたかい？」

「うん。なんとかね」

明日からクリスマス休暇に入る。ホグワーツに来てからの初めての長期休暇だ。

希望者はホグワーツに残る事も可能だと聞いたけれど、ハリーはロンの誘いを受ける事にした。

——ゴドリツクの谷に行ってみませんか？

ゴドリツクの谷がハリーの生まれ故郷だと聞いて、ロンはゴドリツクの谷への旅行計画を打ち立てた。

彼の両親はルーマニアに住んでいる次男のチャリーに会いに行っているらしく、家は空っぽらしい。

一日目はロンの家に泊まり、それからゴドリツクの谷へ向かう予定だ。

どうやらマグルの交通機関を乗り継いで行くつもりらしい。

「しっかし、なるほどな。魔法界とマグル界では同じ場所でも名前が違うんですね」

ロンは二種類の地図を見比べながら言った。

ゴドリツクの谷は魔法界での呼び名であり、マグル界では別の名前と呼ばれているらしい。

電車とバスを乗り継げば半日程で到着出来るだろうとの事だ。

「故郷かあ……」

そこに両親と過ごした家がある。

「考えた事もなかったな」

もしも両親が生きていたら、今もそこで暮らしていたのかもしれない。

ダーズリーに虐げられる事もなく、優しいパパとママに愛されながら生きていたのかもしれない。

「ポッターさん」

ロンはハリーの頭を優しく撫でた。

「オレはポッターさんの親にはなれねえ。恋人にもなれねえ。子供にもなれねえ」

当たり前な事を彼は言う。

「だけど、オレ達はダチ公だ!! アンタを寂しがらせたりはしないぜ!! 辛い事があつたら支えます!! 悲しい事があつたら慰めます!!

楽しい事があつたら一緒に笑います!!」

彼はまっすぐにハリーの目を見て言った。

「アンタは一人じゃねえ!! 一人にはさせねえ!! 絶対にな!!!」

「ロン……」

最初は苦手だった彼の圧が今はとても心地よく感じる。

穴の空いたバケツだって、滝の中に突っ込めば中身を満たされ続けるものだ。

「ありがとう、ロン」

両親を想うとチクリと胸が痛んだけれど、今はもう痛くない。

◆ クリスマス休暇で帰郷する生徒は煙突飛行ネットワークによって

各々の家、もしくはは漏れ鍋へ移動する事になっている。

ハリーは暖炉の向こうへ次々に消えていく生徒達の姿を見て目を丸くしていた。

「いいですかい？ 隠れ穴です。大きな声を出す必要はありませんが、しつかりと口を開けてハキハキと発音して下さい。発音を間違えるととんでもない所へ移動しちまう事もあるそうなんでね」

「わ、わかったよ」

ちなみにゴドリツクの谷へ向かうのはロンとハリーだけだ。だから、隠れ穴に向かうのも二人だけだった。

フレッドとジョージ、パーシーはホグワーツに残るらしい。

パーシーは二人にドツサリと防犯グッズを渡した。

——— いかい？ ロンなら大丈夫だと思うけど、危ない目に遭いそうになったら防犯グッズを使うんだよ？ 最悪、魔法を使ってもいい。よく勘違いしている人がいるけれど、未成年魔法使いの制限事項令でも緊急避難は認められているんだ。だから、使うべき時には躊躇わずに使うんだ。いいね？

そう言つて、いろいろなアドバイスをくれた。

フレッドとジョージは頑固者だとか、堅物だとか言うけれど、何だかんだでハリーとロンの二人旅を認めてくれる辺り、かなりの柔軟さだとハリーは思った。

ロンによれば、パーシーは家族の中で一番迷惑と心配を掛けさせてしまっている相手であり、一番信頼してくれている人でもあるらしい。

「よし、次はオレ達だ！ 行きますぜ、ポッターさん！」

「うん！」

先にロンが暖炉に入り、その後にハリーが続いた。

「隠れ穴！」

叫ぶと共に世界が目まぐるしく変貌していく。

まるで渦の中にいるようだ。そして、徐々に風景が定まっていく。その先にはロンがいた。

「ようこそ、ポッターさん！ 我が家へ！」

両手を広げて歓迎してくれるロンを見て、ハリーは意を決して炎の外に踏み出した。

「どうですか？ 我が家は！ 素敵でしょう！」

「……うん。とつても」

ハリーは家の中をキョロキョロと眺めた。

ダーズリーの家とは比較にならない。

「とつても素敵だよ」

ハリーはロンに隠れ穴を案内してもらった。

ロンの部屋には本がどつきり並んでいて、斜めになつて天井にはチャドリーキャノンズの選手のポスターが貼り付けられている。

お風呂場はとても広く、トイレは逆に狭かった。

最後にキッチンへ向かうと、ロンは鮭や野菜をまな板の上に並べた。

「あんまり得意ってわけじゃねーんですが、今日はオレの手料理を振る舞わせてもらいますよ！」

そう言つて、ロンは鮭に塩コショウを振るとバターを乗せ、キノコや玉ねぎなどと一緒にアルミホイルで包み込んで焼き始めた。

「そのアルミホイルも魔法界の物なの？」

「いや、近所のマグルのスーパーで買ったもんですよ。後で夕飯の材料を買いに行きましょうや」

「うん」

ロンが作ってくれた鮭のホイル焼きは絶品だった。

「美味しい、早い、手軽！ しかも、栄養たっぷりと来たもんだ！ まったく、ホイル焼きを考えた人は偉大だぜ！」

「美味しいよ、ロン！」

「へっへー！」

ホグワーツの料理も美味しかったけれど、このホイル焼きはそれ以上に美味しく感じた。

それはロンがハリーの為に作ってくれた料理だったからだ。

ハリーは不思議な気分浸っていた。

ロンは同じ年なのに、どうしてか年上のように感じてしまう。暖か

くて、大きい、不思議な存在感を彼は持っていた。

「よーし！ 腹ごなしに庭小人退治といきますか！」

「庭小人？」

ササツと食器を片付けると、ロンはハリーを庭先に案内した。

そこには丸々と太った鶏がいて、ハリー達を見るとトウイートウイートウイーと鳴いた。

「よう、鉄平！ 小五郎！ 慎二！」

「な、なに？」

ハリーはギョツとした。

「そいつらの名前ですよ！ オレが名付けました！」

「ふ、不思議な名前だね」

ハリーは言葉をオブラートに包んだ。

「へへっ、大事なダチ公なんですぜ」

そう言って、ロンは鶏達に笑いかけた。

「世話はどうするの？ 僕達も明日から居なくなっちゃうし、他の家族も家を空けてるんでしょ？」

「問題ありませんよ。鉄平達は自分で餌を取りますからね。逞しい奴らなんですよ」

「そうなんだ」

鉄平達は庭を爆走し始めた。元気いっぱいだ。

「さーて、こいつだ」

ロンは足元から何かをつまみ上げた。

「な、なに!？」

「庭小人ですよ、ポッターさん」

それは醜い小人だった。

「放せ！ 放しやがれてんだ！」

喋っている。ハリーは気味が悪くなった。

「定期的に駆除しねえと家の中に勝手に棲家を作っちゃうんです。なんで、こうやって」

なんと、ロンは庭小人の足を掴むとブンブン振り回し始めた。

「ぎゃああああああああ!!! たずけてくれええええええ!!!」

「ちよつと!？」

ハリーはあまりにもショッキングな光景に目を見開いた。

「それで、こうするんでさー!」

そう言つて、ロンは庭小人を遙か彼方へぶつ飛ばしてしまった。

「あ、あれ、ど、どうなったの!?!」

ハリーは庭小人が心配になった。

「^{やつこ}奴さん達は頑丈だから心配御無用ですよ。こうやつて目を回させてぶつ飛ばす事で戻つてこれないようにするんでさ。ほら、ポッターさんもやつてみましょうや!」

「ええ……」

ハリーはあまりにも残酷な仕打ちではないかと近くの庭小人に同情の眼差しを向けている。

そんな彼にロンは「はい、どうぞ!」と笑顔で庭小人を渡した。

「放せ!! この悪魔!!」

キーキー声で叫び続ける庭小人をハリーは恐る恐る振り回した。

そして、そつと投げた。

「ひぎやああああああ!!」

悲鳴が響き渡る。ハリーはゾクツとした。

「も、もう一回」

庭小人投げの弾に不自由する事はなかった。

なにしろ、彼らは仲間が投げ飛ばされる様を見物しにわざわざ近づいてくるのだ。

悲鳴を上げる庭小人を投げ、それを見物しに来た間抜けを掴み上げ、また投げる。

ハリーは段々楽しくなつて来た。ロンと一緒にどちらがより遠くまで飛ばせるか競争し、彼は見事15メートルも飛ばしてロンに勝利した。

「オレも最初はドン引きしたもんですがね。連中、直ぐに戻つてくるんですよ。それで、定期的に駆除を繰り返してる内に同情する気も失せてきちまりました。だって、あいつら仲間が投げ飛ばされてるの見て大喜びしてるし……」

仲間の悲鳴を喜ぶ姿がハリー達の同情心を削る最たる理由だった。おまけに途中で木の柵に激突してもピンピンしている。以前、フレッドが岩に叩きつけてしまった事があったそうだけど、それでもケロッとしていたというのだから相当なタフネスだ。

夢中になって庭小人を投げっていたら日が傾き始め、二人は近くのマグルのスーパーへ向かった。

「ロン、オシャレだね」

二人はマグルの服に着替えていた。

ロンは赤いワイシャツに黒いジャケットという普通なら奇抜過ぎる忌避される組み合わせを見事に着こなしている。

「男はカッコつけてなんぼですからねえ！　そう言うポッターさんもバツチリ決まってますよ！」

ハリーもロンが用意した服を着ていた。

元々持っていた服はダドリーのおさがりでダボダボなものばかりだったからだ。

白いシャツに紺色のカーディガンという組み合わせで、ハリーにとっても似合っていた。

「へへっ、クリスマスと言えばチキンですぜ！」

「あつ、ケーキも売ってるね」

「あれも買いましょー！」

ロンは軍資金があるから遠慮は無用とハリーに買いたい物を好きなだけ選ばせた。

それはハリーにとって初めての体験だった。

「ポッターさん、魚は好きですかい？」

「うん！　とっても！」

「よーし、これも買いだな！」

帰り道ではすっかり大荷物になってしまい、二人はよろけながら隠れ穴に戻った。

ロンが蠟燭や飾りを持って来て、二人でリビングを彩り、それから手分けをしながらデイナーの準備をした。

ロンはCDコンポを持っていて、それでクリスマスソングを流し

た。

「父上はマグルの道具に興味津々なんですよ。それで、倉庫にはマグルの道具がギッシリ詰まってるんです。そいつを修理しましてね」

ロンは本当に多才だとハリーは感心した。

CDコンポの修理なんて、ハリーには到底出来そうになかったからだ。

「うーん、美味そうですね！ポッターさんが料理上手で良かった！さすがですよ、ポッターさん!!」

「……へへっ」

ハリーは初めて自分に料理を仕込んでくれたペチュニアに感謝した。

怒鳴られて、時には折檻を受けながら学んだ料理の技術をロンに美味しいと言ってもらえた事で少し報われた気がした。

それから二人は夜遅くまで騒ぎ続けた。

最後にはクタクタになって、ロンの部屋で同じ布団に入った。

「おやすみなさい、ポッターさん」

「おやすみ、ロン」

クリスマスがこんなにも楽しいものだったなんて知らなかった。

ハリーは幸せだった。

明日は故郷へ向かう事になっている。そこには両親の墓地もあるとハグリッドが言っていた。

不安が無いと言えばウソになる。墓を見てしまったら、否応にも両親の死を直視する事になるからだ。

だけど、隣にはロンがいてくれる。だから、きつと大丈夫。

「……パパ、ママ」

顔も知らない両親。彼らを想いながら、ハリーは瞼を閉じた。

第二十話 『ゴドリツクの谷』

クリスマスの朝、目を覚ましてリビングへ向かうと山のようなプレゼントが置かれていた。

「す、すごいね!？」

「いや、こいつはおでれえた! フクロウ達、頑張りましたね」

「あつ、フクロウが置いたんだ」

大小様々な箱が整然と並べられている。

「こっちはポッターさんのですね」

「僕の!？」

それは山の半分程もあった。一番上の包みを取り上げてみると、そこには『ハリーへ ハグリッドより』と走り書きがしてあった。

中には荒削りな木の横笛が入っていて、試しに吹いてみるとフクロウの鳴き声のような音がした。

次の包みはとても小さくて、メモが入っていた。

「えっと、『お前の言付けを受け取った。クリスマスプレゼントを同封する。バーノンおじさんとペチュニアおばさんより』……」

メモの下には50ペンス硬貨がセロハンテープで貼り付けてあった。

ハリーの目は死んだ。

「……ポッターさん」

ロンが心配そうな視線を向けると、ハリーはメモをポケットに乱暴に入れて他の包みを掴んだ。

「つ、次のは何かな!」

「おつ、そいつはオレからのですね」

「え!？」

確かに、包みにはロンの名前があった。慌てて開いてみると、そこには一冊のアルバムが入っていた。

アルバムを開くと、ハリーは大きく目を見開いた。

「ロ、ロン……。この人達って……」

声を震わせながらハリーは食い入るように中の写真を見つめてい

る。

「ジェームズ・ポッターさん。そして、リリー・エバンズ・ポッターさん。ええ、あなたの御両親です」

「僕のパパと……、ママ……」

生まれて始めて顔を見た。

最初の一枚は二人が赤ん坊を抱いている写真だ。

二人共幸せいっぱいという顔をしている。先にどんな未来が待ち受けているかも知らないで、愛情いっぱいの笑顔を赤ん坊に向けている。

「パパ……。ママ……」

ハリーは涙を溢れさせながら写真を見つめ続けた。

第二十話『ゴドリツクの谷』

電車を乗り継ぐ事三時間あまり、窓の外には地平線まで広がる草原が延々と続いていた。

「暇だね……」

「電車の旅つてのはこういうもんですよ。こういう暇な時間つても、案外悪くないもんですぜ？」

ロンは欠伸を噛み殺しながら外の風景を見つめている。

ハリーも最初は楽しかったけれど、いい加減飽きてきていた。

「また、トランプでもしますか？」

「うん」

駅で暇つぶしの為に買ったトランプだけど、二人だけだと遊べるゲームも限られている。

だけど、ボーツと外を眺めているだけよりは幾分か暇をつぶせた。

電車を降りると、今度はバスでの移動になった。そのバスも途中までで終点になってしまい、そこから先は徒歩だった。

「よつとー」

「ほっほっ」

石を蹴りながら殺風景な道を歩いていく。

「ホッグホッグホッグホッグホッグホッグホッグワーツ！」

ホグワーツの校歌を歌ったり、

「ジングルベル！ ジングルベル！」

クリスマスソングを口ずさんだり、

「お腹空いたね」

「じゃあ、弁当タイムといきますか！」

草原にレジャーシートを敷いてお弁当を食べたり、二人は旅を満喫した。

やがて、空が茜色に染まり始めた頃、漸く目的地が見えてきた。

「やっと着きましたね」

「まる半日掛かったね……」

二人はヘトヘトだった。長旅だったし、おまけに途中から雪道に変わっていたからだ。

ゴドリツクの谷にはマグルの姿もあり、立ち並ぶ家々の中にはイルミネーションで飾られたものもあった。

「ここがゴドリツクの谷なんだ……」

ハリーは見覚えのある家があるのではないかとキョロキョロしながら歩いた。

けれど、一つも記憶に残っている光景は無かった。

当たり前の話だ。なにしろ、彼がこの地を去る事になったのは一歳の時の事なのだから。

「教会だ。これはクリスマスキャロルですね」

ゴドリツクの谷には教会もあった。そこから流れてくるピアノの音色からロンは曲名を探り当てた。

更に進んでいくと広場に出た。そこには戦争記念碑があり、二人が近づくと形を変えた。

「これ……」

そこには三人の像が建っていた。

くしゃくしゃな髪の毛のメガネの男性と髪の毛の長い優しく美しい女性。そして、母親に抱かれた小さな赤ん坊。

彼らは何者なのか、ロンに貰ったアルバムを見た後だったから直ぐに分かった。

石で出来た自分の像を見るのは不思議な気分だった。

「ポッターさん」

ロンはハリーの肩を抱きながら像の見つめる先を指差した。

「あそこにあなたの家があります」

「僕の……？」

ロンはかなり詳しく調べていたらしい。

迷う事なく進んでいき、ハリーを生家へ案内した。

伸び放題の生け垣や腰まで伸びた雑草の中に瓦礫が散らばっている。

そして、その向こうには黒ずんだ蔦と雪に包まれた家があった。一番上の階の右側だけが吹き飛んでいるけれど、家の大部分は当時のままだった。

「僕の家……」

「さよう。君が生まれた家じゃ」

「え？」

ハリーはビツクリして振り返った。

すると、そこには予想外の人物が立っていた。

「ダ、ダンブルドア先生!」

ロンも目を白黒させている。

「ど、どうして、ここに？」

「ここはわしの故郷でもあるからじゃよ」

ダンブルドア先生は言った。

「それよりも見てごらん」

彼はポッター邸を指差した。

すると、目の前のイラクサや雑草の中から桁外れに成長の早い花のように木の掲示板が現れた。

そこには金色の文字が刻まれている。

1981年10月31日、この場所でリリーとジェームズ・ポッターが命を落とした。

息子のハリーは死の呪いアバダ・ケダブラを受けて生き残った唯一の魔法使いである。

マグルの目には見えないこの家はポッター家の記念碑として、更に

家族を引き裂いた暴力を忘れない為に廃墟のまま保存されている。

整然と書かれた文字の周りには生き残った男の子の逃れた場所をひと目見ようとやって来た魔法使いや魔女の落書きが残っていた。

単純に名前のイニシャルを書いたものや『ハリー、今どこにいるか知らないけれど幸運を祈るわ』だとか、『ハリー・ポッターよ、永遠なれ』といった文章もある。

「1981年の10月31日……。その日にパパとママは……」

「ポッターさん……」

ロンはハリーの肩を抱き、ハンカチで彼の涙を拭った。

「中に入っても大丈夫でしょうか?」

ロンはダンブルドア先生に尋ねた。

「もちろんじゃよ。この家の持ち主は他ならぬハリーなのじゃから」

ハリーはロンに縋りながら自らの生家へ足を踏み入れた。

埃は一つも落ちていない。恐らくは魔法を掛けられているのだろう。

そのせいか、まるでついさつきまで誰かが生活していたような空気が残っていた。

「……パパ、ママ」

ハリーの顔はくしゃくしゃになっていた。キッチンを見て、そこに母の幻影を見た。書斎を見て、父の幻影を見た。赤ん坊用のオモチャが置かれている部屋を見て、家族の団欒の幻影を見た。

悲しみで頭がおかしくなりそうだった。

「なんで……。どうして……」

ふらふらと階段を登っていく。

そして、吹き飛ばされた壁と壊れた赤ん坊用のベッドを見た。

床には傷が幾つもあり、そこが惨劇の場所であった事を悟った。

「ああああああああああああああああああああ!!!」

ハリーは泣き叫んだ。

ロンは彼を抱き締めた。何も語らず、ひたすらに彼の頭を撫で続けた。

そして、ダンブルドア先生は彼らをジッと見つめていた。

◆
ポッター邸を後にして、三人は教会へ赴いた。

その墓地には多くの魔法使い達が眠っていて、その一部はゴーストとして周囲を漂っている。

「ママやパパはいないの……？」

「二人はゴーストにならなかったのじゃ」

ダンブルドア先生の言葉に消沈したハリーの手を引いて、ロンはポッター夫妻の墓を探した。

そして、先にダンブルドアの名前を見つけた。

「これは……、ダンブルドア先生の？」

「母と妹の墓じゃよ」

「随分とお若い頃に亡くなったんですね……」

ロンはアリアナという少女の没年を見て呟いた。

「……ジエームズとリリーの墓はその二列後ろじゃよ」

ダンブルドア先生の言葉通り、そこには夫妻の墓があった。

その墓には奇妙な文字が刻まれていた。

最後の敵^{いやはて}なる死もまた亡ぼされん。

ハリーには何の事だか分からなかった。

「……ダンブルドア先生もお墓参りに来ていたんですか？」

ハリーが尋ねると、ダンブルドア先生は頷いた。

「良い機会じゃったよ。あまり……、来てあげられなかったものでね」

ダンブルドア先生は母と妹の墓を見つめていた。

お墓参りを終えた後、ロンはテントを取り出したけれどダンブルド

ア先生が隠れ穴まで送ってくれる事になった。

「旅の思い出を台無しにするように申し訳ないのじゃが、教育者として子供二人の未知の場所でのキャンプは見逃す事が出来ぬのじゃよ。

誠に申し訳ない」

そう言われてしまえばイヤとは言えない。

そもそも、別にテントで寝泊まりしたいとも特に思っていなかった。ただ、バスや電車がとつくに止まっている時間だったからだ。

「ハリー。君にこれを返そうと思う」

「これは……？」

ダンブルドア先生は最後に包みをハリーに渡した。中身は薄い布のようなものだった。

「透明マントというもののじゃ。君のお父上の物をわしが長らく借りていてのう。漸く持ち主に返す事が出来たよ」

その布はとても不思議な物だった。透明マントを被ると、なんとハリーの姿は完全に消えてしまったのだ。

とても凄い物だ。だけど、それ以上に父の形見である事がハリーの心を揺らした。

「あ、あの、ありがとうございます！ 校長先生！」

その言葉にダンブルドア先生はどうしてか瞳を揺らした。

「また、学校で会おう。メリー・クリスマス」

「メリー・クリスマス！ ダンブルドア先生！」

「メリー・クリスマス！ ダンブルドア先生！」

ダンブルドアが去ると、二人は昨日買った料理の材料で慌てて夕飯を作った。

食べながら、ハリーはまた泣いた。お風呂に入っている時も泣いた。眠ろうと布団に入った時も泣いた。

そして、その度にロンは彼の頭を撫でて慰めた。

ハリーが眠った後、ロンは窓の向こうの月を見た。

「……オレに出来る事なんぞ、この程度よ！」

ロンは悔しくて堪らなかった。

今のハリーには心が必要だ。それを十分に与えてやれているとは思えなかった。

不甲斐ない。

「ポッターさん。アンタは凄い御人だ。あの掲示板！ 隅から隅まで文字が刻まれていた！ あれを書いた人達だけじゃねえ!! 数え切れないくらい、大勢の人がアンタという存在に救われて来たんだ!!!」

ロンは叫んだ。

「希望だ!! アンタは希望の光を人々に与えたんだ!! そんなの、ア

ンタは与えた気なんてねえかもしれない!! けど、救われた人が実際大勢いるんだよ!! そんなアンタが悲しみを抱くなんて、オレは我慢出来ないぜ!!! 幸せになつてくれ、ポッターさん!! オレは……、オレはよお!!! その為ならなんだってするぜ!!! アンタの希望になつてみせるぜ!!!」

「……わ、分かったから、もうちよつとポリューム下げてよ」

「ポッターさん!? なんてこった!!! 起こしちゃまったのかい!?!」

「そりや……、うん。と、とにかく、もう寝ようよ」

「は、はい!」

漸く黙ったロンを横目でチラリと見つめると、ハリーは布団の中に潜った。そして、笑顔を浮かべた。

もう、悲しい気持ちは消し飛んでいた。

十分に泣いて、十分過ぎる心を貰ったからだ。

「……ありがとう、ロン」

ハリーはとても幸せな気分で眠った。

第二十一話 『禁じられた選択』

クイリナス・クイレルは岐路に立たされていた。
姿なき声が問う。

『……俺様は驚いている。何に驚いている？ お前には分かるか？
なあ、クイリナスよ』

クイレルは震えるばかりだった。

『己の慈悲深さにだ』

声は言う。

『貴様が俺様を何度失望させたと思う？』

脳裏に直接響き渡る冷徹な声にクイレルは喘ぐばかりだ。

『一度や二度ではない。けれど、俺様はその度に貴様を許した。そして、チャンスを与えて来た』

『……わ、わたしは』

『クイリナス。なあ、クイリナスよ。ヴォルデモート卿の不興を買った者は必死になるべきだと思わぬか？ 失墜した信用を回復する為に懸命になるべきだと、そうは思わぬのか？ なあ、クイリナス』

「お、思います」

『ならば、どうして貴様は部屋に閉じ籠もっているのだ？ ハリー・ポッターがゴドリックの谷へ向かった。付き添っている者は無力な子供が一人だけ。加えて、貴様がこれまで無為に時を過ごしていた事が功を奏し、アルバス・ダンブルドアは賢者の石よりも小僧の身の安全を優先した。今が絶好の好機なのだぞ。今ならば、わざわざトロールを引き込む必要もない。生徒に被害が及ぶ可能性はゼロに等しい。それでも、貴様は俺様の期待をまたも裏切る気なのか？』

「そ、そうでは……、そうではございません」

『クイリナス。お前はもう少し考えるべきだ。何故、俺様が貴様に対してこれほどまでに寛大なのかを。お前を依代としているからか？ お前に頼る事しか出来ない無力な存在だからか？』

「いいえ……、いいえ、違います。貴方様は決して無力などでは……」

『ならば、何故だ？』

「……わかりません」

クイレルには分からなかった。

本来ならば、グリーンゴツツではハグリッドに先を越されてしまった時に始末されても不思議ではなかった。

トロールを招き入れる事を拒絶した時も、ドラゴンの卵を捨てた時も、クイレルはヴォルデモート卿の逆鱗に触れた筈だった。

けれど、彼は生きている。

『……俺様は貴様を認めているからだ』

その言葉に胸が苦しくなった。

『貴様が俺様の前に現れた時、どれほどの衝撃を受けたか分かるか？

配下であった死喰い人も、あのダンブルドアでさえも俺様の居所を掴む事は出来なかったのだ。それなのに、貴様はどうだ？ 確固たる忠誠心があるわけでもなく、気高き使命感があるわけでもなく、ただ他者に認められたいという欲望の為だけに俺様を見つけ出した。貴様が特別な存在なのだ、俺様はすぐに気がついたぞ。貴様を笑った者達や認めなかった者達とはんだ節穴だと笑いそうになった程に』
涙が滴り落ちる。

『頭脳だけではない。貴様は優れた魔法使いでもあった。その魔法力は群を抜いている。嘗ての配下の中で貴様と並ぶ者は一人としていなかった』

声は語りかける。

『だが、それ以上に俺様を寛大にさせた理由がある。それは貴様の忠誠心だ』

『我が君……』

『貴様は生徒の為に俺様の命令を拒絶するが、俺様を拒絶する事はない』

『もちろんでございます……。わたしを認めてくれた御方。わたくしの御主人様……』

『クイリナスよ。俺様の為に立ち上がるのだ。俺様の期待に応えるのだ！ 貴様が見事役割を全うし、俺様が復活した暁には貴様を Hogwarts の校長にしてやろう。生徒には手を出さぬとも誓おう』

「ああ……、御主人様」

クイリナスの心はグチャグチャにかき乱されていた。

ユニコーンの血を口にした事による呪詛、ヴォルデモート卿に対する忠誠、正義に背を向けた事に対する負い目、教師としての誇りと喜び。

一つ一つの感情が極まっていた。

だからこそ、ヴォルデモート卿が囁く甘言は彼の心に深く深く染み渡った。

「御主人様……。ああ、御主人様……」

ヴォルデモート卿が意図していた以上に……。

第二十一話『禁じられた選択』

クイレルは禁じられた廊下の前に立った。

「待て」

その背後にはセブルス・スネイプの姿があった。

「……なんだね？ セブルス」

どもる演技を止め、クイレルは冷たい視線を彼に向けた。

「貴様、やはり……」

杖を構え、スネイプは険しい表情を浮かべている。

「やめたまえ。君とわたしでは勝負にならない」

「大した自信だな」

「自信ではないよ。これは確信だ」

そう言うと、クイレルは杖を握っていない手をスネイプに向けた。

杖に意識を向けていたスネイプの思考が刹那の瞬間乱され、向けられた掌から放たれたフリペンドを回避する為に必要以上に動いてしまった。

その回避の仕方と方向はクイレルの狙い通りだった。

既に向けていた杖から真紅の呪文が飛び出し、スネイプの体を大きく吹き飛ばした。

「ほら、言った通りだろう。御主人様に認められたわたしは君よりも優れた魔法使いなのだよ」

「貴様……」

失神呪文を受けて尚も意識を保つスネイプの精神力にクイレルは称賛の笑みを浮かべる。

「君は思ったよりも真つ直ぐなんだね、セブルス。そういう姿を生徒に見せれば、もっと親しみやすい先生になれると思うよ」

「ほごくなー!」

スネイプは杖を振り上げた。けれど、その前にクイレルの杖なし呪文が彼の体を跳ね飛ばした。

「おやすみ、セブルス。ペトリフィカス・トタルス」

クイレルは石化の呪文を掛け、スネイプを完全に沈黙させた。

「さあ、参りましょう」

扉を開く。その先には三つの頭を持った犬がいた。

ケルベロス。冥界の番犬という異名を持つギリシャの魔法生物だ。

「まったく……。学校に連れて来ていいペットではないと思うのだがね」

ケルベロスに魔法は効かない。死の呪文さえ届かない。

「わたしの目的の為、死んでもらうぞー! ケルベロスよ!」

クイレルは杖を振り上げる。その先からは紅蓮の炎が吹き出した。

「エクスベクト・ファイエンド悪霊よ、来たれ!!」

それは悪霊の火と呼ばれる闇の魔術の奥義。

死の呪文は肉体を殺すが、悪霊の火は魂さえも破壊する。

凶悪無比な術であるだけに、これを極める事が出来た魔法使いは数少ない。

しかし、クイレルは見事に悪霊の火を制御して見せた。

捻れたヤギのような角を持つ炎の巨人がケルベロスに襲いかかる。

「焼き尽くすのだ!!」

ケルベロスの体を業火が包み込む。床や天井も焼き焦がし、ケルベロスは苦痛に満ちた悲鳴を上げながら地下へと落ちていく。

その後をクイレルも追いかけた。

地底には悪魔の罨と呼ばれる植物が根を張っていたが、燃え盛る炎によって焼き滅ぼされた。

焼き焦げた悪魔の罨とケルベロスの死骸を尻目に扉を開く。そこ

には羽の生えた鍵が無数に飛び交っていた。

「……あれだな」

クイレルは一目で本物の鍵を見つけ出した。その鍵だけが一回り大きく、他の鍵と明らかに違っていた。

『お粗末だな』

「フリットウィック先生は正直な方ですので」

何故か、御丁寧に鍵を取るための箒まで用意されている。

クイレルはクスリと微笑むと箒に跨った。そして、一目散に本物の鍵へと飛び、掴み取った。

『中々のものではないか』

「……学生の頃は箒に乗るのが下手くそでしたから、躍起になって練習したのです」

鍵を開いた先には大きなチェス盤があった。

『……まるでテーマパークだな』

「これはマクゴナガル先生が施した仕掛けですね」

クイレルはキングの前に立ち、その王冠を譲り受けた。

「e2をe4へ」

この仕掛けも悪霊の火で焼き尽くせば突破する事が出来る。

しかし、悪霊の火は多くの魔法力を削る術だ。この先の事も踏まえると多用するべきではないとクイレルは判断した。

「f2をf4へ」

最速最短で勝利する為に有名な棋譜をなぞっていく。

相手は人間ではなく、それ故に正確かつ素直だ。

瞬く間に棋譜をなぞり終え、クイレルは悠々と次の部屋へ歩を進めた。

そこには背の高いトロールが立っていた。それはクイレル自身が配置したものだった。

『見事だ、クイリナスよ』

鮮やかにトロールを倒し、最後の仕掛け部屋へ向かう。

そこには複数の薬品と巻紙が置かれていた。

部屋に入ると同時に出入り口を炎で塞がれ、その反対側にも炎の壁

があった。

巻紙を開いてみると、そこには謎解きの文章が記されていた。

「これですね」

文章を一読しただけでクイレルは謎を解き明かした。

論理パズルは元マグル学の担当教授であったクイレルにとっては得意分野だった。

正解の薬品を飲むと体が氷のように冷たくなり、炎の壁をすんなりと乗り越える事が出来た。

『素晴らしいぞ、クイリナスよ。さあ、賢者の石を俺様に……』

期待の籠もった声が途切れる。

賢者の石があると思われた最後の部屋には奇妙な鏡が置かれているだけだった。

「あ、あれは一体……」

クイレルも動揺している。

『……これはみぞの鏡か』

「みぞの鏡……？」

『ダンブルドアめ……』

クイレルは困惑しながら鏡の前に立った。

「……ああ」

彼は大きく目を見開いた。

そこに写し出されていたのは現実とは異なる光景だった。

「わたしがいる……」

みぞの鏡。

それは見た者の真の願いを写す魔法の鏡である。

クイレルが見た光景は生徒達に囲まれている自分だった。そして、彼を導く二人の恩師の姿だった。

「ああ……、これがわたしの……」

アルバス・ダンブルドアとヴォルデモート卿がクイレルを褒め称えている。

あり得ない光景だ。

けれど、それは確かにクイレルの理想だった。

『クイリナスよ、撤退するのだ！ 今の貴様では賢者の石を手に入れる事が出来ん！ これは罠だ!!』

「……御主人様。わたしは……」

理想の光景を目にして、現実の自分を見つめ直した。

口元を歪め、クイレルは涙を零す。

どんなに望んでも、この未来は訪れない。

ダンブルドアとヴォルデモート卿が並び立つ日など来ないし、賢者の石を盗み出す為にスネイプを攻撃した自分はもうホグワーツにいられない。

『クイリナス!!』

もはや、ヴォルデモート卿の声は届かない。

壊れかけていた心は理想と現実の狭間に押し潰され、砕け散った。

『……クイリナス』

もはや、クイレルは使い物にならない。

その事を悟りながら、ヴォルデモート卿はクイレルの体から去る前に一言だけ呟いた。

『さらばだ、クイリナスよ』

呟いてしまった。

その言葉にクイレルの目が見開かれる。

「……イヤだ」

クイリナス・クイレルにとって、ヴォルデモート卿は希望だった。

誰にも認めてもらえなかった自分を認めてくれた人。自分を必要

としてくれた人。自分を褒めてくれた人。

愛しき御主人様と離れる事を卑しき下僕は強烈に拒んだ。

そして、その執着心は彼の中で爆発的な閃きを生んだ。

—— ああ、思いついた。

『なっ?』

彼の精神から激流の如く流れ込む混沌を極めた感情の波にヴォルデモート卿の精神が刹那の間空白となった。

そして、クイレルは杖を自らに向けた。

「オブリビエイト!!!」

第二十二話 『休暇明け』

アルバス・ダンブルドアは瞠目した。

『……先生？』

「……校長？」

二つの顔が彼を見つめている。

不思議そうに、戸惑うように、けれど悪意の欠片も無く。

「おはよう……、クイリナス。そして、トム」

彼らが起きるより少し前、ダンブルドアは土地の記憶を再生した。

そして、何が起きたのかを知った。

「今しばらく眠るが良い」

ダンブルドアは眠りの呪文を掛けた。

抵抗はなく、二人は瞼を閉ざした。

「校長。これは一体……」

共に駆け付けたスネイプは戸惑いを隠せずにいた。

「あるがまま、見るがまま。クイリナスはヴォルデモート卿を滅ぼしたのじゃよ。わしですら思いも寄らぬ方法でな」

クイレルは己の肉体に忘却術を施した。

それはクイレルの肉体を依り代としていたヴォルデモート卿の記憶にまで影響を及ぼした。

「よもや、ヴォルデモート卿に纏わる記憶をすべて消し去るとは……」

クイレルはヴォルデモート卿を愛していた。そして、彼が離れていく事を拒んだ。

偉大なる闇の帝王を独占する為に、彼は帝王を自分だけの御主人様に作り変えた。

「ヴォルデモート卿としての記憶を失った以上、今の彼には憑依状態を解除する方法も分かるまい」

その魂は永遠にクイリナス・クイレルという男の肉体に縛り付けられたのだ。

「……く、狂っている」

スネイプは悍ましいものを見る目をクイレルに向けた。

「そうではない」

ダンブルドアは言った。

「クイリナスはヴォルデモート卿と……いや、トムと共に居たかったのじやろう」

その二つの寝顔を見つめながら、ダンブルドアは深く息を吐いた。

「トムには理解する事が出来なかったのじやろうな。故にこそ、不覚を取ったのじやろう」

愛を知らぬ事こそがヴォルデモート卿の敗因だった。

第二十二話『休暇明け』

暖炉の炎を越えて、ハリーとロンはホグワーツに戻って来た。

隠れ穴での一週間はハリーにとって素晴らしい時間だったけれど、ホグワーツに帰って来ると嬉しい気持ちになった。

「帰って来ましたねー、ポッターさん!!」

「うん！ シエーマス達に早く会いたいよー」

二人はグリフィンボールの談話室へ急いだ。

すると、途中で見覚えのある背中が見えた。

「クイレル先生じゃないですか!! お久しぶりです!!」

「先生、お久しぶりですー」

二人が声を掛けると、クイレル先生は目を丸くしながら振り向いた。

「ああ、君達か！ 相変わらず、元気そうだね。クリスマス休暇は楽しかったかい？」

久しぶりにあったクイレル先生はなんだか雰囲気が変わっていた。

だけど、二人は笑顔で「はい！」と返事をした。

ハリーにとって、このクリスマス休暇はとても重要で、とても大きな意味があった。なればこそ、クイレルにとってもそうだったのだろうと思っただのだ。

「逸る気持ちは分かるけど、転ぶから走ってはいけないよ？」

「はい、先生ー」

「わかりました！」

二人はクイレル先生に手を振ると速歩きで談話室に向かって行っ

た。

「やれやれ」

その背中を見つめながら、クイレル先生は苦笑した。

「さて、授業の準備をしないといけませんね」

『ああ、そうだな』



談話室でシエーマス、デイーン、ネビルと合流したハリーとロンはハグリッドの小屋へ向かった。

みんな、ドラゴンの卵の事が気になっていたのだ。

「ハグリッドー！」

小屋は相変わらず暑かった。

「そろそろ孵かえりそうなの？」

「おう！ もう直ぐだぞー！」

ハグリッドの言葉に伝えるように、卵がピクリと動き出した。

いよいよドラゴンが誕生する。ハリー達は色めき立った。

すると、ハグリッドはカーテンの隙間から中を覗き込む目を見つけた。

「ん？ 誰かおるようだな」

「おつ、坊っちゃん！」

ロンは嬉しそうに飛び出していった。

ハリーはその事が少し気に入らなかった。

「は、離せ！ とうか、お前、自分が何をしているのか分かっているのか!？」

今回は取り逃さなかったらしい。

ロンは意気揚々とドラコを引き摺りながら戻って来た。

「坊っちゃん！ アンタは幸運だぜ！ なにしろ、ドラゴンの誕生に立ち会えるんだからな！」

「正気か!? ドラゴンなんて、法に触れるぞー！」

「大丈夫さー！ 校長先生のお墨付きなんだ！ これはヒツポグリフクラブの立派なクラブ活動なんだぜ！」

「え？」

ドラコはフクロウが豆鉄砲でも食らったかのような顔をした。

「さあ！ 細けえ事は後にして、こっちに来てくれ！」

「あ、ああ」

ドラコはロンに促されるままドラゴンの卵の前にやって来た。卵には既に亀裂が入り始めている。

「ああ、いよいよだぞ」

キーツという音と共に卵が大きく割れた。そして、炎からドラゴンの赤ちゃんが飛び出してきた。

「これがドラゴン……」

あまり可愛くなかった。

まるでしわくちやなこうもり傘のようだとハリーは思った。

痩せた黒い胴体に不釣り合いな巨大で骨っぽい翼、長い鼻に大きな鼻孔、コブのような角、おまけにオレンジ色の出目金だ。

赤ちゃんがくしゃみをすると火花が散った。

「素晴らしく美しいだろう？」

「ああ、最高だぜ……」

ロンは溜息を零しながら赤ちゃんを見つめている。

ハグリッドが頭を撫でようとすると、赤ちゃんは鋭い牙で彼の指を噛んだ。

「こりやすごい！ ちゃんとママちゃんが分かるんだ！」

感激しているハグリッドには申し訳ないけれど、ママというよりは、どう見ても敵とか捕食対象として見ているようにしか見えなかった。

「とつつあん！ まずは飯だぜ！ 飯を食わせてやらねえと！」

ロンの言葉にハグリッドは「そうだ！ 赤ちゃんが腹ペコだ！」と慌てた。

「えっと、ブランデーと鶏の血を混ぜたものを三十分毎にバケツ一杯？ 鶏に優しくないね……」

シエーマスは近くにあった『趣味と実益を兼ねたドラゴンの育て方』という本の開かれていたページの一文を読んで顔を顰めた。

「七面鳥の血を混ぜても大丈夫らしい。丁度、クリスマス休暇中にホグワーツに残った連中で七面鳥や鶏をたらふく食ったからな！」

血抜きした時の血がたんまり残つとるのを厨房から貰ってきたんだ」

ハグリッドの指示を受けながら血で満たされたグロテスクな樽にブランデーを並々と注いでいく。

ネビルは血液の匂いを嗅いただけで目を回したけれど、ハリー達も目眩を感じていた。

「ポッターさん！ 後はオレととつつぁんでやつから！ みんなと表の空気を吸って来てくださいや！」

ロンだけに任せるわけにはいかないと思っただけれど、それを口にする程の余裕がハリー達には無かった。

シエーマスとデイーンは我先に飛び出していき、ドラコもその後が続いた。

ハリーは目を回しているネビルを引き摺りながら外に出した。この中に居たら、目を覚ます度に目を回してしまう。

「ロンはよく平気だよね」

デイーンは吐きそうな顔で言った。

「夢に出てきそう……」

樽いっぱい血液を思い出して、シエーマスは青褪めている。

「……ロナルドのやつ、なんてものを見せるんだ」

ドラコの肌はいつも以上に青白くなっていた。

「ロ、ロンは君にドラゴンの誕生を見せてあげたかったんだ！ 別に意地悪したわけじゃないぞ！」

ハリーは目眩と戦いながらドラコに言った。

「余計なお世話って言葉を知らないのか？」

「なんだとー」

ハリーとドラコは火花を散らした。

けれど、長くは続かなかつた。二人共グツタリしていて喧嘩するどころではなかつたのだ。

「……お前達、クラブに入ったのか？」

「そうだよ。ヒップグリフクラブさ」

「物好きだな。入るならドラゴンクラブだろ」

「君、あそこに入る気なのかい？ やめといた方がいいよ。絶対長続きしないと思うし」

「どういう意味だ……?」

「またも不穏な雰囲気を出し始める二人にシエーマスはうんざりしたような大きい溜息を零した。

「君達さ！ 喧嘩するならどつか別の所でやってくんない!? 僕、今すっごい気分悪いんだけど!」

「ご、ごめん」

「……ふん」

それから五人は小屋の近くの草原に座り込んだ。

ポーツとしていると徐々に気分が良くなって来た。

しばらくすると、ケトルバーン先生や他のヒツポグリフクラブのメンバーがやって来た。

ハリー達はペネロピーが持って来た甘いお菓子を分けてもらい、立ち上がるくらいに元気を取り戻した。

「交代して来ました!」

ロンが出て来た。どうやら、他のメンバーと餌やりを交代したらしい。

「腹減ったな。さあ！ みんなで大広間に行こうぜ！ デイナーが待ってる!」

「……ロナルド」

ドラコはロンを睨みつけた。

「貴様、よくも僕を……」

「坊っちゃん！ どうだった？ ドラゴンだぜ！ いいよな、ドラゴン！ 最高だぜ!!」

けれど、ロンはドラゴンの事で頭がいっぱいだ。

「……つたく」

「そうだ、坊っちゃん!」

何かを閃いたような顔をするロンに、ハリーは彼の次の言葉を読んだ。

「ロン！ そう言えば、ハグリッドはドラゴンに名前をつけたのかな

!？」

「つとと?！」

いきなり腕を掴まれてロンはバランスを崩しかけた。

「え、えええ！ ノーバートって名前にしたみてえです！ いい名前ですよね、さすがとつつあんだぜ！」

話を逸らす事に成功して、ハリーはニヤリと嗤った。

その事にドラコは気付き、大いに苛立った。

「おい、ロナルド！ 話を途中で逸らすな！ 無礼だぞ！」

「つと、そうだったな！」

なんと、ドラコは話を蒸し返した。

ハリーは目をピクピクさせた。ドラコはそんな彼に冷笑を向けた。

「坊っちゃん、オレ達と一緒に——」

「おーい、ドラコ！」

クラブとゴイルが駆け寄ってきた。

「どこ行ってたんだ？」

「なんで、グリフィンボールの連中といるんだ？」

二人は怪訝な表情を浮かべている。

「なんでもない!! 行くぞ、お前達!!」

「お、おう！」

「わ、わかった」

ドラコは拳を硬く握り締め、ハリーは吹き出した。

そんなハリーをドラコは凄まじい形相で睨みつけ、ハリーも凄まじい表情で返した。

「……ほんと仲悪いね」

「相性最悪なんだろうね」

シエーマスとデイーンはそんな二人に呆れていた。

「ネビル。もう少し成長すれば、今みたいな離乳食じゃなくて、肉とかやれるようになるんだ。それなら平気だろ？」

「あれって離乳食なの……? でも、うーん。生肉も僕はちよつと……」

「まあ、折角の機会なんだ！ なんでも挑戦してみるべきだぜ。特にドラゴンの世話なんざ、一生に一度あるかないかってレベルだしよ！」

「……そ、そうだね。うん。ほ、僕、頑張ってみる！」

「その意気だぜ、ネビル！」

その間、ロンはネビルとドラゴンの話で盛り上がっていた。

第二十三話 『ノーベルタ』

季節が巡り、雪はすっかり溶け消えた。

ノーバートと名付けられたドラゴンはすすくと成長し、ハグリッドの小屋よりも大きくなっていた。

「ハグリッド、大変だ!!」

「どうした、セドリック!？」

「ノーバートはメスだ!!」

「なんだって!？」

ドラゴンの雌雄を見極める事は極めて難しいのだが、その勇ましい姿と吐き出す炎の苛烈さから誰もがオスだと信じ込んでいた。

けれど、成長して大きくなった事でセドリックはノーバートの真実に気づく事となったのだ。

「ノーバートは男性名だよ!」

「なんてこった!」

それからヒツポグリフクラブのメンバーが全員小屋の前に集められ、緊急会議が行われる運びとなった。

議題はもちろん、ノーバートの新しい名前である。

「お、俺はノーバートを男の子だと……、女の子だったのに、ノーバートって付けちゃった……」

すっかりしよげ返っているハグリッドをセドリックとペネロピーが慰めている。

「……どうでもよくね?」

うっかり本音を吐いたシエーマスは二学年上のアリシア・スピネットに口を塞がれた。

会議は夜まで続けられ、結局はハグリッドが捻り出したノーベルタという名前に改名される事になった。

ハグリッドはノーベルタに新しい名前を覚えさせようと躍起になっている。

その背中を見て、ヒツポグリフクラブのメンバー達は悲しい気持ちになった。

「来週だっけ？」

「うん。ノルウェーのドラゴンの生息域に連れて行かれるんだって……」

「ハグリッド、きつとすつごく落ち込むよね……」

「夜、ずっと泣いてるみたいよ」

ノーベルタは禁じられた森に放置されていた卵が死産してしまわないように特別措置としてハグリッドに預けられていた。

けれど、今や立派に育った彼女をホグワーツに置いておくわけにはいかない。

別れの日は刻一刻と近づいていて、その事にハグリッドも気付いている。

「ハグリッド……」

ハリーは彼の為に何かしてあげたかった。けれど、何が出来るのか思いつかなかった。

ノーベルタを残留させる事は不可能だし、それは彼女にとっても残酷な仕打ちだ。

なにしろ、ここには彼女の同胞がいない。環境だって、劣悪という程ではなくても快適では無い筈だ。

折角の翼も広げられる機会を与えてもらえず、ここに居る事は彼女にとって極めて過酷な事なのだ。ケトルバーン先生は常々語っていた。

ハグリッドもその話を聞いているからこそ、寂しく思いながらもノーベルタを引き渡す事に反対する事は無かった。

「……なあ、みんな！　こんなのはどうだ？」

ロンが何かを閃いたようだ。彼は仲間達に一つの提案をした。

難色を示す者はいなかった。ヒップグリフクラブのメンバーは誰もがハグリッドの事を愛している。彼の為に何かしたいと思い悩んでいたのだ。

第二十三話『ノーベルタ』

ロンの提案。それはノーベルタとの思い出を形として残そうというものだった。

当人はどこからか運んで来た巨大な岩をノミとトンカチで削りながらノーベルタの像を作ろうとしている。

相変わらぬのロンの引き出しの多さに驚きつつも、ハリーは自分に出来る事を考えた。そして、辿り着いたのは絵だった。

別に得意なわけではないけれど、それが一番現実的だったのだ。

「僕らの知ってる魔法だとあんなの作れないもんねー」

デイーンは上級生が作り出したノーベルタの姿を象る花火だとか、魔法で生み出したミニチュアのノーベルタを見ながらボヤいた。

どれも数人がかりとは言え、今のハリー達には想像もつかない魔法技術によって生み出されている。到底真似出来るとは思えなかった。

「ぼやかないのー。大丈夫よ。大事なのは心なんだからねー」

そう言ったのは一学年上のチョウ・チャンだった。

彼女は最近になってヒップポグリフクラブのメンバーに加わった。どうやら、ドラゴンの飼育に興味を抱いたらしい。

ハリーやロンにとって、彼女は入学したばかりの自分達に親切にしてくれた優しい先輩だったから、彼女が仲間に加わった事を二人はとても喜んだ。

「……うーん、カバみたい」

ハリーは自分が描いたノーベルタを見てガックリした。

実際の彼女はとても雄々しい姿をしているから、こんな物を見せたら炎を浴びせられてしまう。

「絵なんて滅多に描かないもんね」

ネビルに至ってはナメクジみたいになっている。

「あー、描き直しだー」

描いても描いても上達しない。一番マシなデイーンの絵でさえノーベルタとは似て非なるトカゲにしか見えない。

何度も投げ出しそうになった。けれど、その度にハリーは初対面の時にハグリッドがくれた誕生日ケーキの味を思い出した。

ひしゃげてしまって、デコレーションの文字の綴りも間違っていたけれど、ハグリッドが手作りで用意してくれたケーキ。

誰かに誕生日を祝ってもらうのは人生で初めての事だった。あの

時、胸を満たした温かい感情を今でも明瞭に覚えている。

「……ハグリッドのためだ」

生きる事は苦痛だった。だけど、この人に付いて行けば何かが変わるかもしれない。そう思わせてくれた。そして、実際にハリーの人生は一変した。

ハリーは何度も何度も描き直した。

カバにしか見えない絵は徐々にドラゴンの姿へ変わっていった。

上級生にアドバイスを貰ったり、シエーマス達と意見を交わし合ったり、何度もタッチを変えてみたりした。

そして……、

「出来たー！」

ノーベルタがノルウエーに移される日の前日、ハリーの絵は完成した。

その絵は驚くべき事に画用紙の上を這い回り始めた。

「な、なに!?!」

目を丸くするハリーにペネロピーが「大丈夫」と頭を撫でた。

「絵は動くのよ。ホグワーツの絵も動くでしょ?」

「で、でも、僕は魔法なんて使ってないよ!?!」

「使ってたわ」

彼女は言った。

「魔法使いが心を籠めて絵を描いた時、その絵には魔力が宿るの。そして、魔力は絵に擬似的な魂を吹き込む。まあ、専用の筆やインクを使わないと滅多に起きない現象だけだね」

ペネロピーはとても優しい笑みを浮かべた。

「君はハグリッドが大好きなんだね」

「うん!」

ハリーが即答すると、彼女は吹き出した。

「あはは!　じゃあ、折角だから魔法を掛けようか!　そのままだと、すぐに普通の絵になっちゃうからね」

ペネロピーは杖をハリーの絵に向けた。彼女が呪文を唱えると絵のノーベルタがわずかに光った。ノーベルタは戸惑っている。

「これでよしー!」

「ありがとう、ペネロピーー!」

ハリーがお礼を言うと、彼女はニツコリと微笑んで、またハリーの頭を撫でて去っていった。

「ノーベルタ」

絵のノーベルタに声を掛けてみると、ノーベルタは『ギャオ?』と反応した。

とても不思議だ。ただ、絵を描いただけなのにそのノーベルタは確かに生きていた。

「本で読んだ事があります」

ビクツとなった。

いつの間にか背後にロンがいて、ハリーの動く絵を覗き込んでいたのだ。

「ロ、ロン!?!」

心臓に悪い登場の仕方をしたロンをハリーは少し恨むように睨んだ。

「ほら、ビンズ先生が言ってたでしょう? ピラミッドやホグワーツ城に意思が宿するという話を」

「う、うん」

「どうやらロンの意識はすっかり絵に集中しているらしい。」

ハリーが睨んだ事に気付いていない。その事に不満を抱きつつ、ハリーは頷いた。

「あれから気になって、いろいろと本を読んでみたんですよ。やっぱり、付喪神の一種らしいんです。ピラミッドは生贄達の怨念を取り込み、ホグワーツ城は生徒や教師の様々な感情を取り込む事で意思を得た存在なんです」

「う、うん……?」

ハリーには話の繋がりが見えなかった。

戸惑いながらも相槌を打っていると、ロンは言った。

「基本的に魔法界の絵画は特殊なインクと筆を使う事で意思を宿らせています。ただ、これは心を吹き込みやすくする為のものなんです

よ。心さえ吹き込む事が出来たなら、筆やインクは普通の物でも構わないって事です。ただ、これが実に難しい事ですね。まず、魔力が無ければいけません。そして、何よりも重要なのは想いを籠めて描く事です。深くて強い思いです」

そう言つて、ロンはハリーの瞳を見つめた。

「ポッターさん。あなたはこのノーベルタを描く時、一筆一筆に魂を籠めたんだ。ハグリッドの為に……」

彼の瞳はうるみ始めた。ハリーは次の瞬間に起こる事を予期した。

「オレは!! 今、感動しているぜ!!」

間一髪、耳を塞ぐ事に成功した。

失敗したネビルは吹っ飛んだ。

「生半可な思いじゃねえんだ!! ハグリッドに対する深い愛情!! 強く優しい思い遣り!! それが無ければ、ただの筆とインクで絵は絶対に動かねえ!!!」

やめてほしい。周りの視線が痛い。

ハリーはあわあわとロンの口を塞ごうとした。けれど、その手をガシツと掴まれた。

「ポッターさん!! ますます惚れ直しましたぜ!!! さあ、ハグリッドに見せに行きましょう!!! 喜ぶ事間違いなしです!!!」

「……う、うん」

ハリーの手を掴んだままグイグイとハグリッドの下へ向かっていくロン。

周りの微笑ましい視線にハリーは深い溜息を零した。

「……もう、仕方がないな」

ハリーはボソリと呟くと微笑んだ。

ハグリッドに絵を見せると、彼はとても感激した。ロンの石像やペネロピー達のミニチュアにも、あまり上達しなかったシエーマス達の下手くそな絵にも大喜びだった。



翌日、いよいよノーベルタが移送される日がやって来た。

ヒップグリフクラブのメンバーは朝からハグリッドの小屋に集

まっていた。

少しでも彼が寂しくならないようにしてあげたかったのだ。移送中にノーベルタが食べられるようにたつぷりとお肉や血を用意して、別れを惜しむハグリッドに声を掛けた。

そして、午後になると厚手のローブや独特な手袋を身に着けた一団が現れた。彼らがノルウェーのドラゴンの生息域を管理しているらしい。

「驚いたな。すごく元気そうだ」

一団のリーダーらしき人は元気に生肉を頬張るノーベルタを見て微笑んだ。

「ハグリッド。彼女の事は私達が責任を持って預かるよ」

「……ああ、よろしく頼むぞ。バルロ」

彼はホグワーツの卒業生だったらしい。

ハグリッドといろいろとやり取りをした後、彼は仲間と共にノーベルタを大きなトランクケースの中に餌で誘い込んだ。

トランクケースの中は覗いてみるととんでもなく広大な空間が広がっていた。

ノーベルタがトランクの奥に入ると、バルロはトランクを閉めた。すると、トランクは普通のサイズに縮小した。

ハグリッドは何度も手を伸ばしかけた。けれど、これがノーベルタの為なのだと何度も自分に言い聞かせた。

箒にトランクを括り付けて飛び去っていくバルロ達の背中をハグリッドはジツと見つめ、手の中のハリーの絵のノーベルタが『ぎやお？』と鳴くと彼は大声を上げて泣き出した。

ハリー達は彼が泣き止むまでずっとそばにいた。

第二十四話 『トム・リドル』

スネイプは苦虫を噛み潰したような表情を浮かべた。

「正気の沙汰とは思えませんな」

「そう思うかね？」

「思いますとも！ 今こそ、ヴォルデモート卿を滅ぼす最大の好機である筈！ それなのに、何故!？」

クイレルの狂気の選択によって、ヴォルデモート卿はヴォルデモート卿に纏わる記憶を消去された。

ならば、彼はヴォルデモート卿を名乗り始める前の少年時代に戻ったのか？ そうではない。

ヴォルデモート闇の帝王とは、一人の少年が作り上げた虚像ベルソナに過ぎない。

人は誰しも複数の仮面を持ち、それらを使い分ける事で日常を営んでいる。

ヴォルデモート卿もトム・リドルという男の一面でしかないのだ。眠る時、起きる時、本を読む時、食事を嗜む時、彼はヴォルデモート卿ではなく、トム・リドルだった。

その時の記憶は彼の中に残っている。

「ヴォルデモート卿ではなくなった！ だが、奴は悪魔だ！ 時を置けば、再び悪としての自我を取り戻す！」

誰かが彼に悪となれと命じたわけではない。

誰かが彼に悪であれと願ったわけではない。

ただ、彼は悪だった。

「よもや、奴を救おうなどと考えているのではないでしょうな!? 奴は滅ぼさねばならぬ存在!! 生きてはならぬ邪悪なのですぞ!!」

スネイプの懸念は正しい。

トム・リドルという少年は辛い過去と深い孤独を抱えていたが、似たような境遇の者など五万といる。そして、その多くは悪になど染まらずに生きている。

誰かが悪に染めようとしたわけでもない。むしろ、多くの者が彼に善良さを求め、未来の指導者となる事を望んでいた。

環境に依らず、彼は悪としての道を進み始めた。

「生まれ持ったの邪悪!! それが奴なのです!! あなたも分かっている筈でしょう!!」

「……セブルスよ。それでもじや」

ダンブルドアは言った。

「それでも託してみる価値があるとわしは思うのじやよ」

「託す……?」

スネイプは困惑した。

「何を……、誰に託すと……?」

「愛じやよ。セブルス……、愛じや」

その言葉にスネイプは愕然となった。目の前の老人が急に耄碌したのかと思った。

「何を言って……」

正気を疑うかのようなスネイプの眼差しにダンブルドアは微笑んだ。

「セブルス。お主の見解も的外れではない」

「的外れではない!?!」

スネイプはいよいよダンブルドアがボケ老人になったのかと思った。

「問題はヴォルデモート卿を確実に滅ぼす方法が存在しない事じやよ」

「……方法はある筈です。奴は死を超越しているらしいが、ならば魂ごと滅ぼしてしまえばいい。悪霊の火ならば、あるいは!」

「たしかに、悪霊の火ならば滅ぼす事も可能やもしれぬ」

「ならば!」

「それでも滅ぼせぬのじやよ」

「は?」

矛盾しているとスネイプは思った。

「滅ぼせると言ったではありませんか!」

「言ったとも。そして、滅ぼせぬとも」

「な、何を言って……」

スネイプは困惑した。

「ヴォルデモート卿の不死性に関して、わしはずっと考えておった。そして、一つの解答に至ったのじゃ」

「それは一体……」

「あくまでも推測じゃよ。確信に至る証拠はない。けれど、ヒントはあったのじゃ。そして、その解答が真実であったのならば……」

「真実であったのならば……、何だというのですか!？」

「最も恐るべきは複数のヴォルデモート卿が出現する事じゃ」

「……ふ、複数のヴォルデモート卿？」

「それもあくまで推論じゃよ。しかし、あり得る推論じゃ」

推論だと言いながら、ダンブルドアの言葉には確信めいたものがあつた。

「……一体、その解答とは？」

「分霊箱ホークラックスじゃよ」

「分霊箱？ たしか、最も邪悪なる魔術にそのような術の名が……」

スネイプは嘗て読んだ書物の記憶を思い浮かべた。

—— ホークラックス、魔法の中で最も邪悪なる発明なり。我らはそれを語りもせず、説きもせぬ。

名前以外の詳細が何一つ分からず、他の如何なる闇の書にもその名すら記されてはいなかった。

「深い闇の秘術という書物にのみ詳細が記されておった。それをわしは教師として赴任した際に禁書の棚から除籍したのじゃ」

「……一体、如何様な術のですか？」

「語ることもすらすら悍ましい術じゃ」

ダンブルドアは嫌悪感に満ちた声で呟いた。

「じゃが、その書物はわしが除籍するまで禁書の棚に眠り続けておつた。その本は最も邪悪なる魔術とは違い、誰もが気軽に手に取れたのじゃよ」

大抵の闇の書は資格無き者に牙を剥く。けれど、その書物は資格無き者にすら秘術を授けてしまう。

「ヴォルデモート卿自身がその本を読む事は出来なかつた筈じゃ。し

かし、読んだ者から情報を得る事は可能だったかもしれない。そして、そうしてしまった者にわしは心当たりがあるのじゃ」

「なっ……」

スネイプは言葉を失った。

「一体、誰がそのような……」

「責任の所在など、今は良い」

「し、しかし！」

詰め寄ろうとするスネイプをダンブルドアはまっすぐに見つめた。

「セブルス。重要なのは分霊箱という術の真価じゃ。分霊、即ちは分かたれた靈魂。分霊箱とは魂を分割し、それを特定の器に封じ込める事で本体の死後、その魂を現世に繋ぎ止める楔とする術なのじゃ」

ダンブルドアの言葉を聞いて、スネイプは先程のダンブルドアの言葉を思い出した。

「……まさか」

「本体を滅ぼした時、分霊がどうなるか？ それはわしにも想像すら出来ぬ。じゃが、本体と分霊には見えぬ繋がりがあり、それが本体の魂を現世に繋ぎ止めておる事は確かじゃ。その繋がりが途絶えた時、分霊がただ消滅するならば良いのじゃが……」

「そうはならぬと……？」

「……迂闊な真似をすれば、取り返しのつかぬ事態になりかねん。故にこそ、託すのじゃ」

ダンブルドアは一つの頭に浮かぶ二対の眼を思い出しながら呟いた。

「クイレルの愛をトムが受け入れたならば、あるいは……」

「……やはり、正気とは思えませんな」

第二十四話『トム・リドル』

今日も授業を始めよう。

「魔法生物の中には人のような姿のものもあります。例えば、ブルガリアのヴィーラなどは美しい女性の姿をしている為、その容姿の虜となってしまう男性が非常に多いのです。けれど、彼らは人ではありません。中には人に友好的な種族もいますが、その見た目人を油断さ

せ、死に至らしめる者も数多く存在するのです」

クイリナスは生徒の興味を惹くために人擬きひとごとの中からヴィーラの話題を選んで語った。

男女の関係というものは未成熟な子供にとって未知のものであり、同時に生物としての本能を揺り動かすものでもある。

関心を寄せるという事は集中力を増すという事だ。

「中でも危険な種として吸血鬼や人狼がいます。彼らは人の姿をしている上に人の心も持っているのです。それ故に相手がそういう存在であると知っていても心を許してしまう人が大勢います。それが悪い事というわけではありません。ただ、危険である事を忘れてはいけません。吸血鬼には生きる為に血液を求める種族としての本能があり、人狼の歯には変身していかない状態でも毒があるのです」

「でも、先生！ 人狼だからって差別は良くないってママが言ってたよー！」

「もちろん、偏見で差別する事は良くありません。ですが、事実から目を逸らしてもいけません。いいですか？ 相手が何者であるか、その事をキチンと見極めるのです。その者の危険性から目を逸らすのではなく、その者の危険性と向き合い、その上で対等に接するのです。それが彼らとの正しい付き合い方なのだと思わしは思います」

戯言だ。

純血主義者を差別主義者と糾弾して差別する自称博愛主義者共を見れば分かる筈だ。

人間とは差別せずにはいられない生き物なのだ。

人狼を差別するべきではないと言った小僧は、その時点で人狼を見下し、差別している事に気付いていない。

クイリナスの理想論を体現出来る者など、この教室に一人でもいれば驚きだ。

「先生！ 聞いてもいいですか!？」

「はい、ロナルドくん。なんですか?」

「シルキーってのは別嬪さんなんでしょうか!？」

どうやら教科書の片隅にある人擬きの一覧表を見たらしい。

「それは見る者によりますね。君にとって美しい人とは隣に座っている彼女かな？ それとも、年上のお姉さんかな？ あるいはマクゴナガル先生だったり——」

「はい！ マクゴナガル先生です!!」

バシンというキレの良い音が響いた。隣のハーマイオニー・グレンジャーが教科書でロナルドの頭を殴ったらしい。アグレッツシブな小娘だ。

他の生徒達はほぼ全員が吹き出している。クイリナスも吹き出している。俺様も危うかった。

「さ、さて！ まあ、君の好みは分かったけれど、シ、シル、シルキーという種族すべてが同じ容姿をしているわけではなくてね。その……、ウププ……、マ、マク、マクゴナガルせ、先生みたいなシルキーもいる、いるかもしれないけど、そうじゃない子もい、いるんだよ！」

耐え切れなくなったクイリナスはどもり過ぎて息も絶え絶えだ。

仕方のない奴め。

『おい、クイリナス。わたしのクイリナスよ。今は授業中だぞ。笑っている場合では無い筈だぞ。分かっているな？ クイリナスよ。集中するのだ』

「は、はい……ぷぷ」

このままでは俺様が考案した完璧なカリキュラムが崩れてしまう。

おのれ、小僧め。小娘もツツコミのキレが良過ぎるぞ。

まだ、半数以上が腹を抱えているではないか……。

『仕方があるまい。アレを使うぞ、クイリナスよ』

本来は三年生の授業で使う予定だったが、今の状況ならば元々予定していたレッドキャップよりも良い実践訓練となるだろう。

クイリナスは俺様の指示に従い、教室の隅に置いてあるトランクを開いた。

その中から衣装箆筒を呼び寄せせる。

「先生、それはなんですか？」

「見ての通り、衣装箆筒です。ただし、中には衣装ではなく、とある魔

法生物が入っています。これから、この魔法生物を使って今年の闇の魔術に対する防衛術の授業の締めとして、実践訓練を行います！」

生徒達は歓声を上げた。今までの授業でも幾つかの呪文を学んで来たが、人や魔法生物に対して使った事はなかった。

生徒達の興奮が伝わってくる。

「さて、この衣装箆笥の中に入っている魔法生物の正体分かる人はいますかな？」

「はい、先生!!」

先程のツツコミで机に顔面を強打したロナルドは未だに額を押さえて痛がっている為、今回は授業における質問回数第二位のハーマイオニーが手を挙げた。

「はい、グレンジャーさん」

「まね妖怪です！」

「正解！」

相変わらず優秀だ。まね妖怪は三年生用の教科書の魔法生物の章に記されている魔法生物であり、一年生の教科書には載っていない筈なのだ。

どうやら、かなり先の予習まで行っているらしい。

その学習意欲を上手く他の生徒に伝播する事が出来れば、来年度は更なる授業品質の向上を望める筈だ。

『クイリナスよ。あの小娘を利用するのだ。まね妖怪に最初に挑ませるのだ。小娘ならば上手くやるだろう。その時、大げさなまでに褒めてやるのだ。他の生徒が羨む程に。そして、後に続いて成功した者も一人一人を丁寧褒めてやるのだ。そして、ロナルドだ。あの小僧を小娘とは別の角度から褒めてやるのだ。すると、どうなると思う？』

あの小娘は小僧に対抗意識を燃やすだろう。さすれば学習意欲と向上心がクラス全体で循環し、熟成されていく筈なのだ。さあ、やれ！

やるのだ、クイリナスよ！」

「さあ、みんな！ 席を立て！」

クイリナスは杖を振り、机と椅子を教室の隅に片付けた。

「グレンジャーさん。最初は君に挑戦してもらおう！ 呪文は知って

「いるかい？」

「はい！」

「では、注意点だ。笑いを忘れないように！」

そして、実践授業が始まった。

第二十五話 『ダーズリー邸』

一年目が終りを迎える。

学年度末パーティーの会場となる大広間には緑の垂れ幕が垂れ下がっていた。

「我らが王者！ 無敗伝説のテレンス！」

スリザリンの席ではテレンスが胸上げされている。

五年間無敗の最強シーカーとして、彼は伝説を残した。

「てえしたもんだぜ！」

ロンもテレンスに対して尊敬の眼差しを向けている。

「おい、ロン！」

「あいつはスリザリンだぞ！」

フレッドとジョージは御立腹だ。

毎日夜遅くまで訓練に励んでいたのに今年も優勝を逃してしまった。

揃って恨みがましい視線をテレンスに向けている。

「クカカカカッ!! 二人共、青春してるな!!」

ロンはその姿を見て愉快そうに笑っている。

「お前なあ！ お兄ちゃん達が負けちやっただぞ！ ちよつとは悔しがれ！」

「ここは『来年はオレがグリフィンドールのシーカーになって、兄ちゃん達の仇を討つぜ！』って立ち上がるシーンだぞ！」

そんな二人の言葉にロンはニヤリと笑みを浮かべた。

「フレッド！ ジョージ！」

「な、なんだよ!?!」

「ど、どうした!?!」

不思議だ。フレッドとジョージの方がロンのお兄さんの筈なのに、三人のやりとりを見ていると立場が逆のように感じる。

なんと言うか、フレッドとジョージが年上のお兄さんに構って貰いたがっている弟に見えてしまう。

「来年のシーカーはオレじゃねえ！ こちらのポッターさんさ!!」

いきなりロンに肩を抱かれた。

「ポッターさんこそ、テレンスの無敗伝説を受け継ぐ次世代の王者だぜ!!」

目を白黒させている僕に構わず、彼は勝手な事を言い始めた。

「は、はあ!?!」

寝耳に水とはこの事だ。

「おいおい、どういう事だ!?!」

「ロン、詳しく話せ!」

二人が食いついてしまった。周りの視線が痛い。

ロンはいつも僕の事を持ち上げすぎる。

次世代の王者だなんて、飛行訓練ではじめて箒に乗ったばかりの僕がなれるわけもないのに!

「ポッターさんは箒乗りの天才さ! 飛行訓練の度にオレはポッターさんの異常なまでの進化を目撃して来た!」

止まって欲しい。だけど、こうなったロンは止まらない。

「まるで自分の体の一部かのように華麗に箒を乗り回す姿を見た!

フーチ先生が興奮のあまり要求をエスカレートさせた時も見事に答えてみせた!」

知らなかった。フーチ先生が僕やドラコにだけ変な動きをさせる事がしばしばあったのは確かだ。あれは要求をエスカレートさせていたらしい。

「そうだ! 兄上達も実際に見たらいい!」

ロンは僕を見つめた。

「夏休み中、うちに来ませんか!? 昔、チャーリーが譲ってくれたお古の箒があるんですよ! 学校指定のシューティング・スターなんかメジャーな性能ですから、ポッターさんの真の実力を試せる箒ですよ!」

「いいの!?! あっ、でも……、学校の外では魔法を使えない箒でしょ?

クリスマスの時も煙突飛行以外の魔法はダンブルドアとのアレくらいだっかし……」

「そこは大丈夫さ!」

「ああ、大丈夫さー！」

フレッドとジョージが声を揃えて言った。

「未成年の魔法の使用は確かに禁じられてるけど、監督する大人がいれば使ってもいいんだよ」

「うちの両親がいる時なら箒にも乗れるんだぜ！」

「そうなんだ!？」

「つてなわけで、どうです？ 退屈だけは絶対させませんよ、ポッター

さん！」

「行く！ 行きたい！」

迷う余地などなかった。

夏休みの間、ダーズリー邸に戻らなければいけない事がイヤで仕方なかった。

だけど、途中からでもロンの家でロンと一緒に過ごせるなら最初の数日くらいは我慢出来ると思った。

「じゃあ、迎えに行きますよ！ 待ってて下さいね、ポッターさん」

「うん！」

第二十五話『ダーズリー邸』

「というわけで、行ってくるぜ!!」

ロンはワインレッドのシャツに黒いジャケットを羽織り、母親であるモリー・ウィーズリーに言った。

時刻は午前四時三十六分。モリーは心底眠そうな顔だ。

「……いくらなんでも早すぎないかい？」

今日は夏休み初日である。ロンは昨日帰ってきたばかりなのだ。

「ハリーだって、家でゆつくりしたいんじゃないの？」

「……母上」

ロンは普段の陽気な表情を殺して母を見つめた。

その真剣な表情にモリーは驚いた。

「あまり詳しくは話せねえ。プライベートの問題とか、いろいろあるからな。ただ、オレはポッターさんを一刻も早く連れて来てえんだ。もちろん、ポッターさんが嫌がる事はしねえさ。断られたら戻ってくる。ただ、連れて来れたら歓迎して欲しいんだ。頼む！」

そのただならぬ雰囲気にモリーは小さく頷いた。

「も、もちろんよ。歓迎するわ！ それは当然の事よ。ハリーさえ良ければだけど」

「ありがとう！ やっぱり母上は最高の母親だぜ！ オレはあんたに生んでもらえた事が誇らしい!!」

その言葉にモリーはやれやれと肩を竦めた。

うちの子達は誰も彼もが個性的だけど、ロンはその中でもとびつきりだと彼女は常々思っている。

「じゃあ、行ってくるぜ!!」

「気をつけて行くんだよ!」

ロンが出て行くと、モリーは再びやれやれと肩を竦めた。

「……何か事情があるって事かしらね」

モリーは服の袖を捲った。

「さて、歓迎の準備をしないと」

息子の友達が来るのだ。気合を入れて準備をしなければならない。

モリーは杖を振った。まずはリビングの片付けからだ。



「……早朝に出て正解だったぜ」

ロンは溜息を零した。

この国の電車は時刻表など当てにならない。

到着予定時刻よりも遅れて電車がやって来るのが当たり前なのだ。

システムも完璧ではなく、キッチンと目的地の切符を買ったのに改札

口がキッチンと認識しない不具合などにも遭遇した。

いきなり乗り換える予定の電車が運休になった時は天を仰ぎそうになった。

「まあ、手土産もしつかり用意出来たし善しとすつか!」

オッターリー・セント・ポールの駅から五時間近くも掛かったけれど、漸くロンはハリーが住んでいるプリベット通り四番地に辿り着いた。

ポケットからクシを取り出し、髪型を整える。歯も駅のトイレでばっちり磨いてきた。

「……よっ」

ロンはクリスマス休暇の時にハリーの身の上話を聞いた。彼がこの家で受けて来た仕打ちは紛れもなく虐待だった。

子供を手足も満足に伸ばせない物置に閉じ込めるなど正気の沙汰ではないと思った。

もちろん、こういう話を一方向からの情報だけで知った気になつてはならないと分かっている。

だから、来た。もし、この家の家族がハリーの心身に危害を加える悪漢共であるなら許しておけない。

「オレだつてよお、親として褒められたもんじゃなかつたぜ」

息子の太輔には海外を転々とする生活のせいで色々と迷惑を掛けてしまった。

本人は持ち前のコミュニケーション力とバイタリテイでそれなりに楽しくやっていたようだが、定住に憧れる素振りを見せた事もそれなりにあった。

「……だけどよお」

ダーズリー邸での生活の事を話した晩、ハリーは眠りながら涙を零していた。

「あんな涙を流させていいわけねえだろうが」

ブチギレそうになる自分を必死に抑えながら、ロンはチャイムを鳴らした。

中から物音が聞こえてくる。扉を開いたのはでっぷりした体格の少年だった。

「……なんだ、お前」

不愉快そうな視線を向けて来る少年を見て、ロンは彼がダドリーなのだろうと当たりをつけた。

「オレの名はロナルド・ウィーズリー！ ハリー・ポッターさんの友人さー！」

「はあ？」

訝しげな表情を浮かべるダドリー。その後ろから彼とよく似た容姿の男性が現れた。

恐らくはダドリーの父であるバーノンだろう。

「ここにハリー・ポッターなんて名前の小僧はおらん！」
そんな事を言い出した。

「小僧？」

ロンは眉間に皺を寄せた。

「さっさと出て行け!!」

鼻息を荒げながらバーノンは怒鳴り声を上げた。

「断る!!」

ロンも声を荒げた。

「なんだと!?!」

「バーノン・ダーズリーだな？ お前さん、ポッターさんの親なんだろう？ 息子のダチ公が尋ねて来て、その対応がこれか!?!」

「貴様……! あの小僧の友人というのは確からしいな！ その無礼な言動といい、まったくもってイカれておる!!」

「ああ!?! イカれてんのはテメエの方だろうが!!」

怒鳴り合う二人の声はリビングや二階にも響いていた。

「バ、バーノン……?」

「ど、どうしたの……?」

リビングからはバーノンの妻のペチュニアが顔を出し、階段の上からはハリーが降りて来た。

「ロ、ロン!?!」

「ハリー!! こんなロクでなしに我が家の住所を教えるとは!!」

バーノンの怒声を聞いて、ハリーは目の色を変えた。

「ロクでなしだつて!?! 僕の友達をそう言ったのか!?!」

「なんだその態度は!! お前のような穀潰しを誰が面倒見てやってい
ると思ってる!! 親が親なら子も子だな!! このイカレ頭のキチ
ガイが!!」

「おい!!!」

ロンはバーノンの服の襟を掴み、その巨体を持ち上げた。

「なっ……、はっ、はなせ……」

鬼のような形相を浮かべるロンにバーノンは青褪めた。

「お、おい！ パパになにをするんだ!!」

それまで呆然と見つめていたダドリーは慌てたようにロンの肩を掴んだ。そして、その肩の硬さにゾツとした。

まるで鋼のように鍛え抜かれている。

「バーノン……。テメエとはしつかり話をつけとかなきゃならねえみたいだな」

「な、なにを……」

ロンはバーノンを持ち上げたまま反対の手で壁を殴りつけた。

「選ばせてやるぜ。拳で語り合うのと口で語り合うの、テメエはどっちが好みだ？ ああ!？」

そのまま、ロンはバーノンをリビングへ運んでいく。

ペチュニアは怯え切った表情をロンに向けている。

ロンはそのままバーノンをソファアームの上に放り投げた。

「バーノン!!」

ロンは彼の対面に座り、その瞳をジツと見つめた。

「テメエ、今年で何歳だ？」

「き、貴様……」

「何歳かって聞いてんだ!!」

バーノンは体を震わせた。90キロを軽く越える自分の体重をやすやすと持ち上げるなど尋常ではない。

彼の脳裏に魔法という文字が過る。あのおぞましい力が自分に向けられていると思ひ込み、恐怖を感じている。

「よ、四十八だ」

「その歳になって、やって良い事と悪い事の区別がまだつかねえつてのか？ おい!!」

「わ、わしは……」

「お前さん達の事はポッターさんから聞いてるんだけどよ、『マトモじゃない』って言ったらしいな？ お前の常識ではよお、十歳にも満たない子を物置に閉じ込める事がマトモな事なのか？ おい、どうなんだ？ バーノン!!」

「あ、あれは教育だ!!」

「虐待ってんだよ、テメエのやらかした事はな!!」

ロンは目の前の小机に拳を落とす。

「テメエにはテメエの事情があるんだろうけどよ、マトモな事だつてんならよお！ テメエのやってる事を胸張って世間様に公言出来るのか？」

「そ、それは……」

「聞いてやるから話せよ」

「……な、なにを」

「テメエがポッターさんにした仕打ち、もちろん一つ一つにちゃんとした理由があるんだろう!? 無えとは言わせねえぞ!! 一つ一つ、自分がやった事を言ってみやがれ!!」

「あ、あの子は異常なのよ!!」

答えたのはバーノンではなかった。ヒステリックな声でペチュニアが叫んだ。

「あ、あの子のせいで我が家が何度危機に陥ったか!! わ、わたし達はあの子を引き取りたくて引き取ったわけじゃないのよ!!」

「べ、ペチュニア……」

バーノンはたじろいだ。

「あの子は勝手に魔法界なんてイカれた世界に行つて、イカれた男と結婚して、勝手に死んだのよ!! それなのに無関係なわたし達に赤ん坊のハリーを押し付けてきた!! 迷惑なのよ!! あの子がマトモな子ならともかく、魔法で屋根に飛び乗ったり、ガラスを消したり!! そんな異常な事が起きる度にわたし達がどんな思いをしてきたと思つているの!? うちの子はダドリーだけなのよ!!」

「……テメエ」

ロンはペチュニアのあまりの言い草に頭が真っ白になった。

「ここまでの怒りを感じた事など生前にも無かつた事だ。」

「テメエ等は何でも人間か!?!」

「もういいよ!!」

怒鳴り声を上げたロンよりも大きな声でハリーが叫んだ。

「分かつてたよ!! 知つてたんだよ、そんな事!!」

泣きながら、彼は叫んだ。

「知ってたよ……。おじさんやおばさんが僕をどう思ってるか……。ダドリーにだって、何度も言われたよ！ 僕はこの家に居ちやいけな
い存在なんだって……」

その言葉を聞いて、ペチュニアは何故か目を見開いた。

自分が吐いた言葉をハリーに聞かれた事に動揺しているかのよう
だ。

「ポ、ポッターさん……。オ、オレは……」

ロンは青褪めた。

頭に血が上りすぎていて、自分が何をしでかしたのか分かっていな
かった。

「……出てくよ。もう、この家には戻らない」

そう言葉にした瞬間、ハリーの体から何かが離れて行った。

バーノン達には見えなかったらしい。ハリーも自分の事を自分で
見る事など出来ない。

ただ、ロンだけが気付いた。なにか、取り返しのつかない事が起き
てしまった事に。

「せ、清々する!! 始めからお前など引き取るのではなかった!! こ
の無駄飯ぐらいのクズが!!」

ロンは今になって気付いた。

自分が如何に甘い展望を抱いていたか。

話せば分かる筈だと心のどこかで思っていたのだ。

過ちを犯していた事を自覚させれば、彼らはハリーをきちんと家族
として愛する筈だと期待していた。

こんな言葉を聞かせるくらいなら、さつさと彼を連れて出て行けば
良かった。

「ポ、ポッターさん!!」

ロンは走り去っていくハリーを追いかけた。

ハリーは二階に登り、ヘドウィグが入られている鳥籠とトランク
を運んで来た。

その目からは今も涙がこぼれ続けている。

「す、すまねえ……」

謝ってどうにかなる問題ではない。

ロンの迂闊な行為はハリーとダーズリー家の関係を決定的に壊してしまった。

「……謝らないでよ」

ハリーは言った。

「最初から……、この家に僕の居場所なんて無かったんだ……。それだけの事なんだ……」

その言葉を言わせてしまった。

「……行きましょう。オ、オレは迎えに来たんだ。箒に乗ったり、庭小人をぶん投げたり……。い、いっぱい遊びましょうぜ!!」
「うん」

ハリーはいつものように笑ってくれなかった。

第二章 『秘密の部屋』

第二十六話 『ダンベル何キロ持てる?』

ハリーと共に隠れ穴へ戻って来たロンは庭を逆立ちしながら駆け回っていた。

「うおおおおお!!! ポッターさん!! こういう時は体を動かすんだ!!
いくぞおおおおお!!!」

「それどうやってるの!?!」

全力疾走で追いかけているのに逆立ちをしているロンに追いつけない。ハリーは混乱した。

「トレーニングだぜ!! 健全なる精神は健全なる肉体に宿るもんだ!!
今はとにかく鍛えるんだ、ポッターさん!!!」

「君、これ以上鍛える余地あるの!?!」

逆立ちでの全力疾走を終えた後、ロンはそのまま隠れ穴の外壁を登り始めた。

「ポッターさん!!! オレは、オレはあああああ!!!! クソツたれの馬

鹿野郎だ!!! すまねえ!!! 本当にすまねえ!!!」

号泣しながらゴキブリのように外壁をカサカサと登っていくロン。その後を必死に追いかけてやうとするけれど、いくらレンガに凹凸があると言っても数十センチ登る事さえハリーには困難だった。

「待ってよ、ロン!! 本当にどうやってるの!?!」

「うおおおおお!!!」

「ロオオオオオンン!?!」

なんと、ロンが屋根から地面に落下した。ハリーが大慌てで駆け寄ると、ロンは平気な顔で立ち上がった。

「次は重量挙げだ!! いくぞ、ポッターさん!!!」

「なんで無事なの!?!」

第二十六話 『ダンベル何キロ持てる?』

家の中に戻ると、ハリーはすっかりヘトヘトで椅子に座り込んでしまった。

「も、もうだめ……」

「ポッターさん!!」

グツタリするハリーにロンは慌てている。

「このおバカ！ アンタの運動量に普通の子がついていけないでしょう!!」

そんなロンにゲンコツを落としたのは彼の母のモリーだった。

「イツツウウウウ」

悶絶するロンにモリーは溜息を零した。

「話したくないみたいだし、深くは聞かないけどね。でも、あんまり無茶するようならそうもいかないよ?」

「……すまねえ、母上」

モリーはやれやれと肩をすくめるとキッチンに向かって行った。

「ロン、大丈夫?」

「モチのロンでさー」

ロンは立ち上がり、元気いっぱいだとアピールした。

「ロンって、本当に凄いよね。逆立ちしながら庭を走り回るなんて、普通は出来ないよ」

「そうでもないですよ！ 鍛えりや、誰でも出来る事です」

「そうかなあ……。だって、テレビで見るスポーツ選手でも出来そうにないよ?」

以前、ロンはハリーを殴ろうとしたクラブを容易く拘束した事があった。

ここに来る前、肥満体型のバーノンを片手で持ち上げたりもしていた。

ハグリッドみたいな巨漢ならともかく、自分よりも少し背が高くらしいのロンにあんな事が出来るのが不思議で仕方ない。

「まあ、ちよつとした裏技を使ってるんですけどね」

ロンは言った。

「裏技?」

「ポッターさん。筋肉トレについての知識はありますか?」

「ううん。あんまり……」

ハリーが言うと、ロンは服の袖を捲った。

服の中に隠されていたロンの腕は細いながらもしなやかで頑強な筋肉に覆われていた。

「すごい……」

ロンはあまり半袖を着ないし、ハリーに他人の腕をジロジロ見る趣味は無いから気づかなかったけれど、彼の腕はまさしく筋肉の塊だった。

「筋肉つてのは負荷を掛ける事で壊れるんでさ。そんで、壊れた筋肉を体は必死に直そうとする。それこそ、元の筋肉より強く強靱に！それが超回復って筋トレの基礎なんですよ」

ロンはいつもポケットに入れているミニチュアの本棚から爪の先サイズに縮めてある本を取り出して拡大呪文を掛けた。

それはマグルの世界のスポーツ医科学の本だった。

彼が開いたのは筋トレの理論のページで、そこにはロンが語った超回復の事も載っていた。

「この通り、通常は筋肉を休ませる為に時間を置く必要があるし、プロテインを確り摂らねえと効果は薄いんです。ところが、これはマグルの肉体に当て嵌まる理論であって、魔法使いの場合にはちいとばかり違うんでさ」

「どういう事？」

「ポッターさん。髪を切り過ぎた時とかに髪がすごい勢いで元に戻った経験とかありませんか？」

「……ある」

その時のバーノン達の反応を思い出し、ハリーは少し青褪めた。

「それこそ、魔法使いだけの特権なんですよ。魔法使いの平均寿命がマグルと比べてべらぼうに長いのも、魔法力が魔法使いの肉体を保護し、癒やすからなんです。癌のような細胞分裂のエラーも魔法力が発生を防ぐから魔法界に癌による死が無えように」

そう言っつて、今度は魔法界の医学書を取り出した。

「この魔法使いの特性を活かして筋トレすると、どうなると思います？」

「え？ えつと……、壊れた筋肉はすぐに元に戻る……？」

「そうです！ しかも、超回復は免疫力なんかと同じく人間の肉体が自らを守る為の本能的な機能ですからね。魔法力がその機能を阻害する事はなく、むしろ増幅させるんですよ。だから、マグルがやるよりも圧倒的な効率で筋力を増強出来るんです！ 加えて、本来なら若い年頃で筋肉をつけ過ぎると成長障害が発生する可能性もあるんですが、そこも魔法力が解決してくれます」

「そ、そうなんだ」

ロンの話を聞いていると魔法力の便利さがインチキ染みているように思えてしまう。

「それで、自分で色々試して本を出してみたんですよ」

「本!?!」

ロンが新たに取り出したのは『必見！ 魔法スポーツ医学における魔法筋トレ理論!』という本だった。

著者の所に本当にロナルド・ウィーズリーと書いてある。

「書いたの!?! 本を!?! ロンが!?!」

ハリーはガビーンとなった。

「実は魔法界でまだ専門のスポーツ医学の研究は未発展だったんですよ。どうやら、意図して鍛えなくても必要な時に必要なだけの筋力が労せず得られてしまうみたいでして」

例えば、クイディッチだ。箒に乗るための筋力やクアツフルを投げる為の筋肉などは幾度かの反復練習ですぐに仕上がる。

その為、必要とされる事が無かったというのが実情だ。

「けど、興味を持つてくれる人もいるんですよ。印税でガツポガツポとはいきませんが、それなりな収入源になってるんですよ」

いつもながらロンは予想の斜め上をいく。

ロンの本をペラペラと捲ってみると、かなり専門用語も多かったけれど、それら一つ一つに丁寧な解説が添えられていて実に読みやすかった。

挿絵もあり、マグルの学校に通っていた頃に見た人体模型の写真が載せられていて、それぞれの筋肉の名前と役割、効果的なトレーニン

グ法などが記されている。

最後のページには協力者の名前としてチャーリー・ウィーズリーやルドビッチ・バグマンといった名前が載っていた。

「この人は誰？」

「バグマンの旦那ですね。魔法ゲーム・スポーツ部っていう魔法省の部署の一つの部長ですよ。チャーリーが懇意にしまして、本を出したのも旦那の提案に乗った感じですね。自分なりにまとめた資料を高く評価してくれまして」

「このトレーニングをやったら、ロンみたいになれるの？」

「ええ！むしろ、オレが実際にやったトレーニングをよりブラッシュアップしてるんで、オレ以上の肉体を得る事も可能ですよ！興味、出てきましたかい？」

「う、うん。ちよつとだけ」

「よっしゃ！じゃあ、早速トレーニング再開だぜ！」

「い、今から!？」

くたくたのハリーを引き摺り、ロンは庭を駆けずり回った。

「肺活量の強化も魔法使いなら簡単なんですよ！重要なのは目的意識でさ！なにしろ、魔法は精神と密接な関係にありますからね！

大きく口を開いて、大きく息を吸って、大きく息を吐く！ 苦しい！

辛い！ そう強く思う事で魔法力はオレ達の肺活量を強化してくれまーさー！」

「ひい！ひい！」

ハリーは息も絶え絶えだ。

「健全なる肉体には健全なる精神が宿り、健全なる精神は健全なる魔法力を生み、健全なる魔法力は健全なる肉体を育てる!! 魔法力を鍛えるにも、筋トレが最適なんですよ!!」

「は、はひいひい」

苦しい。辛い。でも、全然肺活量が増加した気がしない。

「さあ、次はベンチプレスに挑戦しましょうー！」

そう言って、ロンはどこからかベンチプレスマシンを取り出した。「どっから出したの!？」

「ポケットに入れてたんですよ。まあ、これはハリボテですが、これに変身術をちよちよいのちよいと!」

魔法って便利。ハリーは変身術によって本物になったベンチプレスを見てほえーっとなった。

「ささっ! 横になって! まずは棒だけで大丈夫です!」

「ぼ、棒だけ? これ、意味あるの?」

「大丈夫! オレを信じてくださいえ! 視線はバーの真下に! 握る手首は真っ直ぐに! 曲げすぎると怪我しますからね!」

ロンのアドバイスを聞きながら、ハリーは息を吸い込みつつバーを下げ、息を吐きながらバーを持ち上げた。

重りを取り付けていないのに、バーを上げ下げするだけで腕がプルプルしてくる。

「ロ、ロン。これ、すつごくキツイよ?」

「大丈夫! ポッターさん、良いフォームですよ! さあ、ワン、ツー!」

「そ、そう……?」

「あなたなら出来ます! いいですよ! ナイスマッスル! さあ、もう一回! 限界を超えた所に筋肉はありますぜ!」

「ひいひいひい……。これ、すつごくハードだよ!」

3セット繰り返し、ハリーはバテバテになった。

もう立ち上がる余力すら残っていない。

「よく頑張りましたね! バーの重さは10キロにしてあるんですよ。8回、5回、3回と! 初めてにしては上出来ですぜ、ポッターさん!!」

「つ、次はロンの番だからね!!」

ハリーは自分ばかり苦しい思いをしているのが納得出来なかった。

「もちろんでさ!」

そう言っつて、ハリーを抱き上げると近くに敷いたシートに寝かせ、ロンはハリーが使っていたバーに重りを取り付けていく。

そして、上着を脱ぎ去った。

「うわぁ……」

頭となったロンの上半身はまさに鋼だった。

腹筋は見事な6LDK。背中には鬼神が宿っている。ちよつと気持ち悪い。

「……ロンはそんなに鍛えてどうするの？」

「魔法は結構万能ですが、それだけだともならない事態つても起こり得るのが魔法界です。二年生になったら箒を持ち込めますからね。いよいよ禁じられた森を含め、本格的な大冒険がスタート出来ませ！」

そう言いながら、ロンは60キロの重りを取り付けたバーで10回3セットを涼しい顔のまま終わらせてしまった。

ロンが事前に用意していたバナナ味のプロテインを飲み、その後はフレッドとジョージがゲームに誘いに来るまでのんびりとシートの上で寝そべりながら空を眺めた。

いつの間にか、ダーズリー邸を出た時の嫌な気分や未来への不安はかき消えていた。

「……つかれたー」

そんな事に思考を割く余裕などハリーには残っていなかった。

第二十七話 『ジニー・ウィーズリー』

ハリー・ポッター。生き残った男の子。兄さんの親友。

彼の姿を見た瞬間、わたしの全身を衝撃が貫いた。

カラスの濡れた羽のように美しい黒髪、エメラルドのような緑の瞳、物憂げな表情。

そのどれもがわたしにとってどストライクだった。

「か、かつ……いい……」

話しかけたい。仲良くなりしたい。あわよくばお付き合いしたい。

そう思うのに行動出来ない。自分はこんなにも臆病だったのかと驚くばかりだ。

何か切っ掛けが欲しい。些細な事でいい。だけど、ロンには頼れない。何年か前、ビルが何をトチ狂ったのかロンに恋愛相談を持ちかけて、見事に玉砕した事件をわたしは忘れていないのだ。

ロンは笑った、わたしも笑った、家族全員大爆笑した。そして、ビルがマジグレして、その話は我が家のタブーと化した。あの喜劇を繰り返してはいけない。おっと……、悲劇だったわね。

「……えっと、ジニーだよわね？」

飛び上がりそうになった。物陰からコツソリとハリーの横顔を見つめていたら、彼に気づかれてしまった。

急に話しかけられて、頭の中はパニック状態だ。今の状態で口を開いたら何を口走るか分かったもんじゃやない。

わたしは慌てて逃げ出した。逃げ出してから、自分の行動が彼の目にどう映ったのかを想像して項垂れた。絶対に変な子と思われた。最悪だ。死にたい……。

「うううう……」

モタモタしている暇なんてない。

ロンから聞いた話だと、彼らの周りに浮ついた話は一切ないらしい。

だけど、あんなに素敵なもの。生き残った男の子というネームバリューもある。一年生の時は様子見に徹していただけで、彼を狙っ

ている女は必ずいるはずだ。

約一ヶ月半の夏休みでどうにか距離を詰めておきたい。

「……………こういう時は」

第二十七話『ジニー・ウィーズリー』

パーシー・ウィーズリーはペットのネズミに餌を上げていた。

スキヤバーズという名前で、幼い頃に家の中を徘徊していた彼をパーシーが見つつけてペットにしたのだ。

一見すると普通のネズミのようだけど、普通のネズミは二年で寿命を迎えるものだ。ところがスキヤバーズはもう二年以上もの間、パーシーの部屋のケージで回し車を回し続けている。

特に魔法力を発揮した事は無かったけれど、彼が生きていてくれる事はパーシーにとって喜ばしい事だった。

監督生に就任した記念にヘルメスという名の美しいフクロウを買ってもらい、スキヤバーズは弟の誰かに譲ろうかと思った事もある。けれど、弟達は誰も彼もがアグレッシブなタイプでふとちよネズミが今よりも幸福になる未来が想像出来なかった。

「……………ジニーは喜ばないだろうしね」

末の妹は譲ろうとしても、そもそも受け取ってくれないだろう。

彼女が愛するのはパフスケインのような愛らしい生き物であって、ドブネズミは愛玩対象外だ。

「おっと、これ以上はダメだよ。食べ過ぎだ。今日はもうちょっと回し車を回すんだよ、スキヤバーズ」

もつともつとせがむような仕草をするスキヤバーズに苦笑しながら、回し車を指差した。

スキヤバーズは素直に回し車を回し始めた。結構賢いのだ。

「パーシー!!」

いきなりの大声にスキヤバーズは回し車から落っこちてしまった。

「ジ、ジニー？ どうしたんだい？」

目を白黒させるパーシーにジニーが詰め寄る。

「聞いたんだけど、パーシーはペネロピーっていう人とお付き合ってるのよね？」

「ほあ!?!」

家族にバレないよう慎重に隠していた秘密を妹に知られていた。パーシーは動揺のあまりスキヤバーズのケージをガタガタと揺らした。

スキヤバーズはチューチューと抗議している。

「パーシー! わたし、真剣なの! 話を聞いて!」

「は、話って何を……?」

ジニーは母のモリーとそっくりだ。

愛らしい顔立ちなのに、ジロリと睨む眼光はとても鋭い。

「わ、わたし、ハリーとお付き合いしたいの!」

「ハリーと?」

パーシーは途端に微笑ましい気分になった。

弟達はいつまで経っても花より団子というタイプだけど、妹は彼らよりも一足早く思春期に入ったらしい。

「パ、パーシーはどうやって、ペネロピーとお付き合い出来たの?」

「そ、それは……」

パーシーは赤くなった。恋人との馴れ初めを妹に語るのは抵抗が大きかった。

「お願い! パーシーしか頼れないの! フレッドやジョージはあんなだし、ロンもあんなだし!」

酷い言われようだけど、パーシーは彼らをフォロー出来る言葉を見つけられなかった。

彼らは実際あんなんだ。

「……えっと、ジニー。でも、君って、ハリーと話した事あるのかい?」
パーシーが問い掛けると、ジニーは唇をキュツと締めた。

思い返せば、ジニーはハリーの顔を見る度に逃げ出していた。人見知りなのかと思っていたけれど、どうやら違ったらしい。

「ジニー。僕から出来るアドバイスは一つだよ。勇気を持つんだ」

「……勇気」

「そうだよ。君も今年からホグワーツに通う事になるんだ。ハリーと同じ寮に入りたかったら、尚の事勇気を示さないといけないよ!」

ジニーは俯いた。

「……わたし、がんばってみる」

絞り出すような声だった。きつと、いろいろな感情と戦っているのだろう。

パーシーは彼女の頭を優しく撫でた。

「うん。がんばれ、ジニー」

「ありがとう、パーシー。やっぱり、相談して良かったわ」

ジニーが部屋を出て行くと、パーシーはペネロピーと撮った写真を引き出しから取り出した。

監督生の就任パーティーの時のものだ。各寮の監督生が集まって、ささやかなパーティーを開き、その時に撮影した。

あのパーティーが切っ掛けで話す機会が増え、いつしか惹かれ合うようになった。

「……ペニーに手紙でも書こうかな」



ハリーは戸惑っていた。

ロンが人差し指一本で逆立ちしながら腕立て伏せをしている事にはない。もうその程度では驚かなくなっていた。

フレッドとジョージが鏡合わせのように動きを合わせる特訓をしている事にでもない。今度、リー・ジョーダンに見せるネタの練習らしいと説明を受けている。

戸惑っているのは目の前でジニーがジッとハリーを見つめているからだ。

何度も口をもごもごさせ、目元には薄っすらと涙が浮かび始めている。

「……ジニー？」

ハリーは少し膝を曲げて、目線を彼女に合わせた。

すると、ジニーは目を大きく開き、そして、声を震わせながら言った。

「ハ、ハリー……」

「どうしたの？」

ハリーは辛抱強く彼女の言葉の続きを待った。

「あ、あの……い、わ、わたし……、その……」

彼女は狼狽え始めた。それは肝心な事を忘れていたからだ。

——何を話すか考えてなかった!?

話しかける事ばかり意識し過ぎて、手段と目的が入れ替わっていた。

話の続きを待ち続けているハリーに対して、ジニーは泣きそうだった。

「……ポッターさん！ ジニーは一緒に遊びたいんですよ」

見るに見かねて、ロンは助け舟を出した。

彼は妹の初恋に大分前から気付いていた。けれど、迂闊に口を挟むとビルの二の舞になるかもしれないと思い、口を噤んでいた。

「そうなの？」

「は、はひー！」

噛んでしまった。ジニーは穴があいたら入りたいと思った。

「じゃあ、何をしようか？」

けれど、ハリーは気にした素振りを見せなかった。

僅かな時間でジニーはハリーが類まれな優しさを持った男性である事に気付いた。

ますます好きになってしまい、心臓は高鳴り続けている。

「そうだ！ ちょっとした探検に出かけてみませんか？」

「探検？」

「ええ、近くに景色のいい森がありましたね。森を歩くつてのは心身に良いものですからね」

ロンにしてはナイスなアイデアだとジニーは心の中で親指を上げた。

あの森には何度か行った事があるから、ハリーに色々と教えてあげる事も出来るかもしれない。

彼に感心されたい。褒めてもらいたい。意識してもらいたい。

ジニーはいろいろな想いを胸に秘めながら頷いた。

「い、行きましよう！ すごくいいところなの」

「そうなんだ。じゃあ、行こうか！」

◆ ジニーはその場で踊り出した気分だった。

隠れ穴があるデヴォン州オツタリー・セント・ポールから歩く事一時間あまり。

そこはダートムーアと呼ばれる湿地帯で、ウイストマンズウッド 太古の森という神秘的な森が広がっている。

「ダートムーアはかの有名なシャーロック・ホームズ縁の地でもあるんですよ。バスカヴィル家の犬の舞台こそ、ここダートムーアなんです」

「シャーロック・ホームズなら僕も知ってるよ！」

シャーロック何某について知らないのはジニーだけだった。

疎外感を感じさせる話を振るロンに彼女は恨みがましい視線を向ける。

すると、ハリーはジニーがシャーロックを知らない事に気付いた。そして、疎外感を感じている事にも。

ハリーはロンを一瞥したけれど説明を始める気配は無い。

彼は使命感を抱いてコホンと咳払いをした後にジニーを見た。

「シャーロック・ホームズはマグルの推理小説なんだよ。推理小説って、魔法界にはあるのかな？」

「分からないわ。推理は分かるけど、推理小説って？ どういう内容なのかしら？」

魔法界には小説がある。けれど、そのジャンルの中に推理小説はない。

陰謀渦巻くサスペンスはあっても技巧を凝らした殺人や盗みなど、魔法使いなら杖を振るだけで更に完璧な犯罪を行えてしまうからだ。

なんでも出来る魔法使いにとっては手間暇掛けて不便な犯罪を行う推理小説の犯人はドラゴンよりもファンタジーな存在だった。

ジニーもそういう一般的な感性の感想を抱いたけれど、ハリーの一生懸命な表情を見ると無粋な事を口にする気にはならなかった。

彼はシャーロック・ホームズについての知りうる限りの情報を彼女

に教えた。それは感心されたいとか、相手が知らない事を知っている優越感に浸っているのではなく、純粹にジニーが疎外感を感じずに済むようにと願ったの事だった。

その想いは彼女にも伝わっている。彼の比類なき優しさに包まれて、ジニーはますます彼の事が好きになった。もう十分過ぎるほど愛している筈なのに、愛に終わりが見えない。その事に彼女は戦慄を覚えたほどだった。

「見えて来ましたぜ！」

二人だけの世界に異物が紛れ込んでくる。ジニーがジロリと睨みつけるとロンは苦笑した。

「見てください、ポッターさん。あれこそがウイストマンズウッドです」

そこにはハリーが想像していたよりも何倍も鬱蒼とした森が広がっていた。

第二十八話 『ドビー』

何もかもが緑だ。樹木の幹は苔で覆われ、しなだれる枝にも葉を茂らせている。地面も青々としたシダで覆われている。葉のフィルターを通して、光や空気までも緑に見える。

絡み合うナラの木は得体の知れない怪物のように見えて恐ろしい。

「どうです？ ウィストマンズウッドです！」

「……なんか、すごい所だね」

ハリーはウィストマンズウッドの想像を絶する神秘的な空気に圧倒されていた。

ここはまさに異界だ。迷い込んではいけな場所だと本能が警鐘を鳴らしている。

「だ、大丈夫なの……？ ここって……」

「大丈夫よ！」

ジニーは不安そうなハリーを励ますように力強い口調で言った。

「わたし達、幼い頃からよく来ていたもの！ マグルが遠足に来る事もあるの！」

「そ、そうなの？ なら、平気なのかな……」

そう言いつつも、ハリーは不安を拭い切れていない様子だ。

「ポッターさん、ドルイドって言葉は知ってますか？」

「ドルイド？」

「なにそれ」

ジニーも知らないようだ。二人は顔を見合わせた。

「ドルイド。遙か昔、それこそ1000年以上も前の事ですがね。魔法使いはドルイドと呼ばれていたんですよ。ここはそのドルイドが神聖な儀式を行っていた地でもあるんです」

この事をロンが知ったのは四年も前の事だった。

生まれ変わった世界の事を知りたかった。魔法使いの事を知りたかった。ウィーズリー家の事を知りたかった。

たくさんの本を読み、その中でウィーズリー家のルーツを見つける事が出来た。

この国は神聖ローマ帝国、ゲルマン人、アングロ・サクソン人など様々な民族による征服を受けて来た。

苦難の時代、ドルイドを指導者として崇めていた民族がいる。彼らを称する名はいくつかある。最も有名なのは古代ローマの言葉で未知の人を意味するケルトだろう。

嘗て、ギリシャやローマの人々は彼らを背が高く、赤みのかかった髪をした色白人々と評したらしい。

それはウィーズリー家の特徴と非常に近いものだ。恐らくは彼らこそウィーズリー家の祖先なのだろう。

「他にもグリムの伝説が生まれた地でもあるそうです」

「グリム？」

「……それって、あれでしょ？ ビリウスおじさんが見たって言う……」

ジニーは青褪めている。ハリーは心配になった。

「大丈夫？」

声を掛けると、途端に血色が良くなった。

「え、ええ。あ、あれなのよ。グリムは死の前兆と呼ばれているの。ビリウスおじさんが見たって言う……、その24時間後に死んじゃったの」

彼女の話聞いて、ハリーは寒気を感じた。

「や、やっぱり、帰った方がいいんじゃない……」

「大丈夫ですよ。あくまでも伝説の発祥の地というだけですからね。現れる時はどこにでも現れるのがグリムですから」

ロンはアツサリした様子で言った。

「シャーロック・ホームズの話をしたでしょう？ バスカヴィル家の犬もこの森の逸話から連想されたものなんですよ。他にもシェイクスピアがマクベスの作中で言及していたりもします。グリム、ブラックドッグ、あるいはヘルハウンド。14世紀頃、その最初の目撃例がこの地だったという話なんですよ」

不吉な話をしながらどんどん森の奥へ向かっていくロンにハリーは慌てた。

「ちよ、ちよつと、ロン！ あんまり奥へ行ったら危ないんじゃない!?」

「大丈夫ですって!」

ハリーは迷った。ロンを放っておく事は出来ないけど、ジニーを連れて行くのは危険だと思った。

「ジ、ジニー。君、一人で隠れ穴に戻れるかい？ 僕、ロンを連れて帰ってくるよ」

「ハリー、わたしなら平気よ」

ジニーは勇敢に言った。

「でも……」

「わたしは何度もこの森を歩いた事があるの。でも、慣れないとすぐに迷ってしまうわ。ここはまさに樹海だもの。あなたにはわたしが必要な筈よ。違うかしら?」

「……ジニー」

ハリーは森を見た。ロンの姿はすでに遠い。あまりモタモタしていると本当に見失ってしまう。

ジニーの言う通り、一人で彷徨えばすぐさま遭難してしまう事は目に見えている。

深く溜息を零し、それからすまなそうにハリーは言った。

「力を貸してくれる?」

「もちろんよ!」

力強く微笑むジニーにハリーは息が止まりかけた。

その時になって、彼は彼女がとても可愛らしい女の子である事に気がついたのだ。

「い、行こうか……」

「ええ」

ジニーはそつとハリーの手を取った。

「逸れないようにしなきゃ」

「そ、そうだね……」

彼女の言葉にドギマギしながら彼は頷いた。

「待ってよ、ロン!」

「待ちなさいよ、兄さん！」

二人は手を取り合ったままロンを追いかけるのだった。

第二十八話『ドビー』

ダーズリー家との決別はハリーの心に小さくない穴を空けた。

けれど、その穴は瞬く間に埋められてしまった。

「ハリー！ わたし、あなたに食べて欲しくてサツマイモのパイを作ったのよ！」

「すごい！ 美味しそうだね！」

最初の一步こそ中々踏み出せずにいたけれど、その一步を踏み越えた時からジニーのアクセルは全開だった。

ブレーキなど踏む気はなく、そもそも取っ払ってしまったかのようだ。

彼女の猛アピールっぷりにモリーは呆れ気味で窘めようとするし、フレッドとジョージは面白がってちよっかいを掛けようと企んだ。

けれど、ロンとパーシーが二人の防波堤を自ら進んで買って出た。

ロンはハリーの心をジニーの愛が癒やしてくれるのではないかと期待しているし、パーシーは恋愛の難しさを知っていて、他人にちよっかいを出される事が如何に不快であるかも理解していたからだ。

「ハリー、ママにお使いを頼まれたから後で一緒に買いに行きましょうー！」

「うん」

正確にはお使いをさせてくれと頼み込んで来た娘の巧みな話術にモリーは舌を巻いた。

「それじゃあ、それまで一勝負といきますか！」

ロンはハリーの性格上、ジニーとばかり遊んでいるとそれはそれでロンや他のウィーズリー家の家族の事を気にし始めてしまうだろうと踏んでいた。

その為、適度にジニーからハリーを奪うようにしていた。その度に彼女から恨みの籠もった視線を向けられてしまうのはごく愛嬌だ。

魔法使いのチェスを間に挟んで、ロンは差し迫って来た新学期の事

を話そうと思った。

「どうですか？ いよいよ、秘密の部屋探索に乗り出してみませんか？」

「えっと、サラザール・スリザリンが遺した隠し部屋だよね？ うん。いいと思うよ」

ロンが前々から秘密の部屋を探してみたいと考えていた事を知っているハリーは快諾した。

その時だった。

バチンという音と共に奇妙な生き物がチェス盤の上へ現れた。

「な、なりません!!」

「へ？」

「なっ!？」

ハリーとロンは目を見開いた。

異常が日常の魔法界においても、それは思考を停止させるほどの異常だった。

ロンは慌てて机を飛び越え、ハリーを背中に庇った。杖を引き抜き、臨戦態勢を整える。

「ロ、ロン……………」

ハリーが戸惑うように名前を呼び掛けても、ロンは目の前の異形から視線を逸らさなかった。

彼はその生き物の正体を知っている。本来ならばそこまで警戒する必要のない生き物だ。けれど、その生き物がハリーに向ける視線は尋常ではなかった。

「……すまねえな。出来れば傷つきたくねえ。屋敷しもべ妖精が何をしに来たんだ？」

「屋敷しもべ妖精……………」

「魔法使いの下僕として仕え、主人に絶対の服従を誓う妖精ですよ」

ロンは油断なく屋敷しもべ妖精を睨みつけている。

「答えてくれねえか？ 何の為に、ここへ来た？」

「ひぐつ…………、ド、ドビーは…………」

屋敷しもべ妖精は酷く怯えた様子を見せた。その姿を見て、ハリー

は可哀想に思った。

「口、ロン。杖を向けられたままじゃ話せないよ……」

「ポッターさん。屋敷しもべ妖精は主人に対して絶対服従だが、それ以外の魔法使いに対してまで絶対とは言い切れないんですよ」

「で、でもー」

「以前、屋敷しもべ妖精の話聞いて興味を持ちましてね。彼らの事を本で読んだ時、その能力も調べました」

ロンは言った。

「強いですよ、彼らはね。見た目とは裏腹に」

その言葉を聞いて、闇の魔術に対する防衛術の授業でのクイレル先生の言葉を思い出した。

—— 偏見で差別する事は良くありません。

—— ですが、事実から目を逸らしてもいけません。

—— いいですか？ 相手が何者であるか、その事をキチンと見極めるのです。

—— その者の危険性から目を逸らすのではなく、その者の危険性と向き合い、その上で対等に接するのです。

相手は酷く怯えている。けれど、ロンは彼を強いと言った。これほどまでに警戒せざるを得ない程の脅威なのだ。

彼を哀れんで、クイレル先生の教えを忘れていた。

相手は明らかに魔法生物だ。どんな見た目であっても油断してはいけない。

「……でも、何もしてないよ」

「ポッターさん……」

ハリーはロンが杖を握る手を押さえた。

「彼は何もしていないよ、ロン。危険性と向き合い、その上で対等に接するんだ。杖を向けたままじゃ、対等じゃないと思う」

「……そうですね」

ロンはゆっくりと杖を下ろした。

それでも警戒を緩めた様子はない。今も鋭い眼光を屋敷しもべ妖精に向けている。

「……僕が話すよ」

ハリーは屋敷しもべ妖精に向き直った。

「君、名前は？」

「……な、なまえ？ わ、わたくしめのなまえでございますか？」
「うん」

どうした事だろう。屋敷しもべ妖精は大粒の涙を流し始めた。

「ど、どうしたの!？」

「……わ、わたくしめのなまえを聞いてくださった。ハ、ハリー・ポッターが……、わたくしめのなまえを」

ハリーは困惑した。彼の言葉の意味がちつとも理解できなかったからだ。

「ご、ごめんよ。僕、君の気に障るような事を言っちゃったの?」

「き、きに障る!?! とんでもありません! ドビーは……、ドビーは名前に興味を抱いて貰えたことなどございせん! ただの一度も! 魔法使いから……、まるで対等みたい……!」

その言葉にロンは大きく目を見開いた。

下僕である事が存在意義とされる存在。それが如何に歪であつても、そういうモノなのだろうと思ひ込んでいた。

だって、それがそういうモノでは無かつたとしたら、この世界はあまりにも歪過ぎる。

奴隷である事を望まぬモノが奴隷として生を受ける。それはあまりにも残酷過ぎる。

「ドビーはお伝えにきました! ドビーは偉大なる御方をお護りする為に来ました! 警告しに参りました! ハリー・ポッターはホグワーツに戻つてはなりません!」

「ど、どういう意味……? えっと、ドビー……?」

「ハリー・ポッターは安全な場所にはいないといけません! あなた様は偉大な人! 優しい人! 失うわけには参りません! 最も強き守りは失われましたが、それでもホグワーツに戻るよりはずっと、ここは安全なのでございます!」

「最も強き守り……? き、君は何を言つてるの……?」

「罨です！ ホグワーツ魔法魔術学校で世にも恐ろしい事が起こるよう仕掛けられた罨でございませう！ その罨にあなたは飛び込もうとなされていたのです！」

そう言つて、ドビーはロンを睨んだ。

そして、ハツとした様子で自分の頭を机の角にぶつけ始めた。

「ど、どうしたの!?!」

「ドビーは悪い子！ ドビーは悪い子！」

「ドビー！」

ハリーは慌ててドビーを羽交い締めにした。

「ああ、タンコブが出来てる！ なんて、いきなり……」

ハリーに抱き締められたドビーは再び大粒の涙を零した。

「ドビーは自分にお仕置きをしたのです。そうしなければならぬのです。言つてはいけない事でした。主人に背く行為でした。それでもドビーは……」

「そんな……」

自分で自分にお仕置きをしなければいけない。それはあまりにも理解し難い事だった。

「ドビー」

ロンがしゃがみ込んでドビーに視線を合わせた。

「罨とは何の事だ？」

「ロン！」

ハリーは彼を咎めた。彼の痛々しい姿を見たら、これ以上追い詰める気になんてなれない。

「ポッターさん。彼は主人に背いてまで忠告に来たんです。それが屋敷しもべ妖精にとって、どれほどの覚悟を必要としているかは見ていて分かる筈ですよ。だからこそ、彼の本懐を遂げさせるべきだ」

ロンはドビーに語りかけた。

「……ドビー。答えなくてもいい。今から、オレは想像を語る。間違っているなら首を横に振ってくれ。それだけでいい」

そう前置きをして、彼は言った。

「秘密の部屋が関係しているな。そして、屋敷しもべ妖精の主人とな

れるだけの力を持った魔法使いが関係している。恐らくは純血の一族だ。ヴォルデモート卿の崇拝者だろうな」

ドビーは首を横に振らなかつた。ただ、ギョロツとした大きな目を更に大きく見開いている。

「秘密の部屋。サラザール・スリザリンがホグワーツに隠した部屋。その部屋には恐怖が眠っているという。その恐怖が罨だろう。違うか？」

ドビーはますます目を見開いた。これ以上開いたら目玉がこぼれ落ちてしまいそうなほどだ。

首を横に振る素振りを見せないのは、これが正解という事なのだろうか。

「……ドビー。罨を仕掛けているのはお前さんの主人だな？」

「ええ!？」

ハリーは目を丸くした。

ドビーは目を左右に激しく揺らしている。

「ドビー、もういいぞ。犯人を特定する手段も見つけられた。お前さんのおかげでポッターさんは安全だ」

「ロ、ロン……? どういう事なの?」

ハリーにはチンプンカンプンだった。

「説明は後でしますよ。ただ、ドビーを帰らせないと、ここで説明を始めるとドビーが自分をお仕置きしないといけなくなる」

「……わ、わたくしめはほ、ほとんどなにも……、な、何故……」

「ドビー。そこは大して重要じゃない筈だぜ? ポッターさんはお前さんが教えたがっている危機について正確な情報を得られた。そして、対処法も見当がついた。つまり、もう何も問題ないってこつた」

「で、ですが、あの……」

「安心しな! ポッターさんはオレが守る! この命に替えても絶対に!」

燃えるような眼差しをドビーに向けながら、ロンは宣言した。

ハリーはなんだか恥ずかしくなった。

「……どうか、おねがいします」

そう呟くと、ドビーはバチンという音と共に姿を消した。

若干、ロンの尻に押し負けた感じがする。

「ロ、ロン……」

「ドビーはオレ達が秘密の部屋を探そうと相談していた時に現れました」

「う、うん」

「その時点で秘密の部屋が関係している事は明確でした。そして、ホグワーツでテロ行為を計画している人間がみだりに情報を外部へ漏らすとは思えません」

「あっ！」

「ホグワーツを舞台にした無差別テロだったとしたら、ドビーはダンブルドア先生の所へ向かうべきだった。けれど、彼はポッターさんの前に現れた。個人的な感情が理由かもしれませんが、犯人の狙いがポッターさんである可能性を視野に入れて問い掛けてみたところ、そっちが正解だったらしい。そうになると犯人の可能性が高い人物像は限られてくる……と、そういう感じで推理してみました」

「すごいよ!!」

ハリーは目を輝かせた。

「まるでシャーロック・ホームズみたいだったよ！」

「そ、そうですかい？」

ロンは照れた。

「それで、犯人を特定する手段って？」

「簡単ですよ。他の屋敷しもべ妖精に聞けばいいんです。彼らには彼らのネットワークがありますからね。ドビーという屋敷しもべ妖精が働いている家はどこかを尋ねれば、それが犯人の根城というわけですよ」

やっぱり、ロンはすごい。ハリーは改めて思った。

例えば、ホグワーツで何が起きたとしてもロンがいれば大丈夫だ。

「ドビーとも約束しましたが……」

ロンはハリーに熱い視線を送った。

「あなたの事は死んでも守りますよ」

「ロン……」

どうして、彼はこんなにも恥ずかしいセリフを素面で言えるのだろうか？

ハリーは困ったように笑った。

「あんまり無茶はしないでよね」

その後、再びチェスの対局を楽しんでいるとジニーがやって来た。彼女がハリーを連れて行った後、ロンはドビーという名前を反芻していた。

「……マジかよ」

その名前を彼は知っていた。

——— 僕の屋敷にはドビーっていう屋敷しもべ妖精がいるんだ。

彼の父親の事も知っている。父のアーサー・ウィーズリーが事ある毎に愚痴を零しているからだ。

ルシウス・マルフォイは邪悪な男であり、ヴォルデモート卿の崇拝者の一人だったと……。

「坊っちゃん……」

第二十九話 『ルシウス・マルフォイ』

ハリーは思った。ウィーズリー家の人々ほどすばらしい人達はこの世界のどこを探しても他にいないと。

七月の最後の日、ハリーは誕生日を迎えた。

その日の朝は誰もが開口一番に彼の誕生を祝ってくれた。

「誕生日おめでとうございませう、ポッターさん！」

笑顔で誰もが祝福してくれた。

「誕生日おめでとう、ハリー」

パーシーは頭を撫でてくれた。

「誕生日おめつとさん、ハリー！」

「おめつとさん、ハリー！」

「おめつとおめつとおめつとさん！」

「誕生日おめつとさん！」

フレッドとジョージは何度も何度も祝いの言葉を掛けてくれた。

「ハリー、お誕生日おめでとう」

モリーは抱きしめてくれた。

「ハリー、誕生日おめでとう」

アーサーは抱き上げてくれた。

「ハリー」

ジニーは愛らしい笑顔をくれた。

「お誕生日おめでとう」

「……ありがとう、みんな」

ウィーズリー家は裕福ではない。その事にハリーは気付いていた。それでも彼らは一人一人がハリーの為に誕生日プレゼントを用意してくれた。

そして、ジニーとモリーは誕生日ケーキや豪華なディナーを用意してくれたし、フレッド達は家中を飾り付けてくれた。

ロンはハリーを退屈させなかった。ダートムーアの映画館に連れ出し、ハリーに生まれてはじめての映画鑑賞を楽しませてくれた。

ここは他人の家なのだと思わせる気など彼らにはなく、ハリーの

心に惜しみなく幸福と希望を注いでくれた。

ハリーは幸せだった。この幸せが永遠に続いて欲しいと心から願った。

第二十九話『ルシウス・マルフォイ』

夏休みも終わりが近づいている。

ハリー達はダイアゴン横丁に新学期の学用品を揃える為にやって来た。

あらかたの買い物を終えた後、一行はフローリッシュ・アンド・ブロッツ書店にやって来た。

「なんか、すごく混んでるね」

書店には長蛇の列が出来ていて、その列は店の外まで続いている。

「これですよ」

ロンはポケットから取り出した本に拡大呪文を掛けた。

それはギルドロイ・ロックハートの著書だった。

「彼のサイン会が開かれているんです」

ロックハートと言えば、ロンやハーマイオニーが愛読している本の作者だ。

書店のウィンドウには彼の自伝が飾られていて、そこには著者の顔が描かれている。真っ白な歯を煌めかせているハンサムな男性だった。

「へへっ！　楽しみですね。現代を代表する英雄の一人と会えるんですから！」

意気揚々と列に並ぶロン。その後ろにモリーもピッタリくっついてる。

彼女の手にもロックハートの著書がある。

「ママもロックハートの大ファンなの」

ジニーが言った。

「ジニーは違うの？」

「……前はね」

そう呟くと、彼女はハリーの腕に自分の腕を絡ませた。

「でも、わたしの英雄はここにいるもの」

ウツトリとした視線を向けて来るジニーにハリーはドキドキした。
「……すげえな、我が妹」

「信じられるか？ あいつ、まだホグワーツに入学してすらいないんだぜ」

フレッドとジョージはハリーをメロメロにしている妹の手管に戦慄している。

「ハリーはもう実質弟だよな」
「だな」

そう言つて見つめ合った後、二人はニヤリと笑った。

これまでは一応お客様として遠慮していた部分が無かったわけでも無かった。

けれど、弟になるなら遠慮は無用！

「おい、ハリー！ ロックハートを見に行こうぜ！」

「どんな奴なのか気になるしな！」

「う、うん！」

「あつ、ちよつと！」

素直について来るハリーを見て、フレッドとジョージはうれしくなった。

ロンはいろいろな意味で規格外過ぎて、あまり弟という感じがしなかったからだ。

ハリーは弟として百点満点だと二人は思った。

「おつ、あれか！」

四人が中に入ると列の先頭にロックハートの姿があつた。

彼のサインをもらいに来た人達に笑顔を振りまいている。

「あれ？ ハーマイオニー!？」

列の途中にハリーは見知った顔を見つけた。

「あら、ハリーじゃない！」

「ハリー？」

「あら！ ハリー！」

「あらまあ！」

ハーマイオニーだけではなかった。彼女のルームメイトのラベン

ダー・ブラウンやパーバティ・パチル、その双子のパドマ・パチルも一緒だった。

四人共、揃ってロックハートの自伝を大事そうに抱えている。

「君達もサインをもらいに？」

「そうよ！ ハリーも？」

「僕、違うよ。でも、ロンは後ろの方で並んでるよ」

「やっぱり！ わたし、彼が絶対この日を逃さない筈だと思ってたの！」

ハーマイオニーは嬉しそうに言った。

そんな彼女をラベンダー達は微笑まじげに見つめている。

ハリーはそんな彼女達の反応を見て、もしかしてと思った。

「……ハーマイオニー。ロンを呼んでこようか？」

「え？ いいわよ！ 折角並んでいるんだもの。サインを貰った後で会いに行くわ！」

「そっか」

彼女達と話していると腕を誰かに引っ張られた。

「……ハリー」

ジニーは寂しそうにハリーを見上げていた。

「あつ、紹介するよ！ ハーマイオニーとラベンダー、それにパーバティとパドマだよ。ハーマイオニーはロンとすごく仲がいいんだ」

「ちよ、ちよつと、ハリー！ 変な紹介の仕方をしないでよ！」

ハーマイオニーは真っ赤になりながら抗議した。

その反応を見て、ハリーはやはり思い違いではなかったのだと確信した。

「……ふーん。わたし、ジニーよ。ジニー・ウィーズリー。ロンの妹なの」

「まあ！ よろしくね、ジニー」

ハーマイオニーは両手でジニーの手を握った。

そんな彼女をジニーは見定めるように見つめた。

「いろいろ苦労すると思うけど、がんばってね」

「へ？」

ハーマイオニーはポカンとした表情を浮かべた。

ジニーはニツコリと微笑むとハリーの手を取った。

「そろそろ行きましょう。わたし達は教科書を揃えなきゃ」

「う、うん」

ハリーとジニーが手を取り合う姿を見て、ハーマイオニー達は黄色い悲鳴をあげた。

そして、そんな彼女達の反応をジニーは横目でしっかりと観察していた。

その一部始終を見せられたフレッドとジョージは戦慄した。

「……あの中にライバルがいないか確認したっぽいな」

「牽制も兼ねてたっぽいな」

二人はハリーの背中を見つめた。

そして、彼の肩にポンと手を置いた。

「ハリー。君は今のままでいてくれよ」

「頼むぜ、マイ・ブラザー」

「フ、フレッド……？ ジョージ……？」

「そこどいて！」

ハリーが困惑していると、急に後ろから突き飛ばされた。

「うわっ!？」

「ハリー！」

咄嗟にフレッドが転びそうになるハリーを支えた。

「危ねえな！」

ジョージは突き飛ばした男を睨みつけた。

男はカメラマンらしい。

「日刊預言者新聞の写真だから！」

男はそう言い捨てた。

「それが何だつて言うんだ！ 謝れよ！ ハリーは怪我するところだったんだぞ!!」

フレッドは怒り心頭で怒鳴り声をあげた。彼はハリーに対して、若干過保護になり始めていた。

カメラマンが鬱陶しそうにフレッドを睨むと、その騒ぎを耳にした

ロックハートが顔を上げた。

「もしや、ハリー・ポッターでは！」

興奮した囁き声があがり、人垣がパツと割れて道を拓いた。

ロックハートはハリーの手を掴んだ。

「わわっ!？」

「ちよっ!？」

ハリーと手を繋いでいたジニーも引つ張られ、二人はあれよあれよという間に正面へ引き出された。

「おや、君は?」

ロックハートはそこで漸くジニーの存在に気付いた。

「なるほど! さすがはハリーだね! 英雄は女性のハートを射止めてしまうものだ。彼女は君のプリンセスというわけだ! 違うかい?」

「えっ!?! いや、あの……」

ハリーは咄嗟になんとやっていいか分からなかった。

そして、ジニーは泣きそうになっていた。こんな状況ではハリーが咄嗟に否定してしまうかも知れない。こんな大衆の前で否定されたらと思うと、彼女は恐怖した。

本心がどうあれ、ここで否定されるという事は大きな意味を持つ。彼女は Hogwーツに入学した後もハリーに否定された女というレッテルを貼られてしまう事になるのだ。

「おっと、ごめんよ!!」

その時だった。いきなりハリーとジニーは二人同時に抱き上げられた。そして、そのまま近くにあった脚立を足場に飛び上がられ、口フトのようになっている二階へ連れて行かれた。

「ロ、ロン!？」

「兄さん!？」

ハリーとジニーは目を見開いた。彼らだけではない。人間二人を抱えたまま二階へ跳躍する。そんな人智を超えた事態に直面した人々はポカンとした表情を浮かべている。

魔法がいくら万能だとしても、今の光景は常軌を逸していた。

「い、今のどうやったの!?!」

ハリーが叫ぶと共に一階で物が破裂したような音がした。

ジニーが恐る恐る下を見ると足場にした脚立が粉碎していた。

「魔法力の応用ですよ。実は魔法筋トレの新境地に最近辿り着きましたね」

「し、新境地……?」

「知ってますか? 杖はヨーロッパで発明されたもので、それ以外の地域では杖なし魔法が発展していません。まあ、杖に代わるものが開発された国もありますが、そうした文化圏の魔法理論をちよいと齧ってみましてね。そしたら、魔法力を気と捉えたら色々出来るんじゃないかと思っただですよ」

「気?」

「まあ、まだ完璧じゃないんですがね。今みたいな事を杖なしで出来るように研究中って所です」

ハリーは呆気にとられた。何度驚かされても、ロンはそれ以上に驚かせてくる。

「……しっかし、あれがロックハートなのか」

ロンは一階でポカンとしているロックハートを見下ろしながら呟いた。

「なんか、イメージと違いな……」

「ロン?」

しばらくすると一階でフリーズしていた人々も再起動を始めた。フレッドとジョージがこっそり脚立に修復呪文を掛けてくれたおかげで弁償する羽目にはならなそうだ。

「……まったく、騒がしいな」

そこに現れた……というか、居合わせたのはドラコだった。

「おお、坊っちゃん! 久しぶり!」

ロンが笑顔を向けると、ドラコは一瞬一階を一瞥した。

「……見てたんだが、あれってどうやったんだ?」

ドラコもさっきのロンの超人的な身体能力を目撃したらしい。

「おつ、興味ありますか! それならえつと……、あつた!」

ロンは少し離れた所にあつたスポーツ関係の書棚から一冊の本を取り出した。

それは彼が執筆した必見！ 魔法スポーツ医学における魔法筋トレ理論！だった。

「なんだこれ？ え？ ロナルド・ウィーズリー……？ は？」

ドラコは著者名を見て、ロンを見て、もう一度著者名を見て、ロンを見た。

「は？」

「オレが書いたんだ！」

「本を!？」

懐かしい反応だ。ハリーは彼の驚く顔を見て自分にもそんな時代があつたなあと感傷にふけた。

「魔法力の応用の一種なのさ。坊っちゃんも一冊どうだい？」

「……ふ、ふん！ ど、どうせお前の書いた本なんてくだらな……」

本を開いたドラコは黙ってしまった。

予想以上に本の内容がしつかりしていた為だ。

「ぐぬぬ……」

「どうだい？ 坊っちゃんも理想の肉体を得てみないか？ 鍛えりや

この通り！」

そう言つて、ロンはクヌート銅貨を取り出すと、その指の力だけで握りつぶしてしまった。

「ど、銅貨が……」

ドラコは青褪めた。

「坊っちゃん。魔法は万能だ。けど、最後に物を言うのはフィジカルだぜ！ どうだい？ オレが鍛えてやるぜ！」

そう言つて、彼は手の中でなにかの種のように小さく圧縮してしまったクヌート銅貨を彼の手に乗せた。ドラコはちよつと涙目になってプルプル震えている。

「……坊っちゃん」

ロンはドラコの肩に手を置いた。

「オレはいつだって坊っちゃんの味方だぜ。何があつてもだ」

「な、なんなんだよ……」

ドラコは困惑している。

「……騒がしいぞ、ドラコ」

すると、人混みの中から一人の男が現れた。

「おや……、おやおや……」

男はロンとハリーを見ると薄ら笑いを浮かべた。

「ロナルド・ウィーズリーくんではないか。それに君は……、ああ、間違いない。ハリー・ポッター……」

男はドラコととてもよく似ていた。父親だろうかとハリーは推理した。

「ロン！ まったく、肝を冷やしたぞー！」

そこにアーサーがやって来た。

「これはこれは……、アーサー・ウィーズリー」

「ルシウス……」

顔を合わせた途端、二人は険悪な雰囲気を漂わせ始めた。

「お役所はお忙しいらしいですな。あれだけ何度も抜き打ち調査を……、残業代はもちろん払って貰っているのでしょうか？」

そう呟くと、彼はジニーの大鍋に手を突っ込んだ。

「……そうでもないらしい」

彼が持ち上げたのは擦り切れた本だった。ここに来る前に古本屋で購入した変身術入門だ。

「なんと、役所は満足に給料を支払ってくれていないらしい。これではわざわざ魔法使いの面汚しになる甲斐がありませんなあ」

明確な悪意を持って叩きつけられた言葉にアーサーは顔を真っ赤にしている。

「マルフォイ！ 魔法使いの面汚しという言葉がどういう意味か、わたし達は意見が違うらしいな」

睨み合う二人の大人にハリー達はどうしたらいいか分からなかった。

「やめねえか!!!」

そう叫んだのはロンだった。

「大の大人が公衆の面前で何やってんだ!! みつともねえ真似をするんじゃないぜ!!」

「ロ、ロン……」

「……ロナルド・ウィーズリー」

アーサーはハツとした表情を浮かべ、ルシウスはロンをジロリと睨みつけた。

「相変わらず、忌々しい目をしているな。まともな親に育てられなかったせいかな、礼儀というものを知らないらしい」

「ルシウス、貴様!!」

アーサーはルシウスに飛びかかろうとした。けれど、その前にロンが割り込んだ。

「おい、ルシウス」

そして、ロンはルシウスに言った。

そのまま彼の足を蹴り、跪かせた。

「なっ……」

「なあ、ルシウス。人の親を愚弄するって事がどういう事か分かってやってるのか?」

頭を鷲掴みにして、ロンは恐ろしい形相で呟いた。

「坊っちゃんの手前だし、父上も売り言葉に買い言葉だったから流そうと思ったけどな。二度も三度も繰り返すならオレも対応を考えねえといけねえんだ」

「お、おい! ロナルド! 父上を離せ!!」

慌ててドラコがロンをルシウスから離そうとしたけれど、ロンの体に触れた途端に凍りついた。

まるで岩や鋼に触れたかのような感触だったからだ。引っ張ろうとしてもピクリとも動かない。

さつきクヌート銅貨を握りつぶしたときの光景が脳裏を過る。あんな万力で頭を掴まれたらどうなるかを想像して悲鳴を上げそうになった。

「ルシウス。なあ、ルシウス。やっていい事と悪い事つてもんがあるんだ。分かるよな? お前もいい年なんだからよお。ケジメは自分

でつけられるよな？ それともオレにケジメつけさせて欲しいのか？」

ルシウスは目を見開いていた。驚いているのではない。頭を締め付ける激痛に苦しんでいるのだ。

思考などままならない。生命の危機を感じるほどの強烈な痛みだ。

「聞いてんのか、オイ!!! ルシウスさんよお!!!」

「ロン!! もうやめなさい!!」

アーサーがロンを必死に引つ張った。大の大人が全力を出して、ようやくロンの体は動いた。

「……やっちゃまった」

それで正気を取り戻したらしい。ルシウスは頭を抱えながら真っ赤になってロンを睨みつけている。

「こ、この……、小僧が!!」

「すまねえな。大人気なかったぜ」

煽り文句として、これ以上のものはないだろう。

ルシウスは怒りのあまり口をパクパクさせたが言葉すら出てこない。

「この野郎!!」

すると、ドラコがロンを殴りつけた。

ロンなら避けられた筈なのに、彼は避けなかった。

けれど、彼は表情一つ変えていない。

「痛っ」

殴ったドラコの方が拳を押さえて痛がっている。

「坊っちゃん……。すまねえな」

ドラコに対しては心底すまなそうな表情で謝った。

「お、お前……。許さないからな」

その瞳に宿るのはいつもロンに向けているものとは明らかに違っていた。

憎しみだ。ロンはルシウスに親を愚弄する意味を問い掛けたが、その問い掛けが自分に返ってきた。

公衆の面前で父親にあのような真似をされて、平然としていられる

子などいない。

「すまねえ……」

そのまま、ルシウスとドラコは去って行った。

ロンは俯きながらジニーの下へ向かった。

「重いだろ。兄ちゃんが持つてやるよ」

そう言っつて、大鍋をジニーから取り上げると「先に出てる」と言っつて店を出て行ってしまった。

店内にいた客やロックハートは彼に奇異の目を向けている。

「ロン……」

ハリーは息を呑んだ。

さっきのロンの様子は尋常ではなかった。

親が愚弄されたのだから仕方ない事なのかもしれない。けれど、あのロンがそれだけであそこまで正気を失うとは思えなかった。

第三十話 『正体不明』

ロンが笑わなくなった。

「……どうしたらいいのかな」

ハリーはジニーとウイストマンズウッドを歩きながら話していた。「分からないわ。兄さんって、常人とはちよつと違うから……」

実の兄弟でも読み切れない男、それがロナルド・ウィーズリーだった。

「……ロン」

彼が落ち込んでいる理由は分かっている。ドラコとの関係が罅割れてしまったからだ。

悪態をつけていても、ドラコは明らかにロンを気にしていた。憎からず思っている事もハリーは気付いていた。

だからこそ、彼を見ると凄くイライラした。

「あんな奴のせいで……」

「ハリー？」

「……ごめん」

第三十話 『正体不明』

「明日からジニーもホグワーツだね」

パーシーの言葉を聞いて、取り乱しかけた。

「……あれ？」

気付いたら荷造りをしていた。ついさつきまで食事をしていた筈なのに。

不可解だ。まるで時が消し飛んだかのようだ。

「どうなってやがる……」

半月ほど前より以前の記憶は鮮明に残っている。

ところがダイアゴン横丁へ向かった日から今日に至るまでの記憶が虫食いだらけになっている。

「……オレの名はロナルド・ウィーズリー。父はアーサー、母はモリー、兄は上からビル、チャーリー、パーシー、フレッド、ジョージ。妹はジニー」

一つ一つ確かめてみるが、知識に欠落は見られない。部屋中の物の名称や仕組み、それに纏わる思い出も残っている。

やはり、ここ数日の記憶だけが失われている。

つまり――、

「オレは今、攻撃を受けている!」

相手はおそらくルシウス・マルフォイ。あの日、あの男が何か仕掛けたに違いない。

あの時の記憶を呼び起こす。だけど、曖昧だ。ビジョンは浮かんでいるのに、それがどういいう光景なのか理解出来ない。

「……何か、ある筈だ」

急いで部屋の引き出しを開ける。けれど、これと言ったものはない。

この異常事態に気付いたのは今が最初という事なのだろうか？

そんな筈はない。少なくとも、今朝の食事の時に違和感を覚えた。あの時点で、今と同じ結論に辿り着いていた筈だ。

その時の記憶も中途半端な所で抜け落ちている以上、それ以前にも辿り着いていた可能性がある。

そして、辿り着いていたなら行動している筈だ。

「その行動自体を阻害されたか？　あるいは隠滅を？　監視されている!？　あるいは……、まさか!」

オレは自分自身に杖を向けた。

「フイニー……っぐ」

何らかの魔法を掛けられているならば解呪すればいい。

けれど、その行動は途中で止められた。何者かの意思が今まさに働いている。

腕は徐々に杖をオレの胸から遠ざけていく。喉は呼吸を維持するだけで一言も発する事が出来ない。

操られている？　だが、服従の呪文じゃない。本に書いてあった効果と違う。認識すら出来ないレベルの操作系呪文が存在するのか？

分からない。だが、恐らくはこうして今までの行動も阻害されて来たのだろう。そして、何らかの手段で記憶を奪われたのだ。

どうする？　これまでにどれだけの方法を試してきたのかも分からない。そして、少なくともこれまでに試した行動はすべて失敗に終わっている。

「……………」

それでも諦めるわけにはいかない。これはルシウスが仕掛けた罠だ。そして、奴の本命はオレじゃない。

これは過程だ。結果ではない。オレが今諦めたら、この正体不明な攻撃がポッターさんにまで牙を剥く。そんな事はさせない。

過去のオレが確実に試しているであろう方法ながら、失敗する可能性が高く、今なら成功する可能性がある方法が一つある。

「オオオオオオオオオオオオ!!」

魔法筋トレ理論の研究の最中、オレは魔法力を体感する為の方法を模索してきた。

辿り着いた答えは呼吸だった。

学生時代、オレは空手教室に通っていた。その時、真っ先に教えられた物がある。それこそが息吹という呼吸法だった。

たかだか呼吸と侮るなかれ、この呼吸法を無意識下でも行えるようになれば様々な恩恵を受ける事が出来るのだ。

大きく息を吸い込み、限界まで吐き出す。その繰り返しによって体内に供給出来る酸素量が増加し、激しい運動の最中でも息切れする事がなくなる。

加えて、呼吸は内功の鍛錬に必要な不可欠な要素でもある。息を吐く時、いわゆるインナーマッスルに負荷が掛かり、その負荷を息吹によって増幅する事で鍛える事が可能なのだ。

また、深い呼吸は坐禅や瞑想と同じように心身をリラックスさせ、集中力を上げる事も出来る。

鍛錬の最中、この息吹を繰り返し返す内にオレは体内を巡る力に気付く事が出来た。

徐々に輪郭を持ち始めたものの、やはり目に見えない力を操る事は難しい。けれど、アフリカやアメリカの先住民族の魔法理論の本を自分なりの解釈を散りばめながら読み解く事で少しずつものになり始

めていた。

フローリシユ・アンド・ブロッツ書店で見せた跳躍は魔法力による身体強化の結果だ。

魔法とは心で操るもの。呪文とは心の所作。魔法力を操る術とは心にあり、意識を集中し、語りかけるように意思を向ければ、魔法力は答えてくれる。

「オオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!」

全身を魔法力が駆け巡る。記憶が欠落する前は出来なかつた筈の段階まで来ている。

例え、記憶や精神を支配されたとしても、鍛え抜いた肉体の感覚までは支配出来なかつたらしい。

今日に至るまでの失われた自分に感謝を捧げよう。

バチバチと音が鳴り響く。オレの中に入り込んでいたものをオレの魔法力で追い払う。

「オレから出ていきやがれええええ!!!」

バリバリと全身を稲妻の如く魔法力が駆け回り、やがて腕が自在に動くようになった。

正体不明の存在から、オレはオレ自身の支配権を取り戻した。

「フウウウウウウ」

意識が途切れる事はない。だが、油断は出来ない。

すぐに手近な羊皮紙を手を取った。今分かっている事を出来る限り書き記しておく必要がある。

羽ペンを取り出し、執筆に取り掛かろうとした時だった。

「ロンー! どうしたの!?!」

ポッターさんが部屋に飛び込んできた。

「ん?」

よく見ると、部屋の中が大変な事になっていた。

魔法力は物理的なパワーとなってオレの周囲の一切合切を吹き飛ばしていたらしい。

「……あーっと、魔法筋トレの新境地の実験をちよつと」

ポッターさんには明かせない。彼だけじゃない。他の家族や友人

達にもだ。

正体不明の存在、謎の攻撃、それらは恐らくオレ達の手に余るものだ。

解決出来るとしたら、それは今世紀で最も偉大な魔法使い、アルバス・ダンブルドア先生以外にいない。

「ちよいと手紙を書きますんで！」

「この状況で!？」

とにかく、今分かっている事をすべて書き記す。

秘密の部屋、ドビー、ルシウス・マルフォイ、フローリシユ・アン・ド・ブロッツ書店での一幕、記憶の欠如、謎の攻撃、正体不明の存在。どの情報が重要なのかすら分からない以上、とにかく書き殴る。

ハグリッドの小屋であの方と言葉を交わして分かった。あの方はオレなんかとは比較にならないほど優れた御方だ。

きつと、力になって下さる。

「ポッターさん！」

「な、なに!？」

「ヘドウィグを貸してもらえますか？」

「い、いいけど……」

「ありがとうございます！」



信じられん、あのガキ！

よもや、このボクの支配から自力で抜け出すとは……。

日記を移動させておいて正解だった。無駄な足掻きとと思っていたが、何度記憶を奪つても鍛錬を繰り返し、遂にはあの技術を体得してしまった。

純粋な魔法力の運用。あれはボクも研究していたものの一つだ。極めれば杖なし呪文や箒を使わぬ飛行術を使う事が出来るようになる。

ボクのように生まれ持つての才能があるわけでもなく、あの若さでこの領域に辿り着くとは……。

『……魔法筋トレと言ったか。よもや、マグルの学問や武術と魔法を

融合するとは……』

興味深くはある。彼の研究はボクの中からは決して生まれえない方向性のアプローチだ。

おかげで幾つかの応用を思いついた。

『まあ、今はいい。それよりも今後の事だな……』

彼から取り込む事が出来た魂はほんの僅かだ。

今のままでは覚醒状態を維持するだけで精一杯だ。

出来れば、もう少し彼の魂を取り込みたかった。彼の記憶から得られた情報は少なすぎる。

踏み込む前に退路の確保を優先しなければならなくなった為だ。そして、退路を築き上げた時には道を塞がれてしまった。

だが、退路として選んだ先はアタリだった。ロナルドの兄のパシーだが、彼自身はそれほど重要じゃない。彼のペットにこそ、ボクは興味を唆られている。

よもや、人間のペットとして生きる動物もどきの魔法使いが存在するとは思わなかった。

パシーの記憶を探っているが、彼はあのネズミを間違いないくちよつと寿命が長いだけの普通のネズミだと考えている。

最初は彼が人間を動物に変えて飼い殺すマッドなサイコパス野郎なのかと絶句しかけたものだ。

ネズミの方が人間に飼われる事を望む気狂いだったわけだ。

彼は心までネズミになったわけではなく、人間としての意識をキチンと残している。それが余計に不気味なのだが、とりあえずの手駒とするならば悪くない。

『気持ち悪いが、贅沢も言っていられないからね』

ロナルドから離れて数日、徐々にネズミを支配しつつある。

徐々にだが、彼という男の事がわかって来た。

名前はピーター・ペティグリュウ。男性。三十代らしいが定かではない。大きな罪を犯し、逃げ隠れしている最中のようだ。

今分かっているのはここまでだが、実に都合がいい。

要するに居なくなっても誰も気にしない人間という事だ。

『まずは情報収集だな』

今は西暦1992年らしい。ボクの最後の記憶は1943年だ。およそ半世紀が経過している。その間に世界はどうなったのか、ボクはどうしているのか、知るべき事は山程ある。

第三十一話 『分霊』

セブルス・スネイプはダンブルドアから渡された手紙を読んで目を見開いた。

「……校長、これは」

「由々しき事態じゃ」

手紙には秘密の部屋やルシウスの罫、謎の攻撃の他にもハリーの加護が消失した事を悟らせる内容が含まれていた。

「五十年前、秘密の部屋が開かれた事がある。当時の魔法省はハグリッドを犯人に仕立て上げたが、わしは他に犯人がいたと確信しておく。その者は後に罪を幾つも重ねるようになった」

「まさか……」

「ヴォルデモート卿じゃよ。恐らく、彼の分霊箱をルシウスが保管していたという事なのじゃろう。その分霊箱がミスター・ウィーズリーに対して何らかの攻撃を行使したようじゃ」

スネイプは言葉を失った。

「し、しかし、ウィーズリーのデマカセという事も……」

「あの子がユーモアと愚行を履き違えるような子だと思うのかね？」

加えて、あの子には知り得ぬ情報がなければ見えぬ点と点が像を結んでおる」

その言葉にスネイプは青褪めた。

「い、今、ヤツの家にはポッターも……」

「恐らく、今は大丈夫じゃろう」

ダンブルドアはスネイプの手元にある手紙を見つめた。

「魔法筋トレか……。嘗て、ヴォルデモート卿は似たような技術を研究しておった。あの者はホグワーツに通う前から魔法力を意図的に操る事が出来たからのう」

「こ、このような珍妙なものを……?」

「確かにユーモラスな響きじゃ。しかし、その内容は実に先進的でもある。同時に時代を逆行するかのようなものでもある。純粋な魔法力の運用は杖や言葉を封じられた状況下における危機的状況を打破

する為の唯一無二の手段と言えよう」

「つまり、この手紙はすべて真実であるか？」

「わしはそう確信しておく」

「馬鹿な……。ならば、何故こんな所で時間を浪費しているのですか!? 直ぐにでも隠れ穴に向かわねば！」

「言つたじやろう。隠れ穴は大丈夫じゃ」

「な、何を根拠に……」

焦燥に駆られるスネイプに対し、ダンブルドアはあくまでも冷静な態度を崩さなかった。

「ミスター・ウィーズリーが己の力で危機を脱した時点で隠れ穴に踏みとどまる事は彼にとつてあまりにもリスクが大きすぎる。なにしろ、わしの下まで手紙が届いてしまったのじゃからな。今頃は隠れ穴から遠く離れておる事じやろう」

「し、しかし……。ヤツを捕捉出来なくなりますぞ！」

「彼は恐らくここに来る」

「……ホグワーツに？ まさか、オリジナルと接触する為に!?」

「その可能性が高い。恐らくは生徒の中に紛れて……」

「生徒の中に!?!」

「ミスター・ウィーズリーを支配し掛けたのじゃ。そういう能力を持つているとみて間違いなからう。恐らくはマグル生まれ……。加えてミスター・ウィーズリーと近い関係にある者を標的と定める可能性が高い」

「トーマスカ、あるいはグレンジャーでしょうか……」

「その二人の可能性が最も高いと見ておる」

「ならば、すぐにその両名の下に！」

「そのような真似をすれば、彼は別の者を標的とするじやろうな」
「……し、しかし」

ダンブルドアは冷たい表情で呟いた。

「恐らく、分霊はミスター・トーマスカ、ミス・グレンジャーを依り代としてホグワーツにやって来る事じやろう。不特定多数よりも、二人に絞られている現状の方が此方も動きやすい」

「囮にすると言うのですか……」

「そうじゃ」

スネイプは息を呑んだ。

アルバス・ダンブルドアが風聞通りの慈悲深き聖者では無い事を彼は知っている。それでも、生徒を囮に使うという発想を実行に移すとは考えていなかった。

例え、他に手立てが無かったとしても……。

「……かしこまりました」

それでも彼はダンブルドアの意向に従った。

例え、どれほど冷酷な企てだとしても、その為に生徒の生命が脅かされる事になったとしても、彼が最も優先するのは嘗て愛し、今は亡き女性の忘れ形見なのだから。

第三十一話『分霊』

ピーター・ペティグリューは実に素晴らしい人材だ。

彼の記憶を漁るだけで必要としていた情報がほぼ全て手に入ってしまった。

加えて、彼自身は公的に存在していない状況にあり、彼自身も存在が露見する事を恐れている。

畜生として人に飼われる事よりも人として裁かれる事の方が恐ろしいようだ。

『愚昧極まる男だが、だからこそ良い』

ピーターの記憶で現状をほぼ正確に把握出来た。

どうやら、ボクは敗北したようだ。それも年端も行かぬ赤子の手によつて……。

『愛の加護に敗れるとはね』

ヴォルデモート卿は予言を配下のセブルス・スネイプから受け取り、自らを滅ぼす可能性を秘めた者を成長する前に殺害する事を決意した。

その判断に落ち度はない。問題は殺害時の行動だ。赤子を殺害する寸前、母親が身を挺して赤子を庇った。その行動が太古の魔法を発動させた。

今のボクでも知っている情報だ。未来のボクが知らない筈はない。油断したのか、あるいは耄碌していたのか……。

『老いは賢者を愚物に変えるというが、このボクともあろうものが……』

反省しなければいけない。

如何に有利な状況下であつても、物事は慎重に進めなければいけない。

分霊箱ボクが存在する限り、本体オリジナルも消滅する事は無い筈だ。

だが、彼がもはやヴォルデモート卿を名乗るに値しない者と成り果てていたならば――、

『その時はボクが真のヴォルデモート卿として復活を果たさなければならぬ』



夜中、ピーターに日記をオツタリー・セント・ポールの民家へ運ばせた。

そのこの住民を手駒に、村人の魂を刈り取っていく。

兎にも角にもウィーズリー家から距離を取らなければいけない。

ロナルド・ウィーズリーは危険だ。あの発想力は興味深いが、洞察力と推理力が鋭過ぎる。

加えて、彼は既にダンブルドアへ手紙を送っている。子供とは思えぬ迅速かつ的確な判断だ。彼が幼少の子供特有の無謀な勇気を発揮してくれれば時間を掛けて一家全員を支配下に置く事も出来たのだが……。

『油断はしないよ、ロナルド。年齢で敵を侮る事が如何に愚かな事かをボクは誰よりもよく知っている』

ボク自身、大多数の大人よりも優れた子供だった。

如何に歳を取るかではない。如何に歳を重ねるかが重要なのだ。その点で言えば、ロナルドは実に厄介な歳を重ね方をしている。

『……とりあえず、オリジナルの居場所を探らないといけないね。僅かにだけ引力のようなものを感じる。この方角は……』

どうやら虎穴に入らねばならないようだ。

既に蘇生を完了させた上でホグワーツに潜り込んでいるなら大したものだが、そうではない場合、なんらかの蘇生手段がホグワーツに在るといふ事なのだろう。

先日……いや、今より五十年程前にグリンドバルドとの決戦に備える為、ホグワーツへやって来た枯れ木のような老人の姿を思い出す。

彼の名はニコラス・フラメル。高名な錬金術師であり、彼が発明した賢者の石は強力な蘇生能力を持っている。それがホグワーツにあるのかもしれない。

状況次第ではボクも力を貸そう。

『ホグワーツに向かうなら生徒の一人を支配するのが最善かな』

死喰い人の子供は避けたい。初手から警戒される恐れがある。むしろ、死喰い人から最も遠い存在こそ相応しい。

その点で言えば、ウィーズリー家は100点満点だった。実に惜しい。

『業腹だが、マグル生まれを狙うか……』

ピーターの記憶の範囲ではパーシーとジニーがハーマイオニー・グレンジャーという女の名前を口にしていた。

彼女の両親は歯科医らしい。その職業は魔法界に存在しない。なにしろ、虫歯など魔法ですぐに治療出来るからだ。わざわざ専門の医者を用意する必要はない。

要するに彼女こそボクが求めているマグル生まれの生徒という事だ。

しかも、彼女はロナルドに恋心を抱いているらしい。利用するにはうってつけだ。

『敵も定めておく必要があるね』

ハリー・ポッターはどうでもいい。ヴォルデモート卿を打ち破ったカラクリが判明している以上、彼自身に何か特別な才能があるわけではないと分かっている。

ロナルド・ウィーズリーは厄介だ。生徒の中で動くなら、あるいはダブルドア以上の障害となりかねない。

そして、アルバス・ダンブルドア。ヤツを倒す事は我が覇道において避けては通れぬ道だ。

『さて、動くとしよう』



グレンジャーという姓と歯科医という情報さえあれば、彼女の家を特定する事は容易かった。

その家にピーターをネズミの状態で忍び込ませ、彼女の父親に日記を持たせた。

魔法力のないマグルの魂を支配する事は赤子の手を捻るよりも簡単だ。

父親を支配してしまえば、後は簡単だ。

「ハーマイオニー。君、この日記帳を使わないかい？」

「いいの？ 随分と年代物ね」

父親から与えられた物を彼女は疑いもせず手に取った。

ロナルドの時と同じ流れだ。何の変哲もない日記帳と油断している者に細やかな干渉を行い、文字を書かせる。好奇心を増幅させるだけの簡単な作業だ。

そして、一文字書いた時点でボクと彼女の間には道が開いた。

魂と心は密接な関係にある。そして、心とは記憶や感情の総称だ。

文字を書くとは、心を刻むという事でもある。即ち、魂を刻むという事だ。

彼女から魂を奪い、欠落をボク自身で埋めていく。

「……他愛ない」

彼女の口でボクの言葉を紡ぐ。

ロナルドとは違い、彼女は実に従順だ。

この体は既に頭の前から足の爪先に至るまでがすべてボクのものとなっている。

「随分と学習意欲旺盛らしい」

彼女の机には山積みになった羊皮紙や教科書がある。

恐らく、彼女は一切の授業を受けなくとも期末試験を軽々と突破出来るだろう。

「……夢中なんだね、魔法の世界に」

椅子に腰掛け、目の前に傅いている男を見下す。

「ピーター。お前は隠れ穴に戻っている。そして、パーシーと共にホグワーツへ来い。コッソリとトランクにでも潜り込めばいけるだろう」

「……かしこまりました」

ピーターは怯え切っている。

少女の身形になろうとも、その正体がヴォルデモート卿である事に変わりはない。

彼は闇の帝王の恐ろしさをよくよく知っていた。

第三十二話 『トム・リドルの後悔』

9月1日、キングス・クロス駅でシエーマスやディーン、ネビルと再会したハリーとロンは早速空いているコンパートメントを独占して思い出話に花を咲かせた。

ジニーはハリーと一緒に居たがったけれど、それでは同級生と仲良くなる機会を失ってしまうからとロンが引き離した。

「秘密の部屋？」
「うん」

ハリーはシエーマス達にドビーが現れた時の事を打ち明けた。

三人の反応は半信半疑という感じだった。

「でも、言ったのは屋敷しもべ妖精なんだろう？」

シエーマスにとって、屋敷しもべ妖精の言葉は取り合う価値の低いものだった。

「なんか胡散臭い感じだよな」

「でも、本当だったら？ 婆ちゃんに聞いた事があるんだ。秘密の部屋って、すごく恐ろしいものだって！」

訝しげなディーンに対して、ネビルは怯えた様子だ。

「まあ、ドビーの言葉も一言一句違わず手紙に書いてダンブルドア先生に送ってあるからな。校長先生が何とかしてくれるさ」

ロンは楽観的だ。彼はダンブルドア校長の事を心から尊敬し、信じ切っている。

「結局、ドビーの主人は誰だったんだろう……」

「その辺りもダンブルドア先生が調べて下さっている筈ですよ」

ロンはマルフォイ家の名前を出さなかった。

この一件に関して、自分達に出来る事は皆無だと考えているからだ。

高度な闇の魔術が関わっている可能性が高く、まだ二年生にすらなっていない自分達の知識や魔法力でどうこう出来る筈がないからだ。

「……とりあえず、秘密の部屋探しは取り止めですね」

非常に残念だ。けれど、ロマンを求める為に明確な危機へ踏み込むなど愚行でしかない。

エベレストに登った時も、深海に潜った時も、彼は万全の準備を整えて挑んだものだ。

「いいの？」

ハリーに問い掛けられ、ロンは眉を八の字に歪めた。

「凄く残念です……」

第三十二話『トム・リドルの後悔』

トム・リドルは後悔していた。

「でね！ わたしが思うにロンも絶対あなたの事を意識している筈なのよ！」

「そ、そうかなー」

しくじった。ハーマイオニー・グレンジャーの肉体を支配したのは良い。だが、自由に動ける肉体欲しさに彼女の意識を眠らせたのは完全な失敗だった。

彼女の両親は問題無かった。魂を刈り取り、支配下に置いていたからだ。

だが、キングス・クロス駅で再会してしまったハーマイオニーの友人達を支配下に置く事は困難だ。なにしろ、駅には闇祓いを含めた大人の魔法使い達が息子や娘を見送る為に集まっていたからだ。

中には感知能力に長けた者もいるかもしれない。その中で魔法力を持った子供を無理に支配下に置こうとすれば感づかれる恐れがある。

だから、汽車に乗り込むまで待つ必要があった。

「もう、照れちゃって！ このこのこのー！」

「彼って細かい所にも気づいてくれるじゃない？ だから、髪型とかもつと拘るべきよ！ ほらほら、後ろを向いて！ いろいろアレンジ考えてきたんだから！」

「うふふ、お化粧も勉強しないといけないわね！ ノーメイクなんてドラゴン相手に杖もなく挑むようなものよ！」

コンパートメントでいざ日記を取り出して支配下に置くために文

字を書かせようと思ったら、彼女達のマシンガントークに撃たれ続けている。

相手が一人ならば文字を書かせる必要もないのだが、一人の支配に集中しようとしても他の二人が全力で集中を乱しに来る。極めて厄介な連携プレイだ。

ハーマイオニーはロナルドに恋をしている。その事実には彼女達はそのぼせ上がり、善意のつもりでロナルドを落とすためのアドバイスを延々と浴びせかけてくる。

髪の毛を弄られ、化粧を施され、ロナルドの男性的魅力について語られ、語らされ、トムは思った。

——— 地獄か、ここは。

いつぞ強引に支配してしまおうかとも思った。だが、目の前の三人の少女達はとにかく喧しい。

迂闊な行動に出れば三人で大声で喚き散らして周囲に感づかせてしまう事は目に見えていた。

彼は心底後悔していた。基本はハーマイオニーの意識を浮上させ、必要な時だけ支配すれば良かった。

ハーマイオニーの肉体を捨ててしまえばいいかと言うと、そうもいかない。ハーマイオニーを支配してから今に至るまでの行動や記憶に矛盾が発生する。十中八九、ダンブルドアに自らの存在が露見する。

「もう、仏頂面！ 笑顔が大事なよ、ハーマイオニー！ ほら、スマイルスマイル！」

「エンジエリックスマイルで愛しの彼のハートをズツキユンよ！」

貴様らの心臓をアバダ・ケダブラしたい。

トムはそんな事を考えながら、彼女達を満足させる為に天使のほほえみを浮かべてみせた。

あらゆる才能を持って生まれた稀代の天才であるトム・リドルにとって、その程度の事は造作もなかった。

「かーわーいーいー！ やるじゃないの、ハーマイオニー！ さては練習してたわね！」

「ロンに見せる為ね！ やるじゃん、このこのー！」

「あー、わたし達のハーマイオニーが大人の階段登っちゃうんだー！
避妊呪文は忘れちゃダメよ？」

勘弁して欲しい。もう、騒ぎになろうがダンプルドアに露見しよう
がどうでも良くなつて来てしまっただけじゃないか。

「アリシアに聞いたんだけど、西の塔や地下の隠し通路は普段誰も来
ないみたいよ。あと、スコージファイは大事よ」

「ただ、ウィーズリーの双子とジョーダンには注意が必要よ！ この
前、キャシーがアルビンと逢引してたらいきなり現れたらしいの。も
ちろん、三人に悪気は無かったみたいよ？ ただ、あの三人は暇さえ
あれば隠し通路を探してるじゃない？」

「ホグワーツの隠し通路がどうして隠されているのか、もつと考えて
ほしいわよね！」

そういう用途の為に隠しているわけではないと思う。

「だからって野外はダメよ！ 空き教室も先生達が見回りに来るもの
！ キスくらいならセーフだけど、フィルチに見つかったら最悪よ
！」

どうでもいいが、さつきからそういう話ばかりだな。もう少し、
夏休みのキラキラした思い出かを語れないのか？

「フィルチって、ほんとブサイクよね。ロックハート様を見習って欲
しいわー！」

「この前のサイン会の時も素敵だったわよね！」

「ハンサムだし、勇敢だし、ホグワーツの先生になってくれないかし
ら」

今度はアイドルの話題らしい。聞いた事のない名前だ。もう少し
流行についてもリサーチしておくべきだったかもしれない。

さつきから相槌しか打てていない。このままでは妙に思われる。

「……そ、そう言えば車内販売はまだかしらね？ 知ってる？ あの
魔女はオツタリン・ギャンボルがホグワーツ特急に施した魔法の一種
で——」

「ハーマイオニー。こんな時までそういう話はしないでくれない？」

ダブラ。アバダ・ケダブラ。アバダ・ケダブラ。アバダ・ケダブラ。アバダ・ケダブラ。アバダ・ケダブラ。

「アバ……」

「あば？」

「……なんでもない」

トムは思った。

———　　なんで、ボクはハーマイオニーの肉体なんて支配しちゃったんだろう……。

第三十三話 『トム・リドルは苦悩する』

ロナルド・ウィーズリーは他人の変化に目敏い。それは生前の交友関係の広さに起因している。

数多の国を練り歩いた。そこで数え切れない程の多くの人と出会った。

日本人、アメリカ人、中国人、イギリス人、インド人、フランス人、チベット人、ドイツ人、ロシア人、イタリア人、オーストリア人、マレーシア人。

人種は様々、性別も多様、言語は混沌。

その一人一人を記憶に焼き付ける為には観察眼を鍛える必要があった。

「……お嬢さん？」

ホグズミード駅に到着し、ラベンダーやパチル姉妹に背中を押されながらやって来たハーマイオニーを見て、ロンは違和感を覚えた。

まず、髪の毛だ。整い過ぎている。彼女は髪の手入れを重視していなかった筈だ。

次に化粧だ。彼女が化粧をしている姿など見た事がない。

もつとも、そこまでなら違和感を覚える程でもなかった。

夏休みの間に彼女の中で心境の変化が起きた可能性は十分にあり得る。加えて、ラベンダー達は常々ハーマイオニーにオシャレを覚えさせたいと考えていた。彼女達の執念に彼女が根負けした結果なのかもしれない。

問題は眼だ。彼女は常に相手をまっすぐ見つめる。見下したり、見上げたりなどしない。彼女は常に公平であり、誠実だった。

「何かあったのかい？」

眼は心を映す。彼女の瞳には傲慢さが宿り、とても攻撃的だった。ひと夏の経験からの心境の変化では片付けられない。まるで別人のようだ。

嫌な予感がする。

「あったわよ！」

「へ？」

ハーマイオニーは怒った。

「もうちょっと反応してくれてもいいじゃない！ ……わからないの？」

拗ねたような表情だ。

「髪型がいつもと違うな。お化粧もよく似合ってるぜ」

「……あ、ありがとう」

思い過ぎだったようだ。彼女は髪型や化粧によって見違えた自分を見せに来たのだ。

美しくなった自分に自信を持ち、自らを褒める言葉を引き出そうと挑戦的な視線を向けた。

ただ、それだけの事だったようだ。

「いやはや、お嬢さんは元が良いからな！ こいつは将来が楽しみだ！」

神経質になり過ぎていた。

ロナルドは苦笑した。

第三十三話『トム・リドルは苦悩する』

驚いた。ロナルドは侮れない奴だと分かっていたが、よもや開心術の才能まで秘めているとは思っていなかった。

咄嗟に閉心術が間に合わず、違和感を持たれてしまった。

誤魔化せたとはいえるが、ロナルドに対する警戒度を一段階引き上げなければならぬ。

「良かったじゃないの、ハーマイオニー！」

「ロンったら、あなたにメロメロだったわよ！」

「どうせならキスの一つでも奪っちゃえば良かったのに——！」

鬱陶しい。考えなければならぬ事が山積しているのに、こうも耳元でピーチクパーチク囁られたのでは思考もままならない。

だが、今は辛抱だ。ハーマイオニー・グレンジャーとして違和感のない行動を取らなければならない。さもなければロナルドが抱いた疑念が再浮上してしまう。

「それにしてもさっきの仕草はすごかったわね！」

「頬を染めながらソツポを向きつつ横目で彼の顔を見上げる！ あれはグツと来た筈よ！」

「ハーマイオニー、魔性の女ね！」

アバダ・ケダブラ。

「……だって、ロンったらすぐに気づいてくれないんだもの」

「やーん！ ハーマイオニーったら可愛いんだから！」

「わたし達、応援してるからね！」

「そうだわ！ デイナーの時は彼の隣に座りなさいよ！」

ボクは何をしているんだろう……。



ホグワーツ城に辿り着き、大広間へ入場した瞬間、ボクは教職員席に座る一人の男との間に一本の線が繋がっているのを感じ取った。

彼の情報が今のところボクの中に存在していない。ハーマイオニーの記憶から情報をサルベージする必要がある。

だが、今は止めておいた方が良さだろう。何しろ、周囲に集中を乱す存在が多過ぎる。

この肉体はあくまでも他^{ハーマイオニー}人の物であり、その記憶を無造作に取り込めば取り返しのつかない事になる。

記憶とは肉体に保存された魂魄だ。

人にはそれぞれの器があり、常に一定の魂魄を内包する事で自我を形成している。

現在^{いま}は常に器へ注がれ続け、過ぎ去りし過去は肉体に回収される。それ故に過去の記録を閲覧する為には追憶という過程が必要となる。

忘却術という魔法があるが、あれの原理は脳を弄くり記憶を抹消するという物理的なものではない。脳の記憶はそのままに、魂魄から対象の情報を消し去る。そして、強力な忘却術は肉体と魂魄の間にあるアクセス権をも抹消する。

忘却術を受けた後、記憶が戻る者と戻らない者がいる理由はそこにある。アクセス権を抹消された場合、修復するには魂魄そのものの治療が必要だが、魂への干渉は魔法省の神秘部か、あるいは闇の魔術の最奥に位置する技術だ。真つ当な者ほど治療する事が出来なくなる

わけだ。

ボクという器は現在、ボク自身の魂の欠片とハーマイオニーの魂魄によって満たされている。

魂とは精神を形成する記憶であり、魄とは肉体を操作する為の記憶だ。

ハーマイオニーの魄が無ければ、そもそもボクは指一本動かす事が出来ない。

分霊に割り振られているのはあくまでも魂の欠片のみなのだ。魄はすべて本体が所有している。仮に分霊が魄を有していた場合、分霊箱という魔法は全くの別物となってしまう。

ボクの魂の欠片と彼女の魄だけでは器が満たされない。器が満たされなければ自我は臃げとなり、自我が無ければ器は魂魄の殻足り得なくなる。

その為に彼女の魂をある程度取り込んでいる。だが、それは彼女の日常であったり、彼女の友人との思い出程度のものだ。あまり深い感情を取り込んでしまうと、今度はボクがハーマイオニーに支配されかねない。

今でさえ、ボクは生前苦手としていた筈の甘ったるいケーキを美味しく感じている。嫌々ながらもロナルドの男性的魅力を語れる程度の女性的な視点を備えている。

それ故に魂魄や記憶の扱いには注意が必要なのだ。必要以上の記憶を取り込まないように意図して記憶との接続を遮断している。

「……ねえ、ラベンダー」

「なに？」

イチゴのショートケーキを頬張っているラベンダーに話しかける。美味しそうだ。つついっつい視線がクリームの方へ流れてしまう。

「一口ほしいの？ いいわよ！ あーん！」

「あーん！」

つい、魄に引き摺られてしまった。

あまりにも自然に体がショートケーキの受け入れ態勢を整えてしまったもので抗えなかった。

口の中に甘ったるいクリームの味わいと柔らかなスポンジ生地の食感が広がる。

素晴らしい。口の中が幸せだ。もっと食べたい。

「じゃなくてー！」

「ど、どうしたの!?!」

ラベンダー達のせいだ。彼女達に話を合わせるためにハーマイオニーの記憶を引き出し過ぎたのだ。

自覚はしていた。だから、あの男の情報を引き出すのを延期したのだ。一度整理しなければボクの自我が変質してしまう。

「分かったわ！こっちね！」

「え？」

パーバティがモンブランをボクの口元に運んで来た。

体が勝手に口を開けてしまう。あまりにも自然過ぎて抗う暇がない。

美味しい！最高だ！栗の香ばしい香りが鼻孔を擦る。確か、ホグワーツの食事は地下のキッチンで屋敷しもべ妖精達が作っていた筈だ。

なんて、素晴らしい仕事振りだ。褒めてやりたい気分だ。チョコレートのケーキも食べたくなって来た。

「チョコレートのケーキも食べたくなって来た……」

「もう、仕方ないわねー！太っても知らないよ？」

胸が締め付けられる。太る。その言葉を聞いて、何故かすごく嫌な気分になった。

別にどうでもいいだろ。太ったら痩せればいいだけだろう。なんで、ここまで心が沈むのか理解出来ない。

「……や、やめとく」

あの男についてラベンダー達から情報を引き出しておきたかった。その情報を基にすれば安全にハーマイオニーの記憶を引き出せる筈だった。

それなのに頭の中がケーキの事でいっぱいだ。このボクともあるうものがチョコレートケーキを我慢する為に必死になっている。

食べればいいだろう。さっさと食べて意識を切り替えればいいだろう。そう思うのに、それだけは絶対にダメだと何故か思ってしまう。

ハーマイオニー、そんなに太りたくないのか!?

いや、分からなくはない。ロナルドに太った自分など見られたくないのだろう。ああ、よく分か……、分かってどうする!?

「ハ、ハーマイオニー……? 大丈夫?」

ボクは頭を抱えた。まずい。非常にまずい。

「……ちよ、ちよつと席を」

外そうとしたら食事が消えて、ダンブルドアが立ち上がった。

まるで見計らったようなタイミングだ。これが嫌がらせだとしたら効果抜群だ。

ボクは深く深く息を吸い込んだ。ロナルドから学んだ息吹という呼吸法だ。なるほど、心が安定していく。やはり、彼は素晴らしい。

「あらもう! ハーマイオニーったらロンに熱い視線を送ってるわ!」

「本当に好きなのね!」

ボクは白目を剥きかけた。

第三十四話 『魔王の配下』

妙な気配を感じた。

「どうしました？ 我が君」

『……ハーマイオニー・グレンジャーが何者かに取り憑かれている』
クイレルの表情が変わった。当然だろう。我らの生徒に何者かの手を出したのだ。

しかも、彼女の学力は学年で一二を争う。優等生と劣等生を同時に指導する上で最も効率的かつ的確なカリキュラムを考案したというのに、これでは台無しだ。

「では、ダンブルドア校長に御報告を……」

『いや、我々で対処する。憑依は如何なる形であれ、人間の魂が関係している。真つ当な手段では迅速な対応が取れない』

「……闇の魔術を行使すると言う事ですか？」

『そうではない。それではグレンジャーの肉体や魂にまで影響が及ぶ。闇の魔術とは、そもそも他者を傷つける為のものだからな』

「では、一体……」

『そう難しい話ではないぞ、クイレルよ。憑依する者と憑依される者。本来、主導権は憑依される者にある。意識の仕方を理解すれば、貴様は簡単に俺様を排除する事が出来るのだ』

「そのような事は致しません!!」

目を血走らせながらクイレルは叫んだ。彼の激情が俺様の魂を包み込む。

主導権は宿主の側にあると言ったが、憑依状態を解除する事自体は憑依する側の意思でも可能である筈だった。

けれど、クイレルは俺様の魂を自らの魂で囲い込み、拘束している。俺様はクイレルの支配下にある。この肉体から抜け出そうと思っても、クイレルは俺様を決して逃さない。

一つの体に二つの魂など、クイレルにとっても不快極まりない筈なのだが……。

『ああ、そうだな……』

他者の支配下にあるなど不愉快な筈だ。けれど、俺様はそれを善しとしている。

何故だろう。今の状況を俺様は受け入れてしまっている。心地よいとすら感じている。

『だが、可能か不可能かを論じるならば、可能だ。そして、グレンジャーにもそれは当て嵌まる』

「つまり、彼女自身に？」

『そうだ。覚醒させ、自覚させ、拒絶させれば良い』

「……それは真つ当な手段ではないのですか？」

『ああ、真つ当ではない。なにしろ、憑依状態の者を覚醒させるのだ。しかも、魂に干渉する事なくだ。貴様に真つ当な手段が思いつくか？』

クイレルの思考が流れ込んでくる。古今東西のあらゆる文献に記されている憑依系シャーマニズム魔術の情報を記憶から検索しているらしい。

死者の靈魂を憑依させる術は太古の時代からあらゆる国に存在している。それは死者の霊に憑依される現象が有り触れていたからだ。

「……エクソシスム」

クイレルが導き出した解答は神の御名において退去を命じるというものだった。

『クイレルよ。エクソシスムは確かに有効な手立ての一つだ。だが、それは憑依している者が畏れ敬う者の名を知らねばならぬ』

キリスト教は多くの者に信仰されている。魔法界でもキリストの誕生日を盛大に祝い、その日を特別な日だと信じられている。

その理由はキリストが紛れもなく偉大な魔法使いの一人だったからだ。

かつて、魔法族は王侯貴族としてマグルを支配していた。ダビデやソロモンに連なる最後の王こそ、イエス・キリストと呼ばれる男だった。

霊は精神体であり、信仰心は受肉時よりも遥かに強まっている。その為に多くの者は彼の名において告げられる王命に逆らう事が出来ないのだ。

だが、異教徒にまではその覇名も届かない。異教徒には異教徒がそれぞれ信奉する神の名を用いる必要がある。

『万が一にも失敗した場合、憑依している者に此方が気付いている事を気付かせてしまおう。それではグレンジャーの身が危うい』

「で、では……、一体……」

他の手段の多くは実に乱暴的な物ばかりだった。

『ロナルド・ウィーズリーを使うのだ』

「彼を!? し、しかし、生徒に危険な役目を負わせるのは……」

『案ずるな。危険などではない。良いか? 貴様が発案したエクソシスムはあくまでも霊に対して影響を及ぼす手段だ。俺様は言った筈だぞ? グレンジャー自身にやらせると』

クイレルはハツとした表情を浮かべた。どうやら気付いたらしい。

「ま、まさか……」

『そうだ。そのまさかだ』

「……確かに、これは真つ当ではありませんね。あるいは……、闇の魔術を行使するよりも残酷かもしれません……」

『生憎、俺様にはその手の機微は分からぬ。……そこまでか?』

「ええ、まあ……。ですが、彼ならばあるいは上手く……」

『……俺様としては最も効率的かつ有効的な手段だと思ったのだが、残酷なのか?』

真つ当な手段ではないと思っただが、そこまで言われるとは思っていなかった。

別の方法を模索するべきかもしれぬ。

「いえ、ロナルドくんを信じましょう」

『……ヤツならば問題なく遂行すると思うが、本当にやるのか?』

「やりましょう。ええ、わたしも覚悟を決めました」

『まさか、そこまでの覚悟が必要になるとは思っていなかったのだが……』

「早速、『愛の王子様大作戦』を執行しましょう!」

『……ん、ん?!』

俺様の考えた作戦にとつともなく恥ずかしい作戦名を付けられて

しまった……。

第三十四話 『魔王の配下』

闇の魔術に対する防衛術の授業の後、クイレルはロナルドを呼び止めた。

「どうしたんですかい？」

「うん。少し、君に手伝ってもらいたい事があってね」

「手伝いですか？ もちろん、構いませんよ！ 恩師に報いるチャンスを頂けるとは、生徒冥利に尽きますぜ！」

クイレルは感動している。後でグリフィンドールに5点を与える事にしよう。

「さて、君はミス・グレンジャーと親しいね？」

「お嬢さんですかい？ ええ、まあ……。ただ、最近は少し避けられ気味でして……」

ロナルドは少し寂しそうだ。

「ロナルドくん。これから話す事は誰にも話してはいけない。約束出来るかな？」

「……お嬢さんに関する事なんですかね？」

素晴らしい洞察力だ。

「つまり、お嬢さんは何者かに操られているんだな!! おそらく、下手人はルシウス・マルフォイの手の者……。手段は分からねえが、標的はポッターさんだ!! こうしちゃいられねえ!!」

「待て待て待て!!」

『待て待て待て!!』

「ん？ 今、なんか声が重なってませんかでしたかい？」

「な、何の事やら」

思わず口を出してしまった。いくらなんでも察し過ぎだ。

「そ、それよりもだね。な、何故、ルシウス・マルフォイの名が出てくるんだい？ それに、標的がハリーくんというのはどういう……」

「あれ？ 手紙の事は聞いてないんですかい？」

「手紙？」

「どういう事だ？」

「夏休みの間の出来事なんですがね？」

ロナルドは夏休みに起きた奇妙な出逢いと奇妙な出来事について語った。

その話を聞いて、俺様はダンブルドアが手紙の内容を握りつぶしたのだと悟った。

『……そういう事か』

「え？ また声が!？」

「わ、我が君!？」

『俺様が話す。直に話す』

「い、一体……」

クイレルにターバンを外させる。あまりにも醜悪な姿故、衆目に晒したくはなかった。

だが、クイレルは今回の作戦においてロナルドを信じると言った。ならば、俺様も信じるとしよう。

「……おでれえた」

ロナルドはわずかに目を見開いた。けれど、それだけだった。

『ロナルド・ウィーズリー。俺様の話を聞くのだ』

「その前に自己紹介させてくださいええ！」

『む?』

「オレの事は知ってるみてえですが！ それでも初対面なんでね！

名乗らせて頂きますぜ！ オレの名はロナルド・ウィーズリー！ よろしく頼みますー！」

『……ツフ。俺様はトムだ。今はクイレルの体を間借りしている』

「よろしく頼みます、トム先生！」

その響きは実に心地よかった。

『ロナルドよ。貴様にとっては残念な話だ。残酷とも言える話だ。それでも、聞く勇氣はあるか?』

「もちろんだぜ!! お嬢さんに危険が迫ってるんでしよう!？」

『そうだ。そして、解決出来る者は貴様一人。俺様やクイレルも動く事は出来ぬ。他の誰にも手を借りる事は出来ぬ』

「関係ねえ!! お嬢さんはオレが助けるぜ!!」

『ああ、そう言うと思っていたぞ。俺様はやれると思う者にしかやれとは言わない。ロナルドよ、グレンジャーを救うのだ!!』

「ガッテンだ!! ……で、具体的にはどうすればいいんです?」

『まず、貴様の手紙についてだが、ダンブルドアが握りつぶしたようだ』

「握りつぶした!? なんで!？」

ロナルドは柄にもない素っ頓狂な声を上げた。

無理もない。ダンブルドアの行動は完全な裏切りだ。

『おそらく、貴様の手紙から攻撃の主の行動を読んだのだろう。貴様に取り憑けなかったが故に、貴様に近い者を狙うとな』

「……やっぱり、お嬢さんは」

『貴様に対して有効な人質にする為だろう。加えて、ハリー・ポッターを狙う為にも最適だ。生徒としてならばホグワーツに何の障害もなく辿り着けるのだからな。その行動を読み、ダンブルドアは敢えて泳がせているのだろう』

「だ、だけど、そんな事……」

ロナルドは苦悩している。ダンブルドアの思考が分からないわけでもないのだろう。

卑劣な謀略に対して、卑劣な策略をもって迎え撃つ。戦略としては正しいとすら言える。

だが、そんな事は当人達にとって重要ではない。親しい者がチェスの駒の如く利用されている。その事に怒りを覚えない者などいない。『怒るがいい。貴様には資格がある。それ故に、貴様はダンブルドアの思惑など無視して良いのだ。貴様の手でグレンジャーを救い出して良いのだ』

「……ああ。校長先生には悪いが、お嬢さんを危ない目に合わせるわけにはいかねえぜ」

『では、具体的な手段を話す。よく聞くのだぞ』

「おうー」

『グレンジャーと恋仲になれ』

「……………へ?」

ロナルドはフクロウが豆鉄砲でも食らったかのような表情を浮かべた。

『今のグレンジャーと恋仲になるのだ。さすれば、眠らされている彼女も目覚めるだろう』

「ちよ、ちよちよ、ちよーつと待ってくれ!? どういう事だ!? 意味がわからないぜ!!」

『ハーマイオニー・グレンジャーは何者かに憑依されている。その状態から解放する為には本来の彼女を覚醒させる必要があるのだ。その最も効果的かつ効果的な手段は憑依している者と憑依されている者、双方の精神を強烈に揺さぶる事が必要なのだ』

「い、いや、それにしだって……」

『これを明かす事はクイレルに残酷とまで言われた。だが、貴様に明かす。これを明かすのは俺様だ。憎むなら俺様を憎む事だ! 良いか? グレンジャーは貴様に恋をしている』

「そ、それは……」

『……なんだ、自覚していたのか』

ロナルドは頬をポリポリと搔いた。

「ま、まあ……」

『ならば、話が早い! 彼女の恋心は魂魄だけでなく、肉体の記憶にも宿っている。憑依している者は彼女の行動を模倣する為に彼女の記憶を喰らっている筈だ。そこには彼女の恋心も眠っている筈なのだ!』

「……オレに、それを利用しろってんですかい?」

『そうだ。真つ当な手段とは言えぬ。だが、彼女を救いたければやれ! やるのだ! 残酷になれ! 邪悪になれ! それとも、貴様はグレンジャーの為では穢れられぬのか?』

試すように問い掛ける。すると、ロナルドは邪悪に嗤う。

「……なってやるぜ、悪党に!! お嬢さんを救う為ならな!!」

『やはり、貴様は期待通りの男だ。この俺様が配下を従えんとするなら、真つ先に引き入れたい人材だ』

「へへっ、お褒めに預かり光栄だぜ! なんか、トム先生は先生ってよ

り……、魔王みたいだな」

『魔王の命に従うのは不服か？』

「大歓迎だぜ！ 魔王の配下として動く！ こんな冒険、ワクワクしてくるじゃねえの!!」

『では、征け!! 我が配下よ!!』

「了解だ、我が君!!」

クイレルの言葉を覚えていたのだろう。ロナルドはそんな事を言いながら飛び出していった。

「……我が君。わたしは……」

『貴様は俺様の第一の配下であろう。既に従えている者故に考慮外としたが、含めて求めるなら、貴様は誰よりも欲しい人材だ』

「おお……、おお!! 我が君!! わたくしの忠誠は永遠にあなた様に捧げます!!」

『……知っているとも、わたしのクイレルよ。さあ、ロナルドを動かす間に我らも動くぞ。ダンブルドアが余計な事をしないように牽制しなければならぬ』

「かしこまりました、我が君よ」

第三十五話 『覚醒』

大広間はざわついていた。生徒達の視線は一人の少年に注がれている。

彼はタキシードに身を包み、バラの花束を抱えていた。

『……あれは何をしているんだ?』

「分かりません」

ロナルド・ウィーズリーの奇行に眉をひそめているのは生徒達ばかりではなかった。

アルバス・ダンブルドアでさえ首を傾げている。

「お嬢さん!!」

「ロ、ロン……?」

ロナルドは大広間のだ真ん中で情熱的な眼差しをハーマイオニー・グレンジャーに向けた。

『……おい、まさか』

「ロ、ロナルドくん……?」

トム・リドルとクイリナス・クイレルはとても重要な事を見落としていた。

いや、それ以前に知らなかった。知る筈もなかった。

ロナルド・ウィーズリーという男が転生する前の人生で女房となった女性を口説き落としした時、日本はまさにバブル時代の真っ只中だったなどという事は全く想定の外であった。

男も女も浮かれ切っていたギンギラギンの混沌時代。

その時代の流儀しか、彼は知らなかったのだ。

「愛してるぜ、お嬢さん。オレのツレになってくれねえかい?」

「……………はえ?」

意外、それはプロポーズ!!

「あんたを幸せにしてみせるぜ!! このロナルド・ウィーズリー!! 人生の全てをお嬢さんに捧げると決めたんだ!!!」

「ええええええええ!!」

ハーマイオニーは絶叫した。当然だろう。いきなり公衆の面前で

プロポーズ
愛の告白をされたのだ。

不意打ちにも程がある。彼女は何の覚悟も準備もしていなかった筈だ。

『み、見事だ。あれならば間違いなく精神を揺さぶる事が出来た筈だ』
「し、しかし、こんな事をしでかしては彼の学生生活が……」

効果は劇的だ。ハーマイオニーは真っ赤になっている。恐らく、彼女自身の意識も目覚めている筈だ。

だが、その為の代償が大き過ぎる。ここまでの事を公衆の面前で宣言してしまつたら、もはや単なる冗談と誤魔化す事も出来ない。

ロナルドは彼女の気持ちに気付いていながら答えなかった。それは彼が彼女に恋をしていない事を意味している。

『……クイレルよ。俺様もようやく理解出来たぞ。これが覚悟というものか……』

仮に彼が他に誰か好きな女の子がいたとしても、もはやその子に告白する事も出来なくなる。

加えて、これから彼は全校生徒にハーマイオニーの事を愛しているのだと認知される事になる。

彼女が彼の告白の真意に気付いて拒絶したなら笑いの的になり、気付かずに受け入れたのならば望まぬ愛を貰かねばならない。

これから青春を過ごす筈の彼の人生はハーマイオニーという存在に縛られる事になる。

「彼女を一刻も早く救いたかったのだね、ロナルドくん……」
クイレルは彼の覚悟に敬意を抱いた。

第三十五話『覚醒』

夢を見ていた。とても寂しい夢だった。
その夢でわたしはボクだった。

トム・リドル。初めて聞く筈の名前で呼ばれたのに、わたしの耳にその名前はよく馴染んだ。

潮の香りが鼻孔を擦り、波の音がわたしを包む。海辺の孤児院。それがトムの家だった。

—— どうして、ボクには親がないの？

問い掛けても答えが返ってくる事は無かった。

それは優しさ故の秘密だったのかもしれない。けれど、親を知らない子供にそのような機微を察する事など出来る筈がない。

求める答えを与えてくれない大人達にトムはしばしば癩癩を起こした。そして、その度に大人達は恐怖の表情を浮かべた。

ただの子供の癩癩ではなかったのだ。トムは生まれつき強大な魔法力を宿していた。その力は普通の魔法族の子が覚醒する歳よりも何年も早く覚醒してしまった。

物心付く前から遠くにある物を引き寄せる事が出来るようになり、蛇と話す事も出来た。

彼にとつて、それは拳を握る事やまばたきするような当たり前に出来る事だった。けれど、それは大人達にとつて異常な事だった。

物を取る時はわざわざ歩いて傍に近づき、手を使って取るようにと叱りつけた。蛇に話しかけられても話せない振りをさせられた。

お前は異常なのだと何度も何度も魂に刻み込まれた。

—— どうして、ボクは他の人と違うの？

問い掛けた。けれど、誰も答えてくれない。

教えてくれたら直すのに、大人達は口を揃えて同じ事ばかりを言う。

お前は異常だ。お前はおかしい。お前は人間じゃない。

トムは狭苦しい孤児院コミュニティーの中で異常だと言われ続ける日々を送った。

—— どうしたら、普通になれるの？

質問に答えてくれる先生はいなかった。

彼の心に寄り添ってくれる者はいなかった。

ただ、まともになれと壊れたラジオのように同じ言葉を繰り返される。

その度に自分が異常なのだと刷り込まれていく。

—— どうして？ どうして？ どうして……。

繰り返し、繰り返し、何度でも傷つけられる。

直しても、治しても、何度でも壊される。

—— ああ、そうか。

ある日、彼は悟りを開く。

—— 僕はおかしくなんてない。

自己を否定され続けた少年が行き着いた答え、それは他者の否定だった。

『仕方ないじゃない……』

それ以外の言葉が見つからなかった。

間違った悟りだとしても、彼にとっては唯一の救いだったのだ。

そうしなければ自己を肯定する事など出来なかったのだ。

閉ざされた世界で、己を見つめる目に宿るものは猜疑や不信、恐怖の感情ばかり。

満足な食事も与えられなくて、不自由である事を強要され続ける。

如何に澄み渡る小川も汚泥を流され続ければ穢れていく。

—— 僕は特別なんだ。

八歳の時、彼は自覚した。ボクは卓越した存在であり、他は出来損ないのクズばかりなのだ。

ボクが当然のように出来る事を彼らは出来ない。だから、嫉妬している。自分達がいる奈落に僕を引きずり込もうと躍起になっている。

『そう、思うしか無かったのね……』

十一歳の誕生日を迎えた日、彼の前に一人の男が現れる。

知っているけれど、知らない顔。

彼がアルバス・ダンブルドアと名乗った時は驚いた。今、自分がいつの時代の光景を見ているのかもその時になってようやく分かった。

ダンブルドア先生はトムに己が魔法使いである事を告げ、彼に自身の真実を教えた。

彼は喜んだ。己の正しさが立証されたからだ。

—— ここはボクが居るべき場所ではなかった。

鳥籠の中から解放されたかのような気分だった。灰色だった世界が色鮮やかに輝き始めた。

もう、一人じゃない。キングス・クロス駅で9と3／4番線のホームに立った時、彼は新しい人生の始まりを実感した。

組み分け帽子がスリザリンを選んだ時、彼は希望に満ち溢れた笑みを浮かべていた。

スリザリンのテーブルに向かうと、そこには彼を歓迎する先輩達の姿があった。

はじめて、他人と握手を交わした。はじめて、心からの笑顔を浮かべた。はじめて、他人と接する事を楽しく感じた。

ホグワーツ魔法魔術学校

——— ここが……、この場所こそが、ボクの居場所だ。

スリザリンは彼に居場所を与えた。彼は誰よりも巧みに魔法を操る事が出来たからだ。

誰もが惜しみない称賛を贈り、親を知らない彼に『君は間違いなく純血さ！』と語りかけた。

彼は初めて他者に自己を肯定してもらった事が出来た。その歓喜は同時に恐怖を齎した。

自らが純血である事を半ば確信していたけれど、調べてみなければ絶対とは言い切れない。

あるいは、それは永遠の謎にしておくべき事だったのかもしれない。それでも彼は調べる事を決意した。

——— ボクは純血だ。劣等種^{マグル}の血など一滴も流れていない。

認めてくれたみんなの為に、それを証明しなければいけない。

だから、彼は誰よりも魔法使いらしく生きる事にした。

『望まれたからこそ、あなたはそうなる事を望んだのね……』

誰よりも知識を深めた。誰よりも魔力を研ぎ澄ませた。誰よりも力を追い求めた。

誰よりも魔法使いらしい魔法使いになった。

そして、彼は己のルーツを探す旅に出た。その時はもう自分が純血である事を疑ってなどいなかった。

成績は学年トップ。魔法の実力は既に最上級生の首席さえ超えている。彼よりも博識な人間など、生徒の中には一人もいない。

なりたい自分になれていた。まだ子供だけど、所詮は学校という小さなコミュニケーションの中での話だけど、彼は誰よりも魔法使いだっ

た。

けれど、現実には残酷だった。

母は偉大なるホグワーツの創設者の一人、サラザール・スリザリンの系譜に連なる者だった。彼が蛇と話せるのもサラザールの能力が遺伝した結果だった。

最高の魔法使いの血が流れている事に彼は歓喜した。そして、それほど血筋を持つ母が選んだ男なら、父もさぞや素晴らしい魔法使いなのだろうと信じた。

けれど、父はマグルだった。彼が思い描いていた理想からはかけ離れた存在だった。

誰もが彼に純血である事を求めていた。

培ってきたものが崩れていく。作り上げてきたものが壊れていく。気づいた時、彼はホグワーツに入学する前の彼に戻っていた。

周りの目が孤児院の大人達と同じに見えた。悪夢を見ない日は無かった。

彼にとって、純血である事は大海に浮かぶ小島のようなものだった。その小島がまやかしのものだと気づいてしまった時、彼は大海へ放り出された。

掴まるものもなく、沈みそうになる体を必死にバタつかせる。

一人は嫌だ。一人になりたくない。

—— 僕を助けて……。

特別にならなければいけなかった。

サラザールの末裔である自分ならばと、彼が隠した秘密の部屋を探し始めた。

そして、彼の前に死体があった。

『……違う。そんなつもりじゃなかったのに……』

殺す気なんて無かった。秘密の部屋の発見者として、スリザリンの継承者として、ボクは一目置かれようとしていただけだ。

けれど、彼女は死んでしまった。事故だった。秘密の部屋から出た時、顔を出していたバジリスクの魔眼を彼女が見てしまったのだ。

でも、それはボクが呼び寄せたせい……、彼女には何の罪もなく

て……。

そして、彼の心は二つに切り分けられた。

彼がたまたま持っていた日記に彼の一部が宿り、わたしは二つの視点から彼のその後を見つめる事になった。

彼も自分の意識が自分だけのものではなく、日記にも宿っている事に気付いた。

そして、調べた。様々な本を読んだ。罪の意識から逃れたくて、必死になっていた。

答えに辿り着いた時、彼と日記は完全に分断された。

そして……、

「あんたを幸せにしてみせるぜ!! このロナルド・ウィーズリー!! 人生の全てをお嬢さんに捧げると決めたんだ!!!」

「ええええええええ!!」

いきなりとんでもない言葉が降り注ぎ、わたしの意識は覚醒した。

第三十六話 『ロナルドの決断』

人は常に刺激を受けながら生きています。

それは音であつたり、光であつたり、匂いであつたり、味であつたり、触感であつたりと様々だ。

誰だつて、常日頃からカレーの味を思い浮かべながら生きてなどない。けれど、カレーの話題を聞けば味が脳裏に蘇る筈だ。

刺激は意思を動かす切っ掛けとなり、意思は必要な情報を記憶から取り出す。

それは反射のようなものであり、抑えようと思つて抑えられるものではない。

「愛してるぜ、お嬢さん。オレのツレになつてくれねえかい？」

「……………はえ？」

第三十六話 『ロナルドの決断』

愛している。

そのストレート過ぎる言葉しげきを受けて、ボクの意味は反射的にハーマイオニーの記憶へアクセスしてしまった。

意味がわからなかったからだ。理解を越えた事態に対して、ボクは答えを求めた。求めてしまった。

愛している。愛している。愛している。愛している。

ロナルドの言葉がボクの中で反響し続けている。そして、ハーマイオニーの彼に対する恋心が一気に流れ込んだ。

ホグワーツ城の地下、船着き場で自分に手を差し伸べるロナルドの姿が浮かんだ。

お嬢さんデイと呼びながら陸地へ導いてくれた彼の力強さにトキメキを覚えた。

直後、ネビルを助ける為に自分まで湖に落ちそうになる彼を見て、彼が如何に優しい人なのかを知った。

一緒に寮に入って、好きな本についてたくさん語り合った。お互いにおすすめの一冊を貸し借りして感想を言い合う時間はとても楽しい。

別に劇的な思い出があつたわけじゃない。それは小さな積み重ね。わたしの好きな本を彼が気に入ってくれると嬉しい。彼の好きな本を知る事が出来ると嬉しい。

積み重なった楽しいは気づくと愛おしいに変わっていた。

彼の情熱的な視線が心を焼き焦がしていく。感情が燃え上がる。ドキドキしている。徐々に彼の言葉がボクの中に広がっていく。愛している。その意味をボクは……、

—— 分かっちゃダメだろ!!!

まずい。大変な事になった。ボクとハーマイオニーの境界を護る為に築いていた防壁を崩してしまった。

味覚どころではない。目の前に迫り来るロナルドの唇に視線が行ってしまう。

なんだ!?! キスされたいのか?! 巫山戯るなよ、ハーマイオニー!! 貴様、もつと段階を踏めないのか!?

でも、ロツクハートの小説で読んだような情熱的なキスに憧れない事もな……い! 無い! 無い!! 無いたら無い!!

まずいぞこれは! 態勢を整える必要がある。一刻も早く、ここから離れなければならない!!

「あんたを幸せにしてみせるぜ!! このロナルド・ウィーズリー!! 人生の全てをお嬢さんに捧げると決めたんだ!!!」

「ええええええええ!」

まさかの追撃にトキメキが止まらない。

おかしいだろ。もう、何もかもがおかしいだろう。

ハーマイオニーの頭がおかしい。ボクの心がおかしい。ロナルドの行動がおかしい。

—— いや、待て!!

思考力が落ち過ぎていた。

ロナルドが意味もなくこんな奇行に及ぶ筈がない。

ここは大広間だ。そのど真ん中で愛の告白など常軌を逸している。

—— まさか、ロナルドはボクに気付いてくれている!?

彼の瞳が近づいてくる。心臓の音がうるさすぎる。彼に聞かれて

しまう。こんなにドキドキしている事を彼に知られるなんて恥ずかしい。

『……って、誰?!』

「ほあ!？」

いきなり内側から声が聞こえてきて飛び上がりそうになった。

『誰なの!?! ここはホグワーツなの!?!』

馬鹿な、眠らせていた筈のハーマイオニーが覚醒した!?

『どうなっているの!?! あなたは誰なの!?!』

混乱、恐怖、憤怒、焦燥。様々な感情が一気に爆発した。

その感情がまるで自分のものであるかのように感じてしまう。

「……ああ、そうか」

すごく悲しい気持ちになった。

「お嬢さん……?」

これが狙いだっただな、ロナルド。

あの奇行はボクとハーマイオニーの精神を同時に揺さぶるためのもの。

効果は抜群だった。ハーマイオニーの意識は覚醒し、ボクの魂はグシャグシャだ。

他の如何なる方法を用いても、ここまでの状況には至らなかった筈だ。

ダンブルドアの策略とは思えない。他の誰かの入れ知恵? あるいはロナルド自身が導き出した答えか……。

『……悲しんでいるの?』

ハーマイオニーが問い掛けてくる。まるで心配しているかのようだ。

あり得ない。肉体を得体の知れない者に奪われている状況なのだ。彼女がボクを気遣う事などある筈がない。

それこそあり得ない。哀しんでいる人を見たら、心配するのが普通だろう。励ましてあげたいと思うのが普通だろう。

違う。それは違うよ。普通じゃない。心配という感情は相手よりも優位にある時、はじめて発揮されるものなんだ。

自分が劣悪な状況にあつたら、誰かを心配する余裕などない。誰だって、普通は自分の事で手一杯なのだから。

『可哀想ね……』

哀れんでいる？ このボクを哀れんでいる!?

グチャグチャになった思考が怒りで白く染め上げられていく。

『特別じゃないといけなかったのね。そうじゃないと、自分を保てなかったのね』

まるで見透かすような言葉だ。

—— 貴様、視たのか!?

『見せられたのよ。そう……、やっぱりトムなのね』

ハーマイオニーの感情が収まっていく。けれど、その意思はより明確になっていき、広がっていく。

ボクの意識が薄れていく。彼女から奪い取った魄が彼女の下へ戻ろうとしている。

魂の使い方は魂の状態にならなければ理解する事が出来ない。

彼女は今、ボクに肉体を奪われた事で魂の使い方を理解したらしい。

このままではボクの魂は彼女に支配されてしまう。それはまずい。ボクにはやるべき事があるんだ。

やるべき事……、

『え?! ロンと手を繋いで湖を歩きたいの!?!』

違う!! そんな事ではない。ちよつと考えてしまったけれど、それは貴様の願いだろう!!

『悪くないと思うけど、わたしはどっちかと言うと図書館で一緒に本を読みたいな……』

それでは二人共本に夢中になってしまいう事が目に見えているじゃないか。

やれやれ、本以外の共通点を模索する気概はないのか?

『あ、あるわよ……でも、本好きっていう共通点は大事にするべきでしょ!?!』

否定はしないけど、ロンはヒツポグリフクラブに入ってるじゃない

い。

フィールドワークが好きで彼の趣味に自分を合わせる努力もするべきだと思う。

『一理あるけど……』

読書という共通の趣味を共にするのも素敵だと思うけれど、視野は広く持つべきだよ。

ボクなら……、なんだよ!?　なんで、ボクがロナルドとデートするシチュエーションを考えないといけないんだよ!?

『あなた、情緒不安定なのね』

お前のせいだよ!!

『なんでよ!?　大体、なんでトムがわたしの中にいるわけ!?　っていうか、今までわたしの体をあなたが動かしてたの!?　トイレとお風呂も!?!』

ちよ、ちよっと待て!!　変な誤解をするな!!

『変態!!　変態!!　変態!!』

違う!!　トイレやお風呂には行ってないんだ!!

『嘘よ!!　っていうか、お風呂入ってないのはそれはそれで最悪よ!!』

呪文だ!!　どちらも呪文で解決したんだ!!

そういう呪文があるんだよ!!　サバイバル用だけど……。

『着替えは!?　あなた、着替えはどうしたのよ!?　着替えも呪文!?

でも、一瞬くらい視たわけよね!?　わたしの裸を!!』

いや、それは……、その……。

『口籠ってんじゃないわよ、変態!!』

へ、変態じゃない!!　き、貴様に憑依したのはそういう目的の為じゃなくて口、ロナルドに……、

『ロンに近づきたいからわたしに憑依したってわけ!?　あなた、男の子よね!?　え?　あら……、そうなのね。うん。わたし、否定しないわよ!』

否定していい!!　というか違う!!　ボ、ボクは……!!

「お、お嬢さん?　だ、大丈夫か?」

ロナルドが恐る恐るといった様子で問い掛けてきた。

「な、なにが？」

「いや、さつきからすごい百面相だぜ？」

そうだった。別に時が止まったわけではないのだ。ボクがハーマイオニーとやり取りを交わしている間も時は動き続けている。

真つ赤になつたり、泣きそうになつたり、むくれたり、彼の言うように百面相を繰り広げてしまった。

恥ずかしい。

『ちよつと！ わたしの世間体も考えてよ!!』

世間体を考えている場合か!?

「お嬢さん、本当に大丈夫なのか!？」

「ああ、もう!! うるさい!!」

「ほあ!？」

もういい。いずれにしても彼にはバレているらしい。

だったら隠していても仕方がない。

「見事だ。実に見事だぞ、ロナルド・ウィーズリー!! よくぞ見破つたな!!」

「……お前さん」

彼の顔つきが変わった。暖かかった視線は温度を失っていく。

『ちよ、ちよつと、トム!？』

黙っている。もう、貴様の肉体にしがみつ়理由はない。

「やはり、お嬢さんに……」

「ああ、そうだ。貴様に弾き出された後、ボクはこの体に憑依した」

彼の瞳に敵意が増していく。

苦しい。辛い。だけど、これはハーマイオニーの感情だ。ボクのものではない。

ボクは男だ。ボクはヴォルデモート卿だ。こんな小僧に懸想するなどあり得ない。

「やはりだ。貴様は危険だと分かっていた！ そして、それは正解だったらしい!!」

杖を取り出す。すると、彼の表情が引き締まった。

「おい……、そいつは止めておけよ」

さつきとは違う。けれど、情熱的な視線だ。

これはハーマイオニーに向けられたものじゃない。彼がボクだけに向けてくれていているものだ。

「貴様にこの娘を傷つけられるのか？」

「ああ、出来る」

即答だった。息が止まりかけた。

シヨックを受けたのはハーマイオニーだ。その影響でボクまで思考が止まりかけた。

「こちとら、お嬢さんを救うためなら手段を選ぶ気はねえ」

ロナルドは魔法力を操り始めた。彼は本気だ。

本気でボクを排除しようとしている。

「……おい」

ロナルドの表情が歪んだ。

「なんで、泣いてやがる……」

「え？」

泣いている？ 誰が？

「……お前さん、言ったな。オレから弾き出されたから、お嬢さんの肉体に憑依したと！」

「そ、それがどうした!!」

「だったら、オレに憑依しろ!!」

「はあ!？」

『はあ!？』

ボクとハーマイオニーは耳を疑った。

第三十六話 『眠る場所』

突如大広間を舞台に始まった公開プロポーズ。

告白しているのはロナルド・ウィーズリー。告白されているのは
ハーマイオニー・グレンジャー。

——— なんだ、あの様は……。

恐れた事がある。憎悪した事もある。けれど、セブルス・スネイプ
にとつて、闇の帝王は偉大な男だった。

誰よりも魔法の真髄に近づき、誰よりも強大な魔法力を持つ最強の
魔王。

敵対する立場に立っていても、その事実は動かず、その認識も変わ
らない。

ヴォルデモート卿がリリー・エバンズを殺さなければ、彼は変わら
ず帝王に忠誠を誓い続けていただろう。

それ程の男が少年を相手に百面相を繰り広げている。まるで年頃
の少女のようにコロコロと表情を変えている。

——— いや、あり得ない。あの方があのような醜態を晒すなど
………！

スネイプは頭かぶりを振った。

推理が間違っていたのだ。そう確信した。

アレは帝王の分霊などではない。真正正銘のハーマイオニー・グレ
ンジャーだ。それならばあの百面相にも説明がつく。

「………校長、やはりトーマスの方のようですね」

グレンジャーが候補から外れた以上、残っている分霊の憑依先は
デイン・トーマスのみだ。

「違う」

アルバス・ダンブルドアはスネイプにだけ聞こえる声で呟いた。

「………違う?」

「彼女こそ分霊じゃよ」

「は?」

スネイプは凍りついた。

「……ミス・グレンジャー本人ならば、あそこまで百面相になる事はない」

怒るか恥ずかしがる。あるいは喜ぶ。そのどれか一つの感情を爆発させていた事だろう。

けれど、実際の彼女が発した感情はあまりにも複雑怪奇だった。

「最初に見せたのは戸惑いの表情。あれは理解を超えた事態に遭遇した人間特有のものじゃった。プロポーズ。即ち、愛を突きつけられた事を彼は理解出来なかったのじゃよ。それ故に、恐らくはミス・グレンジャーの記憶と接続してしまったわけじゃ」

ダンブルドアはほぼ正確にグレンジャーに憑依している分霊の感情を読み取っていた。

「今、あの者はミス・グレンジャーの記憶に取り込まれようとしておる」

「……っ、つまり、あれが」

スネイプは愕然となった。今もグレンジャーは少女らしく頬を赤らめながらウィーズリーに口説かれている。

気味が悪かった。

「いや、あり得ない。て、帝王があのような……」

受け入れがたい現実を前にして、スネイプは青褪めた。

闇の帝王と死喰い人の関係は宗教に近い。

相手は神の敵である！ 相手は神の怒りに触れた！ これは神の命令である！

そういう言い訳があつたからこそ、死喰い人は人を殺せた。人から奪えた。罪を犯せた。

しかし、帝王は神ではなかった。そう突きつけられた瞬間、言い訳は使えなくなってしまう。

だから、余計に彼らは必死になる。必死に帝王を偉大なる存在と認め、それを否定する者を攻撃しようとする。

「……我輩はあんな者に付き従っていたのか」

クイレルの愛によって記憶を消された帝王を見た。

ハーマイオニーの記憶に翻弄される帝王を見た。

『その代わりに、わたしには何をくれるのじゃ、セブルス？』

嘗てと同じだ。

スネイプはアルバス・ダンブルドアを慈悲深き聖人であると考えていた。けれど、彼はリリーを救う事に見返りを求めて来た。

その時、スネイプはダンブルドアに対しても神を見出していた事に気がついた。同時に神ではなく、彼が人である事にも気がついた。

そして今、彼は闇の帝王も人である事に気がついた。

当たり前の話だ。それなのに、彼を盲信し、付き従い、拳句の果てにリリーを失った。

あまりにも愚かな話だ。バカバカしくて、もはや笑い話にもならない。

—— リリー……。

第三十六話 『眠る場所』

ロンの行動があまりにも意味不明過ぎて、僕達はずっとポカンとしていた。

大広間のだ真ん中でプロポーズをするなんて、映画でも早々見ない展開だ。

「オレに憑依しろ!!」

「はあ?」

けれど、徐々に二人の様子がおかしくなっていた。

何が起きているのか、何をしたいのか、さっぱり分からない。

だけど、ロンは真剣だ。それだけは分かる。

「ロン! さっきからどうしたって言うの!?!」

「……ドビーですよ」

「ドビー!?!」

その名前には覚えがある。夏休み、突然現れた屋敷しもべ妖精だ。自分を傷つけながら、必死になって僕に迫ろうとしている危機を伝えに来てくれた。

「今、お嬢さんは何者かに憑依されている。それはお嬢さんにとって辛い事だ。だけど、辛いのはお嬢さんだけじゃなかった!!」

ロンは叫ぶと共にハーマイオニーの両肩を掴んだ。
彼女は涙を流しながら呆然とロンを見つめている。

「泣いてる奴を放っておく事は出来ねえ!! オレの下へ来い!!」
分からない。何がなんだか分からない。だけど、ロンは何か取り返しのつかない事をしでかそうとしている。そんな気がする。

「……分からない」

ハーマイオニーが呟いた。

「お前は何なんだ……。ボクが何者なのか、分かっているのか!？」

「ああ、分かってくえ!! だから、教えてくれ!! お前の名前、お前の性格、お前の事情!! 全部教えてくれ!!」

ロンは瞳をメラメラと燃やしながら叫んだ。

「オレはお前の涙を止めたいんだ!!」

「……貴様は識っている筈だ。これは攻撃だぞ。貴様は攻撃を受けているんだぞ!! それなのに……。ボクを受け入れると言うのか!？」
攻撃。それが何を意味しているのか、すぐには分からなかった。

けれど、夏休みの間に起きたロンの異変や今の状況がパズルのように組み合わさっていく。

徐々に真相という名の絵が完成していく。

「当然だ!! 泣いてる奴を放ったらかすなぎ、男が廃すたるってもんよ!! 攻撃したけりやすればいいさ!! 今度は逃げねえ!! お前さんと真正面からぶつかり合ってやる!! 一方で、お前さんの涙を拭いたらあ!!!」

やっと分かった。これがドビーの言っていた罠なんだ。既に罠を仕掛けた者の攻撃は始まっていた。そして、その攻撃をロンは一度退けていた。その攻撃を今まさに受けようとしている!!

「だ、ダメだ!! ロン!! 冷静になってよ!!」

「止めるな、ポッターさん!! オレはこいつを救いてえんだ!! だから!!!」

ロンは叫んだ。

「オレに攻撃して来い!! 逃げも隠れもしねえから!!」

「……バカだ。こんなバカは見たこと……。無い」

ハーマイオニーの体が不自然に揺れた。そして、彼女の体から何か
が飛び出してきた。

攻撃だ。咄嗟に杖を抜いた。だけど、ロンは僕を手で制した。

「来い!!」

そして、ハーマイオニーから飛び出てきた何かはロンの中へ吸い
込まれるように消えていった。

「……ロン」

そして、ハーマイオニーはその場に崩れ落ちるように座り込みなが
らロンを見上げた。

「助けてあげて……。彼、寂しいのよ……」

ロンは応えない。固く瞼を閉ざしながら、深く息を吸い込んでい
る。

「……眠っちまった」

「え?」

ロンは悲しげな表情を浮かべた。

「随分と疲れてたみたいだ。オレの出来る事ってのは、少ねえなあ
……」

「……ロンは大丈夫なの?」

「ああ、ピンピンしてまさあ」



再び入り込んだ彼の中はとても暑苦しかった。

燃え盛る炎の中にいるかのようだ。

だけど、不思議と居心地がいい。

『……もう、ハーマイオニーの体じゃないのに』

彼女の魂はそっくりそのまま彼女に返した筈なのに、心の中は彼女
の中にいた頃のままだ。

この炎に包まれていると安心する。ずっと何かを求めていた筈な
のに、なんだかどうでもよくなって来た。

『なんだか……、疲れたな』

オリジナルは何だかんだで上手くやっているようだし、分霊は分霊
らしく、箱つっわの中で眠ろう。

第三十八話 『禁忌』

大広間でのプロポーズ事件はアツサリと幕を閉じた。あの後、すぐにクイレル先生がやって来たからだ。

『ミス・グレンジャーには悪霊が取り憑いていたのです。少々奇天烈な方法ではありませんでしたが、彼は最も効果的かつ効率的な手段で悪霊に対処したのです』

その言葉と共に始まる全校生徒同時聴講の闇の魔術に対する防衛術の臨時講義はとても面白い内容だった。

それは魂に纏わる話。本来は魔法省の神秘部という場所で研究を重ねられている魔法の深淵に位置するカテゴリー。

その対処の方法として、心や記憶はとても重要なのだという内容だった。

新学期早々の大事件はホグワーツを賑わせたけれど、ロンとハーマイオニーがあまりにも普段通りに過ごすものだからすぐに鎮まってしまった。

普段どおり、二人はとても仲が良い。あのプロポーズの事でイジろうとしても余裕を持った答えを返されてしまう。

元々、グリフィンドールの寮生の中には二人がとつくに付き合い合っているものだとばかり思っていた者もいて、あまり面白いスキャンダルでは無かったのだ。

「……さて、今日の授業では魔法の深淵に少し触れてみましょう」

今日の闇の魔術に対する防衛術の授業も実に心を踊らせる言葉から始まった。

「魔法が生まれ出でて数千年。その間、多くの魔法使い達がこの神秘の力の解明に尽力して来ました。それでも尚、魔法は神秘の塊で在り続けています」

クイレル先生は生徒達を眺めた。

「科学とはマグルの技術である。諸君の多くはそう考えているね？」

そもそも科学という言葉を知らない生徒も多かった。

「だが、それは違う。科学とは物事の必然性を見つける事を意味して

いるのです。『我々がウインガーダイヤモンドレビオーサと唱えると浮遊呪文を使える』という事実を発見したのも科学なのですよ」

「そ、そうなの？」

ハリーはロンに問い掛けた。

「ええ、そうですよ。科学は仮説を立て、実験を繰り返しながら法則を見つけ出す事。物を落としたり下に落ちていくのは地球が回転し、重力を生み出しているが故の事。当たり前と思うかもしれませんが、最初から当たり前だったわけではないんです。遠い昔、人は世界がどこまでも平坦なものだと思っていた。星は地球を中心に回っているものだと思っていた。その真実を暴いていく、それが科学でさ」

ロンはどこか渋い表情を浮かべながら言った。

「ロナルドくん。君は科学が嫌いかな？」

クイレル先生も気付いたようだ。先生の問い掛けにロンは首を横に振った。

「嫌いじゃないですよ。ただ、何でもかんでも解明しちまうのが正しいとも思えないんでさ……」

「そこは否定しないよ」

クイレル先生は言った。

「世界の理の中には人類の手に余るものもあるのです。マグルの技術で言えば、核兵器などが該当しますね。作るべきではなかった。そこに至るまでに足を止めるべきだった」

核兵器の事はハリーも知っていた。マグルの世界で生きていれば嫌でも知る事になる。

世界を終わらせる可能性を秘めた人類最強最悪の兵器の名前だからだ。

「……禁忌は魔法の中にも存在します。例えば、時ですタイムターナーね。逆転時計を知っている人はいますか？」

クイレル先生が問い掛けると、ロンとハーマイオニーの手がまっすぐ天井に向かって伸びた。

その様子にクスリと笑いながら、クイレル先生はハーマイオニーを指名した。

「はい！ 時間逆転呪文を安定して使用するための道具です！」

「その通り！ グリフィンドールに5点」

クイレル先生は杖を振った。すると、金の鎖で繋がれた砂時計のよ
うな物が現れた。

「これは逆転時計の模型です。逆転時計は魔法省によつて嚴重に管理
されていますが、時折使用される事があります」

「え？ 禁忌なんですよね!？」

生徒の一人が叫んだ。

「ええ、時をいたずらに弄れば、それこそ世界が崩壊してしまう。個人
的な意見ですが、わたしは逆転時計を全て破棄し、時間逆転呪文の使
用を永久に禁じる世界規模の呪詛の発動を行うべきだとすら考えて
います」

物々しい言い方に生徒達は息を呑んだ。

「それほどまでに危険なのです。ですが、魔法省は管理が可能だと考
えているようです。わたしはその点に関して大いに疑念を抱いてい
るのですが……。まあ、そこは今はいいでしょう」

クイレル先生は逆転時計の模型を弄りながら呟くように説明を始
めた。

「例えばです。さつき、わたしはハーマイオニーさんを指名しました
ね？ ですが、ロナルドくんを指名する事も出来た。そして、わたし
はその事を識った上で過去に行く事が出来る。その時、過去のわたし
にロナルドくんを指名させる事も出来るわけです。そうになると、指名
された筈のハーマイオニーさんは指名されない事になる。おや？
ならば指名された筈のハーマイオニーさんはどこに行つたのでしょ
う?」

誰も分からなかった。なにしろ、ロンが指名された時点で本来指名
されていた筈のハーマイオニーは存在しなくなるのだから。

「くだらないと思いますか？ その程度の事を危険視するのは馬鹿ら
しいと？ では、もっと広い視野で考えてみましょう。今ここに殺人
鬼が来たとします。幸い、わたしや他の誰かが上手く対処して誰も死
にませんでした。けれど、殺人鬼は過去へ渡りました。さて、どうな

りますか？ 上手くいかなかったという経験と、どういう風に対処されたのかを識っている殺人鬼が過去に渡ったのですよ？」

ゾツとした。ロンまでが青褪めている。

「答えは分かり切っています。殺人鬼は誰かを殺してしまうでしょう。仮に再び失敗しても、その経験を持ったまま過去へ渡り、うまくいくまで繰り返す事も可能なのですからね。そして、過去へ飛ぶという事は物理的に遠くへ行かれるよりも為す術がありません」

その時、生徒達はクイレル先生がどうして時を禁忌だと言ったのかが分かった。

あまりにも恐ろしい。

「過去で殺された者が現在を生きる事は大いなる矛盾であり、その矛盾を許してくれる世界ではないという事も付け加えておきましょう」

第三十八話『禁忌』

「なんか、今日の授業は怖かったね……」

ハリーは少し青褪めている。

「そもそも時間逆転とかよく分からなかったな」

シエーマスの言葉にネビルも頷いている。

「そう？ タイムパラドックスとか、映画でよくあるネタじゃん」

「デイン。魔法界に映画は無いんだよ」

魔法界は『事実は小説よりも奇なり』を地で行く世界だ。

マグルの世界で言うところのファンタジー小説など、魔法族は欠片も興味を示さない。

だから、その発想は現実で止まってしまおう。

「……マグルは魔法を幻想の産物と捉え、自分達を現実的な種族だと考えています。ですが、むしろ魔法族の方が魔法の実像を知るが故に固定観念を抱いてしまっている現実主義者なのですよ」

いきなり後ろから声を掛けられた。

振り向くと、そこには老齢の女性がいた。

「あなたは確か、バーベツジ先生！ お初にお目にかかります。オレの名はロナルド・ウィーズリー。どうぞよろしくお願いします」

どうやらロンの好みにドストライクだったようだ。彼の目はハリー

トマークになっっている。ハリー達はドン引きした。

「あらあら、わたしの事を知っていてくれたのね」

「もちろんでさー!」

「……えつと、ロン? この人って……」

生憎、彼女を知っていたのはロンだけだった。

デイーンがバーベッジに申し訳無さそうな表情を浮かべながら口々に問い掛けると、彼は「マグル学の先生さ」と教えてくれた。

「マグル学……?」

ハリーとデイーンはキョトンとした。

「マグルの世界で言うと、世界史みたいなもんですね。魔法界とマグル界は隣り合い、所によつては重なり合ってますが互いの事を万全に知っているわけではねえんです。例えば、デイーンが当たり前に知っている映画をシエーマスは知らないし、シエーマスが当たり前に知っていたクイディッチをデイーンは魔法界に来るまで知らなかった。そういう知識の齟齬を補う為の重要な学問なんですよ」

「その通り! 驚いたわ。マグル学はあまり重要視されない分野だから……、あなたの歳の子でそんな風に確りとマグル学を捉えてくれている子は初めてよー!」

バーベッジは感激した様子だ。ロンは照れている。

「ロンの趣味って……」

「ハーマイオニーにプロポーズしてたのに……」

「いや、あれは悪霊退治だったんでしょ?」

「でもさあ……」

ハリー達はハーマイオニーの顔を思い浮かべながらロンに一言一言言ひことぶたことってやりたくなつた。

「急にごめんなさいね。あなた達が映画の話題を口にしていたから気になつてしまったの。わたしの授業ではマグルの映画の上映を定期的に挟んでいるのよ。わたしは彼らの独創的な視点は魔法族にとつても重要な意味を持つと常々考えている」

「確かに、時の魔法の概念は魔法族よりもマグルの方が詳しい可能性すらありますからね」

「ええ？ マグルは魔法が使えないからマグルなんだろう？　なんで、そのマグルの方が詳しいんだよ？」

シエーマスは納得いかなげだ。

「使えないからよ」

そんな彼に応えたのはバーベツジだった。

「存在しないからこそ空想するの。そして、その空想に対して、可能な限りの根拠を与えようとする。それがマグルなのよ。時を題材にした映像作品や本が一体どれだけマグルの世界に溢れかえっているか知っているかしら？　時を巻き戻す行為に対して、起き得る問題の可能性を彼らは幾百も考案しているの。その中には外的なものもあるかもしれないけれど、空想を重ねる事は時に真実を見つけ出す事にも繋がるの」

バーベツジはかなり情熱的な女性らしい。マグルを語る彼女の瞳はランランと輝いている。

「あなた達もマグルの本や映像作品に触れてみたほうがいいと思うわ。この世界は一方からだけで全てを見通せるほど狭くも小さくも無いのだから。マグルの視点に限らず、より多くの視点を持つ事が自分の可能性を広げる事でもあるのだからね」

そう言うと、彼女は授業の時間が迫っているからと去って行った。

「……映画って、おもしろいの？」

シエーマスは少し映画に興味を持ったようだ。

「よしー」

ロンは手を叩いた。

「じゃあ、次のクリスマス休暇にみんなで映画見に行こうぜ！」

そういう事になった。

第三十九話 『ヒーロー』

ハロウインの日、グリフィンドールのクイディッチチームの選抜試験が行われた。

挑戦するハリーの応援に駆け付けたのはグリフィンドールの同級生ばかりではなかった。

ヒツポグリフクラブのメンバーも見物に来ている。

試験を行うキャプテンのオリバー・ウツドはスリザリンの生徒達を追い返そうとしたけれど、押し掛けてきた人数があまりにも多過ぎた。

「ハリー、がんばれ！」

「あなたなら大丈夫よ！ 自信を持って！」

ハツフルパフのセドリック・デイゴリーはレイブンクロウのチョウ・チャンと共に『がんばれ！ ハリー！』という文字が描かれた大旗を振っている。

グリフィンドールとは対立している筈のスリザリンの生徒も彼に声援を送っていた。

「……いいの？ 君って、スリザリンの生徒だろ？」

セドリックに誘われてヒツポグリフクラブに入ったばかりのハツフルパフ生が隣のスリザリン生に問い掛けた。

「ハリーは純血だし、別にいいじゃん。そういうの拘ってたらクラブなんて入ってないよ」

ヒツポグリフクラブに限らず、クラブ活動は基本的に他寮との合同活動になる。

そこで一々寮の事で言い争いを行う厄介者に居場所を与えるクラブは少ない。

「まあ、クラブから追い出されるような奴は余計拗らせるんだけどな……」

他寮と馴れ合う者を決して許さない人間もいる。その多くがクラブから追放された経験を持っていた。

最初から溝がある者の溝を更に広げてしまう。その事に頭を悩ま

せるクラブのリーダーは少なくない。

なにしろ、一度はクラブの門戸を叩いてくれた相手だからだ。出来れば仲良く活動したかった。

けれど、不和を撒き散らす人間を受け入れてクラブ内の雰囲気をごスグスしたものにするくらいならばという判断なのだ。

「ドラゴンクラブくらいなもんだよ。そういう奴も受け入れてるのは」

尤も、ドラゴンクラブでそのような事に拘っている余裕が持てる人間など早々いない。

常に苛烈なトレーニングを課され、実践訓練の際には敵意を向けた分の敵意を真正面から向けられる。

心身ともに追い詰められ、それでも周囲の手を払い除け続けられる者は一握りだ。

「……まあ、そこで自分を貫いちやう奴はマジにヤバい奴ばかりなんだけどね」

死喰い人の幹部クラスを含め、名を挙げた闇の魔法使いは大体そういう連中だった。

「受け入れても受け入れなくても、拗らした奴を余計拗らせちゃうんだ。ほんと、面倒くさいよな」

「……それ、君が言っている事なの？」

「俺だけじゃないよ。スリザリンの生徒全員が純血純血言ってるわけじゃないんだぜ？ そんならだったらマグル生まれや半純血の連中の居場所なんて無くなっちゃうだろ？」

「そう言えば、スリザリンにもマグル生まれの生徒がいるんだっけ……」

「毎年じゃないけどな。何年かに一度、一人か二人くらい放り込まれるんだ。例えば、俺とかさ」

「君、そうなの!？」

「でも、別に普通だろ？」

「う、うん……」

マグル生まれのスリザリン生は肩を竦めた。

「純血純血言ってる連中だって、親類縁者全員が純血だらけの奴以外、大抵はポーズだけだしな」

「マジ？」

「だってなあ……。スペンサーの家行ったら、普通にマグル生まれのおっちゃんか飲みか誘いに来てたし」

「……そういうもんなんだ」

第三十九話『ヒーロー』

ハリーは見事にシーカーの座を手に入れた。

デイーンとシエーマスも試験に参加していたのだけど、ハリーには全く歯が立たなかった。

ハリーはグリフィンドール寮で祝われ、ヒツポグリフクラブのクラブルームで祝われ、そして、ハグリッドの小屋でいつものメンバーに祝われた。

アチャコチラに引っ張り回されたハリーはすっかりヘトヘトになっていただけで、その表情はとても明るかった。

「……ビックリした」

まさか、クラブのみんなが選抜試験を見に来てくれるとは思っていなかった。

みんながハリーを応援するものだから、他の挑戦者の肩身は実に狭そうだった。

その事で色々と言われた。だけど、最終的にはみんなが祝ってくれた。

グリフィンドールの生徒だけではなく、ハツフルパフやレイブンクロー、スリザリンの生徒まで……。

「みんな、ポッターさんが試合で活躍する所を見たかったですよ」

ロンは生まれ変わる前の世界での事を思い出していた。

彼は野球をこよなく愛し、鼻根の球団を応援していた。

同じ球団を応援する者もいれば、当然だけど他の球団を鼻根にしている者もいる。

けれど、彼が鼻根にしている球団の投手がアメリカのメジャーリーグに旅立った時は国中の野球ファンが応援した。

メジャーリーグで彼が活躍した時は国民の多くが彼に喝采を向けた。

「あなたという偉大なシーカーの誕生の瞬間をオレ達は今日、目撃したんだ」

見物に来ていた他寮の生徒全員がハリーを好意的に見ていたわけじゃない。

それでもみんなが彼に祝の言葉を向けた理由は単純明快だった。

あの試験、彼の飛行が尋常ではなかったからだ。

箒に一度でも触れたら分かる。

異次元だ。彼の飛行能力はまさに異次元の領域にあった。

天賦の才能とも言うべきもの。

試験の為にフィールドへ解き放たれたスニッチを一番に獲得した者がシーカーとなるというシンプルなルールの中、彼は真つ先にスニッチを見つけ出した。

そして、彼が気付いた事でみんなも気づき、争奪戦になった。

有利だったのは当然、偶然にも一番近い距離を飛んでいた者だ。けれど、その者が箒を加速させるよりも早く、彼はスニッチを狙って加速し始めていた。

スニッチへ至る為の動線には多くの挑戦者達がひしめいていた。その悉くを紙一重で回避しながら最高速度のまま翔け抜けたのだ。

そして、彼はスニッチを獲得した。

その能力に疑問を抱く者などいない。それほどまでの圧巻の勝利であった。

グリフィンドールという枠組みでは収まらないと誰もが悟った。彼は世界で活躍するレベルの選手になると確信した。だから、みんなが喝采を送ったのだ。

「あなたはみんなに夢を与えてくれたんだ。大空を舞うあなたの行く末を見つめてみたい。そう、誰もが思ったんでさ」

「……そ、そんな、ぼく、そんな大したものじゃ……」

「大したもんだよ!!」

シエーマスが怒ったように叫んだ。

「じゃなきや、僕は何なんだよ!? 一番近くにいたのにスニッチに気づけなくて、慌てて加速した時には君が脇を通り過ぎていったんだよ!?! 君は特別なんだよ!! すごい奴なんだよ!! それを君に否定されたら、僕はどうなっちゃうんだ!?!」

「そ、そういうつもりじゃ……」

「だったらさ」

デインはハリーに笑いかけた。

「胸を張りなよ!」

「……うん!」

友達の輪の中で嬉しそうに笑うハリーを見て、ハグリッドは涙ぐんだ。

「ど、どうしたの?」

ネビルが心配して声をかけると、彼はハンカチで鼻をかんだ。

「……思い出しちゃった。ジェームズも凄かったんだ……」

ハグリッドの脳裏に浮かぶのはハリーの父であるジェームズ・ポッターがクイディッチの試合で活躍する姿だった。

「ハリー。お前さんのお父さんは本当に凄かったんだ。誰もが一目置いとった。まあ、スリザリンの連中とは仲が悪かったが……」

「その点で言や、ポッターさんはお父上を超えちゃったってこったな」

「……仲、悪かったの?」

ハリーは祝の言葉を掛けてくれたスリザリンの生徒達の顔を思い浮かべた。

その中には七年生になって引退したテレンス・ヒッグスの姿もあった。

—— ハリー、見事だったぞ!

ハリーは彼の事を尊敬していた。見事だと褒めてくれた時は嬉しくて頬が緩んでしまった。

無敗のテレンスに認められた自分は結構すごいのではないかと思った。

「あんまり仲良くは出来なかった。時代が悪かったってのもあるがな……」

ハリーも嫌いなスリザリン生がいる。だけど、テレンスを含めて、好きなスリザリン生もいる。

父親がスリザリン生を一括にして仲が悪かったと言われるのはハリーにとつて不満だった。

「まあ、例のあの人の時代だからな……」

シエーマスが呟いた。

「死喰い人の多くはスリザリン出身だったって聞いたよ。例のあの人自身も」

「……とつあんが言つたろ？ 時代が悪いんだ」

ロンが厳しい表情をシエーマスに向けた。

「リーダーの出身寮となれば、その繋がりは他寮よりも強い。そうなれば同調圧力つてものが働いちまう。そして、流されちまう奴が増えれば、自然と固定観念みたいなもんが出来ちまう。それは悪循環を生む」

彼の言葉はハリーにとつて難しい話に聞こえた。

理解しようと耳を澄ませているのだけど、その内容をすっかり理解出来ている自信がなかった。

「例えばの話だが、彼がグリフィンドールの出身だったら、恐らくはグリフィンドールが最も死喰い人に近い寮と呼ばれていた筈だぜ。なにしろ、ダンブルドア校長を含め、大勢の魔法使いを相手に戦争を起こした男だ。死喰い人つて組織を作り上げた手腕とカリスマは半端じゃねえ。だから、スリザリンが死喰い人に近い性質を持っているつてのは、ちと違うぜ」

「……で、でも、例のあの人はスリザリンだったんでしょ？」

ネビルはまるで睨むかのようにロンを見つめた。

「二つの寮の性質しか持ち合わせない奴が世界相手に喧嘩を売れると思うか？ 規格外を無理矢理枠に嵌めようとした結果、スリザリンだっただけだろう。実際、組み分け帽子が複数の寮を候補に上げる事は珍しいが無いわけじゃないらしい。その中で生徒の希望とかを聞き入れた後、配属する寮を決めるそうだ」

ロンは悲しそうに呟いた。

「もったいねえ……。きつと、真つ当な道を歩んでいれば偉大な英雄にだって成れただろうに……」

「でも、成らなかつたんだ」

ネビルが言った。その顔はとても恐ろしいものだった。

「ネ、ネビル……？」

ハリーが声を掛けると、彼はハツとした表情を浮かべた。

「……………ごめん」

謝る彼の頭をハグリッドは大きい手で撫でた。

「……奴は悪の道を選んだ。ロンの言葉も分かる。けどな、アイツはやっぱり……、悪党なんだ」

ハグリッドの言葉にロンは小さく息を吐いた。

「……………でも、もったいねえと思っちゃもうんだ」

第四十話 『サテイスフアクション』

うるさいな。

「それでよお！ ポッターさんがよお！」

聞いてない。聞きたくない。

「お前さんにも見せたかったぜ！ あの勇姿！」

ボクは眠っているんだ。

「そういや、もうすぐハロウィンだな！」

奇妙な映像が浮かんできた。

魔法生物の群れに見えるが、それは人間が擬態したものだだった。

奇妙な光景だ。

「思い出さず。大輔と渋谷のハロウィンを見に行つた時の事をよお」

小さな少年がボクを……、この光景を見ている誰かを見つめている。

—— 『父ちゃん！ 日本って、変な国だな！』

—— 『ばっきやろう！ 祭りは楽しんでなんぼだぞ！』

聞き覚えのない言語だ。

「世界中連れ回しちまって、日本には数えられる程度しか連れて行ってやれなかつたな……」

小さな少年が成長していく過程をボクは見た。

好奇心旺盛な性格が表情に表れていて、頬に絆創膏を貼っている姿。

ラグビーの試合で活躍している姿。

研究論文で賞を手に入れて母親らしき女性に抱き締められている姿。

鋭い目つきの女性と教会で愛を誓い合う姿。

恐らく、マグルとしては相当に優秀で順風満帆な人生を歩んだらしい少年の記録だった。

「もつと、ゆつくり人生を歩ませてやるべきだった。何度も思った筈なんだが、性分が変えられなくてなあ……」

さつきからおかしい。これはロナルドの記憶だ。だが、この記憶が

本物だとしたら、ロナルドの年齢は相当な歳である筈だ。

「……オレはよお、良い親じゃなかったんだ。自分の事ばかり考えちまう最低の親さ。けどなあ……、大輔の事は本当に大事だったんだ。亜里沙の事だって、愛していたんだぜ……」

哀しい気持ち広がっていく。

寂しいのだろう。悔いているのだろう。そして、どこか自分に呆れている。

「本当に良い人生を送らせてもらったんだ。だから、オレは他の奴にも良い人生を送って欲しいんだ」

励ます言葉を探していたボクに彼は語りかけてきた。

「……お前さんにも良い人生を送って欲しいんだ」

彼の言葉に嘘偽りなどなかった。

「なあ、どうしたらいいんだ？ お前さんは眠っちまつてる。オレの声は届いてねえのか？ どうやったら、お前さんを笑顔に出来るんだ……」

苦しんでいる。意味が分からない。ボクは十分に満足している。

この暑苦しい心に包まれながら眠る事はとても幸福だった。むしろ、邪魔しないで欲しい。静かにして欲しい。寝られないじゃないか！！

「……なあ、オレの肉体を使ってもいいんだぜ？ したい事があるんじゃないか？ 箒に乗ったり、酒のんだり、風呂入ったり、冒険したり……」

『それはお前がしたい事だろ』

「おお！ 起きてくれたのか！」

『寝られなかったんだよ……。本当にやかましい男だな。もう少し静かに出来ないのか!？』

「ええええええ!？」

本当にやかましい。なんで、こんなにやかましくしているのに他の連中はグースカ眠っていられるのかサツパリ分からない。

『……坂本玄蔵。それがお前の名か?』

「え？ ああ、そつか！ なるほどな！ おう！ それもオレの名だ

！」

相変わらず、頭の回転は早い。ボクという言葉から、ボクが彼の記憶を覗き見た事を察したのだろう。

『つまり、お前は転生したという事か？』

「おう！ いや、驚いたぜ！ そんな事あり得ねえと思つてた事が起きたんだからな！ まあ、本当にオレが玄蔵なのかも実際の所は分からねえがな……」

『その懸念は正しい。転生という概念を魔法で実現させようと思つたら、それは相当難しいものになる。だが、死者の魂を憑依させる。あるいは死者の記憶を刻み込む事だけなら難易度は格段に下がる。君はあくまでもロナルド・ウィーズリーであり、坂本玄蔵の記憶を何らかの理由で有してしまつたと考える方が自然だよ』

「すごいな！ まるで魔法博士だぜ！」

『……まあ、お前がお前自身である事に変わりはない。記憶は肉体に宿る魂魄だ。如何なる形であれ、お前という器は坂本玄蔵の魂魄によつて補完されているからね』

「お前さん、優しい奴だな」

『は？』

意味が分からなかつた。今の会話の流れに優しさを感じる点など無い筈だ。

「モラトリアムで悩む歳でもないんだが、それでも思う所はあるっつーかよ。だから、励ましてくれたんだろ？」

『ちがつ!? ボクはただ事実を言っただけだ……』

「改めて名乗らせてくれや。オレの名はロナルド・ウィーズリーだ。よろしく頼むぜ」

『……トムだ。トム・リドル』

「よろしくな、トム。なあ、オレはお前さんの為に何が出来る？ 教えてくれ。お前さんの幸せの為にオレに出来る事があるなら、してやりてえんだ」

悔しい。こんな小僧の言葉で簡単に揺さぶられてしまう自分の精神に腹が立つ……。

「オレはジジイなんだぜ？ お前さんがいくつなのかは分からねえけどよ、オレより年上って事はないだろ？ だったらよ、少しくらいいじやねえか」

いいのか？ 委ねてしまつて……。

「いいんだ。子供は大人に甘えてなんぼだぜ」

肉体など無い筈なのに頭がグラグラしている。胸から得体のしれない衝動がせり上がってくる。

頭の中がグシャグシャだ。ハーマイオニーの中に居た時よりも更に強い感情がボクの心を満たしていく。

欲しい。欲しい。欲しい。欲しい。欲しいよ……。

まるで砂漠を何日も彷徨っていたかのようなようだ。彼はその果てに見つけたオアシスだ。

その泉の水を口に運ぶ為なら、何をしてもいい。何を差し出してもいい。

『貴様は愚か者だ。ボクは満足していたんだぞ。ただ、お前の中に居られればいいと思つていたんだ。それなのに……』

それでは満足出来なくなつてしまった。こんな魂の状態では足りない。

肉体を得て、直接ロナルドに触れたい。直接言葉を交わしたい。その心身のすべてをボクのものにしたい。

「だったら、満足しようじゃねえか！」

『……簡単に言つてくれる』

魂を持たないボクが肉体を得る事はオリジナルが肉体を得る以上に難しい。

単純な蘇生術ではダメだ。

『ロナルド。ボクを満足させたいか？』

「おう！」

『ならば、秘密の部屋を見つけ出せ』

「秘密の部屋を……？」

秘密の部屋にはバジリスクがいる。

太古の時代から生きる蛇の王。

アレはスリザリンの継承者に従うよう躡けられている。

その身を捧げさせる事でボクは強靱な肉体を得る事が出来る。

『ああ、そうだ。ヒントをやろう。嘗て、秘密の部屋は一度開かれてい
る』

「……具体的な場所は教えてくれねーのか？」

『それを教えてしまったら冒険にならないだろう？ それとも、ボク
の為ではその程度の謎解きすら面倒だと？』

「へへっ、まさか！ 冒険は望むところさ！ それに、お前さんの為
になるなら何だつてしてやらあ！ 男に二言はないぜ！」

『……ならば、精々励む事だな』

秘密の部屋を追えば、いずれはトム・リドルという人間の真実へ辿
り着くだろう。

それでも尚、この男はボクを救おうとするだろうか？

あり得ない。ロナルドはボクを被害者だと思い込んでいる。だか
ら、優しくしてくれる。

真実に辿り着いた時、ロナルドはボクが被害者などではなく、加害
者なのだを知るだろう。

『ふっふっ……』

さっさと秘密の部屋の場所を覚えてしまえばいい。

そうすれば真実を知られる事なくバジリスクの下まで辿り着く事
が出来る。

それが賢い選択というものだ。それなのに、ボクはわざわざ彼に遠
回りをさせようとしている。

自分で自分が分からない。

裁いて欲しいのか？

許して欲しいのか？

憎んで欲しいのか？

慰めて欲しいのか？

分からない。だからこそ、ボクは彼に言う。

『頼んだよ、ロナルド』

「おう！ 任せとけ！」

第四十一話 『空虚な足跡』

ロナルド・ウィーズリーは図書館にやって来た。それはトムとの約束を守る為だ。

秘密の部屋を見つけ出す。その為のヒントは『嘗て、秘密の部屋は一度開かれている』というものだった。

「……一度開かれているか」

実を言えば、その可能性はすでに考慮していた。

夏休みに現れた屋敷しもべ妖精の事を思い出す。

ドビーと名乗った妖精はハリーに危機が迫っている事を伝えに来た。

その危機の内容を直接聞いたわけではない。ただ、その時に並べ立てた推論をドビーは否定しなかった。

何者かが秘密の部屋の恐怖をハリーにけしかけようとしている。そして、その手段がトムだったわけだ。

つまり、少なくともドビーの主人であるルシウス・マルフォイは秘密の部屋を単なる伝説ではなく、実在する物だと知っていた事になる。

「ルシウス・マルフォイの立場なら知り得る情報つてわけだ」

マルフォイ家は魔法界の名家として知られている。

その歴史と情報網は他の多くの魔法族よりも多くの情報を仕入れる事が出来た筈だ。

「ルシウスはポッターさんを狙った……」

理由はいろいろと考えられる。その中で最も有力なのはヴォルデモート卿の配下として動いたというものだ。

考察していく内に幾つもの点が線を結び始めていく。

試しに日刊預言者新聞のバックナンバーを捲っていくと、ある時期から不自然な空白が目立つようになった。

隅ではなく、一面の記事が掲載されるべき所が空白になっているものもある。

「……ヴォルデモート卿の記事か」

He who must be named
名前を呼んではいけない例のあの人。

そのような怪文書が呼称として定着している程、かの帝王は魔法界の禁忌タブーとされている。

その人物の名前はおろか、相貌や引き起こした事件に至るまでが抹消されてしまったのだろう。

「ヴォルデモートという名が本名とも思えない……」

彼の事を興味本位で調べた事がある。

なにしろ、現実に存在した魔王だ。実に冒険心をくすぐった。けれど、ヴォルデモート卿の名が記された如何なる本にも彼の真名は記されていないかった。

試しに家族に問いかけてみたが、そのような事に関心を抱く事さえ許されなかった。温厚な父母や優しい兄達が口を揃えて『例のあの人』の事を知ろうとしてはいけない』と言った。

考えてみれば当たり前の話だった。なにしろ、彼は組織だって大量殺戮を行った犯罪集団の主格だ。犯罪者を神聖視するなど倫理に反している。

「……なんで、誰も止めてやらなかったんだよ」

テレビで犯罪のニュースやテロのニュースを見る度に思う事がある。

生まれ持つての悪など存在しない。赤ん坊はすべからく無垢なもので、染めるのは周囲の環境だ。

悪意の種と善意の種は誰の心にも等しく埋められている。どちらの種も等しく芽吹き、育てられる。

どちらも成長していく以上、急に片方だけが伸びる事などあり得ない。大小の差が生まれる時、そこには必ず切っ掛けが存在する筈だ。

その切っ掛けを誰も見ていないなどという事はあり得ない。なにしろ、人間は一人で成長出来る程器用な生き物ではないからだ。

「まあ、ネットみたいに一方通行で情報を得ちまう可能性もあるが……」

一方通行の情報は誰にも知られぬ内に木を育ててしまう。

だが、この世界ではまだネットが普及していない。そもそも、ヴォ

ルデモート卿が生きていたのは十年以上前の話だ。今以上にネットは遠い存在だった筈だ。

ならば、彼の木の成長を誰かが見ていた筈なのだ。その時、止めてやる事が出来た筈だ。

「……って、そんな簡単な話じゃねーよな」

我ながら馬鹿げた考えだ。そうロナルドは苦笑した。

それは理想論に過ぎないからだ。

実現しようと考えたら監視社会ディストピアの完成だ。

けれど、そう考えてしまうのはヴォルデモート卿という男の末路があまりにも哀れだったからだ。

ヴォルデモート卿という名は何処から来た？

信奉者や被害者が呼び始めた？ あり得ない。

その名は恐らくヴォルデモート卿本人が考えたものだろう。

そして、彼は信奉者を集め、派手に暴れ回った。

その行動からロナルドが読み取れた思想は一つだった。

名を残したかったのだろうか？

それ以外にわざわざヴォルデモート卿という名を生み出す必要性が見出せない。

そして、彼の行動が生み出した結果は存在の抹消だった。

名前どころか姿形に至るまで、すべてが消されようとしている。

今はまだ当時の記憶を残している人々がいるが、あと何十年かすれば世代が入れ替わり、もはや彼の存在は誰かの話題に上がる事もなくなるだろう。

同じような存在としてゲラート・グリンデルバルドという男がいるが、彼とヴォルデモート卿は違う。少なくとも、グリンデルバルドの名は残されているし、彼の行動履歴はヴォルデモート卿と違って新聞で追う事が出来た。

要するに彼はやり過ぎたのだ。そもそもやり方を間違えていた。その過ちを正してくれる者も得られぬ人生を送った。

哀れだ……。

何も得られず、何も残せず、あまりにも空虚な人生だ。

第四十一話 『空虚な足跡』

「……………」

ある記事を境に空白が消えた。

恐らく、ここからヴォルデモート卿の時代が始まったという事だろう。

ロナルドは更に年代を遡っていく。すると、ある記事に目を留めた。

『トム・リドル』

その名前を見つけた。

———— 『……………トムだ。トム・リドル』

二人の人間から聞いた同じフレーズ。

偶然である筈がない。名前だけならともかく、その境遇、その口調がそっくりそのままだった。

『先日の痛ましい事件の続報です。どうやら犯人は生徒の一人が密かに飼育していたアクロマンチュラだった模様。犯人を突き止めたのはホグワーツ魔法魔術学校の五年生であるトム・リドル。彼の聡明さと勇敢さが無ければ被害は今も広がっていたかもしれない……………』

その記事を更に少し遡ると事件の記事があった。

複数の被害者が出ていたらしい。その最後の一人はマートル・ワレン。彼女の死によりホグワーツは閉鎖されようとしていたらしい。

犯人は退校処分になったという。

彼女の死の詳細は記されていない。ただ、原因不明という文字があった。

「……………妙だな」

一度新聞のコーナーを離れ、魔法生物の本を取りに行った。

ニユート・スキヤマンダー著の幻の動物とその生息地からアクロマンチュラという生物を調べてみる。

すると、件の生物が如何に危険な能力を持っているかが事細やかに記されていた。

「ハサミと毒液……………。加えて、人肉を好む傾向にあるか」

たしかに、こんな危険な生き物がいれば犯人だと断定されるのも仕

方がない。

犯人でなくとも、人が密集して生活を営んでいる場でこんな生き物を密かに飼育している時点で殺人未遂同然だ。

だが、本当にアクロマンチュラが犯人だとしたら、死因は一目瞭然となる筈だ。

彼らが空腹ではなかったとしても、殺害方法は明らかな外傷を与えるもの。毒殺、あるいは斬殺……少なくとも原因は明白だった筈だ。

「1943年。今から半世紀程度前だな。危険な魔法生物を校内で飼育していた。退校処分になっている」

以前、ロナルドはハリーからハグリッドが退校処分を受けている事を聞いた事がある。

条件がピタリとハマってしまった。

「……話を聞いてみたいが、デリカシーに欠けるよな」

ただ、ハグリッドが記事に記されている退校処分を受けた生徒だと確定すれば、そこから一気にピースがハマっていく筈だ。

「いや、確定しなくてもいいか……」

知りたいのは秘密の部屋についてだ。

過去の事件の真相を暴きたいわけではない。

ならば、仮定は仮定のままで構わない。結論が間違っていたら、また別のアプローチを考えればいい。

「……マートルか」

以前、ハーマイオニーからその名を聞いた事があった。

嘆きのマートルと呼ばれているゴーストが2階の女子トイレにいます。

ロナルドはテーブルの上に広げていた資料を元に戻し、図書館を出た。そして、廊下を少し進んだ後、全速力で元来た道を駆け戻った。

すると、曲がり角の所にビックリした様子のハリー達を発見した。

「どうしたんですかい？ ポッターさん」

ロナルドが問いかけると、ハリーは悪戯がバレた幼子のようにしどろもどろになった。

シエーマスやデイーン、ネビルも視線を泳がせている。

ハーマイオニーやラベンダー、パーバティは『わたし関係ないもん』とばかりに顔を逸し、フレッドとジョージはニヤニヤしている。

よくもこれだけの大人数で追跡していてバレないと思ったものだとロナルドはむしろ感心した。

「ロ、ロンこそ！ 何やってたの!?! 図書館ですごい怖い顔しながら調べ物してたけど……」

さて、どう答えたものかとロナルドは少し悩んだ。

これから向かう先は秘密の部屋だ。

確実に危険な場所であり、彼らを連れて行くわけにはいかない。

事情を説明すれば、ハリー達について来ようとするだろうし、ハーマイオニー達は先生にこの事を報告してしまうだろう。

それは非常に困る。

「……いや、いつそダンブルドア先生に立ち会ってもらわなきゃか」

「ロン……?」

「とりあえず、校長室へ向かいましょう。事情はそこで説明しますよ」
恐らく、ここで煙に巻いたとしてもハリー達を誤魔化し切る事は不可能だろう。

加えて、ロナルドはトム・リドルという存在の真相にほぼ気付いていた。

自分一人で抱えきれぬリスクなら幾らでも抱えるが、あるいは魔法界全体を揺るがしかねない巨大なリスクとなる可能性もある。

そう考えると、彼らが追跡して来てくれた事は良いブレーキとなったとロナルドは思った。

そして、一行は校長室へと向かった。

第四十二話 『黄金旋風』

アルバス・ダンブルドアは深く息を吐いた。

現在、ヴォルデモート卿のオリジナルと分霊が同時にホグワーツに存在している。

一方はクイリナス・クイレルによって記憶を奪われ、一方はロナルド・ウィーズリーによって籠絡された。

『ダンブルドア！ 何故、動かないのですか!?!』

校長室に並ぶ絵画の一つが声を荒げた。

彼は歴代校長の一人だ。

「……ダーウエント。わしが動く事が得策とは思えぬ」

『何を悠長な事を！ 今が千載一遇の好機ではありませんか!』

デイリス・ダーウエントは今にも肖像画から飛び出してきそうな形相を浮かべている。

『クイリナス・クイレルは死喰い人ですぞ！ 許されざる罪人だ！

故にこそ、諸共に魂すら抜け出せぬ石棺に封印するのです！ さすれば如何なる術を用いようとも二度と転生を企む事は出来ぬ筈!』

『それはあまりにも非人道的過ぎますぞ！ クイレルはヴォルデモート卿の信奉者だが、罪人ではない！ だからこそその現況ではありませぬか!』

ダンブルドアが口を開くよりも先にオッタライン・ギャンボルの肖像画がダーウエントに噛み付いた。

『わたくしもオッタライン殿に賛成ですわ!』

『クリースワシー!?! 貴女までが何を言うのです！ 相手は巨悪なのですぞ!』

『少なくとも！ わたくしにはあなたよりもホグワーツの現況を知る術が多くあるのです！ ヴォルデモート卿としての記憶を失ったトム・リドル！ 彼は邪悪ではなく、邪悪になり得る危うさを持つ者なのです!』

アントニア・クリースワシー。彼女の肖像画はホグワーツに複数存在し、彼女のオリジナルはゴーストとしてホグワーツを今も見守り

続けている。

彼女はダンブルドアの命令によって肖像画とゴーストの両方の眼を使い、クイレルを監視していた。

『ロナルドに憑依した分霊に対しても、わたくしは別の個体として真っ白な状態から判断を下しました！ 彼もまた、危うさを持つだけの少年でした！ クイリナスの愛！ ロナルドの愛！ それぞれ方向性は違えども、彼らはトム・リドルという男の闇を取り払ったのです！』

『二度闇に落ちた者が二度落ちぬ保証など無いでしょう!? そもそも、一つの肉体に二つの魂など、いつ異変が起きてもおかしくない！ 少なくとも、ロナルド・ウィーズリーに対しては早急な措置が必要な筈です！ それとも、罪を犯した者の為に罪なき少年を犠牲にする?!』

ダーウエントの言葉にクリースワシーは押し黙った。

本来、一つの肉体には一つの魂が原則だ。

魔法を使用する際、術者は術のイメージを明確に持つ必要がある。そして、幾つかの呪文には強い感情が必要なものもある。それが意味しているのは魔法力と精神力が同一であるという事だ。そして、精神は魂を構成する要素の一つである。

要するに魂とは強大なエネルギーの塊なのだ。

大きなコップをイメージしてみよう。そこに半分ほどの水を注ぐ。それが魂だ。

一つ分ならば余裕で入る。だが、更に同量かそれ以上の水を注いだらどうなるか？ 簡単だ。水が零れ落ちる。

問題はその水が最初に注いだ方と後から注いだ方の両方が混ざり合っている点だ。

『クイリナスの事はいい！ 奴の選択だ！ それに、忘却術によって互いの魂の一部を取り除いている。だからこそ、今は安定している！』

以前まで、クイリナスはヴォルデモート卿との融合状態に苦痛を感じていた。

それは精神的なものだけではなく、肉体的なものもあった。

ユニコーンの血による呪いもある。だが、それだけではなかった。肉体に二つの魂が宿った状態で長時間過ごした事で異常が発生していたのだ。

その苦痛を和らげたのはダンブルドアが命の水を原料に調合した魔法薬だけではなく、彼自身が行った忘却術も一役買っていたのだ。

『問題はロナルド・ウィーズリーです！　彼が苦痛を味わう必要など一切ない！　だが、時間の問題だ！』

ダーウエントを含め、ここに並ぶ肖像画はすべてがホグワーツの歴代校長のものだ。

偏った思想を持つ者や名誉を優先する者もいた。けれど、生徒を大切に思わない者は一人としていなかった。

生徒に危害が及ぶ事を歓迎する者は例え理事会が認めたとしてもホグワーツ魔法魔術学校そのものが認めない。

嘗て、生徒に一欠片の良心も向ける気がない者が理事会を買収して校長職を得ようとした事がある。その者をホグワーツが校長室へ招き入れる事は一切なかった。

合言葉を言おうと、魔法を使おうと、校長室は決して開かず、その者を追い出す為にホグワーツ中の甲冑が動き出したという。

『……ダーウエント殿の言うとおりだ。少なくとも、ロナルド・ウィーズリーに憑依している者については早急な対処が必要だ。例え、彼に恨まれる事になったとしても……』

クエンティン・トリンブルは沈痛な表情を浮かべながら言った。

『アルバス。君が過去を悔い、新たなる可能性に賭けてみたい気持ちもわからないわけではない。だが……』

『……来たようじゃ』

『ん？』

ダンブルドアは校長室の扉を開いた。すると、先程まで話していた件の少年が入ってきた。

「お邪魔します、校長先生!!」

相変わず澆刺とした少年だとダンブルドアは思った。

その姿はどこかジエームズ・ポッターに近しいものを感じる。
二人の共通点は人を惹きつける才能に溢れているという点だ。
彼の後ろからはそろそろと彼の友人達がついて来ている。

「いらつしやい。わしに用かね?」

「はい! 秘密の部屋を開きます! つきましては先生にも引率をお願いしたく参上しました!!」

彼以外の者達は初耳だったらしい。ギョツとした表情を浮かべて彼を見ている。

「ひ、秘密の部屋!? ど、どういう事!?!」

ハリーは仰天した様子で問い質した。

「慌てなさんな、ポッターさん! しつかり説明しますとも!」

彼は言った。

「オレの中にはトムがいる。彼は恐らくヴォルデモート卿だ。正確には一部……、あるいは……いや、そこはどうでもいいな」

「どうでもよくないと思うよ!? どういう事!? ヴォルデモート卿って!?!」

ハリー達は一様に血相を変えている。

そして、それはダンブルドアも同様だった。

よもや、そこまで感づいているとは考えていなかった。なにしろ、彼がそこに至るための情報のピースはとても少なかった筈だからだ。

「……それはトム自身から聞いたのかね?」

「当たらずとも遠からずですね。先生、クイレル先生についてはもちろん御承知ですよね?」

「ああ、もちろんじゃよ」

ハリー達は頭の上にはなマークを浮かべている。けれど、ロナルドにその事を説明する気が無いようだ。

だが、ダンブルドアにはすべてを理解する事が出来た。

二人のトム・リドルの存在を認知しているのならば推理の難易度は格段に下がる。

「……ミスタ・ウィーズリー。秘密の部屋を開く理由を聞かせてもらえるかね?」

「トムが必要だと言いました。恐らく、秘密の部屋にはトムが受肉する為に必要なナニカがあるのでしょう」

「君はトムを受肉させるつもりなのかね？」

「そうです」

迷いのない目だった。彼はトム・リドルの真実を知りながら、それでも彼を救おうとしている。

「……ならば、何故わしの下を訪れたのかね？」

「トムを助ける為です!!」

キツパリと言い放つロナルドに対して、ダンブルドアは目を細めた。

「……ねえ、ロン」

ハリーは声を震わせながら問い掛けた。

「どういう事……？ 僕……、僕さ、ちゃんと理解出来てないのかもしれないけど……」

言葉とは裏腹に聡明な彼はロナルドの言葉に散りばめられたピースの数々から真相にたどり着いてしまったようだ。

「……君の中にはトム・リドルがいて、そいつがヴォルデモートって事？ ねえ、ロン……」

ハリーの言葉を聞いて、シエーマス達は目を見開いた。

ロナルドの言葉の意味を彼らも理解したという事だ。

「君はヴォルデモートを助けるって言ってるの!？」

否定して欲しい。その思いが瞳に色濃く宿っている。

「そうです、ポッターさん」

けれど、ロナルドは迷う事なく言った。

それは彼なりの誠意なのだろう。

ハリーの親を殺した相手を救う。それは彼にとって何よりの裏切り行為だと分かっているが故に。

「……なんで？」

ハリーの表情が歪んでいく。

ダンブルドアは静かにロナルドを見つめた。

こうなる事は分かっていた筈だ。トムを本心から救いたいと思う

ならば一人で実行するべきだった。

彼の敵対者であったダンブルドアや被害者であるハリーの前で説明する事は計画遂行において致命的な障害となると分かっていた筈だ。

助け舟を出す事はできる。ハリーを説得する事はそう難しくはない。けれど、ダンブルドアは沈黙を選んだ。

トリンブルの言葉は真実だった。

—— 『アルバス。君が過去を悔い、新たなる可能性に賭けてみたい気持ちもわからないわけではない。だが……』

新しい可能性に賭けてみたい。彼ならば自分などよりも遥かに素晴らしい答えを見せてくれるのではないかと期待している。

だからこそ、彼の言葉を待った。

「助けてやりたいからですよ、ポッターさん」

答えはあまりにもシンプルだった。

「苦しんでいる人を見たら助けてやりたいじゃないですか……」

その言葉にハリーは顔をくしゃくしゃに歪めた。

分かっていたからだ。ロナルド・ウィーズリーという男はそういう男なのだ。

大広間でのやり取りも見ていた。夜中、彼が内に宿した魂に語りかけている姿を見た事があった。

困っている人、苦しんでいる人がいたら助けてあげたい。

ただ、それだけなのだ。シンプル過ぎるくらいシンプルで、だからこそ、ハリーは苦しんだ。

そこに一欠片の悪意もない。純粹過ぎるほどの優しさにハリー自身も救われた事があった。

けれど、ドラコ・マルフォイ ヴォルデモート に対して、彼は等しく優しい。

それが辛くて仕方がない。息を必死に吸い込んでいるのに苦しい。

「……わかった」

怒りや憎しみ、失望を超えて、それでも浮かび上がってくる感情があった。

思い出すのはクリスマスの日だ。

二人でゴドリツクの谷へ向かった。

ハリーの為に必死になるロンの姿を見た。

辛いし、苦しい。けれど、ロンがロンである事が嬉しい。

ハリーは涙を零した。相反する感情の中で、それでもハリーは笑ってみせた。

「ロンがそうしたいなら、僕も協力するよ」

「ポッターさん……」

その言葉にロンは涙を溢れさせた。

責め立てられる事も覚悟の上だった。けれど、ハリーは協力すると
言った。

どんな理由があっても、どんな事情があっても常人には絶対に出
ない決断だ。

彼は我慢できずにハリーを抱きしめた。

「ありがとう、ポッターさん!!! アンタは……、アンタってお人は
……、どこまでも偉大だ!!! すまねえ、辛いだろう!!! でも、オレア
……、オレは……、苦しんでる奴をほつとけねえんだ……。すまねえ
……、ありがとう……。ポッターさん!!!」

その光景を見つめていた多くの肖像画達は二人の少年に輝ける黄
金の光を見た気がした。

あまりにも気高く、あまりにも優しい決意を目の当たりにして、そ
れでもヴォルデモート卿の復活など許してはならないと考えている
自らの思考に苦痛を覚えた。

「……ロン」

ダンブルドアは滝のように涙を溢れさせながら万力の如き力でハ
リーを抱きしめているロナルドに声をかけた。

「そのままではハリーが気絶してしまふ。放してあげなさい」

「へあ!? ああああああ、ポッターさん!! 大丈夫ですかあああつ!!」

あまりの大声にハリーはノックアウトしてしまった。

「トドメさしてどうするのよ!?!」

それまで成り行きを見ている事しか出来なかったハーマイオニー

はその光景にハツとなり、慌ててハリーを介抱し始めた。

そして、オロオロしているロンにダンブルドアは言った。

「ロン。トムを救う前に、一度わしにトムと対話をする機会を与えてはくれないかね？」

「ダンブルドア先生……。もちろんでさ!!」

「ありがとう」

そして、ダンブルドアは杖を振るった。

第四十三話『それはとてもとても強く、美しく、そして……、恐ろしいもの』

白い世界が徐々に輪郭を帯びていく。

アルバス・ダンブルドアはそこがキングス・クロス駅である事に気がついた。

「……これがお主の原風景なのじゃな」

『ああ、そうだ』

ベンチに腰掛けていたのは若き日のヴォルデモート卿だった。

まだ、トム・リドルという名で生きていた頃の彼を見て、ダンブルドアは憂いに満ちた表情を浮かべた。

『ここがボクの生まれた場所だ』

その言葉に秘められた思い。

彼にとって、孤児院で過ごした時間は死と同義だった。

生きていない。生まれてすらいない。

ただ、存在しているだけの無為な時間。

『マグルの世界において、ボクは異物だった。その事に苦しんだ。怒りを抱いた。けど、キングス・クロス駅を歩きながら思ったんだ。仕方のない事だったと……』

トムは自らの手を見下ろした。

『ボクは魔法使いだ。そもそも、住むべき世界が違っていったんだ。だから、うれしかった』

上を向き、瞼を閉じる。それは涙が流れぬよう堪える為だった。

『ダンブルドア。ボクにとって、ホグワーツは家だった。だから、教師は親だと思いたかった。生徒は兄弟だと思いたかった。だからだよ……、だから、ボクは誰よりも魔法使いでありたかった。みんなに認めてもらうために』

ダンブルドアは静かに彼の言葉を聞いていた。

それは心を秘め続けてきた男の本音だった。

『ボクは誰よりも頭が良かった。誰よりも強い魔力を持っていた。あ

なたを除いて、教師は誰もがボクを褒めてくれたし、生徒は誰もがボクに一目置いた。完璧な時間だった。ボクは最高の気分だった。だけど……、足りないと感じてしまった』

滲み出たのは苦悩だった。

『満たされる事はなかった。その理由が分からなかった。だから、より一層の高みを目指した。偉大なる存在になりたかった。完璧な魔法使いになりたかった。あまねく魔法使いに傳かれるような……、そういう存在になりたかった。そうなれば、満足出来ると思ったんだ』

「……渴いておつたのじゃな」

『ああ、渴いていた。ボクが求めていたものをボク自身が間違えていた』

目的をはき違えた心は歪んでいき、暴走した。

『秘密の部屋を見つけ出した時は歓喜したものだよ。その奥に潜む力を得た時、ボクは偉大な存在になれたと思った。なにしろ、ホグワーツの創設者の一人であるサラザール・スリザリンの力を得たのだからね』

「じゃが、誰も知らぬ栄光は存在しないものと同義じゃ」

『……ああ、だからバジリスクに生徒を石化させた』

「殺す気は無かったのじゃな」

『当然だ。マートルの事も殺す気などなかった。実際、殺した結果がこのザマだ。魂が引き裂かれ、ボクはたまたま持っていた日記帳に分霊を宿した。そして、オリジナルは二度と秘密の部屋の発見を誇る事が出来なくなつた』

「不思議じゃつた……。何故、ヴォルデモート卿が自らの偉業として秘密の部屋の事を語らぬのか、わしには分からなかった。スリザリンの継承者であり、彼の力を受け継いだ事を大々的に喧伝すれば、その威光は更に強まった筈じゃからな」

『……虐められて、トイレで泣いていた子を殺した事を誇れると思うか!? ブサイクで、性格もあまり良くなかったが、彼女はただの女の子だった!! その死体を見下ろして、愉悦など一欠片も感じ得なかった!!』

「やはり、マートルの死が分水嶺だったというわけじゃな。お主にとって、初めての殺人であり、その罪をハグリッドになすりつけてしまったが故に罰を受ける機会をも失った。それはお主の心を致命的なまでに歪めてしまったのじゃろうな」

『……知らない。ボクに分霊となった後のオリジナルの記憶は存在していない。だけど、想像は出来る……』

トムは俯いた。

『マートルの死に意味を持たせたかったのだろう。この殺人は未来の為のものだと自分に言い聞かせたのだろう。だから、立ち止まれなくなっただろうな……』

「悔いておるのじゃな……」

『……ボクは勘違いしていたんだ。欲しかったものは有象無象からの忠誠では無かった』

「真の愛じゃな。それを得る事は非常に難しく、お主はそれを得る為の手段を誤った」

トムはダンブルドアを睨みつけた。

『知った風な口をきくな』

「知っているとも。わしも同じじゃからな」

『なに?』

「真の愛をわしも知らぬ」

ダンブルドアはトムの隣に座った。

「わしの過去を知っているかね?」

『……どの過去だ? 貴様の輝かんばかりの功績の数々を諳んじてやればいいのか?』

不愉快そうに表情を歪めるトムにダンブルドアは微笑んだ。

「わしは己の欲望の為に妹を死なせ、弟に心底軽蔑された男だという過去じゃよ」

『……は?』

トムはポカンとした表情を浮かべた。

ダンブルドアの栄光の歴史は知っていたが、そのような過去があるなど聞いた事すらなかった。

「ゲラート・グリンデルバルドとわしが旧知の仲であり、愛し合う関係にあった事を知っているかね？」

『え？』

トムは耳を疑った。

「わしがゲラートのマグル支配の思想に賛同した過去がある事を知っているかね？」

『……貴様、何を言ってるんだ？』

トムの表情には困惑が広がっていた。

慈悲深き賢者。それがアルバス・ダンブルドアであり、彼が語る過去はどれも彼の過去に相応しくないものばかりだった。

「事実じゃよ。わしの妹はマグルの少年達から暴行を受け、心を病んでしまった。その妹の為に父は彼らを傷つけアズカバンの囚人となり、母は妹の魔力の暴走に巻き込まれて死亡した。妹は一人では生きられず、わしか弟が世話をしなければならなかった。弟は自分が妹の世話をすると主張したが、わしは彼に学校で学ぶべきだと諭した。自分が面倒を見ると言ってるの……」

語る内にダンブルドアの表情はみるみる曇っていった。

トムはその姿を信じ難い思いで見つめていた。

「その時じゃったよ。わしはゲラートと出会った。夢を語り合い、共に磨き合い、いつしか惹かれ合った」

トムは最後の部分で怪訝な表情を浮かべた。

『……ちよつと待てよ。グリンデルバルドは男だろ？ 貴様も爺だろ？』

「トム。愛には色々な形があるのじゃよ」

『え？』

トムは戦慄した。突っ込むべきではなかった。これ以上深く考えてはいけないと思った。

「わしはゲラートとの時間に夢中になり、妹の世話を蔑ろにしてしまった……」

『最低だな、貴様』

ついポロツと出てしまった。

「まったくじやよ。休暇で帰って来た弟はわしらの現状を見て酷く失望した。そして、口論の末にゲラートとアバーフォースは杖を抜いた……」

青褪めながらダンブルドアは語り続けた。

「わしは二人を止めようと思った。そして、3つの杖から呪文が飛び出した。そこにアリアナが飛び出してしまった……」

『なんで……』

「止めようと思ったのじやろう。病んだ心で、それでも愛に満ちた行動じゃった。その愛に対して、わしらの術は牙を剥いてしまった。どの呪文のせいかなど分からなかった。ただ一つ言える事は、わしらの争いが妹の命を奪ってしまったという事だけじゃ」

あまりにも醜い話だ。

『……それが貴様の過去か』

「あの時、わしはあらゆる愛を失った。妹は死に、弟には絶縁され、ゲラートとの結末はお主も知っておろう？ そんなわしが真の愛を得られる事などある筈もあるまい」

不可解だとトムは思った。

『……なんで、そんな過去をボクに話すんだ？』

「お主が語ってくれた分を語ったまでじやよ」

ダンブルドアは穏やかに微笑んだ。

「トム。秘密の部屋は君の受肉に必要なのかね？」

「違う」

分かっていたのだろう。ダンブルドアは驚いた様子を見せなかった。

「秘密の部屋にはサラザール・スリザリンの知識とバジリスクという怪物がいるだけだ。スリザリンの知識によって、ボクは多くの知識を得られたし、死後に復活する為のヒントを得る事も出来た。だが、それは既に得ているものだ」

「つまり、お主の目的はバジリスクという事かね？」

「そうだ。バジリスクをロナルドに従属させる。そして、奴にボクの本体を破壊させる」

「……たしかに、バジリスクの毒ならば分霊箱を破壊する事も可能かもしれない」

「かもじゃない。バジリスクの毒は魂にまで及ぶ。分霊箱どころか、オリジナルの魂魄すら完全に破壊する事が出来るだろうさ」

トムの言葉を常人が聞けば正気を失ったとしか思えぬものだった。なにしろ、彼の選択は破滅の道だ。トムはロナルドに憑依している。けれど、ロナルドが分霊箱になっているわけではない。本来の器は別であり、そこから抜け出した一部を取り憑かせているのだ。

その本体が破壊されれば、トムの魂はロナルドに憑依していようが関係なく破壊される。

およそ理解不能な思考回路だが、彼の言葉を聞いた者は他ならぬアルバス・ダンブルドアだった。

彼はトム・リドルの決意に秘められた禍々しいまでの情念に気付いていた。

「……ロンに覚えていて欲しいのじゃな」

それが答えだった。

「ダンブルドア。業腹だが、貴様の昔語りで確信を得た。こうして分霊となった後で、ボクはようやく知ったらしい」

その顔に浮かんだものは狂笑という他ないものだった。

「なるほど、これが貴様の焦がれていたものなのだ！ 納得したぞ！ ああ、これは素晴らしいものだ！ 他の何もかもが無価値に感じるほど、ボクはたった一つが欲しくなった！」

爛々と輝く真紅の瞳がダンブルドアを見つめる。

「これまでの過去も、これからの未来も、己の魂すら惜しくはない！ロナルド・ウィーズリー……、その魂にボクという存在を刻み込むのだ!! ああ、一生忘れられないように深く深く刻むのだ!!」

ロナルド・ウィーズリーは骨の髄まで善良だ。

その心には優しさが溢れている。その魂には光が溢れている。その道には希望が溢れている。

彼の肉体の中で彼の心を間近に感じる事で確信を得た。

彼は己の手で殺した相手を忘れられるような男ではない。

だからこそ、鮮烈に——、
だからこそ、どこまでも深く——、
このボクが存在は彼の魂に刻み込まれるだろう。
その為ならば己の魂を捧げよう。
オリジナルを殺す手段を授けよう。

「ああ——、これが……、これこそが……」

歪み切った笑顔で彼は言う。

「……愛なのだな、ダブルドア」

第四十四話 『嘆きのマートル』

ダンブルドア先生はロンにレジリメンズという呪文を唱えた。

ハーマイオニーに呪文の効果を聞いてみると、驚いた事に彼女も知らなかった。悔しげな表情を浮かべている。

「レジリメンズは開心術の呪文だ」

教えてくれたのはジョージだった。

「開心術って？」

「それなら知ってるわ！」

ハーマイオニーは得意げな顔になった。

「開心術は読んで字の如し、心を開く呪文なの。要するに心を読むための魔法なのよ」

「心を？」

僕はロンを見た。ダンブルドアに杖を向けられたまま、彼は凍りついたように動かない。

「大丈夫なの？」

「ダンブルドアを信じるしかないさ」

フレッドは険しい表情を浮かべながら言った。

いつもの彼が持つひょうきんな雰囲気は一欠片も感じられない。

「……あのさ」

シエーマスは不安そうな表情を浮かべながらハーマイオニーに声をかけた。

「ぼ、僕、あんまりちゃんと理解出来てないんだと思うんだけど、もしかして、君に取り憑いていた悪霊って、例のあの人だったの？」

理解出来ていないどころか、完全に理解してしまったからこそその言葉だった。

ハーマイオニーは苦しげな表情を浮かべながらうなずいた。

「……確証は無かったわ。ただ、そうかもしれないとは思っていたの。

トム・リドル。それがわたしに宿っていた霊の名前」

「トム・リドルは闇の帝王の幼名だ」

その言葉を紡いだのは扉から入ってきたスネイプだった。

「校長、済みましたか？」

「……おお、セブルス。今、丁度終わったところじゃよ」

ダンブルドアとスネイプは見つめ合った。

何も喋らず、表情だけを何度か変えながら一分近くもにらめっこをする二人に僕達は困惑した。

「せ、先生？」

デイーンが恐る恐る声を掛けると、スネイプは深く息を吐いた。

「……正気とは思えない」

「へ？」

「此方の話だ」

スネイプは踵を返すと扉の向こうへ去っていった。

「……さて、むしろも向かうとしよう」

ダンブルドアが言った。

「はいー」

そして、いつの間にか硬直が解けていたロンが元気よく返事をした。

第四十四話『嘆きのマートル』

「ここですね」

ロンが案内してくれた先は女子トイレだった。

「(トイレット)?」

「ここって……、マートルの?」

「マートル?」

デイーンが首を傾げると共にロンがトイレの扉を開いた。
すると、中から水が溢れ出してきた。

「なんだあ!?!」

「うわっ、ばっちいい!?!」

慌てて後ずさるとダンブルドアが杖を振った。

その途端、流れてきた水が引っ張られるようにトイレ内に戻っていった。

『なにになに!? 水が戻ってくるんだけど!?』

トイレの水槽の上に浮かぶゴーストがトイレに入ってくる大勢の

人間に驚いている。

『ここは女子トイレよ？ 男がいつぱいに女の子が一人……って、何始める気？ いやらしいわねえ！』

どこか面白がるように彼女は言った。

「……マートル。わしを覚えておるかね？」

『あら！ ダンブルドア先生！ え？ ダンブルドア先生ってロリコンだったの？』

彼女は凄い子だ。あのアルバス・ダンブルドアに若干顔を引き攣らせた。

「マートル・エリザベス・ワレンだな」

その事を気にも留めず、ロンはマートルに声をかけた。

『あら、まーたわたしに何か言う気なのね！ それとも、何かをぶつける気!』

「そ、そんな事はしねえぜ!」

『ふん！ うそばかり！ わたしの生きてる間の人生って、この学校で悲惨そのものだったもの！ 今度はみんなで死んだわたしの人生を台無しにしにやってきたんだわ!』

彼女は一人で盛り上がっている。

「本当だ！ オレ達にアンタを傷つけるつもりなんか……」

『傷つけるつもりなんか……、なに!? 騙されたりしないわよ！ わたしはたしかに死んでるけど、感情はちゃんとあるのよ！ トイレの前で『マートルは陰湿よねー!』とか、『マートルってなんているのかしら!』とか言ってるのもちゃんとして聞こえてるのよ!』

ただでさえ甲高い声を更に高くしながらマートルは泣き始めた。

「……マートル。お主を傷つけてしまった事をホグワーツの校長として謝罪しよう」

ダンブルドアの言葉を聞いて、マートルは吐きそうな表情を浮かべた。

『謝るって、なにを?』

「君が謂れなき中傷を受けてしまった事に対してじゃよ。これからはみなに注意を——」

『別にいいわよ。お優しい、ダンブルドア先生！ わたしが生きてた頃からみんなには優しくしてたけど、わたしみたいな子には興味の欠片も持ってなかったじゃない。今更取り繕わなくてもいいっての』
あまりの言い草に僕は目を見開いた。

ダンブルドアに対してこんな風に言う人を見たのは初めての事だった。

「……すまぬ」

『だから、別にいいっての。お優しくして情け深いダンブルドア先生はとびつきりの問題児やとびつきりの優等生がだーいじでだーいじで仕方なかったんでしょ！ わたしみたいに根暗ないじめられっ子はどーでも良かったんでしょ！ わたし、覚えてるんだからー！』

マートルは恨みがましい表情をダンブルドアに向けた。

『わたしの死体に興味の欠片も持ってなかったでしょ？ 他のだーいじな子ばかり見てたの覚えてるんだから』

「……否定は出来ぬ」

ダンブルドアは苦しげに呟いた。

「お主の死を軽んじていたわけではないが……」

『いいっての！ そもそもわたしが虐められてもなーんにもしてくれないかった先生に期待なんてしてないもん！』

いい加減にして欲しい。確かに可哀想な境遇だけど、いくらなんでも言いすぎだ。

あのダンブルドアが虐められている生徒の事を知って動かない筈がない。でも、ホグワーツにはたくさん生徒がいる。一人で全員を見守る事なんて、物理的に不可能だ。

「い、いい加減に……」

マートルの暴言を止めようとしたら、ダンブルドアに手で遮られた。

「……ダンブルドア先生」

ダンブルドアが苦しそうにしている姿はあまり見たくなかった。

ロンはどうしたのだろうか？ 彼が黙ってこの光景を見ている事が不思議で仕方ない。

視線を向けてみると、ロンは拳を強く握りしめていた。やっぱり、怒っているようだ。

「マートル」

『なによ?』

「……まず、名乗らせてもらうぜ! オレの名はロナルド・ウィーズリー! よろしくな」

『知ってるわよ』

「そうなのかい?」

『だって、みーんなあなたの事ばかり話すんだもん!』

マートルは空中をふわふわ浮かびながら言った。

『みーんな、すごいすごいって大騒ぎ! わたしとはぜーんぜん違う。ダンブルドア先生もだーいじだーいじに思ってるんでしようね!』

「おう、オレはすげえぜ!」

『あら?』

マートルはガクンと落下してきた。

『そんな事ない! とか言わないのね』

「言わねえさ。オレを知る人がオレを認めてくれた言葉だ! だってら、オレはその言葉に見合う男で居なきゃいけねえ! ただ、それだけさ」

ロンのこういうところは本当にすごいと思う。

僕が同じ事を言われていたらすぐに否定していたと思うし、こんな風には考えられなかったと思う。

「マートル。アンタはどうだ? オレをどう思う?」

『そうねえ……』

マートルはロンの周囲をふわふわ浮きながらうっとりした表情を浮かべた。

『いい男って奴じゃないの? わたし、嫌いじゃないわよ』

「ありがてえ! 鍛え抜いた自慢の肉体なんぞ! 見よ! この上腕二頭筋!」

『わーお!』

いつの間にか、マートルからさつきまでの陰気な雰囲気が消えてい

た。

ロンと楽しそうに話している。まるで魔法だ。

「ところでマートル。オレ達、今から冒険するんだ。いっちょ、付き合ってくれないか？」

『冒険？ なにするの？ あらやだ、その子とわたしでいやらしいパーティーを開くんじゃないわよね？』

発想が本当に下品な子だ。僕達はほととウンザリし始めていた。「生憎、そういうのは趣味じゃねえ。エロい事には興味津々だがよ、オレは同時に紳士でもあるんでな」

ハーマイオニーが吹き出した。僕はすごく居心地が悪かった。シエーマス達も気まずそうだ。

『ふーん、いいじゃない！ わたしもそういうのは二人つきりがいいわ！ 星が見えるところで、愛を囁き合いながら！ あこがれるわー』

「それじゃあ、冒険が終わった後にでも二人で星が見える場所に行ってみるかい？」

その言葉にハーマイオニーが体をビクツとさせた。僕は彼女から顔を必死に逸した。なんだか見てはいけけない気がしたのだ。

『……死ぬ前に言っただけじゃなかったわねー』

その言葉は心底悲しげだった。

「死んだ後は青春禁止なんて、誰が言ったんだ？」

『しーらない！ それより、冒険って、結局何する気？』

「秘密の部屋を開く！ このトイレに入り口がある筈なのさ！」

『……ああ、そういう事ね』

マートルは考え込むように俯いた。そして、トイレの手洗い場を見た。

『秘密の部屋。先生達が騒いでたわ。わたし、興味はなかったけど、みーんなが話すから聞こえてはいたのよね。あーあー、そっか……』

マートルは手洗い場の鏡の向こうへすり抜けていった。

『あったあった。穴はつけーん。やっぱりね。わたし、トイレで泣いてたのよ。その時、外で男の子の声が聞こえたの。だから、出て行っ

てって言おうとしたの。そしたら……、死んじゃった……」

「ありがとう、マートル」

ロンがお礼を言うと、マートルはロンの下へ戻っていった。

『あなたも誰か殺すの?』

「助けに行くのさ」

『……ふーん。じゃあ、一緒に行くわ』

「ああ、心強いぜー!」

ロンは杖を握った。

「先生、ぶっ壊します!」

「……許可しよう」

彼は呪文を唱えた。

「エクスパルソ!!」

大きな音を立て、手洗い場が爆発した。その衝撃をダンブルドアが見えない壁で防いでくれた。

そして、煙が晴れた先には無傷の手洗い場が残っていた。

第四十五話 『アビス』

ロンが唱えた爆破呪文による衝撃は凄まじく、床のタイルが割れ、鏡にも亀裂が入っている。

けれど、水道自体はまったくの無傷だった。

「どうして!？」

「まあ、予想通りだわな」

ロンが言った。

「ポッターさん。トイレの歴史を考えた事がありますか？」

「え? 無いけど……」

トイレの歴史になんて一欠片の興味も抱いた事がない。

別に僕が特別不勉強というわけではないと思う。世の中の大抵の人はそこまでトイレに興味なんてない筈だ。

「ホグワーツは千年以上前に建造されたもの。秘密の部屋は創設者の一人であるサラザール・スリザリンが隠した部屋。そして、トイレの歴史はほんの数百年。どうです? 妙だと思いませんか?」

ホグワーツや秘密の部屋というワードにトイレというワードが並ぶのは、それ自体がとても奇妙だ。

だけど、ロンが言いたいのはそういう事ではないだろう。

「……秘密の部屋が出来た時、トイレは歴史的に存在する筈がないという事ね?」

「その通りさ、お嬢さん」

ハーマイオニーが言う通り、トイレに秘密の部屋の入り口があるというのは歴史的に考えるととても奇妙だった。

「つまり、ここは本来トイレじゃなかったというわけさ」

そう言うと、ロンは手洗場に近づいていく。

「秘密の部屋は隠されていたんだ。そして、発見されないまま千年も経過したわけだ。以前がどんな用途の空間だったのかは分からないが、後々、トイレとして改装した以上は床に穴を空けたり、色々と弄り回した筈なんだよ。それなのに見つからないままって事は、弄らなかつた……あるいは、弄れなかつたという事だ」

手洗い場の蛇口を捻りながらロンは言う。

「生半可な攻撃じゃ、こいつは壊せねえ……」

そして、彼の視線はダンブルドアに向けられた。

「わしの出番というわけじゃな」

「お願いします、ダンブルドア先生！」

ロンは僕達の下へ戻って来た。そして、ダンブルドアは更に三步も僕達をさがらせた。

そして、杖の先から光を迸らせた。

「手洗場が……」

さつきはロンの爆破呪文に無傷で耐え抜いた手洗場が完全に消滅していた。

「さすがだぜ、ダンブルドア先生！」

「スツゲエ」

「跡形もないね……」

「うん」

僕達は恐る恐る消滅した手洗場の方へ向かっていった。

すると、そこにはポツカリと穴が空いていた。大柄な大人でもすんなり通れそうな大きい穴だ。

底を覗き込むと、そこには暗黒が広がっている。

「ツシヤア！ 行くぜ行くぜ行くぜ!!」

ロンは躊躇う事なく暗黒の底へ飛び込んでいった。

「ロ、ロン!?!」

「おい、バカ!?!」

フレッドとジョージが慌てて後を追いかける為に飛び込んでいった。

モタモタしてられない。

「……ハリー」

飛び込もうとした時、ダンブルドアが僕の名を呼んだ。

「先生?」

不思議な感覚に襲われた。

半月型のメガネの向こうにあるダンブルドアの瞳はキラキラと輝

いているのに、どこかとても落ち込んでいるように見えた。

「……大丈夫ですか？」

声を掛けると、ダンブルドアは微笑んだ。

「もちろんじゃよ、ハリー。さあ、わしらも行こう」

「……はい！」

僕達も闇の中へ飛び込んでいった。

第四十五話『アビス』

まるで大輔と一緒にいったアミューズメントプールのウォーター
スライダーのようだ。

途中からちよつと楽しくなつて来て、歓声を上げてしまった。

「おっと、出口か！」

勢いよくパイプの出口から飛び出すと、すぐ後に愛すべき兄弟達が
飛び出して来た。

「ロン！ 大丈夫か!？」

「先に行くなよ！」

気遣う目。心配する目。

ああ、胸が熱くなる。

何度目だろう？ 数える事すらバカらしくなるほど、オレは家族に
恵まれた事を噛み締めている。

親に恵まれない子供がいる。

子供に恵まれない親がいる。

兄弟に恵まれない兄弟がいる。

弟妹に恵まれない兄弟がいる。

それなのに、オレは生まれ変わる前も生まれ変わった後も全てに恵
まれている。

友人にも恵まれ、指導者にも恵まれ、世界にすら恵まれた。

オレが何をした？ ここまでの幸福を与えられるほどの善行をし
てきたか？

オレはこんなにも幸せだから、オレはみんなにも幸せでいてほし
い。

烏澁がましい事かもしれない。愛する妻に愛想を尽かされ、

愛する息子^大に不自由な思いをさせたオレに誰かを幸せにする事など
手に余る難行なのかもしれない。

それでも苦しんでいる顔を見たら放っておけない。涙を見たら、
拭ってやりたい。

そんなオレの我儘をポッターさんは肯定してくれた。

—— ロンがそうしたいなら、僕も協力するよ。

親の仇を救いたい。そんな事を言われて、そんな事を言える人間が
どれだけ居るだろう？

その心意気がオレに無限の力を与えてくれる。

「うわあ!？」

パイプから飛び出してくるポッターさんを抱きとめる。

「あ、ありがとう」

「いえいえ！」

見た目よりもずっと軽い。その理由を聞いた時、オレは悲しくて堪
らなかった。

ポッターさんが受けた理不尽。そして、ダーズリー家が襲われた理
不尽。

その元凶は紛れもなくヴォルデモート卿だ。

「ロ、ロン……う？」

この御人は幸せにならなければいけない。

誰よりも大きな器を持ち、誰よりも愛に溢れた御仁だ。

その人生を輝かせる為ならば、オレは今生のすべてを賭けられる。

「あ、あの……、離して欲しいな……」

「ポッターさん!!」

「は、はい!？」

「行きましょう!!」

「う、うん……う？ うん……つて、え？ このまま!？」



ハリーが必死に抵抗するもロンの鋼の肉体をビクともさせる事が
出来ないまま、一行は奥へと進んでいく。すると、そこには巨大な蛇
の抜け殻があった。

「こいつは……」

「バジリスクの抜け殻じゃな」

「バジリスク!？」

ダンブルドアの言葉にハーマイオニーが悲鳴を上げた。

「ハ、ハーマイオニー!？」

「ど、どうしたの?」

「どうしたのじゃないわよ! バジリスクよ!？」

「バジリスクって……?」

ネビルは近くにいたフレッドを見た。

「えーっと、魔法生物学の授業で名前を聞いた事があるような……?」

「あれ? どうだったかな……」

「バジリスク。蛇の王とも呼ばれる幻ファンタステイック 想を超えた伝レジェンダリー 説の生物さ」

ロンは言った。

「ここまでだな」

そう言うと、彼はハリーを下ろした。

「ロ、ロン?」

「ここから先はオレとダンブルドア先生で行く。みんなはここで待っててくれ」

「はあ!？」

「何を言ってるんだ!」

フレッドとジョージが噛みつくけれど、ロンは笑った。

「大丈夫だ!!」

天井の低い洞窟内で、彼の声が幾重にも反響した。

「オレを信じてくれ!! 今のオレに不可能は無ねえ!!」

いつもの覇気に溢れた声だった。

いつも、誰もがその勢いに乗せられてしまう。

それは一種のカリスマ性。彼のテンポに乗せられてしまえば、闇の帝王でさえもペースを狂わせられる。

「バジリスクなのよ!？」

けれど、ハーマイオニーには知識があった。

バジリスクという怪物の恐ろしさを知っていた。

「その目を見ただけで人を殺す伝説の怪物なのよ!？」
「知ってるさ」

その恐ろしい生態を知るが故に踏み込む事が出来た彼女に彼は言う。

「よく知ってるさ。秘密の部屋に秘められたもの。ヒントはあった。前回、秘密の部屋が開かれた時、魔法省はアクロマンチュラを飼育していた生徒を犯人と断定した。つまり、それは少なくとも生き物だと判断出来る証拠があった筈なのさ。そうじゃなきゃ、それまでの被害者の被害状況やマートルの死因と乖離した攻撃能力を持つアクロマンチュラを犯人だと断定するのは無理がある」

『あら、わたしの死因も調べたのね』

「ああ、すまねえな」

『あらあら？ どうして謝るの?』

「さて、どうしてかね……」

ロンは肩を竦めながら言った。

「生物である事と生徒の被害状況、そして、サラザール・スリザリンのプロフィールから バジリスクの存在に辿り着く事は難しい事じゃなかった。なにしろ、パーセル・マウスの能力と死因の特定が出来ない殺害方法を持つ生物だ。そんなの一種類しかいなかったからな」

「だったら……」

「だからこそさ」

ロンは言った。

「そこから真剣に調べた結果、オレとダンブルドア先生なら大丈夫だと確信を持った！ 大丈夫なのさ、お嬢さん！ みんなも、オレを信じてくれ！」

「いや、でも……」

「いくらなんでも……」

納得しきれぬ者などいない。当たり前だ。嘗て、マートルを殺害した生物がこの先にいる。

死ぬかもしれない場所に弟や友人を向かわせて平気でいられる者など、少なくともこの場には一人もいない。

『あら？ わたしもダメなの？』

スーッと空中を滑りながらロンに問いかけるマートルに「いや、エスコートさせてもらうぜ、マートル」とロンは微笑んだ。

そして、ダンブルドアが先にある扉に杖を向けた。

その時だった。

壊すな

手を伸ばすハリーの耳にその声は届いた。

第四十六話 『闇の帝王』

声が聞こえた。とても不思議な声だ。

女性のようにであり、男性のようにでもある。子供のようにであり、老人のようにでもある。

「だ、だれ!？」

ハリーはキョロキョロと辺りを見回した。

「ど、どうしたの?」

デインはハリーの奇行に驚いている。

「ハリー?」

シエーマスも怪訝な表情を浮かべている。

「今の声だよ! 壊すなつて、そう言ったのが聞こえたんだ!」

「え? そんな声、聞こえなかったよ?」

「うん。空耳じゃないの?」

二人の言葉にハリーは困惑した。空耳にしてはハッキリと聞こえて過ぎていた。

ハリーは二人の耳に耳くそが溜まり過ぎているに違いないと思い、ハーマイオニーを見た。

「ねえ、聞こえたよね!？」

「き、聞こえなかったわ。ハリー、本当に聞いたの?」

一番近くに立っていた彼女にも聞こえていなかった。そうやって来ると、ハリーは本当に空耳だったのではないかと思いはじめた。この暗くて狭い道が想像以上に精神をすり減らしていたのかもしれないと。

ところがロンが「いや、オレにも聞こえたぜ」と言い出した。

「……おそらく、秘密の部屋の主じやろう。今のはパーセルタングじゃよ」

「パーセルタング?」

「蛇語の事よ!」

首を傾げるハリーにハーマイオニーが言った。

「つまり、蛇の言葉なの。ホグワーツの創設者の一人であり、秘密の部

屋を作り出したサラザール・スリザリンは蛇語の使い手として有名だったそうよ」

「つまり、ハリー達が聞いたのは蛇の言葉って事？　なんで、ハリー達は蛇の言葉なんて分かるんだ？」

フレッドの言葉は他ならぬハリーの心を代弁していた。

蛇と話せる。その事はホグワーツに入学する前から気付いていた。ホグワーツからの手紙が届く前、ハリーは動物園で蛇と話した事があったのだ。

今まで、蛇と話す事は魔法使いにとって当たり前の事だと思っていた。

けれど、ハーマイオニー達の反応を見て、それが誤りである事に気付いた。

「……まあ、細けえ事はいいんだよ」

ロンが言った。

「おーい！　壊さないから開けてくれねえか？」

そう呼び掛けた。

すると――、

良いだろう。継承者の資格を持つ者よ。

再び、声が響いた。

扉よ、開くがよい。

その言葉と共に扉が動き始めた。その先にも扉があったようだけど、ほぼ同時に開いていく。

「行こうぜ」

ロンは先陣を切った。

得体の知れない声が響き、不穏な空気が漂う空間に臆す事なく進んでいく。

その背中にマートルがピツタリとくつつき、ダンブルドアが続く。フレッドとジョージも彼らを追いかけていき、ハリーはデーンやシエーマス、ネビルと顔を見合わせた。

「……行きましょう」

ハーマイオニーが言った。

その後ろでずっと黙ってついて来ていたラベンダーとパーバティは何かを言いたそうだ。

なにしろ、気付いたら秘密の部屋探索隊に組み込まれてしまったのだ。

こんな所までついて来る気はまったく無かったのに、雰囲気呑まれて何も言えなかった。

「……僕達、ここで待ってるよ」

シエーマスが言った。

「シエーマス？」

「……正直、ついていけないんだ」

彼は言った。

「亡霊とか、例のあの人とかさ……。その上、秘密の部屋だよ？ 僕、怖いんだ」

シエーマスの言葉にデイーンも俯きながら頷いた。

「……僕も」

デイーンは気まずそうに言った。

「行きたくない……」

その言葉にネビルも俯いてしまった。

無理もない。

ハリーを含めて、この場にいる誰もこんな場所に来る事を覚悟などしていなかった。

ただ、様子のおかしいロンを心配していただけだ。

図書館で調べ物をしている姿を見て、手伝うべきか悩んでいたら急に飛び出して行ったものだから、咄嗟に追いかけた。すると、彼に尾行を気付かれて、そこから先は置いてけぼりにされたまま話が進んでしまった。

せめて、一言聞いて欲しかった。

—— 一緒に来るか？

その一言があれば丁重にお断りしていた。だけど、ロンとダンブルドアは聞いてくれなかった。

「……ロン、余裕がないんだと思うんだ」

デインは言った。

「前に言ってたじゃないか！ 危ない事に僕らを付き合わせる気はないって……」

言っていた。

ロンにとつての冒険は命を危険に晒す事ではない。みんなと楽しく過ごす為のものだ。

だから、今回の件はあまりにも彼らしくなかった。

「校長室でロンが言っていた事、全部理解出来たわけじゃないけど……」

パーバティが恐る恐る呟いた。

「その前に図書館で見た彼、すごく怖い顔をしていたじゃない」

鬼気迫る表情だった。だからこそ、普段のように声を掛ける事が出来なかった。

その後は普段の彼に戻ったように見えただけで、実際は違っていたのかもしれない。

「……でも、僕は行かなきゃ」

ハリーは言った。

「みんなの言う通りかもしれない。ロンは……、きっとダンブルドアも冷静じゃないのかもしれない。でも、僕は行かなきゃいけないんだ」

「でも、ハリー……」

シエーマスは言い難そうな表情を浮かべた。

「……僕、よく分かってないんだ。だけど、だげどさ？ この先に行くの、きつと君にとつて凄く辛い事じゃないのかい？」

「だからだよ」

ハリーは言った。

「だからこそ、逃げたくないんだ。行かなきゃいけないんだよ」
きつと、本当はみんなも分かっている。

分かっているから恐ろしいのだ。分かっているから止めるのだ。

「……じゃあ、僕達も行かなきゃだね」

諦めたようにシエーマスは言った。

「うん……」

デインも深く息を吐きながら言った。

「え？」

ハリーは目を丸くした。

「だって……、放っておけないよ」

ネビルが言った。

「苦しんでいる人を見たら助けてやりたいって、僕達も思うもん」

シエーマスとデイン、ネビルの三人は泣きそうな顔で一步を踏み出した。

恐怖して尚、三人は友情の為に勇気を振り絞った。

「……わたし達は」

ラベンダーの声は震えていた。

一緒に立ち止まってくれると期待した三人が先に進むと言い出して、その瞳には絶望の色が浮かんでいる。彼女も三人のように友情の為に勇気を発揮するべきだと考えている。それでも体が竦んでしまふのだ。

「私達は残るわ」

ハーマイオニーが引き返しながら言った。

「ハーマイオニー？」

「いずれにしても、誰かが退路を確保する必要があると思うの」

そう言いながら、彼女は震えているラベンダーを抱きしめた。

「ロンやダンブルドア先生が冷静じゃないって言うのは私も同感よ。きつと、それほどの事態なのよ。だから、ハリー」

ハーマイオニーはハリーを見つめた。

「ロンを助けてあげて」

「うん」

この先で何が起きて、自分に何が出来るとかなどさっぱり分からない。

それでもハリーは頷いた。

彼が歩き出すと、シエーマス達も共に歩き出した。

「……みんな！ 気をつけて！」

パーティーの言葉にハリー達は頷き、開かれた扉を潜り抜けていく。

そして、辿り着いた。

第四十六話 『闇の帝王』

その空間に足を踏み入れた瞬間、ロナルド・ウィーズリーは目を見開いた。

今になって、ハリー達を連れて来てしまった事に慌てた。

「……なにやってんだ、オレは!?!」

ここは秘密の部屋だ。安全の保証など一切ない。

それなのに連れて来てしまった。

『安心したまえ、ロナルド。君の落ち度ではない。ボクが望んだ事だ』

「トム!?!」

突然、目の前にトムが現れた。とてもボンヤリとしていて、まるでゴーストのようだ。

『ボクは君の心の中にいた。そして、ダンブルドアは君の心に入り込んだ。実に浅はかだ』

トムは微笑んだ。彼の視線の先でダンブルドアも目を見開いている。

『心を暴き、心を隠す事に長けていても、心を操る手管に関してはボクが一步先を征く』

邪悪な笑みを浮かべながらトムはロナルドを指差した。

『愚かなロナルドめ。お前は常に自らの意思で動いていた気になっていたのだろうか？ けれど、それは違う。ポケットを漁ってみるがいい』

『ポケット?..』

ロナルドは首を傾げながらポケットを漁った。すると、そこには一冊の小さな日記帳が入っていた。

「こいつは……?..」

『奇妙だろうか？ 君はそれを手に取った覚えがない。それなのに、それを持っている』

「……そうだな。すつげー、不思議だ」

ロナルドは面白がるように笑った。その反応にトムは苛立つような表情を浮かべた。

『……さてさて、脳を休ませている暇などないぞ。ここに君を誘導した理由は分かっているだろう？ ハリー・ポッターを連れて来させる為だ。何故、連れて来させた？ 答えてみたまえ、ロナルド・ウィーズリー』

「そうだな。秘密の部屋を見せたかったんじゃないか？ なにしろ、長い間誰も発見出来なかった秘密の場所だ。発見者として自慢したい気持ちはよく分かるぜ」

軽い口調を崩さないロナルドにトムは険しい表情を浮かべた。

『そんな訳がないだろう。お前は既にボクの正体を知っている！』

「ああ、トム・リドル。それがお前さんの名前だろう？」

『違う！』

トムは杖を振り上げた。それはロナルドの杖だった。気付かぬ間に彼はロナルドの杖を掠め取っていたのだ。

杖から光が溢れ、虚空に文字を刻んでいく。

Tom Marvolo Riddle

それはトムの名前だった。その文字が一つ一つ動き出し、やがて別の言葉を生み出した。

I am Lord Voldemort

それはヴォルデモート卿の名乗りだった。

「おお、スゲエ！ そうか、アナグラムだったのか！ こいつは気付かなかったぜ！ いいセンスしてるじゃねーか、トム！」

その反応にトムはますます表情をしかめた。

『……ボクはヴォルデモート卿だ。ハリー・ポッターの両親を殺害し、ネビル・ロングボトムの両親への拷問を命じ、他の多くの魔法使いに死と絶望を与えた者だ』

ネビルの両親への拷問を命じた。ロナルドはその言葉を無視出来なかった。

僅かに強張った表情を見て、トムはニヤリと笑った。

『新聞の記事や伝聞如きでヴォルデモート卿を知った気になるなよ、

ロナルド。闇の帝王は初めから帝王だったわけではない。屍山血河の果てに畏れを集める事で帝王は帝王となったのだ』

トムは杖を振るった。すると、秘密の部屋に死体の山が現れた。

幻影に過ぎないが、それは確かに存在したヴォルデモート卿の狂気だった。

『ゲンゾウ。貴様はボクを救うとのたまったな』

トムは冷酷な表情を浮かべた。

『この死体の山を見て、それでも貴様は世迷い言を口に出れるのか？』

第四十七話 『苦惱』

ロナルド・ウィーズリーに殺人の経験などない。それは前世も含めての話だ。

彼は戦争を知らぬ世代として生まれ、浮かれ切ったバブル期の日本で育ち、望むままに世界を旅した男だ。

旅の道中でも命を奪ったり、奪われるような危険など無縁だった。当たり前前の話だ。彼の旅には家族が共にいた。殺人が許容されるような戦場や治安の悪い場所に家族を連れて行く事など出来る筈がない。

そして、突発的なテロや通り魔に襲われる経験を持つ人は経験を持たない者と較べて圧倒的に少数であり、彼は多数派に所属していた。

第四十七話 『苦惱』

『平和ボケした頭でよく考える事だな』

倒れ伏す人々を前にして、ロナルドは言葉を紡ぐ事が出来なかった。

平和ボケと言われれば否定する事が出来ない。

相手が大量殺人を犯している事は知っていたし、被害者の慟哭を間近で聞いた。

それでもすべてを理解出来ていたわけではない事をまざまざと知らしめられる。

彼らにはそれぞれの人生があった。彼らが大切に思い、彼らを大切に思う人がいた。

彼らの命を理不尽に奪う権利など誰にもない。

『ロナルド・ウィーズリー。貴様に真実を教えよう。ボクはヴォルデモート卿が分霊箱ホークラックスという術で生み出した分霊だ』

風景が変貌する。そこにはヴォルデモート卿の殺人の歴史があった。

バジリスクと共に生徒達を脅かし、遂には一人の少女を殺害した。それが一つ目の殺人。

二つ目の殺人はリトル・ハングルトンという村に立てられた古い屋

敷で行われた。彼はそこで肉親を殺害した。

それから彼は罪なき人を殺していく。

ただ、そこに居たからという理由だけで殺された青年もいた。

『分霊箱は殺人によつて魂を分割し、器に封じる術だ。ボクはその為に殺したんだよ』

その頃には罪悪感など欠片も抱かなくなっていた。

殺す事が平気になっていた。

許せない事をした相手でなくとも、ただ目の前をうろついた程度の理由でも蠅を潰すように殺せるようになった。

彼の中で命はどこまでも軽くなつていき、やがては個を見る事も無くなつていった。

『想像すら出来ないだろう？ 人を殺す事と蠅を殺す事が同義な者など、そもそも理解の範疇にない筈だ』

それは傍から見ているとても奇妙な光景だ。

ロナルドは彼を救おうとしているのだ。腹に一物無ければ救われればいいし、有るのであれば利用すればいい。

けれど、彼は懇切丁寧に己の悪行と悪性を語る。

その理由に気付ける者はいない。

彼自身、何故こんなにも口が滑らかに動くのか不可解に思っている。

彼の望みはロナルドに滅ぼされる事だ。けれど、その為には必要不可欠ではない事をしている。

ダンブルドアに語った通り、彼を騙して本体である日記をバジリスクに噛ませれば良かった。

それなのに彼の前に現れて、彼に己の罪を見せつけている。

『何十年を生きようとも、お前は光の中でしか生きた事のない男だ。

そして、闇では生きられない男だ。だから……』

だから、お前にボクは理解出来ない。

その言葉が喉元で引つ掛かり、出て来ない。

漸く、自分を理解した。要するに理解して欲しかったのだ。

ロナルドの空想の中の彼ではなく、本物の彼を理解し、その上で滅

ぼしてほしかった。

けれど、自分で辿り着いてしまった。

ロナルドに彼を理解する事は出来ない。

理解しようと頑張ってくれた。けれど、そもそも不可能な話なのだ。

だけど、彼は知って欲しいと思った。思ってしまった……。

「……分かってんだよ、そんなことあ」

ロナルドは涙を零していた。

彼には理解し切れない。そんな事は彼自身が一番よく知っていた。

「それでも……、それでもよお！ オレは……、オレはよお!!」

殺人とは無縁で生きて来た。けれど、人の死と無縁で生きられる者などいない。

死が齎す悲しみと怒りを知らないわけではない。

「誰だって、やり直すチャンスはあるって思っていてえんだ!!」

『それは死者達の無念を蔑ろにしてもかい?』

それは鋭い棘だった。ロナルドに計り知れない苦悩を与える言葉だった。

諦めてしまえば楽になれる。

迷う必要もない。悪を救わない事は悪逆ではないのだから。

それでも苦悩する様を見て、彼は微笑んだ。

『君には酷なようだ。だから、これはボクからの最初で最期の贈り物
や』

彼はロナルドに近づき、その耳元に囁いた。

『悪は討つべきだ』

その言葉にロナルドは目を見開く。

『許してはいけない。権利とは相互に尊重し合う事で初めて成立するものだ。生きる権利を奪った者に生きる権利など有りはしないのだから』

これほどまでに残酷な事があるのか？

救いたいと思う相手にこそ、救うなど説かれるなど……。

「……ロン」

その姿をハリーはジツと見つめていた。

その隣にはシェーマスやデイン、ネビルの姿もある。

苦悩に押し潰されかける友に掛けるべき言葉が見つからない。

それはアルバス・ダンブルドアも変わらない。

皮肉にも彼らとヴォルデモートの認識は共通していた。

許されざる悪は討つべきである。それこそが正しく、迷う余地など本来ならばあり得ない。

それでもと声高に叫びたければ、覚悟を抱かなければならない。

善悪を超える意思。それはもはや人のものではない。己の意思を第一とする。それは王、あるいは神にのみ許された道である。

『……バジリスクよ。サラザール・スリザリンの継承者として命じる。等しく継承の資格を持つ男がここにいる。彼に仕えよ』

その言葉と共に何かが降って来た。

承知した。

それは大蛇だった。瞼を閉ざし、ロンに対して頭を垂れている。

『さあ、ロナルド』

トムは己の本体である日記帳をロンに持ち上げさせた。

『その日記帳を噛むようにバジリスクに命じるんだ。それでお前は英雄になれる』

トムは甘く囁いた。

『悪を討つ事は正義だ。より大きな善のために、ボクを滅ぼせ!』
「……ああ」

ロンは頭を掻きむしった。

他者の幸福を祈れる者は誰よりも幸福である。

他者の嘆きを悲しめる者は誰よりも幸福である。

この場の誰もが、今この場においては幸福だった。

ただ一人、苦悩に苛まされるロナルドを除いて……。

第四十八話 『激怒』

アルバス・ダンプルドアはその様を静観していた。

邪悪と言えども救いの手を伸ばす。それはまさしく博愛の精神であり、尊ばれるべき在り方だ。けれど、その道を貫く事は容易ではない。

目の前に広がる無数の屍が彼の道に立ち塞がる。

何も見ず、何も考えず、ただ万人を救う自分に酔い痴れる者はいるだろう。

邪悪という記号ではなく、その者を愛してしまつたが故に道理よりも感情を優先させてしまう者もいるだろう。

その者の能力を惜しみ、利用する為に赦免する者もいるだろう。

それは悪ではない。さりとて、それは正義ではない。

『ロナルド……、分かるだろう?』

ヴォルデモート卿はロナルド・ウィーズリーの傷跡になりたいと言つた。けれど、それが本当ならば彼の行動はどこか奇妙に映る。

記憶に残り続けたいただけならば騙して本体をさつさと破壊させれば良かった。にも関わらず、ヴォルデモート卿は自らの悪性をロナルドに語り続けている。

その理由にダンプルドアは気づいていた。

闇の中で生きて来たヴォルデモート卿にとって、ロナルドが放つ光はあまりにも眩しかったのだろう。

その輝きに魅せられたが故に、彼はその輝きが曇る事を善しと出来なかつたのだ。

ロナルド・ウィーズリーという男には正義であつて欲しい。

だからこそ、邪悪を救うという悪を為さぬように説得しているのだ。

「オレはそれでも、お前さんには生きて欲しいんだ!!」

その言葉にヴォルデモート卿は溜息を零した。

『何故だ……、ロナルド。この屍の山を見て、なんとも思わないのか!?!』

「思うさー！ 思うけどよお……」

そのあまりの頑なさにヴォルデモート卿は困り果てている。

「トムー！ お前さんは迷っちゃっただけなんだぜ!? ちゃんと道を教えてやれたらよう、こんな……、こんな悲しい事させずに済んだつてのによお……。なんで……。なんで、こんな……。イヤだぜ。オレは、オレ、オレは……」

『何を言ってる……』

「ミスター・ウィーズリー……?」

様子がおかしい。その事に気がついたのはヴォルデモート卿やダブルドアだけではなかった。ハリーやデーン、シエーマス、ネビルも慌てたように駆け寄っていく。

けれど、彼は誰の声にも反応する事なく、「イヤだ。イヤだ」と震え続けた。

第四十八話『激怒』

誰にも理解しようがない。なにしろ、この場に実子を持つ親は一人もいないからだ。

坂本玄蔵は良い親ではなかった。けれど、息子の事を愛していたし、息子からも愛された。

彼はヴォルデモート卿と息子である大輔を重ねてしまっている。

もしも、大輔が道を踏み外してしまったら。人々から憎まれ、恨まれ、恐れられたら。その果てに自らを罪を告白し、自らの死を願うに至ったら……。

想像するだけで気が狂いそうになる。

「……なあ、トム」

ロナルドは懇願した。

「死のうとしないでくれ……」

『お、お前……』

ヴォルデモート卿は顔を歪めた。

「罪を償いてえなら、生きて償ってくれ!! 一人じゃ押し潰されちまうってんなら、一生かけてオレも一緒に背負うからよお!!」

『はあ!? お前、何を言ってるんだ!?!』

ヴォルデモート卿は悲鳴のような声をあげた。

ロナルドの言葉が決して軽口ではない事を彼は理解出来てしまったからだ。だからこそ、理解が出来なかった。

たしかに、二人は同じ体を共有し、多少の縁は出来た。けれど、その付き合いは数カ月程度のもの。その程度の関係性の者の為に一生を使い潰すなど意味が分からない。

これが犯罪の被害者に寄り添ってのものならばまだ分かるのだ。だが、ヴォルデモート卿は加害者なのだ。

『ロナルド！ 貴様が寄り添うべきはハリー・ポッターだろう！ ボクがすべてを奪ってしまった被害者がそこにいるんだぞ!!』

ヴォルデモート卿に名指しされたハリーは言葉に言い表せない表情を浮かべていた。

己の両親を殺害し、額に癒えぬ傷跡を刻み込んだ張本人が目の前にいる。けれど、抱くべき憎しみは湧いてこなかった。

一度、ロナルドに対してヴォルデモートを許すと宣言した事もある。ロナルドの姿を見て、彼が心配でそれどころではないというものがある。

けれど、それ以上に彼の発言が大きかった。

——— ボクがすべてを奪ってしまった被害者。

奪ったではなく、奪ってしまった。

その言葉にヴォルデモート卿の心中が現れていた。

先刻から続くロナルドに対する言葉はどれも自らを断罪して欲しいという懇願だった。

『ネビル・ロングボトムを見ろ!! 彼の両親に起きた悲劇を知れば、貴様も考えを改めざるを得なくなる!!』

その言葉にネビルは青褪める。

『彼の両親は拷問されたのだ。ボクの命令で死喰い人が実行した。心を狂わされ、息子を息子と理解する事も出来ない。親がいるのに……、親が……子だと認識してくれない……』

ロナルドの行為はあるいは何よりも残酷な事だったのかもしれない。

彼に断罪を求める為にヴォルデモート卿は己の罪を罪として直視し続けている。それは彼の心に存在していなかったものを生み出していく。

罪を罪として受け止めた時、彼の中でこれまでの悪行が概念事変化していく。

一度抱いた罪悪感の罪の数と大きさに比例して巨大化していく。裁きとは被害者の為だけではなく、加害者の為にあるものだ。

裁かれない限り、罪は罪として残り続ける。

「……逃げるなよ」

その事に気付いた時、ネビルは言った。その声には怒りが滲んでいた。

「ネビル……？」

死は今のヴォルデモート卿にとって、救いでしかない。

この男はロナルドに苦悩を背負わせた挙げ句、死に逃げ込もうとしている。

あまりにも身勝手だと思った。

「ぼ、僕のパパとママに酷い事をして！ ハリーのパパとママを殺して！ それなのに死んで楽になりたいって言うのかよ!! そんなの卑怯だ!!」

『な、なんだと!?!』

ヴォルデモート卿は怒りのあまり目を見開いた。

『卑怯?・ 卑怯と言ったのか!?! このヴォルデモート卿に!!』

「ああ、そうだ!! 卑怯者め!!」

ヴォルデモート卿の怒りに触れながら、ネビルは臆することなく怒鳴りつけた。

その姿にハリー達は目を白黒させている。

普段大人しく、おどおどしている事が多いネビルが怒りの形相のまま声を張り上げている事に衝撃を受けている。

「お前は逃げ出そうとしている!! 何の責任も負わないで、何の償いもせずに逃げようとしているんだ!! それが卑怯者以外の何だって言うんだ!!」

『ボクは卑怯者なんかじゃない!!』

怒りに顔を歪ませながらヴォルデモート卿は叫んだ。

卑怯者。そう呼ばれる事だけは我慢ならなかった。

「だったら逃げるな!! ロンにお前の事なんか背負わせるな!! 自分で責任を持って!! それが出来ないなら、お前はやっぱり卑怯者だ!!」
『き、貴様……、貴様!! ネビル・ロングボトム!! このボクを……、俺様を愚弄するか!!』

まるで突き刺すような殺意が走る。

真正面からその殺意を受けたわけでもないのに、デイーンとシェーマスは震えが止まらなくなった。ハリーも声を出す事が出来なくなった。

それなのに、真正面から殺意を向けられているネビルだけが更なる怒りをもって受け止めている。

一度燃え上がった憤怒の炎は彼の心を覆う堅牢な鎧となり、更には矛となる。

物心付いた時に祖母と共に面会した両親はネビルを自分達の子供だと認識する事が出来なかった。

その時の絶望は面会を重ねる毎に深くなっていった。

悲しくて、悲しくて、悲しくて……、憤怒と憎悪は彼の中に蓄積されていった。

燃え上がるネビルの眼光にヴォルデモート卿は吞まれかけた。

「逃げるな、卑怯者! 罪を償え!! お前が死んでいいのはその後だ!!」

『……ボクは卑怯者じゃない』

ロナルドを見ないように、彼はそうつぶやいた。

卑怯者とは、勇気を持たぬ臆病者を指す言葉だ。軽蔑されるべき愚者を指す言葉だ。

もし、ネビルの言葉にロナルドが共感を覚え、軽蔑の眼差しを向けてきたら……。

『良いだろう、ネビル・ロングボトム!!』

ヴォルデモート卿は歯を食いしばるような表情でネビルを睨みつ

けた。

『貴様に見せてやろう！ ヴォルデモート卿が卑怯とは程遠き偉大な魔法使いである事を！』

そして、彼は言った。

『……貴様の面親を返してやろうではないか』

「えっ？」

第四十九話 『エグレ』

ネビル・ロングボトムの両親は四人の死喰い人から苛烈な拷問を受けた。

長時間に及ぶ拷問の末、夫妻は完全に正気を失い、ネビルを前にしても息子である事が分からない有様だった。

—— あーえー？

—— ウーウー！

ある時、母であるアリスが口からヨダレを垂らしながらクシャクシャに丸めたちり紙を押し付けた。

単なるゴミでしかなく、付き添ってくれた祖母のオーガスタは捨ててしまえとネビルに言った。

けれど、ネビルには捨てられなかった。それは確かにゴミでしかなく、アリスも別に贈り物として渡したわけではないのだろう。

それでも、そのクシャクシャに丸められたちり紙はネビルにとって生まれて初めて両親から貰えた物だったのだ。

第四十九話 『エグレ』

「……返す？ ど、どういう意味……？」

『そのままの意味だ。貴様の両親は正気を失い、回復の見込みがない。聖マンゴ魔法疾患傷害病院の癒者はそう告げたのだろうか？』

「う、うん……」

ヴォルデモート卿は言った。

『貴様の両親が正気を失った理由は磔の呪文を長時間受け続けた事によるものだ。あれは肉体ではなく、精神に作用する。精神、すなわちは魂そのものに苦痛を与える。長時間に及ぶ魂への攻撃は魂と肉体を繋ぐラインに影響を及ぼしたのだろう』

ヴォルデモート卿はロナルドが持っている日記帳を見た。

『ボクが不死性を得る為に利用した分霊箱は殺人による魂の分割を利用したものだ。だが、魂の分割自体は分霊箱とは関係のない殺人行為でも発生する。殺人を行った者は大なり小なり罪の意識を抱くなどして精神が歪むが、正気を失うなどレアケースだろうか？ つまり、魂

は傷つけられても自然と修復されるように出来ているんだ』

ネビルはさつきまで怒りを向けていたヴォルデモート卿の話に熱心に聞き入っていた。

両親を取り戻せるかもしれない。それは暗黒の中に差しした光明だった。

怒りや憎しみに囚われている場合ではなく、藁にもすがる思いでネビルは耳を傾けている。

『ボクは魂の自然回復に対して、一歩踏み込んだ知識を持っている。それは肉体だ。脳が魂の本来の姿を記録しているからこそ、魂は元の形に戻る事が出来る。逆もまた然り、魂が記憶しているからこそ肉体の損傷を呪文で癒やす事が出来る。エピソードを知っているか？

あの呪文は肉体の自然治癒力を強めているわけではなく、それなのに如何なる箇所の如何なる損傷にも一定の効果を示すだろうか？ 肌の裂傷、打撲、骨折、眼球の破裂に到るまで、完全とはいかないまでもな。一つの呪文が幾つもの損傷に効果を発揮する理由こそ、魂にあるわけだ』

「そ、それで……、パパとママをどうやって治すの!？」

ネビルは焦れたように叫んだ。

『簡単だ。魂の損傷は脳の記録で修復出来る。問題は魂と肉体を繋ぐラインが出鱈目に絡まり合っている事だ。だったら、それを解きほぐしてやれば良い』

なんだか、すごく単純な事に聞こえる。けれど、これまで聖マング魔法疾患傷害病院の癒者達はネビルの両親の為に懸命に手を尽くしてくれていた。そんな簡単な事で治せるなら、とつくに治してくれている筈だと思った。

その事を察したダンブルドアはネビルの肩に手を置いた。

「問題は魂と肉体を繋げるラインの修復が困難である点なのじゃよ。わしですら魂に纏わる知識をその真髄の一端すら把握出来ておらぬ」

「ダ、ダンブルドア先生でも!？」

『ネビル・ロングボトム。さつき、ボクは磔の呪文を魂に苦痛を与える呪文だと言った。それだけではないんだ。服従の呪文なんて、もつと

分かりやすく精神に干渉する呪文だ。そして、アバダ・ケダブラ。あの術の真髄は肉体を傷つけず、相手に死そのものを与える合理性にあるわけだが……、気づく事はないか?」

ネビルは大きく目を見開いた。

普段の授業では同級生達にまったくついていけないネビルにも、ヴォルデモート卿の言わんとしている事はすぐに分かった。

「肉体じゃなくて……、魂を殺しているの?」

『正解だ、ネビル・ロングボトム。さて、闇の魔術のトップ3とも言うべき術が揃いも揃って魂に干渉する術というわけだ。ほら、どうして聖マンガ魔法疾患傷害病院の癒者達やダンブルドアが貴様の両親を治してやれないのか分かっただろう?』

「……パパとママを救うには闇の魔術が必要って事?」

『大正解だ』

ヴォルデモート卿は出来の良い生徒を褒める教師のように微笑んだ。

『魂は闇の魔術の領分なのだ。そして、ボクは他の誰よりも闇の魔術の真髄を理解している。ボクなら、貴様の両親を正気に戻す事が出来るという事だ』

ネビルは慌てたようにダンブルドアを見た。

そして、ダンブルドアは頷いた。

「わしでは救えなかった者達じゃが、トムならば救えるじやろう」

その言葉にネビルは涙を零した。

「お、お願い!! パパとママを治して!!」

その言葉にヴォルデモート卿は呆れた。

『だから、治すと言っているだろう……』

ヴォルデモート卿はロナルドを見た。

『……ロナルド』

「トム……」

二人は見つめ合った。

『お前を説得するのも疲れた……』

ヴォルデモート卿はそう言うのと徐々にその姿を薄れさせていく。

『フランク・ロングボトムとアリス・ロングボトムの下へ連れて行け。ボクは卑怯者ではないからな……』

「ああ、分かったぜ!」

ロナルドは喜色を浮かべながらヴォルデモート卿を受け入れた。

すると、それまでロナルドの後ろに待機していたバジリスクが彼の前に移動して来た。

解決したようだな

【おうよ! ってか、すっかり後回しにしちまってすまなかつたな! お前さん、これからオレのダチ公になつてくれるつて事でいいんだよな!】

「口、ロン?」

シエーマスはロンの口から飛び出したシューシューという音にキョトンとした表情を浮かべた。

「蛇語じゃよ。本来はヴォルデモート卿の能力じゃが、彼に憑依されておる事でミスター・ウィーズリーにもその能力が備わつたのじゃろう」

「そ、そうなんだ……」

シエーマスは呆気にとられつつバジリスクと話すロナルドを見つめた。

ダチ公……? 友という意味であつているのか?

【そうとも! なあ、名前を覚えてくれ!】

我に名はない

【そうなのか!? なら、オレが付けてもいいか!?】
構わない。今は汝こそが我が主故に

【そんじゃよ! そんじゃよ! タロウつてのはどうだ!】

それは昔、大輔が飼いたいと連れて来た老犬の名前だった。

雨の中、老犬は首輪に繋がられたロープを木に結び付けられていた。

急いで動物病院に運び込んだけれど、老犬はすっかり衰弱していた。

老犬が死ぬまでの数週間、大輔は老犬を太郎と呼んで懸命に世話を

した。

思いが通じたのか、老犬は死の間際に大輔の顔を舐めた。殆ど動けなくなっていたのに、その為だけに体を動かして最期の力を振り絞った。

好きに呼ぶがよい

『いや、待て!! バジリスクだぞ!! 蛇の王にタロウはないだろう!!』
なんと、ヴォルデモート卿が口を挟んできた。

【ええ!? いいじゃねーか、タロウ! なあ、ポッターさん!!】

【ええ!? いや、えーつと……】

ハリーは目を泳がせた。タロウという響きはどうにも聞き慣れないし、正直微妙だと思ったからだ。

そして、ハリーが当然のように蛇語を話す姿を見て、シエーマスとデイーンはポカンとしている。

【ええええええ!!】

我は構わぬのだが……

バジリスクは健気な事を言った。

【タ、タロウ……】

『待て待て!! そもそも、タロウは犬の名前だぞ!!』
犬?

なんと、バジリスクは犬を知らなかった。

「ふむ……」

全てではないにしろ、ある程度は蛇語を解す事が出来るダンブルドアは大きな石を出現させ、その石を変身術で犬に変化させた。

これが……、タロウ……

バジリスクの声は微妙にトーンが下がった。

【タ、タロウ!?】

……わ、我は構わぬぞ

明らかにさつきより不満感が滲み出ている声だった。

それからロナルドとヴォルデモート卿はハリーを交えてバジリスクの名前を考え始めた。

そして、最終的にリトアニアの伝承にある蛇の女王の名から取り、

エグレと呼ばれる事になった。発案者はハリーだった。
その光景を見ながらネビルは思った。

—— はやくパパとママを治してもらいたいんだけど……。

第五十話 『スリザリンの継承者』

ロナルド・ウィーズリーとアルバス・ダンブルドアは聖マンゴ魔法疾患傷害病院にやって来ていた。

聖マンゴ魔法疾患傷害病院にはヤヌス・シツキー病棟という重症患者を収容している特別病棟がある。

ネビルの両親であるフランクとアリスもそこにいた。

本来、ヤヌス・シツキー病棟には専属の療者と患者の肉親しか立ち入れない。そして、肉親でさえも制限事項の厳守を求められる。

なにしろ、この病棟に入院している者は呪文による永久的な損傷を受けた患者ばかりだ。彼らは一切の自衛が出来ず、些細な切っ掛けで魔法力を暴走させてしまう。

患者と見舞客の双方を守る為に必要な措置なのだ。

「分かっておるよ、ロディマス。それでもなのじゃ」

聖マンゴ魔法疾患傷害病院の現院長であるロディマス・アーキライは困り果てていた。

肉親ではないにも関わらず、ヤヌス・シツキー病棟の患者に面会を求めめる者は少なくない。

患者の親友であったり、義理の家族であったり、組織の同胞であったりなど事情は様々だ。

けれど、患者の為に特例を認めるわけにはいかない。

「そう言われても困ります、ダンブルドア。当院が最も優先する所がなにか、あなたならご存知でしょう?」

如何に相手が今世紀最高の魔法使いだろうと例外は認められない。

患者達の中には闇の陣営の片棒を担いってしまった者もいる。そうした者達にとって、アルバス・ダンブルドアは不倶戴天の敵であり、一部は深層心理にトラウマを抱いている可能性すらある。そのトラウマが致命的な魔法力の暴走を引き起こすかもしれない。

「頼む、ロディマス。もしかしたら、ロングボトム夫妻を救う事が出来るかも知れぬのじゃ」

「……だ、だから、その方法についての詳細を教えてください！ 詳細

次第では考えると申し上げているではありませんか！」

ロディマスは引かない。相手が仮に魔法省大臣だろうと、闇の帝王だろうと彼は一切引かない。

そういう男だからこそ、聖マンゴ魔法疾患傷害病院の院長を任されているのだ。

あるいは魔法省大臣やホグワーツ魔法魔術学校の校長の地位よりも就くことが難しい立場にいる男なのだ。

「……ロディマス」

ダンブルドアは逡巡している。

世界広しと言えどもロディマス・アーキライ以上に信頼出来る男はいないと多くの者が語る。

その評価はダンブルドアの中でも変わらない。

彼はホグワーツを首席で卒業し、嘗ての戦争時には医療チームを率いて敵味方を問わず治療を行い続けた。

無論、闇の陣営の者は治療後に魔法省へ引き渡していたが、グリーンデルバルドの信奉者の残党や死喰い人までも治療する事には懸念を示す者が多かった。

それでも彼は戦場で人を救い続けた。

一つの命を救う事は、無限の未来を救う事だ!!

高らかに叫びながら敵味方の魔法が入り乱れる戦場を駆け回る彼のチームの存在がなければ、敵味方の戦死者は遥かに多くなっていた事だろう。

魔法戦士としても超一流であった彼を当時の闇祓い局がどうか勧誘出来ないかと躍起になっていた事を覚えている。

ダンブルドアも不死鳥の騎士団への入団を幾度も打診した。けれど、彼は人の命を救う道を突き進んでいる。

患者の未来を第一と考える彼ならば、あるいは受け入れてくれるかもしれない。しかし、事情が事情故に中々切り出す事が出来なかった。

なにしろ、ヤヌス・シツキー病棟に入院している患者の多くは他ならぬヴォルデモート卿の被害者達なのだ。

『……埒が明かないな』

ヴォルデモート卿はロナルドの内を覗いた。

彼から見て、ロディマスという男は与し易そうな人格に見える。

見た目だけではなく、開心術を使った上での判断だ。ダンブルドアのよく回る舌ならば幾らでも転がせそうだ。

だと言うのに、ダンブルドアは何故か苦戦している。

—— いやはや、大した御仁だぜ。

『ロナルド?』

—— あの御人には誤魔化したり、騙したりなんて真似は無理だと思っぜ? きつと、すぐにバレちまうよ。

『何を言っている? 奴は駆け引きなど出来るタイプではないぞ』

—— 駆け引き云々じゃねえんだ。単純に、あの御人は騙されないって話だぜ。ダンブルドア先生もそれが分かっているのさ。

ヴォルデモート卿にはその理屈がよく分からなかった。

秘密の部屋で彼がロナルドに見せたヴォルデモート卿の悪行はあくまでも彼が調べ上げたものをイメージとして映し出したものに過ぎない。

彼にヴォルデモート卿として生きた時間の記憶など存在しない。それは後に作られた分霊箱やオリジナルにしかないものだ。

彼には自分が思っている以上に対人経験が不足していた。少なくとも、何十年も人と接しながら生きて来たダンブルドアや坂本^{ロナルド}玄蔵と比べれば。

『……ならば、騙さなければ良い』

—— トム?

『いいか? 人を欺く為に嘘など必要ないことを貴様に教えてやる』

トムはロナルドの内を覗きながら邪悪に囁いた。

第五十話 『スリザリンの継承者』

「……あー、ごほん!」

ロナルドはわざとらしく咳払いをした。

ダンブルドアとロディマスはあまりにもわざとらしい咳払いに目を丸くしながら彼を見た。

「お話中に失礼!! オレの名はロナルド・ウィーズリー! よろしく頼みますよ、ロディマスの旦那ア!!」

「あ、ああ、よろしく!」

戦場や医療現場では目が逝っているとよく言われがちなロディマスだが、戸惑いながらもその目はとても優しかった。

「ネビルの両親の治療ですがねえ、このオレに任せて欲しいんでさあ!」

「君にかい?」

子供が突飛な事を言い出したというのに、彼は困惑した様子をみせなかった。

「そうです! 実は先日、秘密の部屋を見つけましたもんでねえ!」

「秘密の部屋を?」

ロディマスはダンブルドアを見た。

「本当じゃよ、ロディマス」

ダンブルドアはロナルドの意図に気付いたようだ。

話を合わせてくれたダンブルドアに感謝しながらロナルドは胸を張った。

「そこでスリザリンの継承者になったんですよ!」

ロナルドは言った。それは紛れもなく事実であり、ロディマスはとても驚いた様子を見せている。

「しかし、君はグリフィンドールの生徒なんだろう?」

ロディマスはロナルドの制服を見ながら問い掛けた。

「グリフィンドールの生徒がスリザリンの継承者になっちまったらいけねえってルールはないでしょう? なにしろ、元々は親友同士って話ですからねえ!」

これも事実だ。歴史書にも載っている通り、嘗てのゴドリック・グリフィンドールとサラザール・スリザリンは無二の親友同士だったらしい。

「それで、オレはスリザリンの継承者の知恵を手に入れたんですよ」

嘘ではない。ロナルドは間違いなくスリザリンの継承者だったヴォルデモート卿の知恵を手に入れている。

「スリザリンの知恵!? なるほど、それでロングボトム夫妻の治療を……」

ロディマスは再びダンブルドアを見た。

「なるほど、それで言い淀んでいたわけですか……。しかし、そういう事ならば素直に話してくだされば良かったのに」

彼は心外だとばかりに言った。

『毒が時には薬になるように、闇の魔術にも輝く部分はある筈だ』と、そう主張した癒者がいました。反対が多く、魔法省からの認可も下りなかった為実現しませんでした……。』

「おそらく、サラザール・スリザリンの知恵だとしても魔法省の認可を得る事は難しいじやろう」

「だから、先に実績を作ってしまったおうという事ですね。実際に治癒が出来てしまえば、特例的に認められる可能性は高い」

ロディマスはダンブルドアを見つめた。

「……もし、治せなかったら彼は罪に問われるかも知れません。それを理解しての行動ですか？」

「分かっておる。その覚悟は既に問うてある。そして、彼はここにいる」

ヤヌス・シツキー病棟への立ち入りは聖マング魔法疾患傷害病院が制限を課しているだけで法律的な縛りはない。

けれど、患者に闇の魔術を施したとなれば未成年であってもアズカバン送りの可能性すらあり得る。だからこそ、誰も同行させなかったのだ。

その事をダンブルドアがロナルドに語った時、彼の兄弟であるフレッドとジョージは猛烈に反対した。彼らだけではなく、他ならぬネビルでさえも反対した。

それでも彼は譲らなかつた。

トムが死ではなく、償いの道を選んだのならどこまでも寄り添っていく。その果てがどんなものであれ、受け入れる覚悟を決めていた。

ただ、彼はアズカバンに収監されるかもしれないという不安を一欠

片も抱いてはいなかった。何故なら、彼はトムを信じているからだ。「ネビルの両親を助ける為ならアズカバン送りだろうとなんだろうと構わねえ!! 頼むぜ、ロディマススの旦那ア!! オレを信じてくれ!!」その覚悟を前にして、ロディマスは言った。

「……君を信じよう。だが、一つ確認したい」「なんですかい!?!」

「君が知る方法は君でなければ不可能な手段なのかい? 方法を私に教える事は出来ないかな?」

患者を救える可能性があるのならば、それがどんなに小さな可能性だろうと無視する事など出来ない。

しかも、今回はアルバス・ダンブルドアのお墨付きだ。

今世紀で最も偉大な魔法使いが認めた以上は大いに期待が持てる。秘密の部屋やスリザリンの継承者の話もダンブルドアが認めている以上は事実なのだろう。

だが、万が一にも目の前の少年を犯罪者にするわけにはいかない。ダンブルドアは成功する事を確信しているのだろうが、それでもだ。

「そ、それは……」

『無理だ。治療には魂に対する知識と経験を要する。ボクも一度魂の存在となり、ハーマイオニーや貴様に取り憑く中で漸く出来ると確信に至れたんだ。知識だけなら与えられるが、それでは恐らく失敗する』

トムの言葉にロナルドは少し安堵した。

自分が背負う分には幾らでもリスクを負うが、そのリスクを他人に背負わせる度胸は無かった。

なにしろ、失敗すれば犯罪者になってしまう。万が一にも眼の前の善良で偉大な癒者が犯罪者となって職を追われるなど社会全体の大いなる損失だ。

『余計な事は言わなくていい。無理だと言え』

「……無理です」

「そうか……」

ロディマスは苦悩の表情を浮かべている。

「ロディマス。万が一の時はわしがすべての責を負うつもりじゃよ」
ダンブルドアが言った。

「ダンブルドア先生!! そいつはダメだ!!」

ロナルドは叫んだ。

「ミスター・ウィーズリー。わしは君の教師じゃ。教師として、生徒の行動を知らながら善しとしたならば、その結果に結びつく責任の所在は教師にあるのじゃよ」

「悪いが譲れねえ!! どんな結果になろうとも、これはオレの責任だ!! アンタに泥を被らせるなんざ出来ねえよ!!」

「……ロン」

ダンブルドアは腰を折り曲げてロンに視線を合わせた。

そして、真摯な眼差しを彼に向けながら言った。

「この通りじゃ、ロン」

ロナルドは目を見開いた。

ダンブルドアは彼に頭を下げたのだ。

「よ、よしてくだせえ、ダンブルドア先生!!」

「ロン」

頭を上げないまま、ダンブルドアは言った。

「君はわしには出来ぬ事をしてくれた。わしが求め続け、しかして目を背け続けてきたものを見せてくれた。わしは君に大きな……、とても大きな恩を抱いておる」

「そ、そんな……、オ、オレなんてそんな……」

「どうか、この哀れな老いぼれにその恩を返す機会を与えてほしい」

「先生……」

その声には切実な想いが籠められていた。

—— ああ、そうか……。

ロナルドは目の前の老人を見た。

偉大なる人。誰よりも賢く、誰よりも気高く、誰よりも強き人。だからこそ、彼は間違える事を許されない。

以前、ハグリッドから聞いた事があった。

ヴォルデモート卿は学生時代、多くの教師や生徒から称賛を得てい

たらしい。その中でダンブルドアだけが彼の正体に気付いていたと……。

——この御人は信じたかったんだ。

彼は教師だ。誰が好き好んで自分の生徒を疑いたいものか。

それでも疑わなければいけなかった。彼の敵対者にならないければいけなかった。彼を滅ぼす為に動かなければいけなかった。

それがどれほど苦しく、どれほど辛かった事か……。

『……老いぼれめ』

想像を絶する苦悩があつたのだろう。

彼が口にする恩とは、

彼が出来なかつた事とは、

「……先生」

ロナルドは涙を止める事が出来なかつた。

ダンブルドアを抱き締めながら、彼は言った。

「救いましょう!! 一緒に!!」

「……ああ、一緒にじゃ」

救いたかつた。

彼はヴォルデモート卿となつてしまつた少年を救いたかつたのだ。

「……行きましょう」

ロディマスは言った。彼には二人が涙を流す本当の理由を知らない。

それでも、これ以上何を口にしたとしても彼らの決意は変わらないだろう事を悟つた。

そして、彼は招き入れた病室で奇跡を見た。

「……ここ、は?」

「……わたし、は」

直ぐに二人は意識を失つてしまつた。けれど、次に目を覚ました時、彼らは自分自身を取り戻していた。

治癒を終えた後、ダンブルドアがホグワーツから連れて来た彼らの息子は両親と対面し、初めて両親と会話を交わした。

ロディマスはその光景に涙を流した。

◆ その日届いた日刊預言者新聞の一報にホグワーツは上も下も大騒ぎだった。なにしろ、その内容が衝撃的過ぎた。

「スリザリンの継承者はグリフィンドール生!? スリザリンの叡智によつて、ロングボトム夫妻が奇跡の復活!!」

これまで、歴代の校長達ですら発見する事が出来なかった秘密の部屋が発見された。しかも、発見者はグリフィンドール生であるロナルド・ウィーズリーだ。

それだけでも十分にビッグニュースだが、なんとロナルドは正式にスリザリンの継承者になつたらしい。

「意味がわからん!!」

スリザリンの上級生の一人が頭を抱えながら叫んだ。

彼の言葉は多くのスリザリン生とグリフィンドール生の心を代弁していた。

だって、ロナルドはグリフィンドール生だ。俗に血を裏切る者と呼ばれているウィーズリー家の者だ。

最もスリザリンの継承者に相応しくない者が継承者となつた事に誰もが混乱している。

しかし、事実是不変ならない。

「……ロナルド」

ドラコ・マルフォイも周囲と変わらず驚いていた。

記者が適当な記事を書いているだけだと思いたかつた。しかし、そこにはバジリスクという伝説の怪物を抱き締めているロナルドの姿があつた。この怪物こそ、秘密の部屋に眠る恐怖というものらしい。

記事にはバジリスクの危険性も余すことなく記されているが、ロナルドは完璧に制御出来ているらしい。これまで謎に包まれていたバジリスクの生態を解き明かす為、魔法生物学者が数人ほどホグワーツに駐在する予定と記されている。

ロナルドは秘密の部屋でスリザリンの叡智を授かつたらしく、その智慧を利用して聖マンガ魔法疾患傷害病院のヤヌス・シツキー病棟に入院していたネビル・ロングボトムの両親であるフランクとアリスの

治療に成功した。

現在は他の患者の治療に当たっているらしい。

ここ数日、あの騒がしい声を一切聞かない事に対する疑問が氷解した。

「ロンが継承者!? ヤヌス・シツキー病棟の患者を治療!? どど、どうなってるんだ!?!」

どうやら、家族にも詳しく説明していないようだ。

グリフィンドールのパーシー・ウィーズリーは他の誰よりも困惑している様子を見せている。

「ま、まさか本当だったとは……」

生徒だけではなく、教職員も新聞を食い入るように読んでいる者が多い。

事前にダンブルドアから説明を受けていたが、それでも宇宙までぶっ飛びそうになるほどの衝撃だった。

「い、一体、何がどうなっただけなのですか……」

クイリナス・クイレルもご多分に漏れず困惑していた。

『……なるほどな』

ただ一人、彼に取り憑く者だけが納得したように呟いた。

第三章 『アズカバンの囚人』 第五十一話 『黄金の魂』

ロナルド・ウィーズリーはアルバス・ダンブルドアと共にホグズミード村へ帰って来た。

そのままホグワーツに戻るつもりだったロナルドをダンブルドアは寂れたバーへ案内した。

看板には「ホッグズ・ヘッド・イン」と書いてある。

第五十一話 『黄金の魂』

「……もう閉店の時間だ」

入るなり奥から不機嫌そうな声が響いた。

「わしじゃよ」

「……ホグワーツ魔法魔術学校の校長ならば閉店時間の後でも歓迎される筈だど？ 随分な自惚れだな」

棘のある言い方にダンブルドアは苦笑した。

「弟の家に兄が顔を見せるには良い時間ではないかね？」

その言葉にロナルドは目を丸くした。

「……生徒同伴でか？ こんな夜更けに学校から連れ出すとは教師の風上にも置けんな」

「全くじゃな」

ダンブルドアはロナルドに小さく頷いて見せながら店の奥へ向かっていった。

閉店時間というのは確かなようで、他に客の姿はない。

「彼はアバーフォース・ダンブルドア。わしの弟じゃよ」

ダンブルドアが親しみを籠めながら言うと、紹介されたアバーフォースは不機嫌そうに「注文は？」と聞いてきた。

「バタービールを2つ頼む」

「……ふん」

鼻を鳴らすとアバーフォースはジョッキになみなみと注がれたバタービールと山盛りのポテトをテーブルに飛ばしてきた。

密かに腹ペコだったロナルドは「おお！」と歓声をあげた。

「感謝するぜ、アバーフォースの旦那ア！」

「……威勢のいいガキだ」

鼻を鳴らしながら、アバーフォースは視線をバーカウンターの裏に飾られた絵画に向けた。

その絵画には愛らしい少女が描かれていた。彼女はアバーフォースに対してクスクスと笑いかけている。

「アリアナじゃよ」

ダンブルドアは手元のバタービールに視線を注ぎながら彼女の名前を口にした。

『……アリアナ・ダンブルドア。ダンブルドアの今は亡き妹だ』

「ダンブルドア先生の妹さんか……」

アリアナはロナルドの視線に気がついたようだ。

その微笑みはとても優しく、とても儂く見えた。

「……よしー」

ロナルドは立ち上がり、バーカウンターに駆け寄った。

「アバーフォースの旦那ア！ それに、アリアナの姐さん！ オレの名はロナルド・ウィーズリー！ よろしく頼みます！」

「……わしの耳はまだ遠くなつたらんぞ」

呆れたようにアバーフォースは言った。

《でも、嫌いじゃない。でしょ？ 兄さん》

「……爺さんの長話に付き合って寝不足になる事はねえぞ。話半分に聞いて、眠くなつたらさつきとホグワーツに戻る事だな」

「へへっ、どうもー」

ロナルドは二人に一礼するとダンブルドアの下へ戻って行った。

「兄弟つてのはいいもんですよねえ、ダンブルドア先生。オレも妹や兄上達にいつつも助けられていますよ。先生もそうなんでしょう？」

「だから、ここを選んだ。違いますかい？」

「……ああ、本当にその通りじゃよ。わたしには……、あまりにももったいない……」

ダンブルドアは悲しげな表情を浮かべていた。

普段の覇気は鳴りを潜め、そこには弱り切った老人がいた。

「……ダンブルドア先生。オレは一つ、誰にも話してねえ秘密を持っています。聞いてくれますか？」

色々と話す事があった。色々と聞くべき事があった。色々と相談しなければならなかった。

だけど、それよりもまずは腹を割る必要があるとロナルドは考えた。

目の前の老人と向き合うには、ロナルド子供ではいけないと思った。

「聞かせてくれるのかね？ このわしに」

「ええ、ダンブルドア先生に是非！」

するとゴホンという大きな咳払いが響いた。

「内緒話なら他所へ行く事だな」

「それには及びませんよ！ 内緒にしなきゃいけないような秘密じゃありませんからねえ！」

そう言うと、ロナルドは語り始めた。

「オレは転生しました。坂本玄蔵。それが前の人生でのオレの名です。日本で生まれ、世界中を旅して回り、息子も一人いました。そして、六十六歳の時に酒の飲み過ぎでぶっ倒れてそのまま天寿をまっとうしました」

ダンブルドアは僅かに目を見開いた。

「へへっ、落ち着きのないおっさんだって、よく言われました。いつまで経ってもガキのままだと嫁にも逃げられたしょうもない男でさ！」

「……お主の事はゲンゾウと呼んだ方が良いのかね？」

「どっちもオレの名です。ただ、今は玄蔵という事で」

そう言うと、玄蔵はバタービールをゴクゴクと飲み始めた。

一息でジョッキ一杯分を飲み干すと、彼はプハーと息を吐いた。

「くうー、たまんねえぜ！ いやはや、飲み慣れない味だが、こいつは中々ですなええ！」

「ほっほっほ、バタービールはいくら年を取っても変わらず美味しいものじゃよ」

そう言いながら、ダンブルドアもバタービールをゴクゴクと飲み干

した。

「……ゲンゾウ。この世界はどうかね？」

「最高ですよ」

玄蔵はポテトを齧りながら言った。

「オレはね、ダンブルドア先生。死の間際までガキのままだったんです。未知の冒険に出掛けたって、最期の最期までね。そうしたら、どうですか!? 夢が叶っちゃった! 転生なんて、本当にあるとは思ってなかったんですよ! まさに未知の大冒険だ! しかも、魔法がある世界だ。いや、元々あつたのかもしれないですけどね? 少なくとも、生まれ変わる前は存在して欲しいとは思っていても、存在しない物と確信していたんです。だから、本当にうれしかった……」

ロナルドはアバーフオースが追加で寄越してくれたバタービールをキャッチし、お礼を言いながら呷った。

「家族にも恵まれた。正直、思う所はありませんよ? オレのせいでロナルド・ウィーズリーという少年の人生は歪じまったんじゃないかってね……」

純粹無垢な赤ん坊に六十六歳のおっさんの意識が宿る。

親の立場に立って考えたら、あんまり嬉しくない状況だ。

「だから、親父殿と母上にきっちり告白して、頭を下げました。申し訳ないの一言で済む事じゃねえ。それは分かっています。けど、謝る以外の謝罪の仕方が分かるほど、オレは頭が良くないもんでね。けど、二人は許してくれたんでさ……」

遠き日の光景が今も瞼の裏に浮かぶ。

父であるアーサー・ウィーズリーは黙って酒を持って来た。

—— あんまり強い酒ではないが、今の体ならこれの方がいいだろう。

そう言つて、コップに酒を注いでくれた。

そして、母であるモリー・ウィーズリーは絶品の肴を用意してくれた。

「いつか息子と酒を飲み交わすのが夢だったんだ。最初はビールになると思っていたんだけどな。折角酒の味が分かる息子が目の前にい

るんだ！ 今日飲もう！」と……」

二人で飲み交わした酒は何物にも代えられぬ美酒だった。気づけば二人で踊り回り、庭を駆け回っていた。

そして、二人揃ってモリーにしこたま叱られた。

「それが七歳の時の話でさ。それまでも、それからも……、オレは偉大な愛の中で生きて来た。オレは本当に……、とんでもない幸せ者だぜ……」

生まれ変わる前の記憶を持つ者。それは魔法界でも稀な存在だ。

居ないわけではないが、誰にでもあり得るような事例ではない。

一体、どれだけの人間がウィーズリー夫妻のような愛を抱けるだろうか？ その答えはダンブルドアでさえ分からない。

「愛とは実に素晴らしいものじゃ」

ダンブルドアはバタービールのジョッキを揺らしながら呟いた。

「……ゲンゾウ。わしの秘密も聞いてくれるかね？」

「もちろん。聞かせてくれ、ダンブルドア」

ダンブルドアが語り始めると、アバーフォースはモコモコとした耳あてをつけた。そして、アリアナはジツと向かい合う二人を見つめた。

玄蔵は静かに聞き続けた。アルバス・ダンブルドアの過去の過ち、そして、今の過ちのすべてを。

セブルス・スネイプという男の愛を利用し、ハリー・ポッターに茨の道を敷こうとしていた事を余す事無く彼は語った。

「……ダンブルドア」

玄蔵は涙を零した。

彼の冷酷な企てに対して、彼が抱いたものは怒りでも憎しみでもなかった。

責めるのではなく、ただひたすらに悲しんだ。

ダンブルドアという男は誰よりも優しい男だ。

叶うならばすべてを救いたかった筈だ。けれど、神ならざる身に万人を救う事など出来る筈もない。

彼の決断は常に苦痛と共にあった。

それでも彼は逃げなかった。逃げるわけにはいかなかったからだ。彼の前に道はなく、彼の後に道が出来る。

彼がいなければ、彼が救える筈だった人々も救われなくなる。

「辛すぎるぜ……、ダンブルドア!!」

世界の為に親友を監獄に入れる。

世界の為に愛を求める少年に疑惑の目を向ける。

世界の為に己が信奉する愛を利用する。

世界の為に無垢な子供を犠牲にする。

誰がそんな事をしたと思う？

彼は感情を持たない機械ではない。

常人では耐えられない苦痛に耐える事が出来てしまうだけだ。

「……アンタは」

玄蔵はダンブルドアを見つめた。

「アンタって御人は……」

逃げてしまえばいい。それを責める者がいたなら、その者にすべてを背負わせてしまえばいい。

ただ強いという理由で世界の命運を背負わされるなど、そんな理不尽がまかり通って良い筈がない。

それでも彼は逃げない。何故か？ 分かり切っている。

「優し過ぎるぜ!!」

ロナルドは立ち上がり、ダンブルドアを抱き締めた。

「オレは……、オレは……!! アンタのダチ公として、アンタを支える事を誓うぜ!!」

枯れ木のように弱り果てていた彼に少しでも何かを与えてやりたい。

彼の心の内を聞き、そう思わずにはいられない。

『……まったく、困った奴だ』

ハリー・ポッター、ヴォルデモート卿、そして、アルバス・ダンブルドア。

まったくもって、とんでもない浮気者だ。

そのあまりにも眩い黄金の魂に照らされれば、もはや闇では生きら

れない。

ハリー・ポッターが復讐心を捨て去り、ヴォルデモート卿の救済を善しとしたように、

ヴォルデモート卿が邪悪なる心を捨て去り、贖罪の道を歩み始めたように、

ひび割れてしまった心をアルバス・ダンブルドアは再び集め始めている。

—— 君はわたしには出来ぬ事をしてくれた。わしが求め続け、しかして目を背け続けてきたものを見せてくれた。わしは君に大きな……、とても大きな恩を抱いておる

一度はゲラート・グリンデルバルドが横に並び立ってくれた。けれど、彼は闇の中へ消えていった。

ダンブルドアにとって、玄蔵は生まれて初めて前に進み出てくれた存在だ。

初めて見る導きの光を前にして、彼は涙を零した。

玄蔵の愛は彼の心に深く深く染み渡り、その心を癒やすのだった。

第五十二話『押し付け』

ロナルド・ウィーズリーがホグワーツに帰って来た。

大広間の扉を開き、威風堂々と肩で風を切りながらグリフィンドールの席へ向かっていく。

誰もが彼に注目しながら、声を掛けられずにいる。

スリザリンの継承者に選ばれ、ヤヌス・シツキー病棟の患者を次々に継承者の知識で癒やして回った事で一躍時の人となった彼に誰もがどう接していいか分からずにいる。

「ロン！ おかえり！」

「おかえりー」

「おつかれさま」

その中でハリー・ポッターとルームメイトのシエーマス・フイネガンとデイン・トーマスはいつも通り彼を迎えた。

そこにネビル・ロングボトムが居ないのは目を覚ました家族と離れ離れになっていた時間を埋め合っている為だ。

第五十二話『押し付け』

「いやはや、クリスマス休暇にはなんとか間に合いました」

「……すっごい濃密な三ヶ月だったね」

デインは苦笑いを浮かべながら言った。

ハリーとシエーマスも「たしかに」と頷いている。

ハーマイオニーがヴォルデモート卿の分霊に憑依され、それをロナルドが自分に取り憑かせ、そこから秘密の部屋を発見して継承者となり、ヴォルデモート卿の分霊と和解した後にヤヌス・シツキー病棟の患者を治癒するまでに経過した時間は僅か三ヶ月にも満たなかった。

「まあ、何にしても一段落付いたって所で……」

ロナルドは視線を僅かに落とした。

「……ポッターさん。あなたにお耳に入れておきたい話があります」

「な、なに？」

「シリウス・ブラック。今は冤罪でアズカバンに投獄されている御方なんです、ポッターさんの後見人だそうでしょ？ 今、ダンブル

ドア先生が方々に掛け合つて釈放の為に動いて下さってるんです」

「……ぼ、僕の後見人!?!」

寝耳に水とはこの事だ。ハリーは目を見開いた。

「ど、ど、どういう事!?!」

「ええ、初めから説明させて頂きます。ただ、少し哀しい思い出に触れなければならぬ事を謝らせてください」

「う、うん」

「シリウス・ブラックはポッターさんの御両親の……特に御父上であるジェームズ氏と親友同士の間柄だったそうです。そして、彼はポッター邸の秘密の守り人となり、あなたの後見人となった。そう世間一般では言われていました」

「えつと……、秘密の守り人って?」

「文字通り、秘密を守る者です。例えば、家の位置情報などの情報をある人物に託し、秘密の守り人とします。すると、託された人物が明かさぬ限り、他の誰にも家の位置情報が分からなくなるんですよ。そういう魔法です」

「そうなんだ……。え? でも、それならどうして僕の家が居場所がヴォルデモートに……。まさか!?!」

「いえ、ポッターさん! さっき言った通り、シリウスは冤罪です。実はですね、秘密の守り人をシリウスとジェームズは別の人物にしたんですよ。名はピーター・ペティグリュー。彼が……。その……」

「……秘密の守り人で、僕の家をヴォルデモートに教えたんだね?」

「ええ、そのようです」

ハリーにとって、あまり愉快とは言えない話だった。おまけに周囲からは聞き耳を立てられている。

ロナルドは忙しさのあまり気遣いの概念を忘れてしまったのかとハリーは少し恨めしそうに彼を見た。

「ただ、重要なのはシリウスが冤罪という点です。ダンブルドア先生が彼と面会しまして、ポッターさんと暮らしたいと強く願っていたそうです」

「ぼ、僕と……。そのシリウスが……。?」

「そうです。ポッターさんの家族になりたいと！」

瞳を輝かせながら言うロナルドを見て、ハリーは彼の心の内を見抜いた。

どうやら、ダーズリー邸でハリーとダーズリー家の溝を決定的にしてしまった事を未だに思い悩んでいたらしい。

だからこそ、ハリーに家族が出来ると知って舞い上がっている様子だ。

「ロン。僕、その人の事を何も知らないんだけど……」

「御安心を！ 彼の事をきっちり調べ上げてきました！ なにしろ、ポッターさんの御家族となる御仁だ。身辺調査は徹底しねえといけないからな！」

そう言つて、彼は懐から分厚い羊皮紙の束を取り出した。

そこには細かい文字でシリウス・ブラックという男の情報が記されていた。

「……こ、これ、ロンが作ったの？」

「いえいえ、オレも発案者として動きましたが、実際の所は探偵に依頼しました」

「探偵!?」

ハリーは目を丸くした。探偵と言えば、かの有名なシャーロック・ホームズやエルキュール・ポアロを思い浮かべる。

「実は幸運にもミスター・グレイとお会いする機会に恵まれましたね？ あの偉大な先輩が如何なる道を歩まれたのかずっと気になっていたのですが、探偵として魔法界に蔓延る数々の謎に挑んでいたそうです」

グレイという名にハリーは聞き覚えがあった。たしか、ロナルドの兄弟と共に呪われた部屋を攻略した人の名前がエドワード・グレイだった筈だ。

「彼が集めてくれた資料と他の方々に掛け合つて集めた情報を纏めた物が此方になります。少々破天荒な御方だったらしいが、友情を何よりも大切にしていたそうです。御覧ください！」

ロナルドが見せたのは若き日のジェームズ・ポッターがハンサムな

少年と肩を抱き合う写真だった。

「彼はジェームズ氏と深く信頼し合う関係だったそうです。きつと、ポッターさんとも良い関係が築けるかと！」

彼は興奮し切っている。ハリーは弱ってしまった。

正直に言えば、いきなり後見人がいて、その人の家族になれると言われても困ってしまう。

心の準備がまったく出来ていなくて、嬉しさよりも不安が勝ってしまう。

せめて、自分の意思が介在する余地があるならいいけれど、ダンブルドアが既に動いてしまっているらしく、事態は完全にハリーを置いてけぼりにしてしまっている。

その事に気づいたシエーマスとデイーンは顔を見合わせた。

「ねえ、ロン。それさ、ハリーに相談してから決めるんじゃないかだったのかい？」

シエーマスの言葉にロナルドはキョトンとなった。

ロナルドにとつて、ハリーに家族が出来る事は疑いようもないほど素晴らしい事だった。そして、それはダンブルドアも同意見だった。

二人はハリーに対してヴォルデモート卿の事で大きな負い目を抱いていて、彼の為に出来る限りの事をしてあげたかった。それは親心のようなものだった。

ダンブルドアにとつて、シリウス・ブラックはポッター夫妻を裏切ったという冤罪を除けば疑いようもなく素晴らしい人物だった事も災いした。

「そ、それはその……」

「あのさ、ロン。あの……、校長室での事とかもそうだけどさ、もうちよつと相手の意見を尊重出来ないの？」

二人は校長室でロナルドがハリーにヴォルデモートの救済を認めさせた事に関してもどうかと思っていた。

彼に悪意が無い事は二人も分かっている。けれど、あまりにもハリーの心を蔑ろにしていると思った。

「オ、オレは……」

「君は間違ってると思うよ？ でもさ、分からないかな……。人の心って……。そんなに単純じゃないじゃん。葛藤とか、そういう時間が必要なんだよ」

「冤罪だって言うなら、そのシリウス・ブラックを釈放させるのは正しいと思うよ。でも、後見人云々は先にハリーに話を通すべきじゃない。シリウス・ブラックじゃなくてさ」

「ふ、二人共、僕は大丈夫だから……」

ロナルドを責め立てる二人にハリーは狼狽えながら止めようとした。

そして、その姿を見てロナルドは自分が如何に愚かな行為に走っていたかに気づいた。

「……すまねえ」

先走り過ぎた。二人の言い分は実にもっともだった。

ハリーが喜んでくれると思った。その笑顔を見たくて、彼の幸せが見たくて、あまりにも身勝手な行動を取っていた。

「い、いや！ ちょっと待ってよ！ 別に、僕は嫌がつてるわけじゃない。……」

「ハリー。いい加減、君は怒っていいと思うよ？」

「え!?!」

シエーマスは呆れたように言った。

「ロンがやってる事、実際滅茶苦茶だからね？」

デーンも険しい顔で言った。

その事でロナルドは見る見る内に小さくなっていく。

さつきまで好奇心を覗かせていた周囲の生徒達はあまりにも居た堪れなくて視線を逸している。

「そもそも、ここで話す事じゃない？ 僕だったら殴ってる所だよ？」

「なぐっ!?!」

「君だって不満に思ったんだろ？ だったら、それをぶち撒けといった方がいいよ。じゃないと、また勝手な事されるよ？ 『良かれと思つて』とか言つて」

ハリーはすっかり狼狽していた。シエーマスとデイーンがカンカンに怒っているからだ。

しかし、それは仕方のない事だった。ロナルドが聖マンガ魔法疾患傷害病院に行っている間、憔悴していたハリーを二人は必死に励まし続けていたからだ。

自分の両親を殺害し、家を破壊した男の救済なんて、いくら本人が改心していたとしても容易に受け入れられるわけがない。あの場では取り繕っていたけれど、ロナルド達が去った後は酷い有様だった。その原因を作っておきながらまたしてもハリーを曇らせるような事をしたのだ。いくら友人でも堪忍袋の緒が切れた。

「……でも、僕の為に動いてくれたんだ」

けれど、ハリーはそう言った。

「確かに、先に相談して欲しかったよ。でも、ロンは僕の為に……」

「……ハリー」

シエーマスとデイーンは溜息を零した。別にハリーを困らせたかったわけじゃなかった。

あまりにも彼が不憫だと思ったからこそ、彼らは怒ったのだ。

「……本当にすまねえ」

「もういいってば……。それより、ヒツポグリクラブに行こうよ。色々あって、全然行けてなかったでしょ？」

「ポッターさん……」

ハリーの変わらぬ優しさにロナルドは涙を零した。

この御人を笑顔にしたい。幸福にしたい。それなのに笑顔どころか苦しませてしまった。それでも尚、氣遣ってくれている。

「ええ、行きましょう」

ハリーの手を取って頷くロナルドと嬉しそうに笑顔を浮かべるハリーを見て、シエーマスとデイーンはやれやれと肩を竦めた。

「そう言えば、ドラゴンクラブとの合同訓練も近々行われるってさ」

「楽しみだね」

いつもの雰囲気に戻り、周囲の生徒達はホツとした。

第五十三話 『シリウス・ブラック』

アルバス・ダンブルドアはアズカバンに姿現した。その瞬間に襲い掛かって来た寒気に対して、彼は敢えて無防備を晒した。

息をする度に希望が失われていく。一步進む度に悲しい過去が脳裏を過る。

ここを監獄と称する事は誤りであると彼は常々考えていた。

「……生きておらぬ。さりとて、死んでもおらぬ」

最も悍ましき魔術ですら、死や発狂という救いがある。けれど、ここにはそれすらもない。

繋がれている者達の顔に気はなく、それでも肉体は生かさされる。嘆きと苦悩に心を削られていき、やがて虚ろと成り果てる。ここでの死はその先にある結末でしかない。

そこに彼はいた。愛する者達を失い、許されざる裏切りに合い、人生で最も輝くべき時を奪われ、絶望という毒を注がれ続けていた。

「シリウス」

「……私は夢を見ているのか？」

「夢ではない」

「なら、何をここに来た？」

鋭く研がれた眼光を受けて、ダンブルドアは息を呑んだ。

これほどの絶望を味わいながらも彼は生きていた。在りし日と変わらぬ輝きをその瞳に宿していた。

牢獄の扉を開き、ダンブルドアはシリウスの前に跪いた。

「お主を迎えに来たのじゃよ」

「いま……、なんと？」

「迎えに来たのじゃよ、シリウス。随分と遅くなってしまった。本当に申し訳ない。わしは愚かにも信じるべきではない者を信じてしまった」

「……なんで」

シリウスは大きく目を見開いた。

「今更……、どうして!？」

十年もの間、誰も真実に気がついてくれなかった。

親しかった筈の友達も、尊敬していた恩師達も、信頼していた仲間達ですらも、誰一人として無実を信じてくれなかった。

だから、牙を研ぎ澄ませていた。いつの日にか必ずアズカバンを抜け出し、真実を明らかにしてみせると心に誓っていた。

その決意があつたからこそ、今日まで生き永らえて来た。

「アンタなら信じてくれると思った！ 真実を解き明かしてくれると信じていた！ だけど、だが……、アンタは信じてくれなかった。なのに……、なのに！ 巫山戯るな!! なんて、今更!? 真実に辿り着いたとでも言うつもりか!? 辿り着けるのに……、それなのに……、十年だ!! アンタは何をしていたんだ!？」

納得出来る筈が無かった。

あのアルバス・ダンブルドアでさえも真実に辿り着けないのならば、それはもう仕方のない事だと思っていた。それならば世間の誰もが欺かれていても仕方のない事だと思えた。

それなのに、その気になれば辿り着けていたと言うのならば——

「私のこの十年は何だったと言うんだ!？」

「……わしではない」

ダンブルドアは語った。

「わしは終ぞ真実に辿り着く事が出来なかった。わしはシリウス、君がポッター夫妻の秘密の守人だと信じておった。何故、ピーターを守人にしたのか、真実を識った今ですら理解し切れずにおる」

「それは!! それは……、私では直ぐに気付かれると思ったからだ。だが、ピーターならばと! 私が囹となり、ピーターが真なる守人となればジェームズとリリーの安全は確実な物になると……、そう信じていた……、それなのに……」

「お主達を責める事は出来ぬ。わしも信じてしまった。あの子は勇敢だったのだと……、友に対して最期まで忠実だったのだと……」

弱り切った表情を浮かべるダンブルドアに対して、シリウスは愕然となった。

彼の記憶に残るダンブルドアは常に輝くようなオーラを纏っていた。矍鑠としていて、彼こそが最高最強の魔法使いである事に疑いの余地は全くないと確信していた。

そんな彼と眼の前の老人が同一人物だとは思えなかった。偽物なのかとすら疑いを抱いた。けれど、その瞳に宿る穏やかな輝きは今も昔も変わらぬアルバス・ダンブルドア校長先生のものと感じが付いた。「……校長。真実を解き明かしたのは誰なんです?」

「ウィーズリー家の子じゃよ。わしよりも遥かに素晴らしき見識を持つ子じゃ」

「私はここから出ていけるのですか?」

「その為に来たのじゃよ。そして、お主に一つの提案をする為にも来たのじゃ」

「提案?」

「ポッター夫妻には息子がおった。そして、その子は保護者となる大人を必要としておるのじゃ」

「……まさか」

「まだ、本人には確認しておらん。じゃが、場合によってはお主にポッター夫妻の子へ愛を説いてもらいたいと考えておる。彼は素晴らしき友を幾人も持つておるが、彼らには与えられぬ愛を」

「ジェームズとリリーの子……」

シリウスの瞳に涙が溢れ出した。

もう二度と会う事が出来ない最愛の友の忘れ形見。

会いたい。会って、父が如何に愛すべき存在であり、母が如何に素晴らしき存在であるかを語り聞かせてあげたい。

そして、もしも必要としているならば注げる限りの愛を注ぎたい。

「会わせてくれ……。頼む、ダンブルドア先生。ジェームズとリリーの息子に、私は会いたい。どうしても……。どうしてもだ! お願いだ……。お願いします。ジェームズとリリーの子に会わせて……」

「君が望むならば」

第五十三話『シリウス・ブラック』

クリスマスの日、ハリー・ポッターは去年と同じように親友である

ロナルド・ウィーズリーの家を訪れていた。

ウィーズリー家の人々にとって、ハリーは既に家族だった。

「おい、ハリー！ ちょっとでも気に入らなかつたら直ぐに言えよ！」
「そうだぜ、ハリー！ 君がどうしたいかが重要なんだ。ここに居たいとハッキリ言つてやるんだ！ 僕には素敵な兄貴がいるつてな！」
双子のフレッドとジョージは必死だった。

大事な弟分であり、遅かれ早かれジニーと結婚すれば本当の家族になる筈のハリーを何処の馬の骨とも知れぬ男にやる気は一切無かつた。

「あ、ありがとう」

ハリーはそんな二人に困つたような表情を浮かべながらも内心は嬉しく思っていた。

ロナルドはハリーに家族が必要だと考えているようだったけれど、彼にとってウィーズリー家は十分に家族だった。

そう強く思わせてくれたのは他ならぬロナルド自身であつたし、フレッドやジョージも本当の弟同然に扱つてくれたからだ。

だからこそ、シリウス・ブラックという人物が自分の後見人になると聞いた時は少なからずショックだった。このままウィーズリー家の子になれる未来を幾度も夢想していたからだ。

「……フレッド！ ジョージ！ 決めるのはハリーよ！ わ、わたし達は口出ししちやダメなの！」

ジニーは今にも泣き出しそうな顔で言った。

「わ、分かつてるよ……」

「分かつてるけどさ……」

夏休みも冬休みもずーっと隠れ穴で過ごしていれば良い。卒業したらジニーとさっさと結婚して、本当の家族として隠れ穴に住めば良い。

その未来図にフレッドとジョージは何の疑問も抱いていなかった。ハリーの分の生活費が家の負担になるなら自分達が発明した悪戯グッズを売って用立てても構わないとすら思っていた。

「本当にありがとう、みんな」

感謝の言葉を口にしながら、ハリーは気まずそうに俯いている親友を見た。

「ロン。そんな風にしよげないでよ」

「……あ、ああ」

消沈し切っている。今回の事を誰もが余計なお節介だったと彼を責め立てた。

ハリーは必死にフォローしたけれど、それが余計に彼を沈ませてしまった。

彼は決してハリーを困らせたかったわけではなかった。けれど、結果としてハリーを困らせてしまっている。それが申し訳なくて、情けなくて、自己嫌悪に陥っている。

そんな姿を見ている事がハリーにとって何よりも辛い事なのだけど、その事が伝わらずにいる。

「ロンが僕のためにしてくれたんだって、ちゃんと分かっているからー」

「……ポッターさん」

またすまなそうな顔をしている。

そんな顔をする理由などないとハリーは菌痒く思った。

—— 希望だ!! アンタは希望の光を人々に与えたんだ!!

そんなの、アンタは与えた気なんてねえかもしれない!! けど、救われた人が実際大勢いるんだよ!! そんなアンタが悲しみを抱くなんて、オレは我慢出来ないぜ!!! 幸せになってくれ、ポッターさん!! オレは……、オレはよお!!! その為ならなんだってするぜ!!!!!! アンタの希望になってみせるぜ!!!

あのやかまし過ぎる宣言をハリーは忘れていなかった。忘れてたくても忘れられないほど、脳裏に深く刻まれていた。

彼はずっと望んでいたのだ。ハリーが幸せになる瞬間を。その為に彼はいつだって必死だった。

その思いがどれほど嬉しかった事か、まったく理解してくれていない。ハリーは段々と腹が立ってきた。

「もう、ロンー」

「は、はい?」

「僕が悲しんでるように見えるの？ 辛いように見えるの？ ねえ、君はちゃんと僕を見てくれてるの!？」

その言葉にロナルドはハツとした表情を浮かべた。

「……ポッターさん」

「僕はちつとも辛くないよ。だって、ロンが僕の為にしてくれたんだもん！ お節介なんかじゃない！ 僕は嬉しいんだ！ ねえ、僕がウソを言ってると思うの？ ねえ!？」

「ポッターさん……」

ロナルドは鼻を鳴らした。

「オレは……、オレはよお！ ポッターさん、アンタを幸せにしてえ！」

「……知ってるよ」

何度も聞いた。何度もしてもらった。

キングス・クロス駅で出会った日から今日に至るまで、何度も何度も幸せにしてくれている。

有言断行して来る彼に振り回される日々は本当に充実していて、楽しい。

「だったら、笑ってよ。君がしよげてると僕はちつとも幸せになれないからさ」

「ああ……、ああ!! 今日ポッターさんの門出だ!! どんな道を選んだとしても、オレはあなたが幸せになれるよう全身全霊全力を尽くすことを誓うぜ!!」

そんな熱過ぎる宣言をする兄を見て、ジニーは呟いた。

「……わたし、一番警戒しないとイケないのって、もしかして兄さん?」

「はっはっは、このままだとロンと結婚しちまいそうな勢いだもんぐぼあ!？」

軽口を叩くフレッドを肘鉄で黙らせる妹にジョージはお口のチャックを閉じた。

そうこうしていると彼らの母親であるモリーが料理を魔法でリビングに運んで来た。

「あなた達！ そろそろ時間よ。ほら、シヤキツとおし！」

そう言いながら彼女は杖を何度も振った。その度にリビングに飾りが増えていく。

壁に飾られた大きな看板には『ようこそ、シリウス・ブラック』という雲のような文字がふわふわ浮かんでいる。

無実の罪で投獄されていた彼の出所祝いの意味も兼ねて、出来る限り明るい場にしようと長兄であるビルの発案でパーティーのような装飾になっている。

そんな発案者であるビルは父であるアーサーと共に魔法省でシリウスと落ち合い、ここへ連れて来る案内人を務めている。

「おっ、炎の色が変わったぞ！」

フレッドが目敏く暖炉の炎の変化に気がついた。それは煙突飛行ネットワークが起動した事を示している。

次の瞬間、暖炉の炎の中からハンサムな青年が現れた。

「ただいま。彼も直ぐに来るよ」

その言葉通り、ビルに続いてすぐに彼は現れた。

ハリーと会う時に少しでも良いイメージを持ってもらおうと彼は気合を入れていた。

投獄生活の中で伸び切っていた髪はバツサリ切られ、ヒゲもしっかりと剃っている。

服も事前にグリーンゴッツから引き出した少くない額のガリオン金貨を使ってバツチリと決めて来た。

ダンディで素敵な保護者だと思ってもらいたい。そんな彼の企みは、けれどハリーと出会った瞬間に決壊してしまった。

「……ああ、そっくりだ」

涙が溢れ出した。声が震え、鼻水も出てしまった。

だけど、抑える事など出来なかった。

「君だね。君なんだろう!? ジェームズとリリーの息子……。ハリー。ハリー・ポッター。ああ、会いたかった。君に会いたかったよ……」

その言葉と共に折角アイロンをしつかり掛けた新品のズボンが汚

れるのも構わずに膝を地面に付けてハリーに視線を合わせた。

「ジェームズだ。ちっちゃいジェームズだ。でも、瞳は違うな。優しい、緑の……、リリーの眼だ」

現れるなり泣きじやくり始めた男に対して、ハリーは呆然としていた。

まさか、ここまでとは思っていなかった。自分に会いたいと心の底から思ってくれる人がいた事にここまで心を揺さぶられるとは思っていなかった。

「……シリウス」

「ああ……、ああ！ シリウスだ。シリウス・ブラックだ。ハリー……、君に聞いて欲しい事がある。もう、聞いているかもしれないけれど、私は君の後見人なんだ。だから……、だから……、もし、君さえ良ければ……、イヤならいいんだ！ ただ……、ただ、少しでもいから考えてみて欲しい。もし、イヤだとそれほど思わないなら、この……、この私と家族になってくれないか？」

「なる」

自然と口から出た。

「なる……。僕、あなたの家族になる」

涙が流れ落ちた。

ウィーズリー家の人達の事は大好きだ。だけど、心の何処かで彼らとは距離を感じていた。

彼らはここに居ていいと受け入れてくれている。だけど、ハリーはウィーズリー家に何も返せていない。何か求めてもらえたら返せるものがあるかもしれないけれど、彼らはハリーに不自由なく楽しい日々を過ごさせてくれる。

そこに不満なんてない。けれど、ここが自分の居場所だと言い切る事が出来なかった。

「ああ……、ああああああああああああああああ!!!」

シリウスが泣き叫びながらハリーを抱き締めた。その必死さにハリーは同じくらい大きな声で泣き叫んだ。

「ああああああああああああああああああ!!!」

求めてくれている。心の底から必死に求めてくれている。

居場所という物は作ってもらっただけではダメなのだ。作ってあげられなければ、そこはやっぱり居場所ではないのだ。

この人と一緒に暮らしたい。ハリーは強く思った。